

有リ猶ノ三
字一本者柄
ニ作ル
可見クモノ
下脱文アラ

シ似タル有リ猶此レハ愛敬付キ淨氣ナル事増リタ 然レバ少將目モ暗レ心モ騒テ小舍人童ヲ呼テ此ノ人ノ入ラム所儘ニ
見テ來トテ遣^タレ 童後ニ立テ行クヲ共ナル者共氣色^バミ己レハ誰ゾ怪ク具シ參ラセ様ナル云ヘバ童打啖テ彼^ソ御ツル
少將殿ノ入ラセ給ハム所儘ニ見テ參^ムト云ヘバ共ナル人ノ云ク御マサ所ハ可^レ見クモ所也只疊ノ裏ト許チ申セト云ケ
バ童其ノ由ヲ聞テ返テ少將ニ此ナム申ツル云ケレ 少將更ニ心難^レ得ク歎キ思ケル程ニ女ハ行キ別レニケ 可^レ尋キ方モ
无カリケ 少將ノ家ニ止事无キ學生ノ博士ノ來ルニケ 物語ノ次デニ少將疊ノ裏ト云フ事ハ何ト云フ事ゾト問ケレ 博士疊
ノ裏トハ大和ニ有ル城下ト云フ所^ヲ古^ハ舊事ニ申^タレ 云ケレ 少將此レヲ聞テ心ノ内ニ喜ビ思テ然テハ其ニ住ム人ナ
心得テ上ノ空ナレ 彼ノ人ニ心移リ畢^リ 然云ラム所ヘ行カムベ 思フ心深ク付テ使也^シ小舍人童ト大和ノ邊知タリ侍
一人舍人男一人許シテ馬ニ乗テ忍テ出立テ大和ヘ行ケル城下ト云フ所ヲ尋テ行^ドモ何クモ不^レ知ズ只大^{ナル}家ノ有
ルニ檜垣長^ニ差廻^ルシタ 有リ若シ此ニヤ有ラム 思ヒ煩テ馬ヨリ下テ門ニ立ル程ニ小舍人童彼ノ稻荷ノ共也シ女ノ童ノ
家ノ内ヨリ出^{タル}見テ(下文闕)

◎長谷寺靈驗記卷下

中頃平安ニ、后腹ノミメ心操世ニ超テ、イツキカシヅキ奉ル姫宮オハシケリ。最末ニ成ラセ給ヘル君達
分ノ人ニ、忍々ニ打解ケ給フ御事有リテ、只ナラズ成ラセ給フ。三月ト云ケル時マデモ、常ハ仰ラレカヨ
ハシケレ共、サノミハ人目モ滋サニ、互ニ御志ハオハシナガラ、空ク月日ヲ送ラセ給フホドニ、只ナラス
御事ナレバ、終ニ一人ノ男子ヲ儲ケサセタマヒケリ。色白ク、行末有リテ見ヘサセ給ヘバ、離レガタクハ
思食ケレ共、サテシモ有ベキ御事ナラネバ、百日バカリ過ギテ、御母子ヲ小袖ニ裹テ、泣々南ニ向テ、南無

歸命頂禮大慈大悲長谷寺ノ觀自在尊、願クハ哀愍ヲ垂レテ、何ノ所ニモ有レ、カナラズ擁護シ給ヘト打
口説キ申シテ、廣蓋ニ入レテ、御身近ク召仕ケル女房ヲ以テ、夜ノアケボノニ、何チトモナクツカハシケ
リ。此ノ女房、只打捨シ事ノ勞ハシサニ、棟門ノ有リテ、最^イナマメカシキ屋ノ、サスガニワビシカラヌヤ
ウナリケル家ノ、築地ノ破レニ指シ置テ歸リス。此ノ少兒泣キケレバ、カ、ル者有リトテ取り入レヌ。家
主廣蓋裏物^ア猿シキ體ナル様ヲ見テ、イト貧キナニ人ノ子ニテゾ侍ラントテ、夫妻共ニ我ガ子ニセント云
テ、乳母ヲ付テ養ヒケル程ニ、御母ハ此ノ少人ノ成行事ヲモ知セタマハズ、何ニモ冥加有レト、萬ノ佛神
ニ祈セタマヒケルニヤ、優シキ人ト成テ、或時大納言ニ成リ給ヌ。悦ビ申トテ、御父ニ見參取テ、内裏ヘ
參ラセ給ケルヲ、内ニテ見出テ、傍ラニ此ノ乳母ノ有リケルニ、忍ヤカニ、悦^クシサハ云バカリナレドモ、
哀レ實子ナラバ彌々ト云ケルヲ、過様ニ聞テ心ニカ、リケレバ、内裏ヨリ返テ後チ、御メノトラヨビヨ
セテ問セ給ヘバ、有^レ任^ニ語リ申シケリ。サテハ^{ミナシ}孤^ニテヤト覺食ケレバ、加様ニ常ノ神佛ノ御惠ミモ、
諧^カセ給フマジキ程ノ事ヲモ、長谷ノ觀音コソトテ、忍ビヤカニ^{マウ}諧^セセタマヒテ、我が雙親ノ行末ヲ知ラ
セ給ヘト申サセタマフ程ニ、先ヨリ京ケノ人トテ、窈窕タル女房隣ノ局ニ籠リタリ。暫クハ互ヒニ忍ビ
ケレ共、七日モ過ギケレバ、久ニ付テ人戀シクテ、取り寄り物語リシ、サテモ御籠ハ何事ニカト御尋ネ有
リ。女房泪グミ給フテ、始ハ高人、誰トハ知ラザリケレ共、物語ヲ聞ケバ、我が御事ニコソ侍リケレ。大納
言不思議ノ思ヲ成シテ、能々問ヘバ、此ノ籠リタル女房ト云ハ、我レヲ捨ケル使ノ女房ナリ。イヨノ有
リ難ク覺ヘテ、捨シ恨ノ月日、若シクハ其捨所ヲ尋ヌルニ、御メノト申シケルニ違ハズ侍リケリ。大納言

堪カネテ、泣々我レコソ捨子ニテ侍レ。父母ノ行末ヲ知ガ爲籠リ侍リ。然ル可キ事ニヤト、有リツル様ヲ
 クレ〜ト語リテ、女房モ共ニ面ヲ覆テ泣キ悦テ、大聖ノ御方便ヲ尊ビケル。此女房、サテモ今ハ隠シ
 果ツ可キニモ有ラネバトテ、御母ハ誰人ニテ渡ラセ給ヒ侍ル。離サセ給テ後ハ、御行末ヲ知ラセ給ハデ、
 佛神ニモ只御有所ヲトノミ祈リ申サセ給ヒ侍ル。中ニモ此觀音ニハ、少カリシ御時ヨリ偏ニ憑ヲカケ奉
 ラセ給フテ、常ニ御參リ有リ。此ノ寺ヘハ步行ニテ詣ガ利生ニ預ルトテ、密ニ御歩ニテ參ラセ給フテ、萬
 ズ歎キ申サセ給ヘバ、殊更此事有リテ後ハ、其ノ御祈リノミニテ侍ル。然レ共今ハ内親王ノ宜旨ヲ蒙ラ
 セ給フテ、重ク成ラセ給ヘバ、高御事ハ御物詣ナンドモ輒カラズ侍レバ、御身近ク此事ヲモ知リ進テ、離
 レサセ給ルトキノ御共マデモ、ワラハニテ侍ルトテ、御代ニ御願書ナンド持テ、月詣ヲ始テ御行末ヲ祈
 リ奉リ、既ニ二十四月ニ成テカクト語テ、大納言ノ參籠モ九日ト云ケル時、此ノ女房トツレテ、御母ノ許ヘ
 忍ビテ行テケリ。互ニ古ヨリ今ニ至マデノ事、クレ〜ト語ツテ、只御涙ノミゾセキアヘヌ。サテ大納言
 我が父ヲ御尋ネアリケレバ、少ヨリ養ヘル人ノ事ニテゾ侍ケル。是マデモステラレンシ始メ、長谷ニ御母
 ノ祈ラセ給ヒケル御惠ミト、有リ難ク覺ヘテ、急ギ歸テ日頃ノ養父ニカクト云ケレバ、昔ノ事思ヒ出シ、
 姫宮ノナビヤカニオハセシ有様ヲグニト思ヒケルニヤ、我レ實子ニテ侍レバトテ、嫡子ニゾ立テニケ
 ル。當寺ノ御惠ニテ、母子互ニ願ヲ滿ジケル事隱シ難ク覺ヘテ、其八代ニ當ル人、聊カ世ヲ憚リテ、實名
 ヲ隱シ、時代ヲサダカニカ、ズ。

右近少將

行鎮西語 第七

今昔右近ノ少將□ノ□ト云フ人有ケリ形チ有様美麗ニシ心バヘ可咲カリ其ノ中ニ管絃ヲナ極ク好ケル其ノ人九
 月ノ中ノ十日許ノ程ニ月ノ糸オモシロカカリ夜人ノ許ヘ行ケル□トノ邊ニ極ク荒タル家ノ木立ナド譚キ有ケリ其ノ内
 鬚ホシカニ箏ノ音ノ聞エケレバ少將此極ク興ジケル人ニテ車ヨリ下テ此ハ何ナル人ノ住ムト心憶ク思テ門ヨリ入テ中門ノ廊ノ脇
 ニ隠レテ立見レバ西ノ對ノ簾チ少シ卷上テ放出ノ間ニ向テ年廿許ナル女ノ云ハム方无ク可咲氣ナル前ニ箏ヲ置テ彈
 居タル手ツキ月ニ□テ糸微妙ク可咲ク見ユ少將此レヲ見ルニ心移リ畢テ行方ノ事ハ忘レケ女房ノ前ニ小キ童一
 人居ケリ亦人モ无カリケ少將此折ハヨモ不有ジト思テ押テ入ニケ女可レ隠キ方モ无カリケ奇異ク思ケレ可レ辭キ様
 无クテ近付リケ少將女ノ氣ハヒ有様ナド世ニ不似ズ微妙カリケ類グヒ无ク哀レニ糸惜ク思ケレ然テ可レ有キ事ニ非バ
 曉ニ成タル女モ夜明トテ侘ケレ少將无限ク云ヒ契テ出ニケ其ノ後ハ輒ク會フ事モ无カリケ少將此レヲ歎ツ、有ケル
 程此ノ女ハ□ノ□ト云ケル人ノ娘也ケリ其レガ母堂失レバ父妻ヲ儲テ此ノ娘ヲ不知ザリケ母堂ノ失タル家ニ獨
 リ残り留テ居タル也ケリ而ル間父太宰ノ大貳ニ成レバ鎮西ニ下ニケ此ノ娘ヲ年來ハ不知ザリケ京ニ此テハ何ニシテ有
 ラム爲ルト云テ具シテ下ラム爲ルチ少將此レヲ聞テ京ニ有ツレバ會フ事難キ歎ツツモ過ツレ鎮西ニ祖ニ具シテ下ニハ何シ
 ハカ可レ見キト哀レニ心細ク思ケレ可レ止キ様无バ極ク泣キ歎ケレ甲斐无クテ女下リケ其ノ後ハ少將惣テ世ニ可有
 タモ更ニ不レ思ザリケ後ニハ病ニ成テ年月ヲ經ルニ尙侘テ難堪ク可レ死デ思ケレ然ハ今一度相ヒ不見デハ何デカ有
 ラム思テ公ニ暇ヲ申シ父ノ大納言□ト云ケル人ニモ白地ニ物ニ詣デム云ヒ忍テ竊ニ出立テ鎮西ヘ下ケル隨身一人

一本モ
テハヤサレ
トアリ

小舎人童一人馬舎人許ニテ只行着ク所ナ泊ニテ此ノ者共ニ被レ養テ行ケル程ニ日來チ經テ既ニ太宰府ニ下着テ可
 尋キ方无レバ構テ京ニテ前ニ居シ童ヲ尋テ呼出ケレバ童穴極ジヤ此ハ何ニシ御ゾト云テ主ノ女ニ告レバ主會テ
 哀レト思タル氣色也少將尙世ノ中ニモ難レ有ク思エテ可レ死ク成レバ今一度對面セム思ムト云ケレ女哀レニ此クマ思
 給ケル事ト云テ會レバ少將ヤガテ此モ彼モ不レ云デ曉ニ馬ニ打乗テ京ヘ返リ上ケレバ女何ニシ行キト云ドモ可
 通クモ无レバ何ニカハハ思テ行ケル十二月許ノ程也ケレ雪極ク降テ風ノ氣色難レ堪カリケレ只疾ク行着ナム思テ忿テ行
 ケル日ノ暮ルマニ雪ノ降積ルモ不知ズ行々暗ク成レバ行キ宿ル所モ无クテ只墓无ク木ノ本ニ下居テ此ハ何カト云フト
 問バレ人有テ此ナバ山井トナ申スト云ケレ流々レ行ク水ヲ結び上テ食物ナム構テ女ニモ食ハセ我等ナド食テケ
 道ノ過ケル此ノ共ナル者共ノ墓无キ輕物ナド持レバ此彼シテ養ケル此ハ无下ニ人氣モ遠クテ故ヘ无ク心細ク思ヒ次
 ケテ遙々ト見エ渡ケル過ニシ方行末ノ哀レナ事共チ互ニ語リツ泣ケリ而ル間少將隠レナ方ニ白地トテ行ルガ良久ク
 不見エレバ女何カニ此ク久クハ不見エヌニ思テ共ナル者共ニ告レバ其等行テ見バ少將モ无レ女驚テ小田深
 ク行テ見ケレ垣ノ有ル傍ニ少將ノ狩衣ノ袖ノ限リ懸リタ女此レヲ見テ穴極ニ更ニ不レ云レズ被レ迷テ尙奥ヲ見バ
 其ノ後ノ方ニ少將ノ履ツル片足ノミ有リ取上テ見レバ只足ノ平ゾ有ケル悲ク極キ事云ヘバ愚ニテ女ノ前ニ此
 レヲ持行テ臥丸ビ泣迷フ此レヲ見ル女何許思エケヤガテ其コニ泣臥ニケ然テ二日許其ニ有ケル程ニ女ノ祖ノ大貳
 此ト聞テ鎮西ヨリ數ノ人ヲ遣セテ尋ケル亦少將ノ祖ノ大納言ノ許ヨリ少將鎮西ヘ行ニケ聞テ人ヲ遣ケル共ニ此ノ木ノ
 本ニ尋ネ來リ會ニケ此ト見テ使喜ビ乍ラ何少將殿ハト問ドモ可レ答キ方无シ辛クシ然々ト云ケレ使奇異ク泣迷ヘド
 更ニ甲斐无シ鎮西ノ使ハ今ハ甲斐无ト云テ女ヲ去來給ヘト鎮西ヘ將行カム爲レド泣迷テ泣臥シテ起モ不レ上ナバ使

(下文闕)

大納言娘被取内舎人語 第八

今昔□天皇ノ御代ニ大納言□ノ□ト云フ人有ケリ子共數有ケル中ニ形チ美麗ニ有様微妙キ女子一人有
 クリ父ノ大納言此レヲ愛シ悲テ片時傍ヲ不レ放テ養ヒ傳テ天皇ニ奉ラムトシ其ノ家ニ侍ニテ被レ仕ケル内舎人□ノ
 □ト云フ者有ケリ事ノ縁有テ其ノ家ノ入立ニテ近ク被レ仕ケル程ニ自然ラ擲ニ此ノ姫君ヲ見リ形チ有様氣ノハヒ世
 ニ不レ似ズ嚴ルナ見テ此ノ男忽ニ愛欲ノ心深ク發テ思ヒ可レ寄クモ非ヌ事ナレ其ノ後ハ萬ノ事不レ思テ夜ル晝只
 此ノ姫君ノ有様ノミ心ニ懸リテ見マ欲ク難レ堪ク思エケ程ニ畢ニハ病ニ成テ物ナド敢テ不ニ食ハニテ可レ死キ程ニ成
 レバ返々ス思ヒ續テ其ノ姫君ノ御方ニ有ケル女ニ會テ極タル大事ニテ殿ニ可レ申キ事ノ候チ姫御前ニ申サム思給
 ナ其ノ事申シ給ヘト云ケレ女何事ヲ申サム云バ男此ノ事ヲ極タル密事ニテ人傳ハ否不ニ申マニジキ事ナム有ルチ
 己レ年來此ノ殿ニ仕テ内外无キ身也忝クモ端ニ立出サセ給ラバ不ニ人傳ニ細カニ申サム□ム思給フル云ケレ女其ノ
 由チ聞テ姫君ニ此クナ申スト忍ビヤ語ケレ姫君何事ニカ有ラム實ニ其ノ男ハ親ク被レ仕ケル者ナレ可レ憚ルモ非ズ自ラ聞
 ト云ケレ女此ノ由チ告レバ喜キ物カラ心騒ギテ心ニ思ケル様ハ今ハ生テ世ニ可レ有クモ不ニ思エレバ同
 死ニテ此ノ姫君ヲ取テ本意ヲ遂テ後ニ身ヲ投テ死ナム思ヒ得テ此モ云フ也ケリ然ハ男世ニ有ラム事殘リ少ク思エテ
 萬ゾ心細ク哀レニ思エケレ此ノ心難ニ思止クテ彼ノ女ニ會テ彼ノ事何カニ尙急ギ可レ申キ事ナム有ルト責バレ女此ノ
 由チ姫君ニ申レバ姫君何心モ无ク端ニ出テ妻戸ノ有ル簾ノ内ニ立テ聞ムト爲ル夜ナレ人モ无シ男延ノ際ニ近ク寄テ打

□ムハハナ
シムトアルベナ

出シ可レ申キ事モ无ケレ暫ク居タル^{アサマシ}奇異キ態ヲモシテム今ハ我ガ身ハ限リ也ケリ思ヒ煩ヒケレ只此ノ思ヒノ^{イリヤ}熾燒クガ如クニ思エケレバ然ハレ死ナム思テ立走テ籠ノ内ニ飛入テ姫君ヲ搔抱テ飛フガ如クニ其ノ家ヲ出テ遙ニ去テ人モ无カリ所ニ將行ニケル其ノ家ニハ姫君ヲ失給リト嗚合テ大納言ヨリ始テ一家ノ上中下ノ人騒迷ケル事无限シ然レド可レ尋キ方无レケバ甲斐无クテ止リケ其レニ此ノ内舍人其ノ夜ヨリ跡ヲ暗クシ不見エザリケ此ノ内舍人が取ツルハ不思テ止事无キ人ナド被レ語モシ事ニカ疑ヒ合ヘリ亦彼ノ申繼ケル女モ現ニ内舍人が抱テ逃ニシカ見シカ恐テ然モ否不レ云テ然ニ疑テソ止ニケル然テ彼ノ内舍人ハ此ノ事聞ユナ我ガ身モ徒ニ成ナム思ベ京ニモ否不レ有ジ只遙ナラ方ニ行テ野ノ中ニモ山ノ中ニ此ノ姫君ヲ具シテ有ラム思ヒ得テ此ノ姫君ヲ馬ニ乗セテ我レモ馬ニ乗テ調度搔負テ陸奥國ノ方ヘ行ケル只親ク仕ケ從者二人ゾ付テ行ケル夜晝トモ无ク行テ陸奥國ノ安積ノ郡安積ト云フ山ノ中ニ行着テ此ハ^{ニテ}人^不來^{ジト}思テ其ノ所ニ木ヲ伐テ菴ヲ造テ此ノ姫君ヲ居ヘテ内舍人ハ此ノ從者共ヲ具シテ里ニ出ツ、食ヲ求テゾ食セケル然テ年月ヲ經ケル夫里ニ出タル程ハ女ハ只獨リゾ居ケル而レ間女懷妊ケリ男食ヲ求ムガ爲ニ里ニ出ニケ四五日不來^{ザリケ}女待侘ヲ心細ク思エケル菴ヲ立出テ見行ケル山ノ北ニ穴井ノ有ケル見テ我ガ影ノ水ニ移タリケ見ケル鏡見ル世モ无カバケレ顔ノ成ニケ様モ不レ知テ水ニ移タリ見レバ糸怖シ氣也ケル極テ恥カシ思テ此ナム獨言ニ云ケル

アサカ山カガサヘミユル山ノ井ノアサクハ人ヲオモフモノカハ

ト云テ此レヲ木ニ書付テ菴ニ返リ行テ我が家ニ有シ時父母ヨリ始メテ萬ノ人ニ被レ傳テ微妙カリ事共ヲ思ヒ出シテ心細キ事无限ク何ナル前ノ世ノ報ニテ此ルラ思ケル否ヤ不堪^{ザリケ}ムヤガテ思ヒ死ニケル其ノ後男食物ナド求テ從者ニ持セテ持來テ見バ死テ臥レバ糸哀レニ奇異ト思ケル山ノ井ニ木ニ被レ書付ケル歌ヲ見テ彌ヨ戀ヒ悲ムテ菴ニ還テ

死タル妻ノ傍ニ臥シテ思ヒ死ニケル此ノ事ハ從者ノ語り傳ヘタル世ノ舊事ム云ヌル然レバ女ハ從者也トモ男ハ心不ニ許マージキ也トナ語り傳ヘタトヤ

○萬葉和歌集卷十六

安積香山。影副所見。山井之。淺心乎。吾念莫國。

右傳云。葛城王遣于陸奥國之時。國司祇承緩急甚異。於時王意不悅。怒色顯面。雖設飲饌不肯宴樂。於是前采女風流娘子。左手捧觴右手持水。擊之王膝而詠此歌。爾乃王意解脫。樂飲終日。

○大和物語卷下

むかし、大納言のむすめいとうつくしうて持ち給ひたりけるを、御門に奉らんとてかしづき給ひけるを、殿にちかうつかうまつりける内舍人にてありける人、いかでか見けむ、このむすめを見てけり。顔かたちのいとうつくしげなるを見て、よろづのことおぼえず、心にかゝりて、よるひるいとわびしく、やまひになりておぼえければ、せちにさこえさすべき事なむあるといひわたりければ、あやし、何事ぞといひて出でたりけるを、さる心まうけて、ゆくりもなくかさいだきて馬にのせて、みちの國へ、よるともいはずひるともいはず、にげていにけり。あさかの郡あさかの山といふ所にいほりをつくりて、この女をすえて、里にいでつゝ物などもとめて、きつくはせて年月をへてあるべけり。此男いぬれば、たゞひとり、物もくはで山中にゐたれば、かぎりなくわびしかりけり。かゝるほどにはらみにけり。この男物もとめに出でにけるまゝに、三四日ござりければ、待ちわびて立ちいでて、山の井にいきてかけをみれ

ば、我がありしかたちにもあらず、あやしきやうになりけり。鏡もなければ、顔のなりたゝんやうもし
らでありけるに、にはかに見れば、いとあそろしげなりけるを、いとはづかしとおもひけり。さてよみた
りける

あさか山かげさへみゆる山のゐの浅くは人を思ふものは

とよみて、木にかきつけて、いほにきて死にけり。をとこ物などもとめてもてきて(コノ下殿)しにてふせ
りければ、いとあさましと思ひけり。山の井なりける歌をみてかへりきて、これを思ひ死にに、かたはら
にふせりてしにけり。世のふるごとになむありける。

(更科日記竹芝寺ノ條參閱)

●和歌童蒙抄第五居處部

あさか山かげさへ見ゆる山の井のあさくは人をおもふものは

萬葉廿にあり。葛城王のみちの國へ下るに、近江守なるもの、くりやのことをろそかなり。王心よから
ず、仍て采女の、王の膝を叩て此歌をうたふ。王の心とけて、心ゆくなりぬと云り。されば古今のかなの
序にも、あさか山の言の葉は、采女のたはふれよりよみ出たとあり。而して大和物語には、大納言のむす
めを、内舍人なるもの盗て、あさかの郡あさか山にこもりて、家を造りてすえて、里に出でつゝ物を求め
てくはせありく。出て二三日こざりけり。まぢ侘びて、出て山の井に影を見れば、ありし形にもあらず、い
とおそろしげなり。扱此歌を木に書付て、庵にきて死にけり。をとこかへりて、いとあさましと思ふ。山

姨目次及一
本夷ニ作ル
下同ジ
其ノ下婦
字ヲ脱セル

の井なりける歌をみて、思ひ死ににしにけり。此ふるごと、それになむありけるとかけるは、物語のひが
ごとと云ふべきなり。

(十訓抄中卷可撰朋友事ノ條。古今著聞集卷五和歌篇等參閱)

信濃國姨母弄山語 第九

今昔信濃ノ國更科ト云フ所ニ住ム者有ケリ年老タリテ家ニ居ヘテ祖ノ如クシ 養テ年來相副テ過シケルニ其ノ心ニ此
ノ姨母ヲ糸厭クハシ思エテ此レガ姑ノ如ニテ老屈マリ居タル 極テ憶ク思ベレ常ニ夫ニ此ノ姨母ノ心ノ ク 惡キ由テ云ヒ
聞セケ夫六借キ事ト云テ此ノ姨母ノ爲ニ心ニ非デ愚ナル事共多ク成リ持行ニ 此ノ姨母糸痛ク老テ腰ハ二重ニテ
居タリ婦ハ彌ヨ此レヲ厭テ今マデ此レガ不レ死ヌ事ヨト思テ夫ニ此ノ姨母ノ心ノ極テ憶キニ深キ山ニ將行テ弃テヨ云
ケレドモ夫糸惜ガリ不レ弃ザリケ妻強ニ責云ケレ夫被責レ侘テ弃テム思フ心付テ八月十五夜ノ月ノ糸明カリ夜姨母ニ去
來給ヘ樞共寺ニ極テ貴キ事爲ル見セ奉ラム云バケレ姨母糸吉キ事カナ詣テム云バケレ男搔負テ高キ山ノ麓ニ住バケレ其ノ山
ニ遙々ト峯ニ登リ立テ姨母下リ可レ得クモ非ヌ程ニ成テ打居ヘテ男逆テ返ヌ姨母ヲイノト叫ド男答ヘモ不レ爲デ
逆テ家ニ返ヌ然テ家ニテ思ニ妻ニ被レ責テ此ク山ニ弃ドモ 年來祖ノ如ク養ヒテ相副テ有ニ 此レヲ弃ツル 糸悲ク思
ルニケ此ノ山ノ上ヨリ月ノ糸明ク差出レバ 終夜不レ被レ寝ズ戀シク悲ク思テ獨言ニ此クナ云ケル
ワガゴ、ロナグサメカネツサラシナヤヲバステヤマニテルツキヲミテ

ト云テ亦其ノ山ノ峯ニ行テ姨母ヲ迎ヘ將來ケル然テ本ノ如ク養ケル然レバ今ノ妻ノ云ハム事ニ付テ由无キ心ヲ不レ可

發ハズ今モ然ル事ハ有ヌベ 然テ其ノ山ヲバ其ヨリ姨母奔山ト云ケル難ナシハ云フ譬ニハ舊事ニ此レヲ云フニ其ノ前ニハ冠山ト云ケル冠ノ巾子コシニ似ルトゾ語リ傳ルヘタトヤ

○古今和歌集雜上

題しらず

よみ人しらず

わが心なぐさめかねつ更科や姥すて山にてる月を見て

○大和物語卷下

信濃國さらしなといふ所に男すみけり。わかきときにおやは死にければ、をばなんおやのごとくに、わかくよりあひそひてあるに、このめの心いと心うきこと多くて、このしうとめのをば、かゞまりてゐたるを、常ににくみつゝ、男にも、このをばのみ心の、さがなくあしきことをいひきかせければ、むかしの如くにもあらず、おろかなる事おほく、このをばのためになりゆきけり。このをばいといたう老いて、ふたへにてゐたり。これをなほこのよめところせがりて、今までしなぬこととおもひて、よからぬことをいひつゝ、もていまして、ふかき山にすてたうびよとのみせめければ、せめられわびて、さしてんとおもふなり。月のいとあかさ夜、おうなどもいざたまへ。寺にたふときわざすなる、見せ奉らんといひければ、限りなくよろこびておはれにけり。たかき山のふもとにすみければ、その山にはるくゝと入りて、たかき山の峯の、おろくべくもあらぬにおきて、にげてきぬ。やゝといへど、いらへもせで、にげて家に来て思ひをるに、いひはらだてける折にはらだちて、かくしつれど、年比おやのごとやしなひつゝ、あひそひ

にければ、いとかなしくおぼえけり。この山のかひより、月もいとかぎりなくあかくて出でたるをながめて、夜いとよいもねられず、悲しくおぼえければ、かくよみたりける

我が心なぐさめかねつさらしなやをばすて山にてる月を見て

とよみてなん、又いきてむかへもてきにける。それより後なん、をばすて山といひける。なぐさめがたしとは、これがよしになんありける。

●俊頼無名抄卷下

わが心なぐさめかねつさらしなやをば捨山にてる月を見て

この歌は、信濃の國にさらしな郡に、をばすて山といふやまのあるなり。むかし人のめひを子にして、年比やしなひけるが、母のをば年老てむづかしかりければ、この母のをばをすかしのぼせて、八月十五夜の月くまもなくあかりけるに、にげてかへりにけり。たゞひとりなほ山のいたゞきにゐて、よもすがら月を見てながめける歌なり。さすがにおぼつかなかりければ、この歌をぞうちながめてなきをりける。その後、この山をばをばすて山といふなり。其のさきはかぶり山とぞ申ける。かぶりのこじに似たるとかや

(本書卷九第四十五條參閱)

住下野國去妻後返棲語 第十

今昔下野ノ國^一ノ郡ニ住ム者有ケリ年來夫妻相共ニ棲渡ケル程ニ何ナル事カ有ケム夫其ノ妻ヲ去テ異妻ヲ儲レバケ夫心替リ畢テ其ノ本ノ妻ノ許ニ有ケル物共ナ何ニモ彼モ不ニ殘サズ今ノ妻ノ許ヘ計^{カフ}運ビ持行ケル本ノ妻糸心疎トシ思^{ドモ}ケレ只男ノ爲ルニ任テ見^ニ應許ノ物モ不ニ殘サズ皆持行畢^ヌ只纔ニ殘タル物ハ馬船一ツ有ケル其レナ此ノ夫ノ從者ニテ馬飼ニテ仕ケル童有ケリ名チバ真梶丸トソ云ケル其レヲ使ニテ取^{オコ}遣ケレバ本ノ妻此ノ童ヲ見テ云ケル様今ハ世ニ不來ジナ童云ク何デカ不ニ參候^ムザラ心淺クモ被^レ仰ルカナ馬船持行ト爲ルニ本ノ妻己ガ主ニ申^サ思フ事ノ有ルヲ申^ヤテ云ケレ童糸吉ヲ申シ候^ムト云ケレ本ノ妻文ヲ奉^ラ更ニ世モ不ニ見給^ハジ只事ニ此ク申^セト

フネモコジマカデモコジナケフヨリハウキ世ノナカライカデワタラム

ト童此レヲ聞テ返リ行テ主ニ此ナム被^レ仰ハト男此レヲ聞テ哀レ也トヤ思^ム運ビ取ケル物共ヲ皆運ビ返シテ本ノ妻ノ許ニ返行キ本ノ如白地目^{オトアカラ}モ不^レ爲^テ棲ケル然レバ情有ル心有ル者此ナム有ケルト語^ル傳^ヘトヤ

○大和物語卷下

下野國に男女すみわたりけり。年比すみけるほどに、をとこ妻をもうけて、心かはりはてて、此の家にありけるものどもを、今のめのがりかきはらひもてはこびいく。心うしとあもへど、猶まかせて見けり。ちりばかりのものもこのさず、みなもていぬ。たゞのこりたる物は、馬ぶねのみなんありける。それをこのをとこのずさ、まかちといひけるわらはをつかひけるして、此の舟をさへとりにおこせたり。このわらはに女のいひける、さむぢも、今はこゝに見えじかしなどいひければ、などてかさぶらはざらん、ぬしあはせずともさぶらひなんなどいひたり。女、ぬしにせうそさきこえば申してんや。ふみはよに見給

はじ。たゞことばにて申せよといひければ、いとよく申してんといひければ、かくいひける

ふねもいぬまかしも見えしけふよりはうさよの中をいかでわたらん

と申せといひければ、男にいひければ、ものかさふるひいにしをとこなん、しかながらはこびかへして、もとのごとく、あからめもせでそひ居にける。

品不賤人去妻後返棲語 第十一

今昔誰トハ不^レ云ズ人品不^レ賤^ヌ君達受領ノ年若キ有ケリ心ニ情有テ故々^{シク}有ケル其ノ人年來棲ケル妻ヲ去テ今カ^レ人ニ見移^リケレ然レバ本ノ所チバ忘^レ畢^ヌ今ノ所ニ住^ケレ本ノ妻心疎^シ思^テ糸心細クテ過ケル男攝津ノ國ニ知^ル所有ケレ遊ガ^ム爲^ニ下^ニ難波邊ヲ過ケル程ニ濱邊ノ糸^{オモ}識^シキヲ見行^ケル蛤^サノ小^ルニ海松ノ房^ニテ生出^ルチ見付^テ此レ極ク興有物也ト思^テ取^テ此レヲ我ガ難^ク去^ク思^フ人ノ許ニ遣^テ見^セテ興^セサセ^ム思^テ小舎人童ノ然様ノ方ニ心得^テ仕^ケル以^テ此レ儘^ニ京ニ持行^テ彼^ニ奉^レ此レガ興有物ナレ見^セ奉^ラムト申^セト云^テ遣^ケレ童此レヲ持^テ行^テ思^ヒ違^ヘテ今ノ所ヘハ不^ニ行^持ズ本ノ妻ノ家ニ持行^テ此ナム云^ヒ入^タリケ本ノ妻糸思^ヒ不^レ懸^ヌ程ニ此ク興有物ヲサ^オ遣^セテ此レ我ガ上^ノマデ不^ニ失^ハテ御覽^ト云^ヒ遣^レバ殿^ハ何^ニ御ソト問^ハスレ童攝津ノ國ニ御^ニ候^フ其レニ難波邊^ニテ此レハ御覽^ジ付タル物ヲ奉^ラセ給^ヒタ也ト云^ハ本ノ妻此ク聞クニ怪ク僻事ニ所違^ヘニ持^來タル有^ラム思^ヘド取^リ入^レテ然承^リ許^云セ童即チ走り返^テ攝津ノ國ニ行^テ主ニ儘^ニ奉^リ候^ヒヌ云^ハバ主^ハ今ノ所ニ持^行ゾト知^テ有^ケル彼ノ本ノ所ニハ此レヲ見^ルニ實^ノ興有^ル物ナレ盤^ニ水ヲ入^レテ前^ニ並^テ此レヲ入^レテ興^ジ見^居タリ而^ル間^男十日許^有

テ攝津ノ國ヨリ返リ上テ今ノ妻ニ何シカ彼ノ奉リシ物ハ侍リヤ打咲テ云ケレ妻遣シ物ヤハ有レ其レハ何物ゾト云ケレ
男否ヤ小キ蛤ノ可咲氣ナル海松ノ房ニ生出シテ難波ノ濱邊ニテ見付テ見シニ興有ル物也バシカ奉リ云ヘバ妻更
ニ然ル物不見エズ誰ヲ以テ遣セ給ゾ持來シカバ蛤ハ燒テ食シ海松ハ酢ニ入レテ食ト云フニ男聞クニ思ヒニ違
テ少シ心月无キ様也然テ男外ニ出テ遣セシ童ヲ呼テ汝ハ有シ物ヲバ何ニ持行ゾト問ヘバ童思ヒ違ヘテ本ノ所ニ持行ル
由ナ云ヘバ主大キニ唄テ速ニ其レ取リ返シテ只今來ト責レバ童極キ錯ルカナト思ヒ驚テ本ノ所ニ走り行テ此ノ由ナ
云ヒ入レセタリ本ノ人然コソ所違ヘ也ケルニ思テ水ニ入レテ見ケル急ギ取上テ陸奥紙ニ裏テ返シ遣ニ其ノ紙ニ此ナム
書ケル

アマノツトオモハヌカタニアリケレバミルカヒナクモカヘシツルカナ

ト童此レヲ持行テ此ク持參タル由ナ云ケレ主外ニ出テ此レヲ取テ見ルニ本ノ様ニテ有レバ糸喜ク不ニ失ハズ有ケル
心慥ク思テ内ニ持入テ披テ見レバ裏紙ニ此ク書タリ男此レヲ見ルニ糸哀レニ悲クテ今ノ妻ノ貝ハ燒テ食シ海松ハ酢
ニ入レテ食シト云シ事思ヒ被合テ忽ニ心替テ本ノ所ニ行ナム思フ心付レバヤガテ其ノ蛤ヲ打具レテ行ニケテ定テ其ノ
今ノ妻ノ云シ事本ノ妻ニ語リケル然テ今ノ妻ヲバ忘レテ本ノ所ニ住ケル情有ケル人ノ心ハ此ナム有ケル現ニ今ノ妻ノ云
ケム事疎カシ本ノ妻ノ情ニハ必ズ返リ可レ棲キ事也トナ語リ傳ヘタトヤ

住丹波國者妻讀和歌語 第十二

今昔丹波ノ國□ノ郡ニ住ム者アリ田舎人ナレ心ニ情有ル者也ケリ其レガ妻ヲ二人持テ家ヲ並ベテ住ケル本ノ妻ハ

其ノ國ノ人ニテ有ケル其レチ静ニ思ヒ今ノ妻ハ京ヨリ迎ヘテ者ニテ有ケル其レチ増タル様也バ本ノ妻心疎シト
思テゾ過ケル而ル間秋北方ニ山郷ニテ有バ後ノ山ノ方ニ糸哀レ氣ナル音ニテ鹿ノ鳴バ男今ノ妻ノ家ニ居ケル時ニテ
妻ニ此ハ何ガ聞給フカ云ケレ今ノ妻煎物ニテ甘シ燒物モ美キ奴ゾカ云ケレ男心ニ違ヒテ京ノ者ナレ此様ノ事ヲ巴與
ズラム思ケル少シ心月无シト思テ只本ノ妻ノ家ニ行テ男此ノ鳴ツル鹿ノ音ハ聞給ヤト云ケレ本ノ妻此ナム云ケル

ワレモシカナキテゾキミニコヒラレシイマソコエヲヨソニノミキケ

ト男此レヲ聞テ極ジク哀レト思テ今ノ妻ノ云ツル事思ヒ被合テ今ノ妻ノ志失レバ京ニ送リ然テ本ノ妻トナ棲ケル思
ニ田舎人ナレ男モ女ノ心ヲ思ヒ知テ此ナム有ケル亦女モ心バヘ可咲カレバ此ナム和歌ヲモ讀ケルト語リ傳ヘタトヤ

○新古今和歌集戀五

題しらず

讀人しらず

われもしかなきてぞ人にこひられし今こそよそにこそをのみさけ

○大和物語卷下

大和國に男女ありけり。年月かぎりなく思ひてすみわたりけるを、いかゞしけん女をえてけり。猶もあ
らず、この家にあてきて、かべをへだててすみて、わが方にはさらによこず。いとうしとおもへど、さ
らにいひもねたまず。秋の夜のながきに、めをさましてさけば、しかなんなきける。ものもいはでさしけ
り。かべをへだてたるをとこ、さし給ふや、にしこそといひければ、何事といらへければ、このしかのな
くは、さし給ふやといひければ、ささし侍りといらへけり。をとこ、さてそれをば、いかゞ聞き給ふとい

ひければ、をんなふといひけり。

我もしか啼きてぞ人に戀ひられし今こそよそに聲をのみきけ

とよみたりければ、限りなくめでて、この今の女をばおくりて、もとのごとくなんすみわたりける。

(十訓抄下卷可堪忍于諸事事ノ條。沙石集第七無嫉妬之心人事等參閱)

夫死女人後不嫁他夫語 第十三

今昔□ノ國□ノ郡ニ住ケル人祖有テ娘ニ夫ヲ合セタリ其ノ夫失レバ祖亦他ノ夫ヲ合セム爲ルニ娘此レヲ聞テ母ニ
 云ク我レ男ニ具シテ可レ有キ宿世有カバ前ノ男コソ不レ死テ相具シテ有シカ男ニ不ニ具マレジキ報ノ有コソ彼レモ死
 メラ譬ヒ夫ヲ儲タリ身ノ報ナラ亦モ死ナム然レバ此ノ事可レ被レ止シト母此レヲ聞キ大キニ驚テ父ニ此ノ由ヲ語ケレ父ノ
 云ク我レ年既ニ老リ事近キニ有リ汝チ其ノ後ハ何ニシカ世ニハ有ラム尙合セム爲ル娘父母ニ云ク然ラバ此ノ家ニ
 巢ヲ作テ子ヲ産メル燕有リ雄燕ヲ相具セリ其ノ雄燕ヲ取テ煞シテ雌燕ニ注シテ付テ放テ給ヘ然テ明ケム年其ノ雌燕他
 ノ雄燕ヲ具シテ來タリ時ニ其レヲ見テ我レニ夫ヲ合セ給ヘ畜生ソラ夫ヲ失レバ他ノ夫ヲ儲クル事无シ況ヤ人ハ畜生ヨ
 モ心可レ有シト父母現ニ然モ有ル事トテ其ノ家ニ集テ子ヲ産タル燕ヲ取テ雄燕ヲ煞シテ雌燕ニハ頸ニ赤キ糸ヲ付
 テ放ツ然テ明ケム年ノ春燕ヲ待ツニ其ノ雌燕他ノ雄燕ヲ不レ具テ頸ニ糸ハ付テ來レリ巢ヲ作テ子ヲ産ム事无ク飛
 ビ去ヌ父母此レヲ見テ實ニ然ル事也ト云テ娘ニ夫合セム心无クテ止リ然テ娘此ナム云ケル

カゾイロハアハレトミルラムツバメソラフタリハ人ニチギラヌモノヲ

爲ルノ下ニ
カ字脱セル

ミルラム諸
作本ミラムニ

トゾ云ケル此レヲ思フニ昔ノ女ノ心ハ此ナム有ケル近來ノ女ノ心ニハ不レ似ザリケル燕メモモ亦他ノ雄无ケレ子ハ不レ産ド
 モ家ニ來リケム哀ナレト語リ傳ヘタトヤ

●俊頼無名抄卷下

かぞいろは哀れとみえむつばめすらふたりは人にちぎらぬ物を

むかし男ありけり。むすめに男をあはせたりけるに、男うせにければ、又こと人にむことらむとしける
 を、むすめのさへて、母にいひけるは、男にぐしてあるべきすくせあらましかば、ありつる男こそあらま
 しか。さるほうのなければこそしぬらめ。たとひしたりとも、身の宿世なれば、又もこそしぬれ。さるこ
 とおぼしよるなど云ひければ、母きゝて、我しなむこと近きあり。さらむ後には、いかにして世にはあ
 らんとて、さる事はおもひよるぞといひて、なほあはせむとしければ、むすめ親に申けるやうは、さらば
 この家にすくひて、子うみたるつばくらめをころして、めつばくらめにしるしをしてはなち給へ。さら
 むに又の年、男つばくらめをぐしてきたらむ折に、それを見ておぼしたつべきといひければ、げにさも
 といひて、家に子うみたるつばくらめをとりて、男つばくらめをばころして、めつばくらめには、くびに
 あかき糸をつけて放ちつ。つばくらめ歸りきたりて、男もぐせで、首に付たるしるしの糸ばかりつきて、
 まうで來りければ、それを見て、親ども男あはせむの心もなくして止みにけり。昔の女の心は、今やうには
 似ざりけるにや。つばくらめ、男ふたりせずといへるふみの文なり。

●和歌童蒙抄第八鳥部

かぞいろはあはれみつらむつばめすらふたりは人にちぎらぬものを

昔、人むすめにちとこをあはせたりける日、おとこうせにければ、又こと人をむことらんとしければ、むすめのよめる也。南史曰(卷七十四)霸城王整之姉。嫁爲衛敬瑜妻。年十六而敬瑜亡。父母舅姑咸欲嫁之。誓而不許。乃截耳置盤中爲誓。乃止。戸有燕巢。常雙飛來去。後忽孤飛。女感其偏栖。乃以纒繫脚爲誌。後歲此燕果復更來。猶帶前纒。女爲詩曰。昔年無偶去。今春猶獨歸。故人思既重。不忍復雙飛云々。出事類賦。

人妻化成弓後成鳥飛失語 第十四

今昔□ノ國□ノ郡ニ住ケル男有ケリ其ノ妻形チ美麗ニシ有様微妙レバ夫難去ク思テ棲ケル程ニ妻夫寢ケル間ニ男ノ夢ニ見ル様此ノ我ガ愛シ思フ妻我レニ云ク我レ汝ト相棲ト云ヘド我レ忽ニ遙ナル所ニ行ナム汝チ今ハ不可見ズ但シ我ガ形見テバ留置カム其レヲ我ガ替ニ可レ哀キ也ト云フト見ル程ニ夢覺ヌ男驚キ騷テ見ルニ妻无シ起テ近キ邊ニ此レヲ求ニムル无ケレバ奇異ト思フ程ニ本ハ无ルニ枕上ニ弓一張立タリ此レヲ見ルニ夢ニ形見ト云ツル此レヲ云ニヤト疑ヒ思テ妻若シ尙ヤ來ルト待テ遂ニ不見エテ夫戀ヒ悲フト云ヘド甲斐无シ此レハ若シ鬼神ナム變化シタリケ怖シク思ヒケ然リト今ハ何ガハセ爲ルト思テ其ノ弓ヲ傍ニ近ク立テ明ケ暮レ妻ノ戀マニハ手ニ取り振巾シテ身ヲ放ツ事无ケリ然テ月來テ經ル程ニ其ノ弓前ニ立タル俄ニ白キ鳥ト成テ飛ビ出テ遙ニ南ヲ指テ行ク男奇異ト思テ出テ見ルニ雲ニ付テ行クヲ男尋ネ行テ見レバ紀伊ノ國ニ至ヌ其ノ鳥亦人ト成ニケ男然レバ此レハ只物ニハ非ザリケ思テ其ゾ返ケル然テ男和歌ヲ讀テ云ク

アサモヨヒキノカハユスリユクミヅノイツサヤムサヤイルサヤムサヤ

ト此ノ歌近來ノ和歌ニハ不似シカアサモヨヒトハ朝メテ物食フ時ヲ云フ也イツサヤムサヤトハ狩スル野ヲ云フ也此ノ歌ハ聞ク何トモ心不ニ得マニバナム亦此ノ語リ奥戀ク現モト不ニ思エヌ事ドモ舊キ記ニ書タル事ナレ此ナム語リ傳ヘタトヤ

●俊頼無名抄卷下

あさもよひさのかはゆすり行く水のいつさやむさやいるさやむさや

むかし男ありけり。女を思ひて、ふかくこめて愛し侍りけるほどに、夢に此女の、われは遙かなる所へゆきなむとす。たゞしかたみはとゞめむとす。われがかはりには、あはれにはすべきなりといひけるほどに、夢さめぬ。おどろきて見るに、女はなくて、枕がみに弓たてり。いと淺ましと思ひて、さりとはいかかはせんとおもひて、その弓をちかくかたはらに立てて、あけくれ泣く／＼手にとりのごひなどして、身をはなす事なし。月日ふるほどに、また白鳥になりて、飛び出でて、はるかに南の方に雲につきていくを、たづねゆきて見れば、紀伊國にいたりて、人に又なりにけり。さて此歌はよみたりけるとぞ。あさもよひとは、つとめての物くふをいふ也。いつさやむさやとは、かりする野なりとぞ。おくゆかしくげにときこえねども、ふるき物にかきたれば、のぞくべきにあらずとて、かきつくばかりなり。

●詞林采葉抄第四朝毛吉紀ノ條

多豆加由彌と云事、古歌に曰く

開クノ下ニ
カ
字
ヲ
脱
セ
ル

あさもよひ木の關もりが手束弓ゆるす時なくまづえめる君(一本、待つ夜ぬるかな、作ル)

昔河内國にある男、いと志し深き妻をもてり。或夜夢の内に云く、我は日比の契いまだ不盡といへども、遠き所へまかりなんとす。此を形見には見るべしとて、弓をなんとらすと見て夢さめぬ。起て見るに枕がみに弓ありて、妻は行方知れずなりぬ。男歎きながら、此弓を手なれて自愛しけるに、月日を経て後、此弓白鳥と成て、南をさして飛去ぬ。男跡を尋て行けるに、紀伊國雄山と云所に、又女と成てかさけす如くにて失ぬと云々。彼の山の關守の持たりける弓にて有けるとかや。

證今昔物語集卷第卅一

東山科藤尾寺尼奉遷八幡新宮語 第一

今昔天曆ノ御代ニ粟田山ノ東山科ノ郷ノ北ノ方ニ寺有リ始テ藤尾寺ト云フ其ノ寺ノ南ニ別ノ堂有リ其ノ堂ニ一人ノ年老タル尼住ケリ其ノ尼財豐ニシ萬ツ皆思フ様ニテ年來過ケル其ノ尼若クモ懃ニ八幡ニ仕テ常ニ詣ケル心ノ内ニ思ケル様我レ年來大菩薩ヲ懃ニ奉テ朝暮ニ念ジ奉ル同クハ我ガ居タル邊ニ大菩薩ヲ遷シ奉テ常ニ思ノ如ク崇メ敬ヒ奉ラト思テ忽ニ其ノ邊ニ所ヲ撰テ寶殿ヲ造リテ微妙ク莊テ大菩薩ヲ崇奉テ年來崇メ奉ケルニ亦願ヒ思ケル様本宮ニハ毎年ノ事トシ八月ノ十五日ノ法會ヲ行テ放生會ト云フ此レ大菩薩ノ御誓ニ依ル事也然ハ我レ此宮ニモ同日ニ此ノ放生會ヲ行トハム思得テ本宮ノ如ク年内ニ所々ニ放生會ノ行ヲ修シテ八月ノ十五日ヲ以テ放生會ヲ行リ其ノ儀式本宮ノ放生會ニ異ナル事无シ但シ諸ノ止事无キ多ノ僧ヲ請ジ微妙キ音樂ヲ奏シ歌舞ヲ調ヘテ此ク法會ヲ行ニ尼本ヨリ財ニ豐ニテ乏キ事无カリケレバ請僧ノ布施モ樂人ノ祿ナド器量ケリ然レバ本宮ノ放生會ニ不劣ケリ如レ此ク毎年ニ行テ既ニ數ノ年ヲ經ル間本宮ノ放生會新宮ニ漸ク劣テ祿ナド珍ケレバ舞人樂人モ此ノ粟田口ノ放生會ニ皆競テ參ケレ本宮ノ會少シ廢ヌレバ此ノ事ヲ本宮ノ僧俗ノ神官等皆歎テ相議シテ使ヲ以テ彼ノ粟田口ノ尼ノ許ニ遣シテ云ク八月ノ十五日ハ此レ大菩薩ノ御誓ニ依テ昔ヨリ于レ今至マデ行フ所ノ放生大會也人構ヘ出タル事ニハ非ズ而ルニ其ノ

作猥一本
作正一本
作聖一本

日亦別ニ其所テ放生會ヲ行フ故ニ本宮ノ恒例ノ放生會既ニ廢ルニ似タリ然レバ其ノ被レ行ル所ノ今マノ放生會ヲ八月ノ十五日ニハ不行シテ延テ他ノ日ヲ以テ可レ行キ也ト尼答テ云ク放生會大菩薩ノ御誓ニ依テ八月ノ十五日ニ行フ事也然レバ尼ガ行フ放生會モ同ク大菩薩ヲ崇メ奉ル故バ尙八月十五日ヲ以テ可レ行キ也更ニ他ノ日ヲ以テ行フ事不可レ有ト使返テ尼ノ言ヲ語ルニ本宮ノ僧俗ノ神官等皆此レヲ聞テ大キニ嘖リ相議シテ我等速ニ彼ノ新宮ニ行テ寶殿ヲ壞テ御聖體ヲ取テ本宮ニ安置シ可レ奉キ也ト云テ若干ノ神人等雲ノ如クニ集リ發テ彼ノ栗田口ノ宮ニ行キ向テ猥ニ夜ノ晝ル崇メ奉ル新宮ノ寶殿ヲ皆壞テ棄テ御正體ヲ取テ本宮ニ將奉テ護國寺ニ安置シ奉リツ然レバ其ノ御聖體子今護國寺ニ御マシ靈驗新タ也栗田口ノ放生會ハ其ノ後絶リ其ノ尼本ヨリ公ニ申シテ行フ事モ無カリケ訴ヘ申ス事モ无カリ只世ニソニテ誘ケル本宮ヨリ延テ他ノ日行ヘト云ケル隨テ他ノ日行カバ于今ニモ並ベテ行シマ強ニ密ク云テ不レ延ルガ惡キ也其レモ可レ然キ事ニヤ大菩薩ヲ崇メ奉ルト云ヒ乍ラ往古止事无キ會ヲ競フ様ニ爲ルチ大菩薩ノ惡シト思シ食ニヤ其ノ後チ本宮ノ放生會彌ヨ嚴重ニ于今至マテ不レ愚ズ此ナム語リ傳ルヘダトヤ

○扶桑略記第二十五

天慶二年己亥云々。或記云。粟田山之東。山科里之北。有一仁祠。號藤尾寺。南有別道場。伴道場有一尼。自先年奉造石清水八幡大菩薩像。安置尙矣。凡厥靈驗觸事多端。仍遠近僧尼貴賤男女。歸依如林輻湊成市。彼石清水本宮。每至八月十五日。弁設一會號之放生。上下諸人莫不來會。而伴尼同日更設此會。晝則迎俗人。盡音樂之妙曲。夜則請名僧。傳菩薩之大戒。飲食引物盡善盡美。布施供養如山如岳。因茲僧徒樂人難向本宮。本宮法會頗以寂寥。爰本宮道俗相議云。菩薩廣德普覃法界。彼尼宿虛非可制止。但設法會於同

日。成障礙於本宮。源流細而未流深。本根小而枝葉大。今此所行爲之如何云。本宮牒新宮云。大小之事。會無所禁抑。同八月十五日。是本宮放生會之日也。乞改他日。行新宮會事云々。而伴尼蔑爾本宮之告。經年無所改定。爰八月十二日。本宮道俗數千人。向伴山科新宮。壞棄其神社。打縛彼尼身。至于其靈像。奉移石清水本宮。即捕尼身。將去本宮云々。

(本朝世紀天慶元年八月ノ條。及ビ古事談第五神社佛寺篇等參閱)

鳥羽鄉聖人等造大橋供養語 第一

今昔鳥羽ノ村ニ大橋有ケリ此レハ昔ヨリ桂川ニ渡セル也其ノ橋壞レテ人渡ル事无カリ比一人ノ聖人有テ此ノ橋壞レテ人皆河ヨリ渡ル事ヲ歎テ往還ノ人ヲ助ケム爲ニ普ク諸ノ人ヲ催テ知識ト云フ事ヲ以テ其ノ橋ヲ渡シテ其ノ後其ノ知識ノ物多ク殘レバ聖人其レヲ以テ本トシ亦人ヲ催シ其ノ村ヲ人ノ與力ヲ憑テ大キニ法會ヲ儲テ供養シケ其ノ講師ニハト云フ人ヲ請ケル請僧ハ四色ヲ調テ百僧ヲ請リ大山寺三井寺ノ止事无キ名僧ヲ皆盡シタ唐高麗ノ舞人樂人等皆唐ノ裝束ヲ用ケル京中ノ上中下ノ人皆物ヲ加フ舞臺樂屋僧ノ幄シ皆微妙ク立テ大鼓二ツヲ立リテ立タリ其ノ日ニ成テ京中ノ上中下ノ人皆來テ聽聞ス(下文闕)

湛慶阿闍梨還俗爲高向公輔語 第三

今昔ノ御代ニ湛慶阿闍梨ト云フ僧有ケリ慈覺大師ノ弟子也眞言ヲ極メ内外ノ文道ニ足レリ亦藝尤極ケリ

尤諸本无ニ作ル

音ハ衍字ナ

慶行法ヲ修テ公私ニ仕ルニ忠仁公不例ノ事有ケル時ニ湛慶御祈リノ爲ニ被レ召テ參ヌ祈リ奉ルニ驗シテ病愈給ヒヌレ暫ク此クテ候ヘト被レ置タル程若キ女「音」出來テ湛慶ガ前ニ僧供ナ
 欲テ發テ竊ニ語ヲ成シテ互ニ契テ遂ニ始テ落ヌ其ノ後隱スト爲モレド其ノ聞エ顯ニ成リニ湛慶前ニ勲ニ不動尊ニ仕テ行ケル夢ノ中ニ不動尊告テ宣ハク汝ハ專ニ我レヲ憑メリ我レ汝ヲ可ニ加護シ但シ汝デ前生ニ縁有ルニ依テ
 郡ニ住ムト云フ者ノ娘ニ落テ夫妻トシ有スト告ゲ給フト見テ夢覺ヌ其ノ後湛慶此ノ事ヲ歎キ悲ムデ我レ何ノ故ニカ女ニ落ム但シ我レ彼ノ教ヘ給フ女ヲ尋テ煞シテ心安クテ有ラム思ヒ得テ修行スル様ニテ只獨リ
 行ヌ其ノ所ニ尋ネ行テ問フニ誠ニ然カ云フ者有リ湛慶喜テ其ノ家ニ行テ竊ニ伺ヒ見ル家ノ南面ニ湛慶夫ノ如クシ伺フニ十歳許ナル女子ノ端正ナル庭ニ走り出テ遊ビ行ク湛慶其ノ家ヨリ下女ノ出ニ彼ノ出遊フ女子ハ誰ゾト問ヘバ彼レハ此ノ殿ノ獨娘也ト答フ湛慶此レヲ聞テ其レ也ト喜テ其ノ日ハ然テ止ヌ次ノ日行テ南面ノ庭ニ居ルニ昨日ノ如ク女子出テ遊ビ行ク其ノ時ニ敢テ人無し湛慶喜ビ乍ラ走り寄テ女子ヲ捕テ頸ヲ搔斬ツ此レヲ知ル人無し後ソハ見付テ嗚ト思テ遙ニ逃ゲ去テ其ヨリ京ニ歸ヌ今ハ爲得ツト思テ有ルニ此ク思ヒ不懸ヌ女ニ落ヌ湛慶先年ニ不動尊ノ示シ給ヒシ女ヲバ煞ニ此ク思ヒ不懸ヌ者ニ落ヌ奇異ト思テ此ノ女ト抱テ臥ル時ニ湛慶女ノ頸ヲ搜ルニ頸ニ大ナル疵有テ炙キ綴タル跡也湛慶此レハ何ナル疵ゾト問ヘバ女ノ云ク我レハ
 國ノ人也ト云フ者ノ娘也幼カリ時家ノ庭ニ遊ビ行キ不レ知ヌ者ノ出來テ捕ヘテ頸ヲ搔斬シ也後ニ家ノ人見付テ嗚ト行方ヲ不レ知テ止リ其ノ後誰ト不レ知ズ其レヲ炙キ綴タル也奇異キ命ヲ生ソト事ノ縁有テ此ノ殿ニハ參タル也ト云フヲ聞ニ湛慶奇異クモ哀レニ思ユ我ガ深キ宿世ノ有レバ不動尊ノ示シ給ヒシ事ヲ貴ク悲ク思テ泣々ク女ニ此ノ事ヲ語レバ女モ哀レニ思テケ然テ

杖諸本楚ニ作ル下同ジ

永キ夫妻トゾ有ケル湛慶濫行ニ成リ畢レバ忠仁公湛慶法師既ニ濫行ニ成タリ僧ノ身ニテ異様也亦内外ノ道ニ付テ極タル者也此レヲ徒ニ可被レ弃キニ非ズ速ニ還俗シテ公ニ可仕キ也ト被レ定テ還俗シツ名ヲ公輔ト云フ本姓高向也即チ五品ニ叙シテ公ニ仕ル此レヲ高大夫ト云フ本止事无キ才人也バ公ニ仕ルニ心モト无キ事无カリ遂ニ讃岐ノ守ニ任ジテ彌ヨ家モ豊也ケリ此レヲ思フニ人ノ態有ルナ不レ被レ弃ザリ但シ此ノ高大夫俗ノ身ニ成テ眞言ノ密法ヲ吉ク知レバ極樂寺ト云フ寺ニ木像ノ兩界ノ像御マス久ク其ノ諸尊ノ座位違テ有ニ人ヲ有テ此レヲ誰カ直シ可奉テキト諸ノ眞言師ノ僧ヲ呼テ直サセケ様々ニ云ツ直シ得ル事モ无ルニ高大夫此レヲ聞テ極樂寺ニ行テ其ノ兩界ヲ見奉テ實ニ此ノ座位悉クニ錯シ給リト云テ杖ヲ持テ此ノ佛ハ此ニ可御シト彼ノ佛ハ彼ニ可御シト差ヌニ付テ佛達人モ手モ觸レ不奉ヌニ踊テ杖ノ差ヌ所ニ自然ニ居給ケリ多ク人此レヲ見ケリ高大夫佛ノ座位直シ奉ガ爲ニ極樂寺ニ可レ行シト兼テ聞キ繼テ可然キ人共モ有ガ此ク佛達ノ各直リ給フヲ見テ泣々ク貴リ高大夫内外ノ道ニ付テ此クソ有ナムト語り傳ルヘトヤ

續幽怪錄

韋固旅次宋城。遇異人向月檢書。因問囊中赤繩。答曰。以繫夫婦足。雖仇家異域。此繩繫不可易。君妻乃此店北賣菜陳姬之女。因見抱二歲女陋。刺女子稠人中傷眉間。後十四年。參相州軍事。王秦妻以刺女。容貌端麗。常貼花銅。逼問。曰。妾郡主之猶子。父卒于宋城。幼時乳母抱以鬻菜。爲賊所刺。痕尙在。宋城宰聞之。名其店曰定昏店。

元亨釋書卷十七王臣篇

讚州刺史高公輔。幼稚髮於慈覺之室。法名法慶。有義學名。然倦戒檢反俗。仕到于候牧。俗號高大夫。于時都城多怪。勅太史卜。奏曰。王城東南古寺佛像亂階。故有此怪。宮使物色。東山安祥寺大殿安兩界諸尊。歲久傾斜差舛。詔公輔整理。公輔向寺入殿坐一席。以白杖指揮曰。某像移某處。諸像自起。隨杖居各位。無少錯誤。聲下嘆舊感之不失。

●三國傳記卷八高大夫公輔事

和ニ云ク、高大夫ト云フ人、元ハ慈覺大師御弟子、堪慶阿闍梨也。此堪慶モ同ク大内ニ候ニ、護摩ノ烟ハ爐ニ^{ツル}妓ク和シ、振鈴ノ聲ハ殿ニ振ヒ響ケリ。然ニ此堪慶、何ナル宿執ニカ有リケン、春宮ノ御母ニ通フ事露顯シケレバ、執政忠仁公(良房)聞レ之、即令ニ還俗、號ニ高公輔。皇后宮大進、式部權少輔、讚岐守等ニ被^レ補了。爲ニ讚岐守ニ赴^レ任國、道有ニ舊堂、木像兩界ノ曼荼羅有リケルガ、經^レ年後、諸尊座位散々ニ成ケルヲ、鞭ヲ以テ指シ、此佛ハ彼^{カシ}ヘオハセ、此菩薩ハ此^コヘオハセヨナンドイハレケレバ、如ニ其教導、皆被^レ居置^ケケリ。又國ノ間モ、段圯ノ術ト云事ヲシテ、京ニ有リケル女房ヲ、毎度ニ迎ヘケリ。後ニハ比良山ニ隱居シテ有リケルガ、鹿常ニ來テ彼ノ人ニ食セラレケリ云々。

繪師巨勢廣高出家還俗語 第四

今昔一條ノ院ノ御代ニ繪師巨勢ノ廣高ト云フ者、有ケリ古ニモ不^レ恥ズ今モ肩ヲ並ブル者无シ而ルニ廣高本ヨリ道心有^ニ身ニ重キ病ヲ受ケテ日來煩^ルニ世ノ中^ニ无端^シト思取テ出家シテ其ノ後病癒テ有ケル公此ノ由ヲ聞シ食テ法

師ニテ繪書カム事ハ憚リ不^ニ有^マドモ、内裏ノ繪所ニ召テ被^レ仕ムニ便无カルベ速ニ可^ニ還俗^シト被^レ定テ召テ可^ニ還俗^シト被^レ定ル由ヲ仰セ給ヒツ廣高本意ニ非テ歎キ悲ムト云モ、宣旨限リ有レバ力不^レ及ズ而ル間公近江ノ守^ノト云フ人ニ廣高ヲ預テ髮^ヲ被^レ生^{ケル}守東山ニ有ル所ニ廣高ヲ籠^メ居^ヘテ人ヲ付テ髮^ヲ令^レ生^ム然^レハ其ノ所ニ新キ堂有^ニ籠^リ居^テ人ニモ不^レ會^ズ髮^ヲ生^シケル間堂ノ後ニ有ケル壁板ニ徒也^マ地獄繪^ム書ケル其ノ繪于^レ今有^リ萬ノ人行テ皆此^レ見^ル微妙キ物ニテ有^ム云フ今ノ長樂寺ト云ハ其ノ繪書タル堂也廣高其ノ後俗ニテ久ク有テ公ニ仕ケリ此ノ廣高ガ書タル障紙ノ繪屏風ノ繪ナド可^レ然^キ所ニ有^リ一ノ所ノ傳^ハリ物ニテ廣高ガ書タル屏風ノ繪有^リ此^レ財^トシ大饗臨時客^ト時ニゾ取^リ被^レ出^リナ(下文闕)

大藏史生宗岡高助傳娘語 第五

今昔大藏ノ最下ノ史生ニ宗岡ノ高助ト云フ者有^キ行^ク時ニハ垂髮ニテ栗毛ナル草馬ヲ乘物^ニ表^ノ袴泊襪ニハ布ナ^リムシタ此ノ高助下衆ト云ヒ乍ラモ身ノ持成シ有様ナド无下ニ賤クナ有ケル家ハ西ノ京ニ^ナ住ケル堀河ヨリ西近衛ノ御門ヨリ北ニ八戸主ノ家也南ニ近衛ノ御門面ニ唐門屋ヲ立^テ其ノ門ノ東ノ脇ニ七間ノ屋ヲ造テ其^レ住ケル其ノ内ニ綾檜垣ヲ差廻シテ其ノ内ニ小^{ナル}ヤカナル五間四面ノ寢殿ヲ造テ其^レ高助ガ娘二人ヲ令^レ住^ム其ノ寢殿ヲ^{タル}事帳ヲ立テ冬ハ朽木形ノ几帳ノ帷ヲ懸ケ夏ハ薄物ノ帷ヲ懸ケ前ニハ唐草ノ蒔繪ノ唐櫛笥ノ具ヲ立タリ女房廿人許ヲ仕ハセケ皆裳唐衣ヲ着セタリ娘一人ガ方ニ十人ルベシ童四人ニ常ニ汗衫ヲ着セタリ其^レモ二人ツツ仕ハスルナ此ノ女房童ハ皆可^レ然^キ藏人經タル人ノ娘ノ父母モ无クテ便无ク迷^ヒ盜^ムガ如クニ語ヒ取テ仕^レバ一人モ弊^キ者ナシ形ヲ持

ハ、ナヨヤカ
カトアルベ
シ

成シモ皆可レ有ク故ビタ下仕半物心ニ任セテ形チ有様ナ撰勝バケレ敢テ片ナム者无カリ女房ノ局共ニ屏風几帳疊ナド
 一タル事宮原ノ有様ニ不劣ズ時折節ニ隨テ衣ハ調ヘ重ネテ着セ替ケリ姫君達ノ裝束ハタラ綾織チ撰ツ、織セ
 物シチ尋ネ語ヒテ染サセケ様物ノ色手ニ移ル許目モ曜ゾ見エケケル食ニハ各臺一具ニ銀ノ器チナム備ル侍ハ
 落ブレ尊ノ子共ノ爲方无ク不合ナル語ヒ將來テ様々ニ装ゾカ仕ハセ凡ソ有様一ニヤカ高ク持成シタ事實ノ吉キ人
 ニ不異ザリ父高助ハ行ク時ニハ極ジ氣ナル様シタリケ我ガ娘ノ方ニ行ク時ニハ綾ノ欄ニ蒲萄染ノ織物ノ指貫チ着テ紅
 ノ出シ泊チシ薫チ焼シメ行ケリ妻ハ細ノ襖ト云フ物チ着ルチ脱弃テ色々ニ縫重タル衣チ着テゾ娘ノ方ニハ行ケル此様
 ニ力ノ及フ限リ極ク傳ク事限ナシ而ル間池上ノ寛忠僧都ト云フ人堂チ造テ供養シケル此ノ高助彼ノ僧都ノ許ニ行テ申
 サセ様御堂供養極テ貴ク候ナレ賤ノ童部ニ物見セムト思ヒ給フル云ケレ僧都糸吉キ事也可レ然カラ所ニ狭敷シテ見
 ト被レ許ケレ高助極ク喜テ返ニケ此ノ高助ハ此ノ僧都ニ年來極ク仕リケ者ナレ此ノ堂供養ノ間ニモ兼テ可レ然キ
 事共チ様々ニ訪バケレ此ク見物ノ事チモ申シ請ベシ然テ明日堂供養ニ成ヌル夕サリ火チ數燃シテ荷ニ車二ツニ纏二ツニ
 積テ牛共ニ懸テ遣リ入レテ池ノ汀ニ下セバ僧都此レハ何ヨリ持來レル間ハ大藏ノ史生高助ガ令上ル船也ト申セバ
 僧都何ニ料ノ船ニカ有ト思ケル兼テ造リ儲タリケ其ノ船ニ高助蘭シテ様々ニ終夜物ノ具共打付テ上ニハ錦ノ平
 張チ覆ヒ高ニハ帽額ノ簾チ懸テ裾濃ノ几帳ノ帷チ重タリ朱塗タル高欄チ造リ渡シテ下ニハ紺ノ布チ引タリ然テ曉ニ成
 バレ菴上タル車ノ新キニ娘共チ乗セテ出シ車十兩許乘リ泛レテ次リ色々ニ装ゾキ指貫姿ノ御前共十餘人前ニ火チ
 燃シ次リ然シテ皆船ニ乗バ簾ノ懸リタル廻々ル皆衣チ出シツ衣ノ重ナリ色共可ニ云盡クモ非ズ光チ放ツ様也蠻繪
 着タル童ノ鬘結タル二ツノ船ニ乗セテ色取リタ棹チ以テ船チ差ス池ノ南ニ平張チ打テ其レニ御前共チ居レタ夜明

下ノニツニ
ハニツツチノ
誤カ

欄ノ上高字
アルベシ

テ供養ノ朝ニ成バ上達部殿上人請僧ナド皆來ヌ此ノ二ノ船池ノ上ニ廻リ行クニ莊リ立タル大鼓鉦鼓舞臺絹屋ナド
 照リ曜キ愕シク見ヨリ此ノ二ツノ船ノ莊タル様出シ衣共ノ一欄ニ被レ打懸ツ、色々ニ重タル水ニ影ノ移テ世ニ不レ似
 ズ微妙ク見ユレ上達部殿上人此レヲ見テ彼レハ何ノ宮ノ女房ノ物見ルニ問ヒ被レ尋ケレ僧都ノ穴賢彼ガ船ト不レ云ト
 口チ被レ固レバ高助ガ船ト云フ人モ无カリ然レバ心憶ガリ極クナ尋問ケル然レド遂ニ誰ガ船トモ不レ知デ止ニケ其ノ後
 ニモ事ノ折節ニ付ツ、高助此様ニシ娘ニ物見セケレ然レド其ノ人トハ露不レ被レ知ザリ然テ此様ニ微妙ク傳ケレ上日ノ
 者宮ノ侍可レ然キ諸司ノ尉ノ子ナド聲ニ成ラム云セケレ高助目ガマシ文チダ不ニ取入サセ一ザリ只賤クト前追ハム人
 チコ出シ入レテ見メ極カラ近江播磨ノ守ノ子也トモ前追ザリ人チバ我ガ御前達ノ御當ハ何デカ寄セム云テ聲取モ不
 レ爲ケル程ニ父母打次キテ死ケレ兄ノ男有ケル父返々モ云付ドモ萬ノ財ハ我レ獨コソ取ラム思ケレ妹傳チバ露不レ知
 ザリケ侍モ女房モ一人モ无ク皆去テ不レ寄來レバ娘二人歎キ入テ物モ不レ食ケル程ニ病付ニケ慕々シク練フ人モ无
 カリケル二人乍ラ打次キテ死ニケ其レハ大藏ノ史生時延ガ祖父也昔ハ此ル賤キ者ノ中ニモ此ク心バセ有ル者ナム有ケ
 マ、ニ亦極ク心バセ有トモ家貧クシ財チ不レ持ザラム娘悲クト然許ハ不ニ練ハ一ジ此レチ思フニ高助量无ケル徳人ニコ有ヌ
 當任ノ受領ニモ増リテ有ケレバ然ハ翔トゾ人云ケルト語リ傳ルヘタトヤ

賀茂祭日一條大路立札見物翁語 第六

今昔賀茂ノ祭ノ日一條ト東ノ洞院トニ曉ヨリ札立ケリ其ノ札ニ書タル様此ハ翁ノ物見ムズ所也人不可レ立ズト人共
 ノ札チ見テ敢テ其ノ邊ニ不レ寄ズ此レハ陽成院ノ物御覽ト被レ立タル札ト皆人思テ歩ノ人更ニ不レ寄ケリ何ニ況ヤ

車ト云フ物ハ其ノ札ノ當リニ不立ルニ漸ク事成ラム爲ル程ニ見レバ淺黄上下着タル翁出來テ上下見上見下シテ高扇ヲ仕テ其ノ札ノ許ニ立テ靜ニ物ヲ見テ物渡リ畢レバ返ヌ然レバ人陽成院ノ物可ニ御覽ニ怪ク不御マサザリマ何ナル事ニテ不御覽ニカ札ヲ立テ不御マサザリ怪キ事カナ人口々ニ心不レ得ズ云ヒ合ルニ亦人ノ云フ様此ノ物見ツル翁ノ氣色ハ怪カリ者カナ此奴ノ院ヨリ被立タル札ト人ニハ思テ此ノ翁ノ札ヲ立テ我レ所得テ物見テ爲ニヤ有ナド様々ニ人云ヒ縁ニ陽成院自然ラ此ノ事ヲ聞シ食レバ其ノ翁慥ニ召シテ問ヘト被仰ベレ其ノ翁ヲ被尋ケル其ノ翁西ノ八條ノ刀禰ニ有ケル然レバ院ヨリ下部ヲ遣シテ召ケル翁參リテ院司承リテ汝チ何カニ思テ院ヨリ被立タル札ト書テ一條ノ大路ニ札ヲ立テ人ヲ恐シテシタリ顔ニ物ハ見ケル其ノ由慥ニ申セト被問ケル翁申テ云ク札ヲ立タル事ハ翁ガ仕タル事也但院ヨリ被立タル札トハ更ニ不書候ニズ翁既ニ年八十ニ罷リ成レバ物見ム心モ不候ズ其レニ孫ニ候フ男ノ今年藏司ノ小使ニテ罷リ渡リ候ツル也其レガ極テ見マ欲ク思給ヘ候バ罷出テ見給ヘム思給ヘシ年ハ罷老ニタ人ノ多ク候ハム中ニテ見候ハ被踏倒テ死候ナム益无ムト思給テ人ニ寄來ム所ニテヤスラカニ見給ヘム思給ヘテ立テ候ヒシ札也ト陳レバ陽成院此レヲ聞シ食レシ此ノ翁極ク思ヒ寄テ札ヲ立ケリ孫ヲ見ムト思ケ專ラ理也此奴ハ極ク賢キ奴ニ有ケレ感ゼサ給テ速ニ疾ク罷返リ仰セ給ケル翁シタリ顔ナル氣色ニテ家ニ返テ妻ノ嫗ニ我ガ構タリ事當ニ惡カラ院モ此ク感ゼサ給テ我レ賢ム思ケル然レド世ノ人ハ此ク感ゼサ給テ不レ受申ケリ但シ翁ノ孫ヲ見ムト思ケム理也ト人云ナム語リ傳ヘタトヤ

●十訓抄上卷可定心操振舞事

ひかし西八條の刀禰なりける翁、賀茂祭の日、一條東洞院の邊に、こゝは翁が見物せんずる所なり。人

よるべからずといふ札をかきて、あかつきよりたたりければ、人かの翁の所爲とはしらず、陽成院の物御らんせんとて、たてられたる札なめりとして、人よらざりける程に、時になりて、此の翁淺黄かみしも着、たか扇つかひて、したりがほなるけしきにて、物を見けり。人々目をたてけり。陽成院此の事をきこし召して、くだんの翁をめして、院司して問はせられければ、年八十になりて、見物の志更にはべらぬが、ことし孫にて候ふ男の、内藏寮の小使にて、祭をわたり候ふが、あまりに見まほしく候ひて、たゞ見候はんには、ふみころされぬべくおぼえて、やすく見候はんために、札をばたてて侍る。たゞし院の物御覽せんずるよしは、全く書かず候ふと申しければ、さもある事とて、御沙汰なくてゆりにけり。これ肝ふとさわざなれども、かなしう支度しにたりけるこそをかしかれ。

右少弁師家朝臣值女死語 第七

今昔右少弁藤原ノ師家ト云フ人有キ其ノ人ノ互ニ志有テ行キ通フ女有ケリ女ノ心様ノ極テ心慥クテ疎キ事ナモ靜メ思ヒナド有ケレ弁事ニ觸テ此レニ働ト不レ被レ思ジト翔ドモ公事ニ付ツ、念ガシ事共有リ亦自然ラ泛ナル女ニ被レ留ル夜モ有ケル程ニ夜枯ニ成ケル女此様ナル有様モ未ダ不レ習ヌ心ニハ心疎キ事ニ思ツ、打解タル氣色モ不レ見エズノ有ケル程ニ漸ク枯々ニ成ツ、前々ノ様ニモ无カリ慥シト无ドモ其レチ心疎キ事ニ思テ心不レ吉ズノ成リ持行ケレ互ニ疎ム心ハ无ドモ遂ニ絶ニケ然テ年半許ニ成レバ弁其ノ女ノ家ノ前ヲ過ニ其ノ家ノ人外ヨリ來ガ入來テ弁殿コソ此ヨリ過サセ給ヒツ入御シ時ハ何ニカ有ケム哀ソ見奉ト主ノ女聞テ人ヲ出シテ可レ申キ事ノ有ルヲ白地ニ入給

ヒナム云セタリ弁此レヲ聞テ實ニ此ハ然ゾカ思ヒ出テ遣リ返サセ下テ入テ見レバ女經箱ニ向テヨカ衣嚴氣ナル生ノ
袴ノ清氣ナル有付テ今取疏トモ不見エズ様吉クテ居タル眼見額額口ナド不レ憶ズ見マ欲キ様也然レバ弁事シモ今
日始メテ見ム人トノ様ニ此チバ何ト今マデ不レ見ザリケ返々ス我ガ心ニモ口惜クテ經讀奉ルチ取リ妨ゲテ臥ヤト思モ
月來ノ隔ニ許サレ无クテ押立山モ慎クテ此彼物云ヒ懸レド答ヘモ不レ爲ネバ經讀畢テ萬ツ云ム氣色ニチ打タル
顔ノ匂過ヌル方取返ス物ナラ今モ取返ベク強ニ様惡キマ思ユレヤガテ留リテ今日ヨリ後此ノ人ヲ愚ニ思タラ心ノ内ニ
萬ノ誓言ヲ思次ケテ月來心ヨリ外也ツル事ナド返々ス云モ答ヘモ不レ爲デ七ノ卷ニ成テ藥王品ヲ押返シ押返シク
返ツツ三度許讀奉レバ弁何ト此クハ疾ク讀畢給ヘ可レ申事共モ多カリ云フニ於此命終。即往安樂世界。阿彌陀佛。
大菩薩衆。圍遶住所。青蓮花中。寶座之上。」ト云フ所ヲ讀奉テ目ヨリ涙ヲホロ／＼ト泛セバ弁穴轉テ尼原ノ様ニ
道心付給ヤト云フニ女涙ノ浮タル目ヲ見合セタ霜露ニ濕タル思フニ忘々シク月來何ニ働シト思フニ我モ忍カネ
若シ此ノ人ヲ今日ヨリ後亦モ不レ見ザラ何ナル心有ナム返々ス忘々シク思ヘテ我ガ心乍ラ憶シク思ユ而ル間女經ヲ讀
畢テ後沈ノ念珠ノ虎珀ノ裝束ルチ押攤テ念ジ入テ暫許有テ目ヲ見上タル氣色ノ俄ニ替テ怪ク成ダレ此ハ何ニト見ルニ
女今一度對面セム思テ呼聞エツ也今ハ此レヲ限ニテ云テ只死バ弁奇異クテ此ハ何ニト此ニ人來ト云ヘド急ト人モ否
不ニ聞付テ暫許有テゾ聞付テ長キ人何ニト指出ニ弁居ダレ此ノ長シキ者穴奇□此ハ何ニシ事ゾヤマドフ
フ甲斐无ク只髮ノ筋ノ切レム程ニ失畢ヌレ然リトテ穢ニ可籠キニ非ネバ弁返ナム爲モ有ツル顔ノ心ニ懸リテ悲シク
思フニ付テモ何かハ思ヒ得ム然テ其レヨ返テ弁幾モ无クテ病付テ日來ヲ經テ遂ニ失ニケケ其ノ女寄ヤトゾ其ニ親カリ人
ハ女ノ靈ナド知ムカシ其ノ女最後ニ法花經ヲ讀奉テ失レバ定メテ後世モ貴ムト人モ見ケル弁ヲ見テ深ク恨ノ心ヲ發シ

失ケルニ何ニ共ニ罪深カハヲ思ユル此ナム語リ傳ヘタトヤ

●今鏡敷島のうちぎさの巻

ある女ありけり。とき／＼通ひける男の、いつしかたえにければ、心うくて、心のうちに思み惱みけるほどに、その人門をすぐることのありけるを、家の人の、今こそすぎさせ給へといひければ、おもひあまりて、さと立ちながら入らせ給へと、おひつきていはせければ、やりかへして入りたるに、もと見しよりもなつかしささまにて、ことの外に見えければ、悔しくなりて、とかくいひけれど、女ただ經をのみよみて、かへりごともしせざりける程に、七のまきの即往安樂世界といふ所を、くりかへしよむと見けるほどに、やがて絶えいりてうせにければ、われもよりておさへ、人もよりてとかくしけれども、やがてうせにけり。かくてもりもし、またかしらをもおろしてむと思ひけれど、當時辨なりける人なれば、さすがえこもらで、つちにおりて、とかくの事までさたして、しばしは山ざとにかくれたりければ、世をそむさぬるときこえけれど、さすがかくれもはてで出でつかへければ、かへる辨となんいひける。

移燈火影死女語 第八

今昔女御ノ御許ニ候ケル若キ女房有ケリ小中將ノ君トナ云ケル形チ有様皆美麗ニテ心バ不レ惡ケレ同僚ノ女房達
モ皆此ノ小中將ヲ勞タキ者ニナ思タリ定ル男モ无カリケ美濃ノ守藤原ノ隆經ノ朝臣ゾ時々通ヒケ而ル問此ノ小中
將薄色ノ衣共ニ紅ノ單衣ヲ着テ女御殿ニ候ケル程ニ夕サリ御燈油參ラセタ火ニ此ノ小中將ガ薄色ノ衣共ニ紅ノ單重

次ニノ下小
中將トアル小

テ着テ立ケル形チ有様體一ツモ不替テ口覆シタマハ眼見額ツキ髪ノ下ハ露不達ズシタリケ見付テ女房達奇異ク似
者ナド云テ見騒ケル其ノ中ニ然様ノ事爲ル様知タル長シキ人モ无クテ只集テ見興ジケル程ニ搔落ケリ然テ此ク有ツル小
中將ニ語リケレバ何ニ賤氣ニテ弊ヲム疾ク不搔棄一テ无期ニ見給ヒツラ恥シケレ小中將云ケル其ノ後長シキ人々此レナ
聞テ彼ハナ物ナ此ノ君達ノ人ニ此トモ不告給一テ搔落シテ止ニケレ云モ甲斐无クテ止ニケレ然テ廿日許
候ケル程ニ此ノ小中將其ノ事トモ无ク風モ發テ二三日ハ局ニ臥ルガ苦ト云テ里ヘ出リ而ル間隆經ノ朝臣白地
ニ知ル所ヘ行トテ女御殿ヘ參ケル次ニナ尋ケレ只今里ヘ出給ヌル大盤所ノ女ノ童部ノ云ケレヤガテ家ニ行テ
尋ケル七日八日ノ程ノ月ノ西ニ傾タル程ニテ有ケル西向ナル妻戸ノ有ケル内ニ小中將出レバ隆經妻戸ヲ押開テ入
テ曉ニ物ヘ行カムズ此ト告グ許ニテ返ナム思ケル此ノ小中將ヲ見ルニ例ヨリ身ニ染テ糸惜ク思ケル合セテ小中將モ心細
氣ニ思テ少シ惱マシ氣ニテ有ケレ隆經ノ朝臣返ナム思ケレ臥ニケテ終夜語ヒテ曉ニ返ナム思ケル見置テ出
レバ隆經家ヘ返ケル終道心ニ懸テ家ニ返リ着ニ不審ベキ事今疾ク返ナムト書テ遣タリケ返事ヲ何シカ待居ルニ持
來バ不取敢一ズ取テ披テ見レバ異事ハ无クテ只鳥部山ト許書タリケ隆經此レヲ見テ哀レニ思テ懷ニ差入レテヒタ
秦ニ宛テテナ出テ物ヘ行ニケテ終道モ此レヲ取出ツ見バ手モ糸吉カリ然テ彼モ暫シ可有キ事有ケレ此ノ人ノ戀サニ急
ギ返リ京ニ上着ケル先ゾ急ギテ行レバ家ヨリ人出テ早ウ失給ヒニシ夜前ナム鳥部野ニ葬シ奉テシ云ケル聞ケム隆經
ノ朝臣ノ心コソ可譬キ方无カリ現ニ然ゾ有ケム然レバ火ニ立テ見エム人ヲバ其燐ヲ搔落シテ必ズ其ノ人ニ可キ也
亦祈テモ吉ク可レ爲シ極ク忌ム事ニテ有テ不レ知テ不ズ搔落シテ止ニケレ新タニ此ク死ヌル也ナム語リ傳ヘタトヤ

◎今鏡敷島のうちぎさの巻

何シカノ下
ト字ヲ脱セ

中ごろ男ありけり。女をおもひてときく通ひけるに、をとこある所にて、ともし火のほのほの上にか
の女の見えければ、これはいむなるものを、火のもゆる所をかきおとしてこそ、その人にのますなれと
て、かみにつゝみてもたりけるほどに、事しげくしてまざるゝことありければ、わすれて一日二日すぎ
て、思ひいでけるまゝにゆけりければ、惱みて程なく女かくれぬといひければ、いつしかゆきて、かのと
もしびのかきおとしたりし物を見せでと、わがあやまちに悲しくおぼえて、つねなき鬼にひとくちにく
はれけむ心うさ、足すりをしつべく歎きなきけるほどに、御覽せさせよとにや、この御ふみを見つけて
待るとて、とりいだしたるを見れば

鳥部山たににけぶりの見えたらばはかなく消えし我としらなん

とどかきたりける。歌さへともし火のけぶりとおぼえて、いとかなしくおもひける、ことわりになむ。

常澄安永於不破關夢見在京妻語 第九

今昔常澄ノ安永ト云フ者有ケリ此レハ惟孝ノ親王ト申ケル人ノ下家司シモケイシニテ有ケル其レニ安永其ノ宮ノ封戸ハダラムナ
爲ニ上野ノ國ニ行リ然テ年月ヲ經テ返リ上ニ美濃國不破ノ關ニ宿シヌ而ル間安永京ニ年若キ妻ノ有ケル月來國
ニ下ケル時ヨリ極テ不審ク思ケル合セテ俄ニ極ジク戀シク思ケル何ナル事ノ有ム夜明バ疾ク念ギ行カム思テ關屋ニ寄
臥ケル程ニ寢入ニケテ夢ニ安永見レバ京ノ方ヨリ火ヲ燃ル者來ルヲ見レバ童火ヲ燃シテ女ヲ具リ何ナル者ノ來ナラ思
フ程ニ此ノ臥タル屋ノ傍ニ來タル見レバ此ノ具シタ女ハ早ウ京ニ有ル我が不審シト思フ妻也ケリ此ハ何カニ奇異ク思フ

程ニ此ノ臥タル所ニ壁ヲ隔テ居ヌ安永其ノ壁ノ穴ヨリ臨^{イソキ}テ見レバ此ノ童我が妻ト並ビ居テ忽ニ鍋ヲ取寄テ飯ヲ炊テ童ト共ニ食フ安永此レヲ見テ思ハク早ウ我が妻ハ我が无ツル間ニ此ノ童ト夫妻ト成リト思フニ肝騒ギ心動テ不安ズ思ヘド然ハレ爲ム様ヲ見ムト思テ見ルニ物食ヒ畢テ後我が妻此ノ童ト二人搔抱カラ臥ヌ然テ程モ无ク娶ク安永此レヲ見ルニ惡心忽ニ發テ其コニ踊入テ見レバ火モ无シ人モ不見エズト思フ程ニ夢覺ヌ早ウ夢也ト思フニ京ニ何ナル事ノ有ルニ彌ヨ不審ク思ヒ臥タル程ニ夜明ヌレ急立テ夜ヲ晝ニ成テ京ニ返テ家ニ行ニ妻恙ガ无クテ有バケレ安永喜ト思ケカト彌ヨ不審ク思ヒ臥タル程ニ夜明ヌレ急立テ夜ヲ晝ニ成テ京ニ返テ家ニ行ニ妻恙ガ无クテ有バケレ安永喜ト思ケニ妻安永ヲ見マ、咲テ云ク昨日ノ夜ノ夢ニ此ニ不^レ知ヌ童ノ來テ我レヲ相具シテ何クト不^レ思ヌ所ニ行シニ夜ル火ヲ燃シテ空ナル屋ノ有レ内ニ入テ飯ヲ炊テ童ト二人食テ後二人臥タリ時ニ其コ俄カニ出來カバ童モ我モ騒グト思ヒ程ニ夢覺ニキ然テ不審ト思ヒ居ツル程ニ此ク御タル云ケル聞テ安永我モ然々見テ不審シト思テ夜ヲ晝ニ成シテ急ギ來タル也ト云ケレ妻モ此ク聞テ奇異ク思ケリ此レヲ思フニ妻モ夫モ此ク同時ニ同様ナル事ヲ見ケム實ニ希有ノ事也此ハ互ニ同様ニ不審シト思ヘバ此ク見ルニ有ラム亦精ノ見ニヤ有ラム不^レ心得ヌ事也然レバ物ヘ行ニモ妻子ニテ強ニ不審ハ^レ不^レ思マ^レジキ也此ク見レバ極ク心盡ル事ニテ有ル也トナ語リ傳ルヘトヤ

尾張國勾經方妻事夢見語 第十

今昔尾張ノ國ニ勾ノ經方ト云フ者有キ字ナバ勾官首トゾ云ケル事ナド叶タル者ニテ有ケル其ノ經方ガ年來棲ケル妻ノ上ニ亦思フ女ノ其ノ國ニ有ケル本ノ妻女ノ事トハ云ヒ乍ラ強ニ云ドモ經方ノ女ノ難^レ去ク思ニヤ此様彼様ニ構ツ忍テ行通ケル本ノ妻強ニ尋テ經方彼ノ女ノ許ニ行ヌト聞付ツレ色形ヲ失セ肝心モ迷^レハシ妬ミ狂ケリ而ル間經方京ニ可

目次及丹本
等尾張國勾
經方宿他所
夢見妻來語
ニ作ル

己字一本ナ

レ上キ要事有テ日來出立ケル既ニ旦上^{アソク}ラム夜彼ノ女ノ許ニ構テ行^{ハヤ}切^{ホソク}ニ思ケル此ノ本ノ妻ノ痛ク妬ムガ六借ク思エテ
 〓ニ打任セテ現ハニ否^エ不^レ行^ズシ國府ニ召スト云ヒ成テ經方彼ノ女ノ許ニ行ニケ經方女ト物語ナド臥タリ程ド寢入
 ニケ然テ經方夢ニ見ル様本ノ妻忽ニ此ニ走入テアラ己ハ年來許此テ二人臥ルナリ此テ何デ口淨クハ云ケルゾ様々
 エナブ艶ヌ事共ナ云ヒ次ケテ取懸リテ二人臥タル中ニ入テ引妨^グト見テ夢覺ヌ其ノ後怖シク氣六借ク思ヘテ念ギ出デテ
 家ニ返リ行ヌ夜明テ經方京ヘ上ヌ事共ナド拈^メ居タル今夜御館ニ事ノ沙汰共有テトミニ否不^レ罷出^ズシ寢^ザリツ
 苦事无限シト云テ本ノ妻ノ傍ニ居タリ本ノ妻物疾ク參レナ云フ頂ノ髮ヲ見レバ一度ニ散^チト起上リ一度ニ散^チト臥ス經
 方怪シク怖シ氣ニ爲ル物カナ見居タル程ニ妻ノ云ク己ヲノレハ強顏^キ者カナ今夜正シク女ノ彼ノ許ニ行テ二人臥シテ
 愛シツ顔ヨト云ヘバ經方誰カ此ル事ハ云ゾト問ヘバ妻イデ慄ヤ我が夢ニ慥ニ見カシト云ヘバ經方怪ト思テ何ニ見
 問ヘバ妻夜前出テ行ニ必ズ其コヘ行ラム思ヒ合セテ今夜ノ夢ニ彼ノ女ノ許ニ我が行レバ己レハ其ノ女ト二人臥シ
 萬ヲ語ルチ吉ク聞テアラ己レハ不^レ來ズト云ヘド此テ二人臥ルハト云テ引妨^レバ女モ己モ起騒^ソハ有ツレ云フナ聞
 經方奇異ク然ハ何事カ云ツル問ヘバ妻經方ガ彼^カニ云ツル事ヲ一言モ不^レ落サ^ズツラト云フニ經方ガ夢ニ見
 ツル事ニ露不^レ違ネバ經方怖^シト愚也ヤ[〓]テナ有ケル然レド我が夢ヲ不^レ語デ後二人ニ會ム然々ノ奇異キ事コソ
 有シカ語ケル然レバ心ニ強ニ思フ事ハ必ズ此ク見ユル也ケリ此レヲ思フニ其ノ本ノ妻何カニ罪深ケム嫉妬ハ罪深キ事也
 必ズ蛇ニ成シトゾ人云ケルト語リ傳ルヘトヤ

陸奥國安倍頼時行胡國空返語 第十一

空返目次及
丹本等歸來
ニ作ル

今昔陸奥ノ國ニ安倍ノ頼時ト云フ兵有ケリ其ノ國ノ奥ニ夷ト云フ者有テ公ニ隨ヒ奉ズシ戰ヒ可奉シト云テ陸奥ノ守源ノ頼義ノ朝臣責ケル程ニ頼時其ノ夷ト同心ノ聞エ有テ頼義ノ朝臣頼時ヲ責ケレバ頼時ガ云ク古ヨリ于レ今至マデ公ノ責ヲ蒙ル者其ノ員有ト云ヘド未ダ公ニ勝奉ル者一人モ無シ然レバ我レ更ニ錯ツ事無シト思モ此ク責ヲノ蒙レバ敢テ可レ遁キ方無シ而ルニ此ノ奥ノ方ヨリ海ノ北ニ幽ニ被レ見渡ル地有ナリ其ニ渡テ所ノ有様ヲ見テ有キベ所ナラ此ニテ徒ニ命ヲ亡リサハ我レ難レ去ク思ハム人ノ限ヲ相具シテ彼ニ渡リ住ト云テ先ダ大キナ船一ツヲ調ヘテ其ニ乗テ行ケル人ハ頼時ヲ始テ子ノ厨河ノ二郎貞任鳥ノ海ノ三郎宗任其ノ外ノ子共亦親シク仕ケル郎等廿人許也其ノ從者共亦食物ナド爲ル者取合セテ五十人許一ツ船ニ乗テ暫ク可食キ白米酒菓子魚鳥ナド皆多ク入レ拈テ船ヲ出シ渡ケレ其ノ被レ見渡ル地ニ行着ニケレド遙ニ高キ巖ノ岸ニテ上ハ滋キ山ニテ有ベレ可レ登キ様モ无カリケ遙ニ山ノ根ニ付テ差廻テ見ケル左右遙ナル葦原ニテ有ケル大キナ河ノ湊ヲ見付テ其ノ湊ニ差入リ人ヤ見ユル見ドモ人モ不見エザリ亦タ登ベキ所有ルト見ケレ遙ナル葦原ニテ道踏タル跡モ无カリ河ノ底モ不知ズ深キ沼ノ様ナル河ニテ有ケル若シ人氣ノ爲ル所有ルト河ヲ上様ニ差上ケル程ニ只同様ニテ一日過ギ二日過ニ奇異ト思ケル七日差上リケニ只同様ニテ有ケレ然リト何デ河ノ畢无テハ有ゾト云テ差上ケル程ニ廿日差上リ尙人ノ氣ハヒ无ク同様也卅日差上リケ其ノ時ニ怪シク地ノ響ク様ニ思エバ船ノ人皆何ナル人ノ有カニ怖シク思エテ葦原ノ遙ニ高キニ船ヲ差隠シ響ク様ニ爲ル方ヲ葦原ノ迫ヨリ見バ胡國ノ人ヲ繪ニ書タル姿シタ者ノ様ニ赤キ物ノ□テ頭ヲ結タル一騎打出ゾ船ノ人此レヲ見テ此ハ何ナル者ゾト思テ見ル程ニ其ノ胡ノ人打次キ員モ不知ズ出來リケ河ノ鉞ニ皆打立テ聞モ不知ズ言共ナレ何事ヲ云フト不聞エズ若シ此ノ船ヲ見テ云ニヤ有ラム思ヘバ怖シク彌ヨ隠レテ見ル程ニ此ノ胡ノ人一時許

轉合テ河ニハテト打入テ渡ニケル千騎許ハ有ラム見エケテ歩ナル者共サバ馬ニ乗タル者共ノ高ニ引付ケ引付ケツ渡ケル早ウ此ノ者共ノ馬ノ足音ノ遙ニ響キテ聞エケ也ケリ皆渡リ畢テ後船ノ者共此ノ卅日許差上ニ一所渡瀬ト思ケル所モ无カリツ此ク歩渡ヲシツ此コソ渡瀬也ケレ思テ恐々差出テ和ヲ差寄セテ見ニケル底ヒモ不知ズ同様ニ深ケレバ此モ渡瀬ニハ非ザリケ奇異ク思テ止リ早ウ馬ノ後ト云フ事ヲ馬ヲ游ガシ渡ケル也ケリ其レニ歩人共サバ其ノ馬共ニ引付ケツ渡シケ歩渡ト思ケル也ケリ然テ船ノ者共頼時ヨリ始メテ云ヒ合セテ極ク此ク上モ无キ所ニ有ケル亦然ラム程ニ自然ラ事ニ値ナバ極テ益无シ然レバ食物ノ不盡又前ニ去來返ナム云テ其ヨリ差下テ海ヲ渡テ本國ニ返ルニケ其ノ後幾ノ程モ不經シテ頼時ハ死ニケレ然レバ胡國ト云フ所ハ唐モ遙ノ北ト聞ニ陸奥ノ國ノ奥ニ有ル夷ノ地ニ差合ニヤ有ラム彼ノ頼時ガ子ノ宗任法師トテ筑紫ニ有ル者ノ語ケル聞次テ此ク語リ傳ヘタトヤ

●宇治拾遺物語卷十五頼時が胡人見たる事

これも今は昔、胡國といふは唐よりも遙に北と聞くを、奥州の地につゞきたるにやあらんとて、宗任法師とて筑紫にありしが、語り侍りけるなり。この宗任が父は頼時とて、陸奥國のえびすにて、おほやけにしがひ奉らずとて、攻めんとせられけるほどに、いにしへより今に至るまで、おほやけに勝ち奉る者なし。我は過たずと思へども、責をのみからぶれば、はるくべき方なきを、奥の地より北に見わたさるゝ地あなり。そこに渡りて有様を見て、さてもありぬべき所なれば、我にしたがふ人のかぎりを、皆めて渡して住まんとひて、まづ船一つを調へて、それに乗りて行きたりける人々は、頼時、厨川の次郎、鳥海の三郎、さては又ひつまじき郎等ども二十人ばかり、食物酒など多く入れて船を出だしければ、いくば

くもはしらぬほどに、見わたしなりければ、渡り着きにけり。左右は遙なる葦原にぞありける。大きな川
 のさしを見つけて、その湊にさし入りけり。人や見ゆると見けれども、人げもなし。陸にのぼりぬべ
 き所やあると見けれども、葦原にて道ふみたる方もなかりければ、若し人げする所やあると、川をのぼ
 りさまに七日まで上りにけり。それがただ同じやうなりければ、あさましきわざかなとて、なほ二十日
 ばかり上りけれども、人のけはひもせざりけり。三十日ばかり上りけるに、地の響くやうにしなければ、
 いかなる事のあるにかと恐ろしくて、葦原にさし隠れて、響くやうにする方をのぞき見ければ、胡人
 とて繪に書きたる姿したる者の、赤きものにて頭結ひたるが、馬に乗りつれてうち出でたり。これはい
 かなる者ぞと見るほどに、うちつゞき數知らず出で來にけり。河原の端に集まり立ちて、聞きも知らぬ
 事をさへづりあひて、河にはらくとうち入りて渡りけるほどに、千騎ばかりやあらんとぞ見えわた
 る。これが足音の響にて、遙に聞えけるなりけり。かちのものをば、馬に乗りたる者の側に引きつづ
 して渡りけるをば、只かちわたりする所なめりと見けり。三十日ばかり上りつるに、一所も瀬なかりし
 川なれば、かれこそ渡瀬なりけれと見て、人過ぎて後にさし寄せて見れば、同じやうに底ひも知らぬ淵
 にてなんありける。馬筏を作りて泳がせけるに、徒人はそれに取りつきて渡りけるなるべし。なほ上る
 とも、はかりもなく覺えければ、恐ろしくてそれより歸りにけり。さていくばくもなくぞ頼時は失せ
 にける。されば胡國と日本の東の奥の地とは、さしあひてぞあなると申しける。

島ノ下目次
 及丹本等値
 虎(鬼?)ノ
 二字アリ

鎮西人至度羅島語 第十二

今昔鎮西ノ國ノ郡ニ住ケル人商ノ爲ニ數ノ人一ツ船ニ乗テ不知世界ニ行テ本國ニ返ケル鎮西ノ未申ノ
 方ニ當テ遙ノ息ニ大ル島有ケリ人住タル氣色有バ船ノ者共此ノ島ヲ見テ此ニ此島コソ有ケレ此ノ島ニ下テ食物
 ナド事ヲモテ思テ漕寄セテ其ノ島ニ皆下ヌ或ハ島ノ體ヲモ見廻シ或ハ箸ノ伐ヲ散々ニ行ヌ而ル間山ノ方ヨリ多
 ノ人ノ來ル音シテ聞エケ怪ク此ル不知ヌ所ニハ鬼モ有ラム由无シト思テ皆船ニ急ギ乗テ差シ去テ山ノ方ヨリ動シテ出
 來ル者ヲ何者ソト見遣テ見レバ烏帽子折テ結タル男共ノ白キ水干袴着タル百餘人許出來タリ船ノ者共此レヲ見テ早
 ウ人也ケリ此レハ可恐キ事ニハ非ケリ但シ此ル不知ヌ所ナレ此奴共ニ被テ驚モソ爲ル人ノ員極テ多クハ不レ寄
 ジト思テ彌ヨ船ヲ差去テ見ケル此奴共海際ニ來テ船ヲ差シ去テ見テ海ニ只下ニ下ケル時ニ船ノ者共本ヨリ皆兵ニテ弓
 箭兵仗ヲ各具シタリ手毎ニ弓箭ヲ取テ番テ番テ何者共ノ此ク追テハ來ルソ近ク寄來バ射テ云ケレ此奴共皆身ノ衛
 モ不レ爲ズ弓箭モ不レ持ケリ船ノ者共ハ多クノ人皆手毎ニ弓箭ヲ取テ有ケレバ物モ不レ云ズ打見遣セテ暫許有テ皆
 山様へ返入リケ其ノ時ニ船ノ者共此ハ何カニ思テ此奴共追ヒ來モ不レ知レバ恐レテ成シテ遙ニ差去リケ然テ鎮
 西ニ返リテ後此ノ事ヲ普ク人ニ語バケレ其ノ中ニ年老ケル者此レヲ聞テ云ク其レハ度羅ノ島ト云フ所ニコ有ナレ其ノ島ノ
 人ハ人ノ形チニ有レド人ヲ食ト爲ル所也然レバ案内不レ知ズシ人共ノ島ニ行バ然集リ來テ人ヲ捕ヘテ只煞シテ食トコ
 ソ聞侍カ其達ノ心賢クテ近ク不レ寄セテ逃コソ有ナレ近ク寄カバ百千ノ弓箭有モ取付ニハ不レ叶テ皆被レ煞
 シト船ニ有シ者共此レヲ聞テ奇異ク思テナ彌ヨ怖レケ此レニ依テ人ノ中ニモ弊キ者ノ人ニ不レ似ズ弊キ物ナド食フ者バ

度羅人トハ云フ也ケリ只□思フニ此ク聞テ後ゾ度羅人ト云フ事ヲバ知ケル此ノ事ハ鎮西ノ人京ニ上ルガ語ケル聞
繼テ此ク語り傳ヘタトヤ

行目次至ニ
作ル

通大峯僧行酒泉郷語 第十三

今昔佛ノ道ヲ行フ僧有ケリ大峯ト云フ所ヲ通ケル間ニ道ヲ踏違テ何モト不思エズ谷ノ方様ニ行ケル程ニ大ナル人
郷ニ出リニケ喜ト思テ人ノ家ニ立寄テ此ノ郷ハ何ナル所ゾナ問ハム思テ行ケル程ニ其ノ郷ノ中ニ泉有リ石ヲ以テ疊ムデ
微妙ク上ヘニ屋ヲ造リ覆タリ僧此レヲ見テ此ノ泉ヲ飲ムト思テ寄タル其ノ泉ノ色頗ル黄ダリ何ナレ此ノ泉ハ黄ルニカ
有トム思テ吉ク見レバ此ノ泉早ウ水ニハ非ズ酒ノ涌出也ケリ僧奇異ト思テ守リ立テル程ニ郷ヨリ人數出來テ此ハ
何ナル人ノ來ゾト問ケレ僧大峯ヲ通ツル程ニ道ヲ踏違ヘテ思ヒ不懸ズ此ク來レル由ヲ答フ一人有テ去來給ヘト云
テ僧ヲ行ケバ僧我レニ非デ此レハ何クハ將行ニカ有ラム我ヲ驚シニ將行ニヤ有ラム思ヘド可辭キ事ニ非ネバ此ノ倡
人ノ後ニ立テ行ケル程ニ大ルキ家ノ極ク辟ハ、氣ナル將行ヌ其ノ家主ニヤ有ラム長シキ男出來テ僧ニ來レル様ヲ問ヘバ僧
前ノ如ク答フ其ノ後僧ヲ呼上テ物ヲ食ハセ此ノ家主若キ男ヲ呼出テ此ノ人具シテ例ノ所ハ將行ト云ヘバ僧此レハ此
ノ郷ノ長者ナド有ナメ我レヲ何ナル所ハ將行ムト爲ラム「有ラム」怖シク思フ程ニ此ノ若キ男去來給ヘト云テ具シテ將行
ケバ僧怖シト思ヘド可遁キ方无ケレ只云フニ隨テ行ケル片山ノ有ル所ニ將行テ男ノ云ク實ニハ汝ヲ驚ガ爲ニ此ハハ
將來ツル也前々モ此様ニシ此ニ來ヌル人ヲ返テ此ノ有様ヲ語ラム事ヲ怖レテ必ズ驚ス也然レバ此ニ此郷有ト云フ
事ヲバ人努々不知ヌ也ト云ニ僧此レヲ聞クニ惣テ不思エド泣々ク此ノ男ニ云ク己レ佛ノ道ヲ行キ諸ノ人ヲ利益

有ラムトノ
四字一本ナ
シテナラシ

トム思テ大峯ヲ通ル間心ヲ發シテ身ヲ碎ク事无限シ其レニ道ヲ踏違ヘテ思ヒ不懸ズ此ニ來テ命ヲ亡シテ死ヌル道
遂ニ通ル所ニ非ズ然レバ其レヲ苦シム非ズ只其ノ佛ノ道ヲ行フ僧ノ咎无キヲ驚シ給テム爲ルガ无限キ罪ニテ有レバ若
シ助ケ給ヤト云ケレ男實ニ宣フ事理バ免シ可申キ若シ返テ此ノ郷ノ有様ヲ語リ給ハム事ノ怖レキ也ト云ヘバ僧己
レ更ニ此ノ郷ノ有様ヲ本ノ郷ニ返テ人ニ語り不侍ジ世有ル人命ニ増ヌ物无ケレ命ニ存ナバ何デカ其ノ恩ヲ忘レ申
ヤト云ヘバ男女僧ノ身ニテ御スモ亦佛ノ道ヲ修行シ給フ人也助ケ申サム但シ其々ニ此ル所有ト云フ事ヲダ語リ給マ
ハ然様ニテ免シ申サム云ヘバ僧喜キマ諸ノ誓言ヲ立テ、不ニ云マ「ジキ由ヲ懃ニ云ヘバ男然ラバ穴賢々々ト返々ス口
ヲ固テ道ヲ教ヘテ返シ遣バ僧男ニ向テ禮拜シテ後ノ世マデ此ノ恩ヲ不ニ忘マ「ジキ由ヲ契テ泣々ク別レテ其ノ教ヘケ
道ノマ行ケレ例ノ道ニ出ケリ然テ本ノ郷ニ返マニ然許誓言ヲ立テ云シカ信无ク口早ケル僧バ何シカ會フ人毎ニ此ノ
事ヲ語リバ此レヲ聞ク人皆イデト云テ語ケレ僧郷ノ有シ様酒ノ泉ノ有シ事ナド極ク口聞キ不落サズ語ケレ年
若キ勇タル者共有リテ此許ノ事ヲ聞テ何カ不見え様ハ有ラム鬼ニテ神ニテ有ナド聞コソ怖シカ聞バ人ソ有ナレ其ハ
何ナル猛キ者也ト云モ思フニ然許コソ有ラメ去來行テ見ムト若キ者共ノ魂太ク力極ク強ク手極テ聞ケル五六人許
各弓箭ヲ帶シ兵仗ヲ提テ此ノ僧ヲ具シテ只行ニ行カム爲ルキ長キ者共ハ此レ由无キ事也彼レハ我が士バ皆構タル事
共有ラム此ヨリ行カムズ旅バ惡ムト云テ制止シケレ云ヒ立タル事ナレ聞モ不入ズ亦僧モ云ヒ早シケル有ラム皆出立
テ行ニケ而ル間此ノ行タル者共ノ父母類親共ハ各不審カリ歎キ合タル事无限シ其レニ其ノ日モ不返ズ次ノ日モ不
レ返ズ二三日不返ザリケ彌ヨ悲ビ迷ヒケレ甲斐无シ然テ久ク不見エレドモ尋ニ行カム云フ者一人モ无テ歎キ合ケル
程ニ遂ニ不見エド止リニケ思フニ行タル人一人不殘ズ皆被レ歎コソハ有ラメ其ノ事何ケリト云フ事モ何デカ聞ムト

可止レ一本
可止也ニ作
ル

爲ル極メテ益无キ事云ケル僧也カシ我モ不レ死ズ多ノ人モ不レ煞ズ有カバ何ニ吉カラ然レバ人ノ不信ニテ口早キ事ハ努々可レ止シ亦譬ヒ口早クテ語ルト行ク者共糸愚也其ノ後其ノ所ヲ傳モ聞ユル事モ无カリ此ノ事ハ彼ノ僧ノ語ナル聞タル人ノ語リ傳ヘタトヤ

通四國邊地僧行不知所被打成馬語 第十四

行目次至ニ
作ル

今昔佛ノ道ヲ行ケル僧三人伴ナヒ四國ノ邊地ト云ハ伊豫讃岐阿波土佐ノ海邊ノ廻也其ノ僧共其ヲ廻ケル思ヒ不懸ズ山ニ踏入ニケ深キ山ニ迷ヒニケ濱邊ニ出ム事ヲ願ヒケ終ニハ人跡絶タル深キ谷ニ踏入ニケ彌ヨ敷キ悲ミテ荆棘ヲ分ケ行ケル程ニ一ノ平地有リ見バ垣ナド拵ヒ廻タリ此レハ人ノ栖ソ有ヌレ思フニ喜クテ入テ見レバ屋共有リ譬ヒ鬼ノ栖也トモ今ハ何ガセ道ヲモ不レ知ネバ可レ行キ方モ不レ思エテ其ノ家ニ寄テ物申サム云ヘバ屋ノ内ニ誰ゾト問フ修行仕ル者共ノ道ヲ踏違ヘテ參タル也何方ヘ可レ行ニカ教ヘ給ヘト云ヘバ暫ト云テ内ヨリ人出來ルヲ見レバ年六十餘許ナル僧也形チ糸怖氣也呼寄バ鬼モ神モ今ハ何ニカハ思テ三人乍ラ板敷ノ上ニ昇テ居バ僧ノ云ク其達ハ極ジ給ヒヌト云チ程无ク糸清氣ナル食物ヲ持來タリ然ハ此レハ例ノ人ナリト糸喜ク思テ物打食畢テ居タル程ニ家主ノ僧糸氣怖氣ニ成テ人ヲ呼ベバ怖ト思テ有ルニ來ル人ヲ見レバ怪氣ナル法師也主例ノ物共取テ來レト云ヘバ法師馬ノ轡頭ト答トテ持來タリ主ノ僧例ノ様ニセテ轡レバ一人ノ修行者ヲ板敷ヨリ取テ引落トス今二人ハ此ハ何ニセムア思フ程ニ庭ニ引落トレ此ノ管ヲ以テ背ヲ打ツ儘ニ五十度打ツ修行者音ヲ舉テ助ケヨ叫モト今二人何ガハ助ケムト然テ亦衣ヲ引去テ膚ヲ亦五十度打ツ百度被打レ修行者臣ニ臥タル主ノ僧然テ引起セト云ヘバ法師引起タル見レバ忽ニ馬ニ成テ身振打

シテ立レバ轡頭ヲ引立タリ殘ノ二人ノ修行者此ヲ見ルニ此ハ何ナル事ゾ此ノ世ニハ非ヌ所也ケリ我等チモ此クセム也ケリ思フニ悲シク更ニ物不レ思デ有程ニ亦一人ノ修行者ヲ板敷ヨリ引落シテ前ノ如ク打バ打畢チ亦引起バ其レモ馬ニ成テ立リ然レバ二疋ノ馬ニ轡頭ヲ引入レツ今一人ノ修行者我チモ引落シテ彼等ガ様ニ打ラムト思フニ悲ケレ懇奉ル本尊ニ我チ助ケ給ヘト心ノ内ニ念ズル事无限シ其ノ時ニ主ノ僧其ノ修行者ヲ暫ク然テ置タル云テ其ニ有レト云ツル所ニ居タル程ニ日暮ヌ修行者ノ思ハク我レ馬ニ成ラムヨ只逃ナム追テ被レ捕テ死ナム命チ棄ナム事ハ同事也ト思ヘド不知ヌ山中ナレ何方ヘ可レ逃シト不レ思エズ亦身ヲ投ヤ死シト様々ニ思ヒ歎ク程ニ家主ノ僧修行者ヲ呼リ候フト答バ彼ノ後ノ方ニ有ル田ニハ水有ヤト見ヨト云ヘバ恐々行テ見ルニ水有レ返テ水候フト答フ此レモ我チ何ニセム云ト思フニ生タル心地モ不レ爲ズ然ル間人皆寢ヌル時ニ修行者只逃ナム偏ニ思ヒ得テ負チモ奔テ只身一ツ走り出テ足ノ向タル方ニ走ル程ニ五六町ハ來ヨラ思フニ亦一ツノ屋有リ此ハ何ナル所ナラ恐シク思テ走り過ムト爲ルニ屋ノ前ニ女房一人立テ彼レハ何ナル人ゾト問ヘバ修行者恐々然々ノ者ノ此ク思ヒ得テ身ヲ投テモ死ナム罷候フ也助ケサ給ヘト云ヘバ女哀然ル事有ラム糸惜キ事カナ先ヅ此ヘ入り給ヘト云ヘバ入ヌ女ノ云ク年來此ク疎キ事共チ見居ドモ我レ力不レ及ズ但シ其チバ構テ助ケ聞エム思フ我レハ其ノ御ツラ御房ノ大娘也此ヨリ下ニ然許去テ丸ガ弟ナル女房御ス然々有ル所也其ノ人ゾ其チバ助ケ聞エム此ヨリゾ其ヘ御セ消息ヲ奉ラム云テ書テ取セテ云ク二人ノ修行者ヲ既ニ馬ニ成シテ其チバ土ニ掘リ埋テ煞サム爲ツル也田ニ水有ト見セケム掘リ埋ガ爲也ト云フヲ聞ク賢クゾ逃ケル暫ノ命モ有ルハ佛ノ御助ケ也ト思テ消息ヲ取マ、女ニ向テ手ヲ摺テ泣々ク臥禮ヲ走り出デテ教ル方チ指テ升町許ハ來ラム思フ程ニ片山邊ニ屋有リ此ナメ思テ寄テ人ヲ以テ然々ノ御文奉ラム云入バ使取テ入テ返テ此

方へ入給へト云へバ入ヌ亦女房有テ云ク我レモ年來疎キ事ト思ニ姉ノ亦此ク云ヒ遣バ助ケ聞ト思フ也但シ此ハ極ク恐シキ事有ル所也暫ク此ニ隠レテ御テ一間ナル所ニ隠シ居ヘテ努々音ナ不ニ爲給ソ時既ニ吉ク成ヌト云へバ修行者何事ナラ恐シク思テ音モ不立ズ不レ動テ居タリ暫許有レバ恐シ氣ナル氣ハヒシ者入來生鼻キ香薰タリ恐シキ事无限シ此レモ何ナル者ナラ思フ限ニ入來テ此ノ家主ノ女房ト物語ナド打シテ二人臥ヌナ聞ケバ懷抱シテ返ヌ修行者此レヲ心得ル様此レハ鬼ノ妻ニ常ニ來テ此様ニ懷抱シテ返ル也ト思フニ極テ氣六借シ然テ女房可レ行キ道ヲ教テ實ニ奇異キ命ヲ存シ給ルヒ人カナ喜シト思セト云へバ修行者前ノ如ク泣々伏禮テ其ノ所ヲ出テ教ヘケル行ケレ夜モ曙方ニ成ヌ今ハ百町許ハ來ヌラ思フ程ニ夜白々ト成ヌ見レバ例ノ直キ道ニ出ヌル也ケリ其ノ時ニソ心落居ケル喜ト云バ愚也ヤ其ヨリ人里ヲ尋テ行テ人ノ家ニ這入テ然々ノ事ノ有ツル様ヲ語リケバ其ノ家ノ人モ奇異ケル事カナ云ケリ里ノ者共モ聞繼テ來テソ問ヒ合ケル其ノ逃テ出ケル所ハ何ノ國何ノ郡何ノ郷也然テ彼ノ二人ノ女房ノ修行者ニ口固メケ事ハ此ク難レ有キ命ヲ助ケ聞エツ努々此ル所有ツト人ニナ不ニ語給ソ返々ヌ云ケレ修行者然許ノ事ナバ何デカ然テ止マム普ク語ケレ其ノ國ノ人ノ年若クテ勇タル兵ノ道ニ堪ハ軍ヲ發シテ行テ見ムナ云ケレ道ノ行方モ无レバ然テ止ニケレバ彼ノ僧モ修行者ノ逃ヌル道ノ无レバ否不レ逃ジト思テ念テモ不追ザリケル然テ修行者其ヨリ傳テ京ニ上リタリ其ノ後其ノ所ナ何コニ有リト云フ事不ニ聞エズ現ニ人ヲ馬ニ打成ケル更ニ不ニ心得ヌ畜生道ニヤ有ム彼ノ修行者ノ京ニ返テ二人ノ同法ノ馬ノ爲ニ殊ニ善根ヲ修リシケレ此レヲ思フニ身ヲ弃テ、行フト云ヒ乍モ无下ニ不レ知ム所ニハ不可レ行ズト修行者ノ正シク語ケル聞傳ヘテ此ク語り傳ルヘタトヤ

◎幻異志板橋三娘子篇

唐汴州西有板橋店。店姓三娘子者。不知何從來。寡居年三十餘。無男女亦無親屬。有舍數間。以鬻餐爲業。然而家甚富貴。多有驢畜。往來公私車乘有不逮者。輒賤其估以濟之。人皆謂之有道。故遠近行旅多歸之。元和。許州客趙季和將詣東都。過是宿焉。客有先至者六七人。皆據便榻。季和後至。最得深處一榻。榻鄰比主人房壁。既而三娘子供給諸客甚厚。夜深致酒。與諸客會飲極歡。季和素不飲酒。亦預言笑。至二更許。諸客醉倦各就寢。三娘子歸室。閉關息燭。人皆熟睡。獨季和轉展不寐。隔壁聞三娘子窸窣若動物之聲。偶然隙中窺之。卽見三娘子向覆器下。取燭挑明之。後於巾箱中取一副耒耜。并一木牛一木偶人。各大六七寸。置於竈前含水喫之。二物便行走。木人則牽牛耨耒耜。遂耕牀前一席之地。來去數出。又於箱中取出一裹蕎麥子。受於木人種之。須臾生花發麥熟。令小人收割。持踐可得七八升。又安置小磨子磑成麵訖。却收木人子於箱中。卽取麵作燒餅數枚。有頃雞鳴。諸客欲發。三娘子先起點燈。置新作燒餅於食牀上。與諸客點心。季和心動遽辭。開門而去。卽潛於戶外窺之。乃見諸客圍牀。食燒餅未盡。忽一時踏地作驢鳴。須臾皆變驢矣。三娘子盡驅入店後。而盡沒其貨財。季和亦不告於人。後月餘日。季和自東都回。將至板橋店。預作蕎麥燒餅。大小如前。既至復寓宿焉。三娘子歡悅如初。其夕更無他客。主人供待愈厚。夜深股動問所欲。季和曰。明晨發。請隨事點心。三娘子曰。此事無疑但請穩便。半夜後季和窺見之。一依前所爲。天明。三娘子具盤。食果實燒餅數枚於盤中訖。更取他物。季和乘間走下。以先有者易其一枚。彼不知覺也。季和將發就食。謂三娘子曰。適會某自有燒餅。請撤去主人者。留待他賓。卽取己者食之。方飲次。三娘子送茶出來。季和曰。請主人嘗客一片燒餅。乃據所易者與噉之。纔入口。三娘子據地作驢聲。卽立變爲驢。甚壯健。季和卽乘之發。兼盡收木人木牛

子等。然不得其術。試之不成。季和乘策所變驢。周遊他處。未常阻失。日行百里。後四年乘入關。至華岳廟東五六里。路傍忽見一老人。拍手大笑曰。板橋三娘子。何得作此形骸。因捉驢謂季和曰。彼雖有過。然遭君亦甚矣。可憐許。請從此放之。老人乃從驢口鼻邊。以兩手壁開。三娘子自皮中跳出。宛復舊身。向老人拜訖走去。更不知所之。

◎出曜經卷十五利養品

昔此貴邦有一僑士。適南天竺。同伴一人。與彼奢婆羅咒術家女人交通。其人發意欲還歸家。輒化為驢不能得歸。同伴語曰。我等積年離家。吉凶災變永無消息。汝意云何為欲歸不。設欲去者可時莊嚴。其人報曰。吾無遠慮。遭值惡緣。與咒術女人交通。意適欲歸。便化為驢。神識倒錯。天地洞然為一。不知東西南北。以是故不能得歸。同伴報曰。汝何愚惑乃至如此。此關山頂有草。名遮羅波羅。其有人被咒術鎮壓者。食彼藥草即還復形。其人報曰。不識此草知當如何。同伴語曰。汝以次噉草自當遇之。其人隨語如彼教誡。設成爲驢。即詣南山。以次噉草還復人形。採取奇珍異寶。得與同伴安穩歸家。

◎寶物集卷一親馬ニ成レタルヲ子ノ助シ事

天竺ニ國アリ、名ヲバ安息國ト云フ。彼王馬ヲ好ミ飼給フ事、イカバカリト云事ヲ知ラズ。餘ニ馬ヲ飼給フ其德至テ、葉ノ狹キ草ヲ食セツレバ、人ヲ馬ニ成ス術ヲ習ヒケリ。又葉ノ廣キ草ヲ食セツレバ、馬人ニ成還ル事アリキ。如此ノ間、人ヲ馬ニ成事其數ヲ知ラズ。此事ヲバ知ラズシテ、一人ノ商人彼ノ國ヘ行ヌ。國王喜デ前々ノ如ク、葉ノ狹キ草ヲ食セテ馬ニ成テ繫ツ。商人ノ心ハ人ナリト云ドモ、馬ニ成テ嘆キ

目次北山狗
以人爲妻人
來至其所語
ニ作ル

悲ミケレドモ、哀ム人ナシ。去程ニ商人ノ子、父ノ歸ザル事ヲ怪ンデ、彼國ヘ尋行テ宿ヲ借テ留リケルニ、宿主ノ彼者ニ教テ云ク、此國ハ人ヲ馬ニ成事アリ。馬ニ成サレテアル者、此程モ近クアリ。其故ハ他國ヨリ商人來テ、馬ニ成サレテ繫レタル由ヲ申シケレバ、我父馬ニ成サレテケリト思ヒ、心憂テ悲シク覺ケレバ、事ノ有様ヲ細ニ問ケリ。家ノ主答ケレハ、葉狹キ草ノ有ヲ取テ食スレバ、則チ人馬ニ成ル。又葉ノ廣キ草ヲ食スレバ、馬則チ人ニ成ル。然ルニマデカク馬ニ成サレタル商人ハ、栗毛ナル馬ノ眉ニ斑アルト云ケレバ、教ヘタルマ、ニ行テ見レバ、此馬我ヲ見付テ嘶ヒ、涙ヲ流シ悲ム。宿ノ主ノ教タル如ク、葉ノ廣キ草ヲ取テ持テ、彼馬ニ食セタルバ、本ノ如ク人ニ成ヌ。即チ我父也。相具シテ本國ヘ歸來ルト云リ。是ハ子ニアラズンバ、生ナガラ畜生ニ成テコソハ有マシカ。

北山狗人爲妻語 第十五

今昔京ニ有ケル若キ男ノ遊ガ爲ニ北山ノ邊ニ行ダリケ日ハ只暮レニ暮ニケク、不思エズ野山ノ中ニ迷テ道モ不
思エレバ、可レ返キ様モ无カリケ。今夜可レ宿キ所モ无クテ思ヒ續テ有ケル程ニ谷ノ迫ニ小キ菴ノ髻ニ見レバ、男此ニ人ノ
住コソ有ケレ。喜テ其ヘ搔行テ見ケレ。小キ柴ノ菴有リ此ク來レタ氣色ヲ聞テ菴ノ内ヨリ若キ女ノ年廿餘許ニテ糸淨氣ル
出來タリ男此レチ見テ彌ヨ喜ト思ケル女男ヲ打見テ奇異氣ニ思テ此ハ何ナル人ノ御ゾト云ハバ男山ニ遊ビ行キ侍
ツル道ヲ踏違ヘテ否返リ不レ待ヌ程ニ日ノ暮ニタレバ可ニ行宿キ所モ无カリツ。此ヲ見付テ喜ビ乍ラ念ギ參ナムト云ハバ女此
ニハ□ノ人不來ズ此ノ菴ノ主ハ只今來トス其レニ其ノ菴ニ御セムズ定メテ己レガ知タル人ソト疑ラメ其レチ何カミシ

給トハム爲ルト云ヘバ男只何カニ吉カラ様ニコハ但シ可返キ様ノ无バケレ今夜許ハ此ソコ侍ラメ云ヘバ女然ラバ此テ御セ我ガ兄ノ年來相ヒ不見ルサ戀ツル程ニ思ヒモ不懸ズ山ニ遊ビニ行ケル道ヲ踏違テ此ニ來レル也ト云ズル也其ノ由ナ心得テ御セ然テ京ニ出ラマヒタ努々此ル所ニ然ル者ナム有ツル不宣ソト云ヘバ男喜テ糸喜ク侍リ然心得ソハ侍ラメ亦此ク宣フ事バナレ何テカ人ニハ申サム云ヘバ女男ヲ呼入レテ一間ナル所ニ筵ヲ敷テ取セタ男其レニ居タル女寄來テ忍テ云ク實ニハ己ハ京ニ其々ニ侍シ人ノ娘也其レガ思ヒ不懸ズ奇異キ物ニ被レ取レテ其レニ被レ領テ年來此テ侍ル也今此ノ具シタ物ハ只今來トス見給テム但シ乏シキ事ハ不侍ヌ也ト云テサメト泣ケバ男此レヲ聞ニ何ナル物ナラ鬼ニヤ有ナド怖シク思ヒ居タル程ニ夜ニ入テ外ニ極ク怖シ氣ニムメク物ノ音有リ男此レヲ聞クニ肝身眩マリ怖シト思ヒ居タル程ニ女出來テ戸ヲ開テ入來ル物ヲ男見レバ器量ク大キナ白キ狗也ケリ男早ウ狗也ケリ此ノ女ハ此ノ狗ノ妻也ト思フ程ニ狗入來テ男ヲ打見テムメキテ立レバ女出來テ年來戀シト思ツル兄ノ山ニ迷ケル程ニ思ヒ不懸ズ此ニ坐レバ奇異ク喜キ事ト云テ泣ケバ其ノ時ニ狗此レヲ聞知リ顔ニテ入テ竈ノ前ニ臥セリテ云フ物ヲ續テ狗ノ傍ニ居タリ食物系淨氣ニシ食スレ男吉ク食テ寢ヌ狗モ内ニ入テ女ト臥リ然テ夜明ヌレ女男ノ許ニ食物持來テ男ニ密ニ云ク尙々穴賢此ニ此ル所有ト人ニ語リ不給ナ亦時々ハ御セ此ク兄ト申シタ此レモ然知テ侍ル也自然ラ要事有ラム事ナド叶ヘ申サム云ヘバ男敢ヘテ人ニ申シ不侍ズ今亦參リ來ド勸ニ云テ物食畢ツレ京ヘ返ヌ返ケルマ男昨日然々ノ所ニ行タリ此ル事コソ有シカ會フ人毎ニ語ケレ此レヲ聞ク人輿ジテ亦人ニ語リケレ程ニ普ク人皆聞リテ其ノ中ニ年若ク勇タル冠者原ノ落所モ不知ヌ集テ去來北山ニ妻ニ居ルナ行テ其ノ狗射然シテ妻ヲ取テ來ムト云テ各出立テ此ノ行ル男ヲ前ニ立テ、行ニケ一二百人有ケル者共手毎ニ弓箭仗ヲ持テ行ケル男ノ教ルニ隨テ既ニ其ノ所ニ行着テ見レバ

實ニ谷迫ニ小キ菴有リ彼ソゾ各音チ高クツク云ケル狗聞テ驚キ出テ打見テ此ノ來シ男ノ顔ヲ見ル菴ニ返入テ暫許有テ狗女ヲ前ニ突立テ菴ヨリ出テ山ノ奥様ニ行ケル立衛ムテ多人射ケレ更ニ不當ズシテ狗モ女モ行ケレ追ケレ鳥ノ飛ガ如テニ山ニ入リ然レバ此ノ者共モ此レハ只者ニモ非ヌモ也ケリ云テ皆返ケリ此ノ前ニ行ケル男ハ返ケルマ心地惡ト云テ臥ルガ一二三日有テ死ニケレ然レバ物思エケ者ノ云ハハ彼ノ狗ハ神ニテ有リトゾ云ケル糸益无キ事云タル男也カシ然ハ信无カラ者ハ心カラ命ヲ亡ボス也ケリ其ノ後其ノ狗ノ有所知タル人无シ近江ノ國ニ有トゾ人云ヒ傳ル神ナド有ケルニヤ語リ傳ルヘタトヤ

◎瀟湘錄

杜修己者趙人也。善豎。其妻即趙州富人薛氏女也。性淫佚。修己家養一白犬甚愛之。每與珍饈。食後修己出。其犬突入室內。欲嚙修己妻薛。仍似有姦私之心。薛氏因怪而問之曰。爾欲私我邪。若然則勿嚙我。犬搖尾登其床。薛氏懼而私焉。其犬不異於人。爾後每修己出。必姦淫無度。忽一日方在內同寢。修己自外入。見之因欲殺犬。犬走出。修己怒出其妻薛氏。後歸薛贊半年。其犬忽突入贊家。口銜薛氏髻。而背負走出。家人趕奪之不得。不知所之。犬携薛氏。直入恒山潛之。每至夜即下山。竊所食之物。晝則守薛氏。經一年薛氏有孕生一男。雖形貌如人。而偏身白毛。薛氏只於山中撫養之。又一年其犬忽死。薛氏乃抱子遷還出山。入冀州求食。有知此事者。遠詣薛贊家以告。贊遮令家人取至家。其所生子年十七。形貌醜陋。性復兇惡。每私走作盜賊。或旬餘或數月即復還。薛贊患之欲殺焉。薛氏乃私誡其子。子大號泣而言曰。我稟犬之氣而生。也無人心。好殺爲賊自然耳。何以爲過。母當自愛。我其遠去不復來矣。薛氏堅留之不得。携劍拜母而去。又三年。其

子領群盜千餘人至門。自稱曰將軍。既入拜母。後令羣盜殺其薛賀家屬。唯留其母。焚其宅携母而去。

佐渡國人爲風被吹寄不知島語 第十六

今昔佐渡ノ國ニ有ケル者數一船ニ乗テ物ヘ行ケル息中ニ俄ニ南ノ風出來テ船ヲ北様ニ箭ヲ射ルガ如クニ吹キ遣リケル者共今ハ限リソソ思テ鱗ヲモ引上テ只風ニ任セテ行ケル息ノ方ニ一ノ島ヲ見付テ構テ彼ノ島ニ着バヤ思ヒケル思ノ如ク其ノ島ニ着メ先ツ暫ノ命ハ助メト思テ迷ヒ下ムト爲ルニ島ヨリ人出來タリ見レバ男ニモ非ズ童ニモ非ズ頭ヲ白キ衣ヲ以テ結タリ其ノ人ハ長極テ高カシ有様實ニ此ノ世ノ人ト不思ズ船ノ人此レチ見ルニ怖シキ事无限シ此レハ鬼ノ有メレ我等ハ鬼ノ住ケル島ヲ不知テ來リト思フニ島ノ人ノ云ク此ハ何ナル人ノ寄リ來ゾト船ノ人ノ答テ云ク我等ハ佐渡ノ國ノ人也船ニ乗テ物ヘ罷ツル程ニ俄ニ惡風ニ値テ思ヒ不懸ズ此ノ島ニ着タル也ト島ノ人ノ云ク努々此ノ地ニ下ル事无カレ此ノ地ニ登ナバ惡キ事有ラム食物ナド遺セム云テ罷入又暫許有レバ同様ナル人十餘人許出來タリ船ノ人我等ヲバ煞ズル也ケリ此等ガ長程ヲ見ルニ其ノ力思ヒ被テ遣テ怖シキ事无限シ島ノ者共寄リ來テ云ク此ノ島ヘ呼ビ可レ上ケレ上ナバ其コ達ノ爲ニ惡キ事有レバケ也此レチ食ヒテ暫ク有ラバ自然ラ風直リナ其ノ時ニ本國ニ返リ可レ行キ也ト云テ不動ト云フ物ト芋頭ト云フ物ト持來テ食バ糸吉ク食リ不動ト云フ物モ極テ大キ也芋頭モ例リモ事ノ外ニ大キニテ有ケル此ノ島ニハ此レチ食物トシ過ル也トゾ云ケル其ノ後風直リニケ船ヲ出シテ本國ニ返リ然レバ鬼ニハ非ザリ神ニヤトゾ疑ケル此奇異キ事ナム有ケル彼ノ船ノ者共ノ佐渡ノ國ニ返テ語ケレ聞人モ極ク恐ケリ其ノ島ハ他國ニハ非ザリケ此ノ國ノ言ゾテ有ケル只人ノ大キニ器量ク有様ノ不似ケル也此ノ事ハ糸ト近キ事也佐渡ノ國ニ此ル

事ナム有ケルト語リ傳ヘタトヤ

常陸國 郡寄大死人語 第十七

今昔藤原ノ信通ノ朝臣ト云ケル人常陸ノ守ニテ其ノ國ニ有ニ任畢ノ年四月許ノ比風糸オドロクシク吹テ極ク荒ケル夜ノ郡ノ東西ノ濱ト云フ所ニ死人被ニ打寄ケリ其ノ死人ノ長ケ五丈餘也ケリ臥長砂ニ半バ被レ埋タリケ人高キ馬ニ乗テ打寄ルニ弓ヲ持タル末許ソ此方ニ見エケ然テハ其ノ程ヲ可ニ押量シ其ノ死人頭ヨリ切テ頭无カリ亦右ノ手左ノ足モ无カリ此レハ鰐ノ昨切コソハ本ノ如クニ有カバ極マシ亦何シニ砂ニ隱レバ男女何レト云フ事ヲ不知ズ但身成リ秦ハ女ニテ見エケ國ノ者共此レチ見テ奇異ツ合テ見惶ケル事无限シ亦陸奥ノ國ニ海道ト云フ所ニテ國司ト云ケル人モ此ル大人寄ト聞テ人ヲ遣テ見セケ砂ニ被レ埋レバ男女ヲ難知シ女ニコ有レト見ケル智リ有ル僧ナム云ケル此ノ一世界ニ此ル大人有ル所有ト佛ノ不説給ハズ此レチ思フニ阿修羅女ニヤ有ラム身成ナド糸清氣ナル若シ然トゾ疑ヒケケ然テ國ノ司此ル希有ノ事ナレ何テカ國解不申テハ有ラム申上ムト既ニシケ國ノ者共申シ被レ上ナバ必ズ官使下テ見ス其ノ官使ノ下ニ線大事也ナム只隱シテ此ノ事ハ可有キ也ト云バレ守不ニ申上ニテ隱シテ止リ而ル間其ノ國ニト云フ兵有ケリ此ノ大人ヲ見テ若シ此ル大人寄來バ何ガセ爲ル若シ箭ハ立ナム試ムト云テ射レバ箭糸ト深ク立ニケ然レバ此レチ聞ク人微妙ク試トゾ讚メ感ジケ然テ其ノ死人日來チ經ケル程ニ亂レバ廿町ガ程ニハ人否不レ住テ逃シケル鼻サニ難レ堪ナム此ノ事隱シタリケ守京ニ上レバ自然ラ聞エテ此ク語リ傳ヘタトヤ

郡目次第ニ作ル

亂シノ下二本アリ

越後國被打寄小船語 第十八

今昔源ノ行任ノ朝臣ト云フ人ノ越後ノ守ニテ其ノ國ニ有ケル時ニ□ノ郡ニ有ケル濱ニ小船被打寄ケリ廣サ二尺五寸深サ二寸長サ一丈許也人此レテ見テ此ハ何也ケル物ゾ戲レニ人ノナド造テ海ニ投入ルカト思テ吉ク見レバ其ノ船ノ鉉一尺許ヲ追ニテ梶ノ跡有リ其ノ跡馴杭タル事无限シ然レバ見ル人現ニ人ノ乗タリ船也ト見テ何也ケル少人ノ乗タリ船ニカ有ラム思テ奇異ガル事无限シ漕ラム時ニハ蜈蚣ノ手ノ様ニコ有ラメ世ニ珍キ物也ト云テ館ニ持行ケレバ守モ此レヲ見テ極ク奇異ケリ長ナル者ノ云ケル前々此ハ小船寄ル時有トナ云バ然レバ其ノ船ニ乗ル許ノ人ノ有ルコソ此ヨリ北ニ有ル世界ベシ此ク越後ノ國ニ度々寄ケル外ノ國ニハ此ル小船寄トモ不聞エズ此ノ事ハ守京ニ上テ眷屬共ニ語リケ聞繼テ此ナム語リ傳ヘタトヤ

愛宕寺鑄鐘語 第十九

今昔小野ノ篁ト云ケル人愛宕寺ヲ造テ其ノ寺ノ料ニ鑄師ヲ以テ鐘ヲ鑄サセタリ鑄師ガ云ク此ノ鐘ヲ搥ク人モ无クテ十二時ニ鳴ト爲ル也其レテ此ク鑄テ後土ニ掘埋テ三年可令有キ也今日ヨリ始メテ三年ニ滿テラ日ノ其ノ明ム日可ニ掘出一キ也其レテ或ハ日ヲ不令足ズ或ハ日ヲ餘テ掘開ム然カ搥ク人モ无クテ十二時ニ鳴ル事ハ不レ可有ズ而ル構ヘテ也ト云テ鑄師ハ返リ去リ然テ土ニ掘埋ルニ其ノ後別當ニテ有ケル法師二年ヲ過テ三年ト云フニ未ダ其ノ日ニモ不レ至ルニ否不レ待テズ心モトナカリ云フ甲斐无ク掘開リ然レバ搥ク人モ无テ十二時ニ鳴ル事ハ无テ只

有ル鐘ニテ有ル也ケリ鑄師ノ云ケム様ニ其ノ日掘出シカバ搥ク人モ无クテ十二時ニ鳴リナ然鳴カバ鐘ノ音ノ聞及バム所ニハ時ヲモ慥ニ知リ微妙マシ極ク口惜シキ事ル別當也トナ其ノ時ノ人云ヒ謗リケ然レバ騒シク物念ジ不レ爲ザラ人ハ必ズ此ク弊キ也心愚ニテ不信ナル至ス所也世ノ人此レヲ聞テ努々不信ナラ事ヲバ可レ止シナム語リ傳ヘタトヤ

纂異記

德藏寺前鐘。乃銅所鑄。音極洪響。嘗見古老云。初鑄鐘時。有匠者云。此鐘未可便扣。俟吾至六十里乃擊之。及既去方至新坊十八里。寺僧遽扣之。匠人聞其聲。嘆曰。聲止於此。今寺中鐘。自新坊十八里外。不復聞矣。怪哉。

古事談第五神社佛寺篇

珍皇寺別當某云。當寺鐘者。慶俊僧都鑄之。土ニ埋、經ニ三ケ年、可ニ掘出之由契テ入唐畢。而一年半許アリテ、本寺之住僧等掘出之、槌之音聞ニ唐土。仍慶俊僧都示云、吾寺之鐘聲コソ聞ナレ。不レ槌ニ六時ニ鳴サント思ツルモノヲ、大口惜云々。伴僧都ハ弘法大師之祖師也。

靈巖寺別當碎巖廉語 第二十一

今昔北山ニ靈巖寺ト云フ寺有ケリ此ノ寺ハ妙見ノ現シ給フ所也寺ノ前ニ三町許去テ巖廉有リケ人ノ屈テ通ル許ノ穴ゾニテ有ケル萬ノ人皆參リ仕リテ驗新タ也バケレ僧房共數造リ重ネテ碎シキ事无限シ而ル間□ノ天皇御目ヲ病セ給ケレバ彼ノ靈巖寺ニ行幸可有キ議有ニ此ノ巖廉ノ有レバ御輿ノ可レ通キ様无レバ行幸否不レ有マレト被レ定ケ

間ノ下一本
三條ノ二字
アリ

廉字一本ナ
シ

ナ聞キ其ノ寺ノ別當也ケル僧行幸有ラバ我レ必ズ僧綱ニ可レ成キニ行幸无クバ僧綱ニ成ヌ事ハ不用リト、思テ行幸ヲ有ラセ故ニ此ノ巖廉失ト云テ夫ヲ以テ多ノ柴ヲ茹セテ此ノ巖廉ノ上下ニ積セテ火ヲ付テ焼ムト爲ルニ其ノ寺ノ僧ノ中ニ年老タル者共ナド有テ此ノ寺ノ驗ヲ給フ事ハ此ノ巖廉ニ依テ也其レニ此ノ巖廉ヲ被レ失ナバ驗失セテ寺廢ヌト云ヒ合テ歎ケレ時ノ別當ノ我ガ喜セム爲ニ破无ク謀ル事ナレ寺ノ僧共ノ云ハム事ヲ聞テム耳ニモ不ニ聞入ニズ其ノ茹積タル柴ニ火ヲ付テ燒キツ然テ巖廉ヲ温テ大キナ鐵鎚ヲ以テ打碎ケレ皆碎テ散々ニ其ノ時ニ巖廉ノ碎ケル中ヨリ百人許ガ音ニテ同音ニ咲タリケ寺ノ僧共極キ態カナ此ノ寺ハ荒ヌ魔障ニ被レ謀テ此ル也ト云テ別當ヲ慄ミ惶ケル程ニ巖廉ハ失レドモ行幸モ无レバ別當喜ビモ不レ爲テ止リケ其ノ後別當寺ノ僧共ニ慄ミ被レ厭テ寺ニモ不ニ寄來ニズ成ケリ其ノ後ヨリ寺只荒ニ荒テ堂舎僧房モ皆失ニケ僧一人モ住ム事无クシ後ニハ木伐ノ道ト成テナ有ケル此レヲ思フニ糸益无キ態シタ別當也カレ僧綱ニ可レ成キ報ノ无ニハ極ク巖廉失トモ智リ无カリ僧ニヤ愚ニ其レヲ不レ知ズシ我ヲ喜ビ不レ爲ヌ者カラ止事无キ靈驗ノ所ヲ失ナヒ心疎キ事也然レバ所ニ隨ヒテ驗モ有ケル也トナ語リ傳ヘトヤ

能登國鬼寢屋島語 第廿一

寢屋ノ上一本鬼ノノニ字アリ

今昔能登ノ國ノ息ノ寢屋ト云フ島有ナリ其ノ島ニハ河原ノ石ノ有ル様ニ鮑ノ多ク有ナレ其ノ國ニ光ノ島ト云フ浦有リ其ノ浦ニ住ム海人共モハ其ノ鬼ノ寢屋ニ渡テゾ鮑ヲ取テ國ノ司ニハ弁ケル其ノ光ノ浦ヨリ鬼ノ寢屋ハ一日一夜走テ人行ナル亦其ヨリ彼ノ方ニ猫ノ島ト云フ島有ナリ鬼ノ寢屋ヨリ其ノ猫ノ島ハ亦負風一日一夜走テゾ渡ル然レバ程ヲ思フニ高麗ニ渡ル許カリ程ノ遠サハ有ニヤ有ラム然ドモ其ノ猫ノ島ハニテ人不行ザル然テ光ノ浦ノ海人ハ彼ノ

我ヲハ我モノ誤カ

鬼ノ寢屋ニ渡テ返ヌレ一人シテ鮑萬ヲゾ國ノ司ニ弁ケル其レニ一度ニ四五十人渡ケレ其ノ鮑ノ多サヲ思ヒ可レ遣シ而ル間藤原ノ通宗ノ朝臣ト云フ能登ノ守ノ任畢ノ年其ノ光ノ浦ノ海人共ノ鬼ノ寢屋ニ渡テ返テ國ノ司ニ鮑弁ケル強ニ責ケレ海人共愕テ越後ノ國ニ返テ渡レバ其ノ光ノ浦ニ一人ノ人無クテ鬼ノ寢屋ニ渡テ鮑取ル事絶ニケ然テ人ノ強ニ欲心有ルハ弊キ事也一度ニ責テ多ク取ラム程ニ後ニハ一ツチ否不レ取テ止リ于今モ國ノ司其ノ鮑不レ取レバ極テ益无キ事也トゾ國ノ者共モ彼ノ通宗ノ朝臣ヲ謗ケルト語リ傳ヘトヤ

讚岐國滿農池類國司語 第廿二

今昔讚岐ノ國ノ郡ニ滿農ノ池トテ大キナ池アリ高野ノ大師ノ其ノ國ノ人ヲ哀ガム爲ニ人ヲ催テ築給ヘル池也池ノ廻リ遙ニ遠クテ堤高カリケ更ニ池トハ不ニ思エド海トゾ見エケ廣サハ彼方幽ナル程ナレ思ヒ可レ遣シ其ノ池築テ後不類レズシ久ク有ケレ其ノ國ノ人田ヲ作ルニ早魃スル時ト多ノ田此ノ池ニ被レ助テ有ケレ國ノ人皆喜ビ合ヘル事无限シ上ヨリ數ノ川共懸レバ池ノ内ニ水溢テ絶ル事无カリ然レバ池ノ内ニ大キナ小サキ多ノ魚有ケリ此レヲ國ノ内ノ人自然ラ構テ取ル事有レド魚多ク有ケレ池ニ魚滿テ期モ无カリ而ル間ト云フ人其ノ國ノ司トシ國ニ有ケル其ノ國ノ者共モ館ノ人モ集テ物語ケル次デニ哀レ滿農ノ池ニハ无限ク多カル魚カナ三尺ノ鯉モ有ナム語ケル守傳ヘ聞テ欲ト思ケレ構テ此ノ池ノ魚ヲ取ラバ思フニ池遙ニ深バ人下テ網ヲ置ク事モ不レ能ズ然レバ爲ケル様池ノ堤ニ大ナル穴ヲ通シテ其ヨリ水ヲ出シテ水ノ落ツル所ニ魚ノ可レ入キ物ヲ構ヘ置テ水ヲ出シケレ水走り出ルニ隨テ其ノ穴ヨリ多ノ魚共出ケレ期モ无ク取リ然テ其ノ後其ノ穴ヲ塞ドモ水ノ出ル勢強クテ更ニ否塞ギ不レ得ザリ池ニハ械ト云フ物ヲ

立テ打樋ヲ構テ水ヲ出セバ池ハ持ツ事ニテ有ルニ此レハ堤ヲ接通シテ暫ク其ノ穴類レテ廣ク成ケル程ニ大キナ雨降
 テ池ノ上ヨリ流れ來ル河共ノ水増リテ水池ニ多ク滿ケル程ニ其ノ穴本トシ堤被ニ突類ニケレバ池ノ水皆出テ其ノ國
 ノ入ノ家共田畠ナド皆損ジ多ノ魚共ハ流レテ出テ此彼ニテ皆人ニ被レ取リ其ノ後ハ池ケノ水モ少クテ有ケル程ニ
 漸ク其ノ殘タル池モ皆失セテ今ハ其ノ池跡形モ无テ有ナル此レヲ思フニ此ノ守ノ欲心ニ依テ失セタ池也ケリ然レバ此
 ノ守此レニ依テ何ニ罪量无カシム然ル止事无キ權者ノ人ヲ哀マム築給ヘル池ヲ失ヒタラシム量无キ罪也其レニ此ノ池ノ類
 ルニ依テ多ノ人ノ家共損ジ多ノ田畠失ヒタ罪モ只此ノ守ハコソ負フ何ニ況ヤ池ノ内ニ有ル若干ノ魚共ノ被レ取タル
 罪モ誰人カハ負トハム爲ル極テ益无キ態シタ守也カシ然レバ人ノ強ノ欲心ハ可レ止キ也カシ亦國ノ人共モ于レ今至マデ共
 ノ守ヲ憶ミ謗ルナ其ノ池ノ堤ノ形ハ未ダ不ニ失セデ有ナリト語リ傳ヘトヤ

多武峯成比叡山末寺語 第廿三

今昔比叡ノ山ニ尊睿律師ト云フ人有ケリ年來山ニ住シテ顯密ノ法ヲ學シテ止事无ケル者也亦極タル相人ニテ有ケル
 後ニハ京ニ下テ雲林院ニ住ケル而ル間无動寺ノ慶命座主ノ未ダ年若ケル時阿闍梨ニテ有ケル此ノ尊睿律師慶命
 阿闍梨ヲ見テ和君ハ殊ニ止事无キ相ノ限リ有ル人カナ必ズ此ノ山ノ佛法ノ棟梁ト可レ成キ相顯也然レバ己ハ年老
 バレ世ニ有テモ益不レ有ジ此ノ己ガ僧綱ノ位和君ニ讓申ムニ和君ハ關白殿ニ親ク仕テ思ニ御ナル人也此ノ由ヲ申シ
 給ヘト云ケレ阿闍梨心ニ喜ト思テ其ノ由ヲ殿ニ申リテ殿ト申スハ御堂殿也殿慶命阿闍梨ヲ糸惜ト思食ケル人ニテ有
 バレ此ノ由ヲ聞食シテ糸吉キ事也ト被レ仰テ慶命阿闍梨ヲ尊睿ガ讓ニ依テ律師ニ被レ成リ其ノ後尊睿道心ヲ發シテ

本山ヲ去テ多武ノ峯ニ籠居テ偏ニ後世ヲ思テ念佛ヲ唱ヘテ有ケル多武ノ峯本ヨリ御廟ハ止事无ケレ顯密ノ佛法ハ无
 カリケレ此ノ尊睿多武ノ峯ニ住シテ眞言ノ密法ヲ弘メ天台ノ法文ヲ教ヘ立テ學生數出來ニケレ法花ノ八講ヲ行ハセ卅講
 ノ始メ置テ既ニ佛法ノ地ト成ニケ尊睿此ノ所此ク佛法ノ地トハ成シツ云ヘド指ル本寺无シ同クハ此レヲ我ガ本山ノ末
 寺ト寄成ト思ヒ得テ尊睿彼ノ慶命座主ノ關白殿ノ思ハ殊ニシ親ク參ケル以テ殿ニ御氣色ヲ取ケレ殿此レヲ聞食
 シテ尤モ吉キ事也ト被レ仰テ速カニ可レ寄シト被レ仰下ニケレ多武ノ峯ヲ妙樂寺ト云フ名ヲ付テ比叡ノ山ノ末寺ニ寄成
 シケ其ノ時ニ山階寺ノ大衆此ノ事ヲ聞テ多武ノ峯ハ大織冠ノ御廟也然レバ尤モ山階寺ノ末寺ニ可レ有ケレ何カデ
 延曆寺ノ末寺ニハ可レ被レ成キゾ云ヒ嗚リ合テ殿下ニ此ノ由ヲ訴ヘ申バ殿前ニ延曆寺ノ末寺ト可レ爲キ由申シ請ニ
 依テ既ニ仰セ下シ畢ヌト被レ仰テ承引无レカケレ不レ叶テ止ニケレ後ノ悔前ニ不レ立ズト云フ譬ゾ有ケル今昔
 モ下ヌル事ハ此ナム有ケル山階寺ニ前ニ申シカバ山階寺ノ末寺コソ有マシ尤モ便宜有ル事バ其レヲ既ニ被レ仰下
 テ後ニ申ニハ當ニ叶ヤ然レバ比叡山ノ末寺トシ于レ今天台ノ佛法盛也然テ彼ノ尊睿ヲバ彼ノ山ノ本願トハ云ナル語
 ト傳ヘトヤ

祇園成比叡山末寺語 第廿四

今昔祇園ハ本山階寺ノ末寺ニテ有ケル其ノ只東ニ比叡ノ山ノ末寺ニ蓮花寺ト云フ所有リ而ル間祇園ノ別當ニテ良
 算ト云フ僧有ケリ勢徳有テ世間叶ケル僧也其レニ彼ノ蓮花寺ノ堂ノ前ニ微妙キ紅葉ノ有ケル十月ノ比色ノ微妙ケレ
 バ祇園ノ別當良算折ニ遣リケ蓮花寺ノ住僧ノ法師心奇怪也此レヲ制シテ云ク祇園ノ別當徳人ニ坐トモ何カ

天台末寺ノ内ナル木ヲ心ニ任セテ案内モ不云ズシ可被折キノ極タル非常ノ事也ト良算ガ使此ヲ被制テ否不折返テ此ナム申シテ折セ不侍ヌト良算ニ云ケレ良算大キニ嗔テ此ク云バ同クハ其ノ木皆伐テ來ト云テ從者共ヲ出シ立テ遣ケル程ニ彼ノ蓮花寺ニテ制ル法師定メテ良算從者共遣セテ此ノ木ヲ伐テ來ト云テ悟テ良算ガ從者共ノ不來ヌ前ニ法師自ラ其ノ紅葉ノ木ヲ根際ヨリ伐臥ケリ然レバ良算ガ使行テ見ルニ木ヲ伐レバ返テ良算ニ其ノ由ヲ云ケレ良算彌ヨ嗔リケ而ル間横川ノ慈惠僧正天台座主トシ殿下ノ御修法シテ法性寺ニ有ニ彼ノ法師木ヲ伐ルマニ法性寺ニ急ギ參テ此ノ由ヲ座主ニ申バ其ノ時ニ座主肩ヲ並ブル人無カリケ大キニ嗔テ良算ヲ召シ遣リケ良算我ハ山階寺ノ末寺ノ司也何ノ故ニ天台座主我ヲ心ニ任テ可召云テ放言シテ不參ザリケ座主彌ヨ嗔テ山ノ所司ヲ呼下シ其レヲ以テ祇園ノ神人等代人等ノ延曆寺ニ寄スル寄文ヲ書儲テ其レニ判ヲ加ヘヨ押責ケレ神人等被責侘ヲ判ナ加ヘテ其ノ後座主今ニ於テハ祇園ハ天台山ノ末寺也早ク別當良算ヲ可追却キ也ト云テ追セケ良算敢テ事ト不爲ズシ公公平ノ致頼ト云フ兵ノ郎等共ヲ雇寄セテ楯ヲ儲ケ軍ヲ調テ待ケル間ニ座主此レヲ聞テ彌ヨ嗔テ西塔ノ平南房ト云フ所ニ住ケル容荷ト云ケル僧ハ極タル武藝第一ノ者也亦彼ノ致頼ガ弟ニ入禪ト云フ僧有ケリ極タル兵也此ノ僧二人ヲ祇園ニ遣テ良算ヲ令追ルニ此ノ二人彼ノ所ニ行テ良算ガ儲タル軍共ニ向テ云ク汝等濫ニ箭ヲ放テ惡事ヲ至サバ後ノ爲ニ惡カリナコシラケル良算ガ雇タル致頼ガ郎等共入禪ヲ見テ早ウ山ノ禪師殿ノ御スルニ有ケレ云テ後ノ山ニ逃去リケ心ニ任セテ良算ヲ追却ケリ然テ容荷ヲ別當ニ成シテ令執行ニケル其ノ後山階寺ノ大衆發テ公家ニ訴ヘ申ス様祇園ハ往古ノ山階寺ノ末寺也寺ノ其レヲ何カテ恣ニ延曆寺ニ被押取ム速ニ本ノ如ク山階寺ノ末寺ト可爲キ由ヲ可被仰下シト度々訴ヘ申ル程ニ御裁許ノ遅々ニヤ山階寺ノ若干ノ大衆京上シテ勸學院ニ着ケ

僧字諸本ナ

然レバ公ケ聞シ食シテ驚テ御沙汰可有カリケ其ノ前ニ彼ノ座主ノ慈惠僧正失ニケ然テ其ノ沙汰明日可有ト既ニ被ニ仰下ルニ山階寺ノ大衆ハ皆勸學院ニ有ニ其ノ寺ノ中算ハ宗ト此ノ事ヲ可ニ沙汰キ者ニテ有ニ勸學院近キ小家ニ宿テ居ルニ其ノ夕サリ方前ニ弟子共ナド數居ルヲ俄ニ中算只今此ニ人來トス其達暫ク外ニ出テ云レバ弟子共皆去テ有ケル程ニ人外ヨリ入來ト不見エヌニ中算人ト物語スル音ノ聞エケ弟子共怪シト思ケル程ニ暫許有テ中算弟子共ヲ呼バ皆出來ルヲ中算此ニ山ノ慈惠僧正ノ御ツル也ト云ケレ弟子共此レヲ聞テ此ハ何カニ宣フ事ゾ慈惠僧正ハ早ウ失ニシ人ヲ思ケレ怖シク物モ不云テ止ニケ然テ明日此ノ沙汰有ニ中算風發ト云テ沙汰ノ庭ニ不出ザリケ山階寺ノ方ニ指ル申シ沙汰スル人無カリケ依テ其ノ御裁許不切レバ大衆モ返下ナド遂ニ祇園ハ比叡ノ山ノ末寺ニ成畢タル也ケリ由无キ良算ガ惡事ヨリ發ル事ナレ此レヲ思フニ慈惠僧正ノ強ク被執ケル事ニ有ヌレ失レドモ其ノ靈ノ行テ中算ニ乞請ケレ中算ハ俄ニ風發トテ不出ザリケル中算出テ沙汰カバ何ハ有マシ然レバ其レヲ知テ慈惠僧正ノ靈モ行テ乞請ソハ然レバ中算只人ニハ非ザリケリ弟子共モ此レヲ聞ク人モ皆知トナム語リ傳ヘタトヤ

豊前大君知世中作法語 第廿五

今昔 天皇ノ御代ニ豊前ノ大君ト云フ人有ケリ柏原ノ天皇ノ五郎ノ御子ノ御孫ニテ有ケル程ニ位ハ四位ニテ官ハ刑部卿ニテ大和ノ守テナム有ケル程ニ此ノ人世ノ中ノ事ヲ吉ク知リ心バ直ニテ公ノ御政ヲ吉モ惡モ吉ク知テ除目有ズル時ニハ先ツ國ノ數ヲ開テ各ノ次第ヲ待テ望ム人々ノ有ルヲ國ノ程ニ宛テ押量テ其ノ人ヲバ其ノ國ノ守ニ被

程ニノ二字
諸本ナシ

成ラメ其ノ人ハ道理立テ望モ不レ成ジカシ國毎ニ云ケル事ナ人皆聞テ所望叶ケル人ハ御目ノ後朝ニハ此ノ大君ノ許ニ行テナ讚ケル此ノ大君ノ押量リ除目露不レ違レバ世舉テ尙此ノ大君ノ押量リ除目賢キ事也トナ云ヒ噂ケル除目ノ前ニモ此ノ大君ノ許ニ行キ集テ問バ思ヒ量ニナム、答ヘ居ケル可レ成シト被レ云タル人ハ手ヲ摺テ喜ビテ尙此ノ大君極キ入ト云ム返ケル不レ成ジト云フヲ聞タル人ハ大キニ嘖テ此ハ何事云ヒ居ル舊大君ゾ道祖ノ神ヲ祭テ狂ソ有ナド云テ腹立テナ返ケル然テ此ク可レ成シト云タル人ノ不レ成テズ異人ノ成ナル此レハ公ノ惡ク被レ成タルゾ大君世ヲ謗リ申ケル然レバ天皇モ豊前ノ大君ハ除目ヲバ何ガ云ナルト天皇ニ親ク仕ツル人々ニ行テ問ヘト被レ仰ケル昔ハ此人ナム世ニ有ケル語リ傳ヘタトヤ

○三代實錄卷十

貞觀七年二月癸丑朔二日甲寅。從四位上行伊豫守豊前王卒。豊前王者。贈一品舍人親王後。四世木工頭從五位上榮井王之子也。豊前少以涉學爲稱。天長三年爲大學助。俄而遷式部大丞。五年父憂去職。服中詔以本官起之。七年遷諸陵助。九年爲太宰大監。十年仁明天皇卽天子位。是年十一月新嘗廣謙。授從五位下。承和元年拜備中守。罷秩之後爲參河守。久而除大藏少輔。十四年叙從五位上。出爲安藝守。明年遷伊豫守。仁壽三年春加正五位下。爲大和守。齊衡二年爲左京權大夫。大和守如故。天安元年九月丁母憂解官。服闋之後。二年十一月拜民部大輔。貞觀三年正月遷伊豫守。不之任。六年授從四位上。卒於官。時年六十一。豊前爲性簡傲。言語夸浪。接物之道。爲人所避。尋常直於侍從局。品藻人物。以爲己任。談笑消日。放縱不拘。諸王五世以下帶五位者。法不聽着紫。豊前爲五世五位着紫。爲有司所糾。然後着緋。

●宇治拾遺物語卷十豊前王の事

今はむかし、柏原の御門の御子の五の御子にて、豊前のおほきみといふ人ありけり。四位にて、司は刑部卿、大和守にてなんありける。世の事をよくしり、心ばへすなほにて、おほやけの御政をも、よきあしきよくしりて、除目のあらんととも、まづ國のあまたあきたるのぞむ人あるをも、國のほどにあてつゝ、その人は、その國の守にぞなざるらん、その人は、道理たて望むともえならじなど、國ごとにいひぬたりける事を、人きゝて、除目の朝に、この大君の推しはかりごとにいふ事は、つゆたがはねば、この大君の推しはかり除目かきしといひて、除目の前には、この大君の家にいきつどひて、なりぬべしといふ人は、手をすりてよろこび、えならじといふをきゝつる人は、何事いひをる古大君ぞ。さへの神まつりて狂ふにこそあめれなど、つぶやきてなんかへりける。かくなるべしといふ人のならで、不慮にこと人なりたるをば、あしくなされたりとなん世にはそしりける。さればおほやけも、豊前の大君は、いかゞ除目をばいひけるとなん、したしく候ふ人には行きて問へとなん仰せられける。これは田村、水の尾などの御時になんありけるにや。

打臥御子巫語 第廿六

今昔打臥ノ御子ト云フ 巫世ニ有ケリ昔ヨリ賀茂ノ巫ト云フ事ハ不レ聞ヌニ此レハ賀茂ノ若宮ノ託セ給フト云ケル何ナレ此ク打臥ノ御子トハ云フソ思ヘバ打臥ノミ物ナ云ケレ打臥ノ御子トハ云ケル也ケリ京中ノ上中下ノ人舉テ物ナ問

ニケル過ニシ方ノ事行末ニ可有キ事當時有ル事ナド惣テ彼レガ云タル事露許モ違フ事无レバ世ノ人皆首ヲ傾ケ手ヲ造テ此レヲ信ジ貴ビケテ畢ニハ法興院モ常ニ召シテ問セ給ケル此ク正ク艶^{エロイ}ズ物ヲ申ケレ深ク信セ給テ常ニ召ツ、御冠ヲ奉リ紐ヲ差^サセ給テ御膝ノ上ニ枕サセ給テ問セ給ケル思シ食ケル事ニ叶ケルニ常ニ召シテ問セ給ケル也然ドモ此レヲ不ニ受申一サヌ人モ有ケリ萬ノ事露不^レ違ズ申シ叶ハ云ヒ乍ラモ然許ノ人ノ御膝ニ枕セテ巫ニ物ヲ問セ給ケル事ノ頗ル落居サセ不^レ給ヌ様バ^レ此レヲ不^ニ受申一ヌ人モ理也トナ語リ傳^ルトヤ

兄弟二人殖萱草紫菀語 第廿七

今昔^ノ國^ノ郡ニ住ム人有ケリ男子二人有ガ^ル其ノ父失ニケ^レ其ノ二人ノ子共戀ヒ悲フ事年ヲ經レ^ド忘ル事无^カリ昔ハ失ヌル人ヲバ墓ニ納メケ^レ此ヲモ納メテ子共祖ノ戀シキ時ニハ打具シテ彼ノ墓ニ行テ涙ヲ流シテ我ガ身ニ有^ル憂ヘテ歎チモ生タル祖ニ^ナ向テ云ハム様ニ云ゾ、返ケル而ル間漸ク年月積テ此ノ子共公ケ^ニ仕ヘ私ヲ願ルニ難^レ堪キ事共有^ベレ兄ガ思ケル様我レ只ニテ思ヒ可^ク様无^シ萱草ト云フ草コソ其レヲ見ル人思^フバ忘^ルナ^ラ然レバ彼ノ萱草ヲ墓ノ邊ニ殖テ見ムト思テ殖^リ其ノ後弟常ニ行キテ例ノ御墓ヘヤ參リ給^フ兄ニ問ケ^レ兄障^ノガチニ成テ不^レ具^ズ成^リニケ^レ然レバ弟、兄ヲ糸心疎シト思テ我等二人シテ祖ヲ戀^ニ懸^コソ^テ日ヲ暗^ク夜ヲ曙^ク兄ハ既ニ思ヒ忘^レドモ我ハ更ニ祖ヲ戀^ル心不^レ忘^ジト思テ紫菀ト云フ草コソ其レヲ見ル人心ニ思ユル事不^レ忘^トテ紫菀ヲ墓ノ邊ニ殖テ常ニ行ツ、見ケ^レ彌ヨ忘^ル、事无^カリ此様ニ年月ヲ經テ行ケル程ニ墓ノ内ニ音有テ云ク我レハ汝ガ祖ノ骸ヲ守ル鬼也汝テ怖^ル、事无^カレ我レ亦汝ヲ守^ラム思フト弟此ノ音ヲ聞クニ極テ怖シト思ヒ乍ラ答ヘモ不^レ爲^テ聞居^{タル}鬼亦云ク汝テ祖ヲ戀ル事年月

ヲ送^ルト云^モ替^ル事无^シ兄ヘ同ク戀ヒ悲テ見^ドモ思ヒ忘^ル草ヲ殖テ其レヲ見テ既ニ其ノ驗ヲ得^{タリ}汝ハ亦紫菀ヲ殖テ亦其レヲ見テ其ノ驗ヲ得^{タリ}然レバ我レ祖ヲ戀フル志ノ懃ナル事哀^フ我レ鬼ノ身ヲ得^{タリ}云^モ慈悲有^ルニ依テ物ヲ哀^フ心深シ亦日ノ内ノ善惡ノ事ヲ知^ルル事明カ也然レバ我レ汝ガ爲^ニ見^ユム所有^ラム夢ヲ以テ必ズ示^サム云テ其音止^ヌ弟泣^ク喜^ブ事无^レ限シ其ノ後^ハ日ノ中ニ可有^キ事夢ニ見^ル事違^フ事无^カリ身ノ上ノ諸ノ善惡ノ事ヲ知^ル事暗^キ事无^シ此レ祖ヲ戀フル心ノ深キ故也然レバ喜^キ事有^ラム人ハ紫菀ヲ殖テ常ニ可^レ見^シ憂^ヘ有^ラム人ハ萱草ヲ殖テ常ニ可^レ見^シ語^リ傳^ルトヤ

俊頼無名抄卷上鬼の志許草ノ歌ノ條

昔人のおや、子二人もたりけり。あやうせにける後、こひかなしぶ事、年をふれど忘るゝことなし。昔はうせたる人をば、塚にをさめければ、こひきたびに、兄弟うちぐしつゝ、かのつかのもとにゆきむかひて、涙をながして、我身にあるうれへをもなげきをも、生きたる親などにむかひていはんやうに、いひつづ歸りけり。兄のをのこ、やうく年月つもりて、おほやけにつかへり。わたくしをかへりみるに、たへがたき事どもありて、思ひけるやう、たゞにては思ひなぐさむべきやうもなし。萱草といふ草こそ、人の思をばわすらかすなれとて、萱草をそのつかのほとりにうゑつ。其後あと、つねにきて、れいの御はかへやまゐるとてさそひけれども、さはりがちになりて、ぐせずのみなりにけり。このおとゝの男、いと心うしと思ひて、此人をこひ申すにこそ、かゝりて日をくらし夜をあかしつれ。われは忘れ申さじとて、紫菀と云ふ草こそ、心におほゆる事は忘れざるなれとて、紫菀を塚のほとりにうゑて見ければ、いよゝ

忘るゝ事なくて、日を経てまゐりあるきけるをみて、塚のうちに聲ありて、我はそのおやのかげねをまぼる鬼なり。ねがはくはおそるゝ事なかれ。君をまもらんと思ふといひければ、おそりながら聞きをりければ、君は親に孝ある事、年月を送れどもかはる事なし。兄のぬしは、おなじく戀ひかなしみてみえしかど、思ひわすれ草をうえて、そのしるしをえたり。そこは紫苑をうえて、又そのしるしをえたり。心ざし念比にして、あはれぶところ少なからず。われ鬼のかたちをえたれども、物をあはれぶ心あり。又日のうちの事をさとする事あり。みえんところあらば、夢をもちてしめさんといひて聲やみぬ。その後、日のうちにあるべき事を夢に見る事、日としておこたることなし。これをきけば、紫苑をば、うれしきことあらん人は、家にうえて見、なげくことあらん人は、こふべからざる草なり。

藤原惟規於越中國死語 第廿八

目次藤原惟規父爲善行越中國死語

今昔越中ノ守藤原ノ爲善ト云ケル博士ノ子ニ惟規ト云フ者有リ爲善ガ越中ノ守ニ成テ下ケル時ニ惟規ハ當職ノ藏人ニテ有ベケレモ不_レ下_テズシテ叙爵シテ後ニゾ下_レケル惟規道ヨリ重キ病付レドモ然トテ道ニ可_レ留キニ非_レバ構テ下リ着_リニケ_レ國ニ行キ着_ケレ限ナル様ニ成_ニケ_レ父爲善惟規下_レ聞テ喜テ待付_ニ此_ク限ナル様_ニ奇異ク思テ歎_キ騒_グ事无_レ限シ然テ萬_ニ療_ドモ不_レ愈_ズシ无_下ニ限_リニ成_レベ_今ハ此_ノ世_ノ事_ハ无_レ益_カリ後_ノ世_ノ事_チ思_ハト云テ智_リ有_リ止_事无_カリ僧_チ枕_上ニ居_ヘテ念佛_ナド勸_メサセ爲_ニケ_ル僧惟規ガ耳_ニ宛_テ教_ヘケ_様地獄_ノ苦患_ハヒタ_{ブル}ニ成_ヌ云_ヒ不_可盡_ズ先_中有_ト云_テ生_未ダ_不定_ヌ程_ハ遙_{ナル}廣野_ニ鳥獸_ナド_无キ_ニ只_獨リ_有ル_心細_サ此_ノ世_ノ人_ノ戀_サナ_難堪

類無名抄、俊梅ラヒツ、トアリメ同上ナグサマメトアリケレバトアリケレバトアリ

サ押量ラセ給_ヘナ云_ケレ惟規此_レヲ聞_テ息_ノ下_ニ其_ノ中_有ノ旅_ノ空_ニハ嵐_ニ類_フ紅葉風_ニ隨_フ尾花_ノナ_本ニ松虫_ノナ_音ハ_不聞_エ一_ヤト_ツ、息_ノ下_ニ云_ケレ僧_博サノ餘_リニ糸_荒ラ_何ノ料_ニ其_チバ_尋ネ_給ゾ_問ケ_レ惟規然_ラバ_其等_チ見_テコ_メト_打息_ツ云_ケレ僧_此ノ事_チ糸_狂シ_ト云_テ逃_テ去_リ父_尙動_ム限_ハト_思テ_副居_テ守_リケ_レ惟規_二手_チ舉_テカ_ヨリ_ケル_心モ_不得_テ見_居ル_ニ傍_{ナル}人_若シ_物書_ムナ_思ヤ_ト心得_テ問_ケレ_バ筆_ヲ濕_シテ_紙具_シテ_取ケ_レバ_此ク_書ケ_リ

ミヤコニモワビシキ人ノアマタアレバナホコノダビハイカムトゾオモフ

ト書ケル畢_ノフ文字_チバ_否書_キ不_レ畢_テ息_キ絶_レベ_父ナム_然リ_ト云_テ其_ノフ文字_チ書_副ヘ_テ形_見ニ_セム_置テ_常ニ_見ツ_泣ケ_レ涙_ニ濕_テ畢_ニハ_破レ_失リ_父京_ニ返_リ上_テ語_ケレ_其ノ_比此_レヲ_聞ク_人極_ク哀_ケリ_此レ_ヲ思_フニ_何カ_ニ罪_深ケ_ム三_寶ノ_事チ_心ニ_懸テ_死ヌ_ル人_尙シ_惡道_ヲ通_ル、事_ハ難_ルニ_此レ_ハ偏_ニ其_ノ方_チバ_離レ_ベ悲_キ事_也此_ナム_語ヲ_傳ヘ_タトヤ

○後拾遺和歌集戀三

父のもとに、この國に侍りける時、おもくわづらひて、京にはべりける齋院の中將(源爲理ノ女、大齋院ノ女)がもとにつかはしける 藤原 惟規

●宇治大納言物語

いまはひかし、藤原のまさちかは、世のすきものにて侍りし。父の越後守爲時にともなひて、彼の國へ下りけるほどに、おもくわづらひけるが

都にもこひしき人のあまたあればなほこの度はいかんとぞ思ふ

とよみたりけれども、いとどかぎりにも見えければ、父のさだにて、或山寺より、とくある知識をよびたりけるに、中有の旅のありさま、心ぼそきやうなどかたりて、是にやすらはで、直に浄土へまわり給へなどいひ聞せけり。まさちか、中有とはいかなる所ぞやと申せば、夕暮の空に、廣き野に行き出でたる様にて、しれる人もなくて、たゞひとり心ぼそくまよひありくなりと答ふるをききて、其野には、あらしにたぐふ紅葉、風になびく尾花がもとに、松むし鈴むし鳴くにや。さだにもあらば、何かは苦しからんといへる。これをききて、あひなく心づきなく覺えければ、僧にげはしりにけり。此歌のをはりのふ文字をば、えか、ざりけるとかや。さながら都へもて歸りてけり。おやども、いかにあはれにかなしかりけん。

●俊頼無名抄卷下

ためよしと申す儒者の子に、のぶのりと申すものありき。親の越中の守になりて下りける時に、藏人にてえくだらで、かうぶりたまはりて後にぞまかりける。みちより病をうけて、いきつきければ、限りなるさまになりけり。親まぢつけて、よろづにあつかひけれど、やまざりければ、今は後の世の事をおもへとて、まくらに僧をすえて、後の世の事いひきかせけるに、地獄などはひたぶるにさる事にて、まづしぬれば中有といひて、未ださだまらぬほどは、はるかなるくわうやに、鳥けだものなどにも音もなきに、ただ一人まどひありく心ぼそさ、此の世の人の戀しきなどのたへがたさを、おしはからせ給へなどいひければ、目をほそめに見あげて、いきの下に、その中有のたびの空には、あらしにたぐふもみぢ、風にした

がふをばななんどのもとに、まつむしなどの聲はきこえぬにやと、ためらひつゝいきのしたにいひければ、僧にくさのあまりにあらゝかに、何のれうにたづぬるぞととひければ、さらばそれらを見てこそはなぐさまめと、うちやすみていひければ、僧のこのことものぐるほしとて、にげてまかりにけり。さる人の心ばへもありけりと、しろしめさむれうに、むやくなれども申す也。親ありて、目のはたらかん限りはと思ひて、そひりてまぼりければ、二つの手をさへげてありければ、心もえで見たりけるに、物かゝひとあぼしめすにやと、人の心得て申ければ、うなづきければ、筆をぬらして、紙をぐしてとらせたりければ、かきたる歌

都にも戀しき人のあまたあれば猶このたびはいかむとぞおもふ

はてのふ文字をえかゝで、いきたえにければ、親こそさなめりとして、ふ文字をば書きそへて、かたみにせんとてあきて、つねに見てなきければ、涙にぬれはて、くちうせにけるとかや。

●寶物集卷六頭陀師臨終ノ念ヲ佛ニ問事

波羅奈國ニ鸚鵡頭陀師ト云人、佛ニ申テ言ク、如何ナレバ百年功德ヲ作セル人地獄ニ落ち、百年罪ヲ作ル人浄土ニ往生スル。佛頭陀師ニ告テ宣ク、百年功德ヲ作セル者ノ地獄ニ落ルハ、命終ノ時ニ臨デ、今生ニ執ヲトムル妄念ニ依ル故也。百年罪ヲ作ル者ノ浄土ニ往生スルハ、臨終ニ彌陀ヲ念ズル故也トコソ宣ヒケレ。此理ヲバシラデ、夢ノ内ノ世ニ着ヲ成シ、幻ノ間ノ此身ニ執ヲトムル人多クゾ侍ル。歌ニテ申シ侍ルベシ。

都ニハ戀シキ人ノ數多アレバ猶此度ハイカントゾ思フ

(十訓抄上卷可定心操振舞事ノ條參閱)

藏人式部丞貞高於殿上俄死語 第廿九

貞高ノ上目
次藤原ノ二
字アリ
俄死ノ上額
院ノ上宇治
拾遺ニ後字

今昔圓融院ノ天皇ノ御時ニ内裏焼レバ□院ニナ御ケル而ル間殿上ノ夕サリ大盤ニ殿上人藏人數着テ物食ケル間ニ式部丞ノ藏人藤原ノ貞高ト云ケル人モ着タリケ其ノ貞高ガ俄ニ倂シテ大盤ニ顔ヲ宛テ喉ヲクツメカス様ニ鳴シテ有バケレ極テ見苦カリケ小野ノ宮ノ實資ノ右ノ大臣其ノ時ニ頭ノ中將ニテ御ガケル其レモ大盤ニ着テ御ケレ主殿司ヲ呼テ其ノ式部ノ丞ガ居様コソ極ク不ニ心得ニ其レ寄テ搜レト宣バレ主殿司寄テ搜テ早ウ死給ヒニ極キ態カナ此ハ何ガ可爲キト云ケル聞テ大盤ニ着タル有ト有ル殿上人藏人皆立走テ向タル方ニ走リ散リテ頭ノ中將ハ然リト此テ可有キ事ニモ非ズト云テ此レヲ奏司ノ下部召シテ搔出ヨト被仰ケレ何方ノ陣カ可ニ將出キト申バレ頭ノ中將東ノ陣ヨリ可出キト被行ケル聞テ藏人所ノ衆瀧口出納御藏女官主殿司下部共ニ至マテ東ノ陣ヨリ將出サム見ムト競ヒ集タル程ニ頭ノ中將違ヘテ俄ニ西ノ陣ヨリ將出ヨト有ケレ殿上ノ疊乍ラ西ノ陣ヨリ搔出テ將行バレ見ムトシ若干ノ者共ハ否不レ見ズ成ヌ陣ノ外ニ搔出ケル程ニ父ノ□□三位來テ迎ヘ取テ去リ然ハ賢ク此レヲ人ノ不見ズ成ヌト人云ケル此ハ頭中將ノ哀ビノ心ノ御シテ前ニハ東ヨリ出セト行ヒテ俄ニ違ヘテ西ヨリ將出ヨト被俸テ一タリケ此レヲ哀ビテ恥テ不レ見セニジト構ケル事也其ノ後十日許有テ頭ノ中將ノ夢ニ有レ式部ノ丞ノ藏人内ニテ會ヌ寄來タル見レバ極ク泣テ物多云フ聞ケバ死ノ耻ヲ隠サセ給タル事世々ニモ難ク忘ク候フ然許人ノ多ク見ムト集テ候ヒシ西ヨリ出サセ不レ給シカバ多

被仰一本被
行ニ作ル

ノ人ニ被見線ニテ極タル死ノ恥ヲハ候カト云テ泣クテ手ヲ摺テ喜ブト見ニテ夢覺ニケレ然レバ人ノ爲ニハ專ニ情可有キ事也此ヲ思フニ頭ノ中將然止事无キ人バレ然モ急ト思ヒ寄テ被俸ケル也トナ此レヲ聞テ人皆頭ノ中將ヲ讚ケルト語り傳ヘタトヤ

○日本紀略後篇七

天元四年辛巳九月四日。藏人式部丞藤原貞孝候殿上間。爲鬼物被殺。

●宇治拾遺物語卷十藏人頓死の事

今はひかし、圓融院の御時、内裏焼けにければ、後院になんおはしましける。殿上の臺盤に、人々あまたつきて物くひけるに、藏人貞高、臺盤に額をあててねぶり入りて、いびきするなめりと思ふに、やゝしばしになれば、あやしと思ふ程に、臺盤に額をあてて、喉をくつ／＼とくつめくやうにならせば、小野宮大臣殿、いまだ頭中將にておはしけるが、主殿司に、その式部丞のねざまこそ心えね。それおせとのたまひければ、主殿司よりおこすに、すくみたるやうにて動かさず。あやしさにかいさぐりて、はや死に給ひにたり。いみじきわざかなといふをききて、ありとある殿上人、藏人、ものも覺えず物おそろしかりければ、やがて向きたる方さまにみな走りちる。頭中將、さりとてあるべき事ならず、これ諸司の下部めしてかさいでよとおこなひ給ふ。いづかたの陣よりかいだすべさと申せば、東の陣よりいだすべきなりとのたまふを聞きて、内の人あるかぎり、東の陣にかい出でゆくを見んとて、つどひあつたりたる程に、たがへて西の陣より、殿上のたゝみながら、かさいでて出でぬれば、人々も見ずなりぬ。陣の口かさいづるほ

どに、父の三位来てむかへとりて去りぬ。かしこく人々に見あはずなりぬるものかなとなん人々いひける。さて二十日ばかりありて、頭中將の夢に、ありしやうにて、いみじう泣きて物をいふ。さけば、いとうれしく、おのれが死の耻をかくさせ給ひたることは、世々にわすれ申すまじ。はかりごちて、西よりいださせ給はざらましかば、多くの人に面をこそは見えて、死の耻にて候はましかとて、なくなく手をすりてよろこぶとなん、夢に見えたりける。

●十訓抄中卷可存忠信廉直旨事

小野の宮右大臣(實資)とて、世には賢人の右府とぞ申しける。此の殿、わかより賢人の一筋のみならず、思慮ことに深く、情人にすぐれておはしけり。圓融天皇の御時、頭の中將にて殿上に候ひ給ひけるに、式部丞藏人藤原真高といふ人、臺盤につきたるが頓死したりけるを、頭の奉行にて、奏司の下部を召して、かき出ださせられけるに、何方より出だすべきぞと申しければ、東の陣よりいだすべしと仰せられけるに、藏人所衆瀧口出納御倉女官主殿司下部どもに至るまで、そこらの者どもこれを見んとて、東の陣へ競ひ集まる程に、殿上の疊ながら、西の陣より出だせとのたまひければ、引きちがへて、西の陣より出だしければ、見る者もなく、陣の外へいだしたるを、父三位来てむかへ取りてけり。その後十日ばかりして、頭の中將の夢に、藏人内々参りて、死の耻をかくさせ給ひたる、よにも忘れがたし。東より出でましかば、多くの人に見えなましといひて、手をすりて、なくなく悦ぶと見えてけり。

出人語目次
出女不知語
ニ作ル

尾張守 於鳥部野出人語 第三十

今昔尾張ノ守□□ト云フ人有ケリ其ノ□□ニテ有ケル女有ケリ歌讀ノ内ニテ心バヘナ糸可咲クヲ男ナド不レ爲
ム有ケル尾張ノ守此レヲ哀テ國ニ郡ナド預ケテ有ケレ便リ有テナ有ケル子二三人有ハル母ニモ不レ似ズ極タル不覺ノ
者ニテ有ケレ皆外ノ國ヘ迷ヒ失リニケレ其ノ母ハ年老テ衰ケレ尼ニ成ニケレ後ニハ尾張ノ守モ不問ズ成ニケレ畢ニハ兄也ケル
者ニ懸リテ過ケル間ニ難レ堪キ事多カリケ本ヨリ有識ナル者ニテ弊キ事ナバ不レ爲ズシ尙身ヲ持上テ心惚ヲ造テ過ルシケ
程ニ身ニ病付テケ日來チ經ルマ病ノ筈ニ沈ムデ氣色不覺ニ見エケル兄有テ家ニテ不レ然ジト思テ家ヲ出シケレ其レバ我レバ
爲ル様有ラム思テ昔ノ共達ニテ有ケル者ノ清水ノ邊ニ有ガケル許ニ其レヲ打憑ムデ車ニ乗テ行タルニ憑テ行タル所ニモ思
ヒ返シテ此ニテ不レ然ト云バ何ガセム鳥部野ニ行テ淨ケナ高麗端ノ疊ナ敷テ其レニ下居ケレ極ク和ギ哀レ也ケル人
ニテ膝ノ影ニ隠レテ引疏テソ疊ニ居ケル然テ疊ニ寄臥チ見テ從者ニテ有ケル女ハ返リ哀ナル事ム其ノ比人云ケ
此レハ體ナル人ドモ糸惜バケレ不レ書ゾト人云シ彼ノ尾張ノ守ノ妻カ妹カ娘カ不レ知ズ何デ有トモ極ク口惜ク不問ケル
事トゾ聞ク人誇リケルトナム語リ傳ヘタトヤ

太刀帶陣賣魚姬語 第卅一

今昔三條ノ院ノ天皇ノ春宮ニテ御ケル時ニ太刀帶ノ陣ニ常ニ來テ魚賣ル女有ケリ太刀帶共此レヲ買セテ食フニ味ノ
美カリケ此レヲ役ト持成シテ菜料ニ好リケ干タル魚ノ切々ナルニ有ケル而ル間八月許ニ太刀帶共小鷹狩ニ北野ニ出

目次野刀等
於北野小鷹
狩賣魚女
語ニ作ル

有識丹本等
有職ニ作ル

テ遊ケル此ノ魚賣ノ女出來タリ太刀帶共女ノ顔ヲ見知バレ此奴ハ野ニハ何態爲ルニ有ラム思テ馳寄テ見レバ女大キ
 カナシク持タリ亦楚一筋ヲ捧テ持タリ此ノ女太刀帶共ヲ見テ怪ク逃目ヲ仕ヒテ只騒ギニ騒グ太刀帶ノ從者共寄テ女
 ノ持タル籬ニハ何ノ入ゾト見ムト爲ルニ女惜ムテ不見セヌ怪テ引テ見レバ蛇ナ四寸許ニ切ツ、入タリ奇異ク思
 テ此ハ何ノ料ゾト問モ女更ニ答フル事无クテ立テ早ウ此奴ノ様ハ楚ヲ以テ敷テ驚ツ、這出ル蛇ヲ打煞シテ
 切ツ、家ニ持行テ鹽ヲ付テ干テ賣ケル也ケリ太刀帶共其レヲ不知ズシ買セテ役ト食ケル也ケリ此レヲ思フニ蛇ハ食ツ
 人惡ト云フニ何ト蛇ノ不毒ヌ然レバ其ノ體髓ニ无クテ切々ム魚賣ヲ廣量ニ買テ食ハム事ハ可レ止シト此レヲ聞
 ク人云縁ナム語リ傳ルヘトヤ

人見酔酒販婦所行語 第卅二

今昔京ニ有ケル人知タル人ノ許ニ行ケル馬ヨリ下テ其ノ門ニ入ケル時ニ其ノ門ノ向也ケル舊キ門ノ閉テ人モ不通ニ其
 ノ門ノ下ニ販婦ノ女傍ニ賣ル物共入レタ平ナル桶ヲ置テ臥セリ何ニ思テ打寄テ見レバ此ノ女酒ニ吉ク醉タル
 也ケリ此ク見置テ其ノ家ニ入テ暫ク有テ出テ亦馬ニ乗ラム爲ル時ニ此ノ販婦ノ女驚キ覺タリ見レバ驚ク突ニ其
 ノ物共入レ桶ニ突キ入レケリ穴穢ナト思テ見ル程ニ其ノ桶ニ鮎鮎ノ有ニ突懸ケリ販婦錯シテ思テ忿テ手ヲ以テ其ノ
 突懸タル物ヲ鮎鮎ニコソテ此レヲ見ルニ穢シト云ヘバ愚也ヤ肝モ違ヒ心モ迷フ許思レバ馬ニ急ギ乗テ其ノ所ヲ逃去
 リ此レヲ思フニ鮎鮎本ヨリ然様ダケ物ナレ何モ不見ユジ定メテ其ノ鮎鮎賣ムニ人ノ不食ヌ様不レ有ジ彼ノ見ケル
 人其ノ後永ク鮎鮎ヲ不食ケリ然様ニ賣ラム鮎鮎ヲ不食ガ我ガ許ニテ憶見テ鮎調セタル事ヲ不食ケル其

人ノ下目次
於大路ノ三
字アリ

目次竹取翁
於篋中見付
女兒養立語
ニ作ル

長大スル丹
本等長大ニ
ナルニ作ル

竹取翁見付女兒養語 第卅三

今昔天皇ノ御代ニ一人ノ翁有ケリ竹ヲ取テ籠ヲ造テ要スル人ニ與ヘテ其ノ功ヲ取テ世ヲ渡ケル翁籠ヲ造ガ爲ニ
 篋ニ行キ竹ヲ切ケル篋ノ中ニ一ノ光リ有リ其ノ竹ノ節ノ中ニ三寸許ナル人有リ翁此レヲ見テ思ハク我レ年來竹取
 今此ル物ヲ見付タル事ヲ喜テ片手ニハ其ノ小キ人ヲ取リ今片手ニ竹ヲ荷テ家ニ返テ妻ノ篋ノ中ニシ此ル女兒ヲ
 見付タレ云ケレ姫モ喜テ初ハ籠ニ入レテ養ニ三月許養ケル例ノ人ニ成ヌ其ノ兒漸ク長大スルマ世ニ並无ク端正ニシ
 此ノ世ノ人トモ不と思エレバ翁姫彌ヨ此レヲ悲ビ愛シテ傳ケル間ニ此ノ事世ニ聞エ高ク成テケ而ル間翁亦竹ヲ取ラ
 ガ爲ニ篋ニ行ヌ竹ヲ取ルニ其ノ度ハ竹ノ中ニ金ヲ見付タリ翁此レヲ取テ家ニ返ヌ然レバ翁忽ニ豊ニ成ヌ居所ニ宮殿樓
 閣ヲ造テ其レニ住ミ種々ノ財庫倉ニ充テ滿テリ眷屬衆多ニ成ヌ亦此ノ兒ヲ儲後ハ事ニ觸レテ思フ様也然レバ彌
 ヲ愛シ傳ク事无限シ而ル間其ノ時ノ諸ノ上達部殿上人消息ヲ遣テ假借ルニ女更ニ不聞レバ皆心ヲ盡シテ云セケ
 女初ニハ空ニ鳴ル雷ヲ捕ヘテ將來レ其ノ時ニ會ト云ケリ次ニハ優曇花ト云フ花有ケリ其レヲ取テ持來レ然ラム時ニ
 會ト云ケレ後ニハ不レ打ヌニ鳴ル鼓ト云フ物有リ其レヲ取テ得ラム折ニ自ラ聞エム云テ不レ會ザリケレ假借スル人々女
 ノ形ノ世ニ不レ似ズ微妙カリケレ耽テ只此ク云フニ隨テ難堪キ事ナレ舊ク物知タル人ニ此等ヲ可求キ事ヲ問ヒ聞テ或ハ

家ヲ出テ海邊ニ行キ或ハ世ヲ弃テ山ノ中ニ入り此様ニシテ求ケル程ニ或ハ命ヲ亡シ或ハ不ニ返來ニテ輩モ有ケリ而ル間天皇此ノ女ノ有様ヲ聞シ食シテ此ノ女世ニ並无ク微妙シト聞ク我レ行テ見テ實ニ端正ノ姿バ速ニ思テ忽ニ大臣百官ヲ引將テ彼ノ翁ノ家ニ行幸有ケリ既ニ御マシ着タル家ノ有様微妙ナル事王ノ宮ニ不レ異ズ女ヲ召出ルニ即チ參リ天皇此レヲ見給ニ實ニ世ニ可レ譬キ者无ク微妙カリケレバ此レハ我ガ后ニ成ラム人ニハ不ニ近付ニザリケル喜ク思シ食テヤガテ具シテ宮ニ返テ后ニ立テム宣フニ女ノ申サク我レ后ト成ラム无限キ喜ビ也ト云セド實ニハ己レ人ニハ非ヌ身ニテ候フ也ト天皇ノ宣ク汝然レバ何者ソ鬼カ神カト女ノ云ク己レ鬼ニモ非ズ神ニモ非ズ但シ己チバ只今空ヨリ人來テ可レ迎キ也天皇速ニ返ラセ給ヒネ天皇此レヲ聞給テ此ハ何ニ云フ事ニカ有ラム只今空ヨリ人來テ可レ迎キニ非ズ此レハ只我ガ云フ事ヲ辭ビム云ナノ思給ケル程ニ暫許有テ空ヨリ多人來テ與テ持來テ此ノ女ヲ乘セテ空ニ昇リケ其ノ迎ニ來レル人ノ姿此ノ世ノ人ニモ不レ似ケリ其ノ時ニ天皇實ニ此ノ女ハ只人ニハ无キ者ニコ有ケレ思シテ宮ニ返リ給ニケ其ノ後ハ天皇彼ノ女ヲ見給ケル實ニ世ニ不レ似ズ形有様微妙カリケレ常ニ思シ出テ破无ク思シケレ更ニ甲斐无クテ止リケ其ノ女遂ニ何者ト知ル事无シ亦翁ノ子ニ成ル事モ何ナル事ニカ有ケム惣ベテ不ニ心得ニヌ事也トナ世ノ人思ケル此ル希有ノ事ナレ此ク語り傳ルヘタトヤ

◎廣大寶樓閣善住祕密陀羅尼經卷上序品(抄錄)

爾時衆中有金剛手菩薩摩訶薩。頂禮釋迦牟尼如來。合掌恭敬白佛言。世尊。今此塔中諸如來等。從何而有從何而來。佛言。汝今諦聽。當爲汝說。乃往古昔不可思議無量無數阿僧祇劫。此瞻部洲中。多諸人衆安穩豐樂。五穀不種自然成熟。人無彼我亦無積貯。當此之時無有佛名。有一大山名寶山王。彼寶山中有三仙人。一

名寶髻。二名金髻。三名金剛髻。彼三仙人。繫心專念佛法僧寶。復作是念。我等何時證無上正覺。度脫一切諸衆生等。時彼仙衆作是念已。須臾默念復起前念。由是念故。即證慈悲歡喜一切衆生種々樓閣三摩地。獲於天眼。觀彼上方見淨居天。復於空中有聲言曰。善哉正士善哉正士。能發上願求大正覺。汝曾聞不。有大妙法名廣大寶樓閣祕密善住陀羅尼。往昔如來已曾演說。善爲利益一切衆生。諸有聞者。決定不退無上正覺云々。此陀羅尼有如是等無量無邊不可思議力。時彼仙人得法歡喜欣慶踊躍。於其住處如新醍醐消沒於地。即於沒處而生三竹。七寶爲根金莖葉竿。梢枝之上皆有真珠。香潔殊勝常有光明。往來見者靡不欣悅。生滿十月便自裂破。一々竹內各生一童子。顏貌端正色相成就。時三童子亦既生已。各於竹下結跏趺坐。入諸禪定至第七日。於其夜中皆成正覺。其身金色。三十二相八十種好圓光嚴飾。時彼三竹。一々變成高妙樓閣云々。

◎佛說柰女者域因緣經(抄錄)

如是我聞。一時佛在羅閱祇園云々。爾時座中有一比丘尼。名曰柰女。即從座起整服作禮。長跪叉手白佛言。世尊我自念。先世生波羅奈國。爲貧女人時。世有佛名曰迦葉。時與大衆圍遶說法。坐聞經歡喜。意欲布施願無所有。自惟貧賤心用悲感。詣他園圃求乞果藏。當以施佛。時得一柰大而香好。擎一盂水并柰一枚。奉迦葉佛及諸衆僧。佛知至意咒願受之。分布水柰一切周普。緣此福祚。壽盡生天得爲天后。下生世間不由胞胎。九十一劫生柰華中。端正鮮潔常識宿命。今值世尊開示道眼云々。柰女禮已還坐。佛在世時。羅耶黎國國王苑中。自然生一柰樹。枝葉繁茂實又加大。既有光色香美非凡。王寶愛此柰。自非中宮尊貴美人不得啖此柰果。國中有梵志居士。財富無數一國无雙。又聰明博達才智超群。王重愛之用爲大臣。請梵志飯食。食畢以一柰

實與之。梵志見柰香美非凡。乃問王曰。此柰樹下。寧有小栽可得乞不。王曰。太多小栽。吾恐妨其大樹。輒除去之。卿若欲得今當相與。卽以一柰栽與梵志。梵志得歸種之。朝夕溉灌。日々長大枝條茂好。三年生實。光彩大小如王家柰。梵志大喜。自念我家資財無數不減於王。惟无此柰以爲不如。今已得之爲无減王。既取食之。而大苦澀了不可食。梵志更大愁惱。乃退思惟。當是土爲无肥潤故耳。乃捉百牛之糞以飲一牛。復取一牛。灌煎之爲醃。以灌柰根。日々灌之。到至明年。實乃甘美如王家柰。而樹邊忽復生一瘤節。大如手拳。日々增長。梵志心念。忽有此瘤節。恐妨其實。適欲斫去。恐復傷樹。連日思惟遲徊未決。而節中忽生一枝。正指上向。洪直調好高出樹頭。去地七丈。其杪乃分作諸枝。周圍傍出形如偃蓋。華葉茂好勝於本樹。梵志怪之。不知枝上當何所有。乃作棧閣登而視之。見枝上偃蓋之中乃有池水。既清且香。又有衆華彩色鮮明。披視華中。有一女兒在池華中。梵志抱取歸長養之。名曰柰女。至年十五。顏色端正天下无雙。宣聞遠國。有七國王。同時俱來詣梵志所。求娉柰女以爲夫人。梵志大恐怖。不知當以與誰。乃於園中架一高樓。以柰女著上。出謂諸王曰。此非我所生。自出於柰樹之上。不知是天龍鬼神女耶。鬼魅之物。今七王俱來求之。我設與一王六王當怒不敢愛惜也。女今在園中樓上。諸王便自平議。有應得者便自取去。非我所制也。於是七王口共爭之。紛々未決。至其夕夜。萍沙王從伏寶中入。登樓就之共宿。明晨當去。柰女白曰。大王幸枉威尊接逮於我。今復相捨而去。若其有子則是王種。當何所與。王曰。若是男兒當以還我。若是女兒便以與汝。王則脫手金鎖之印以付柰女。以是爲信。便出語群臣言。我已得柰女一宿。亦无奇異。故如凡人。故不取耳。萍沙軍中皆稱萬歲。曰。我王已得柰女。六王聞之便各還去。萍沙王去後。遂便有娠。時柰女勅守門人言。若有求我見者。當語言

我病。後日月滿生一男兒。顏貌端正。兒生則手持針藥囊。梵志曰。此國王之子。而執醫器必醫王也云々。名曰耆域云々。

◎後漢書南蠻西南夷列傳第七十六

夜郎者。初有女子浣於遼水。有三節大竹。流入足間。聞其中有號聲。剖竹視之。得一男兒。歸而養之。及長有才武。自立爲夜郎侯。目竹爲姓。武帝元鼎六年。平南夷爲牂牁郡。夜郎侯迎降。天子賜其王印綬。後遂殺之。夷獠咸目竹王非血氣所生甚重之。求爲立後。牂牁太守吳霸曰。天子乃封其三子爲侯。死配食其父。今夜郎縣有竹王三郎神是也。

(佛說柰女者婆經。華陽國志卷四。異苑卷五。述異記卷下。及竹取物語等參閱)

◎國名風土記第二

甲斐國トハ、昔ハ富士山ノ麓ニ竹取ノ翁トテ、竹ヲ種テアキナヒケル者アリ。彼翁、園生ノ竹林ニシテ鶯ノ卵ヲ見付タリ。暖メ置ク。其後程ヲヘテ是ヲミレバ、容顏優ナル寵姫ト成ケリ。然ルニ彼ヲ養子トス。タケシ後ニ、カノ翁ガ田作りケル時ニ、暇ナカリシカバ、養母ノ詛ヘテイハク、隙ナキ時ニシモ、何トカヤ手助トナリ玉ハザルト、情ナク云ケレバ、鶯姫コレニ怒ヲナシテ、富士山ノ峯ニ登テ、岩ヲ蹴破テ湯ヲ走ラカシ、田ツクル人ノ所ミナ燒石トナル。件ノ祖父母ハニゲテ白根ガ峯ヘユキ、又彼田カケル馬モニゲテ、信州駒ガミネニスキケル。其駒主ヲワスレズ常ニ馴シカバ、彼馬ヲ心ニ入テ飼シユエナリ。此所ヲ飼國ト云。然ラカナガキニ甲斐トカクナリ。黑駒ト云モ甲斐國ヨリイヅルナリ。

●海道記

むかし採竹翁と云ふものあり。女を赫奕姫といふ。翁が家の竹林に、鶯の卵子の形にかへりて、巢の中にあり。翁養て子とせり。人となりて顔よき事たぐひなし。光ありてかたはらをてらす。嬋娟たる兩鬢は秋のせみのはね、婉轉たる雙娥は遠山の色。一たび咲へばも、のこびなり。見さく人みなはらわたをたつ。此姫は先生に人として翁に養はれたりけるが、天上に生れて後は、宿世の恩を報ぜんとして、しばらく此翁が竹に化生せるなり。あはれむべし、父子の契りの他生にも變ぜざること。是よりして青竹のよの中に黄金出来て、貧翁たちまちに富人となりけり。其間英花の家、好色のみち、月卿ひかりをあらそひ、雲客色を重じて、艶言をつくし、懇情を抽でて、常にかぐや姫が室屋に來會して、絃をしらべ、歌を詠じて遊びたりける。されども翁姫難詞を結びて、うちとくる心もなし。時のみかど此よしを聞召して、召しけれども參らざりければ、みかど御狩あそびのよしにて、鶯姫が竹亭に御幸し給ひて、鶯のちぎり結び、松のよはひをひきたまふ。翁姫おもふところ有て、後日をちぎり申ければ、みかどむなしくかへり給ひぬ。かたへの天これを知て、玉のまくら、金の釵、たまきはまだ手なれざるさきに、飛車くだりて天にあがりぬ。開城のかためも雲路にえきなく、猛子がかちからも飛行にはよしなし。時に秋の半、月のひかりくまなきころ、夜半のけしき風おとづれ、ものを思はぬ人も物おもふをりふし、きみのおもひ臣の懐舊、おなじく袖をうるほす。彼の雲をつなぐにつなぎ得ず、雲の色慘々として、くれのおもひふかし。風を追ともおはれず、風の聲颯々として、夜のうらみふかし。花民は奈木の孫枝なり、薬の君臣として萬民

病をいやす。鶯姫は竹林の子葉なり、毒の化女として一人の心をなやます。方士が大真院をたづねし、貴妃がさゝめごと、二度唐帝がおもひにかへり、使臣の富士のみねにのぼり、仙女がわかれの書、なか／＼和君の情をこがせり。翁ひめ天にあがりける時、帝の御ちぎりさすがにおぼえて、不死の薬に歌をかきぐして、とどめあきたり。其歌に云く

今はとて天のは衣さる時ぞ君をあはれとおもひ出でぬ

みかどこれを御覽じて、忘れがたみは見るもうらめしとて、怨戀にたへず、青鳥をとばし、雁札をかきそへて、薬をかへし給ひけり。其返事

あふことの涙にうかぶ我が身にはしなぬ薬も何にかはせん

使節智計をめぐらして、天に近きところは此山にしかじとて、富士山にのぼりてやきあげれば、薬も文もけふりとむすぼほれて、空にあがりけり。これより此みねに戀の煙をたてたり。この山をば不死の峯といへり。然るを郡の名に付て富士とかくにや。彼も仙女なり、これも仙女なり。ともに戀しき袖にたまれる。彼は死てさり、これはいきて去る。おなじく別てよるの衣をかへす。すべて昔も今も、好女は國をかたぶけ人をなやます。慎で色にふけるべからず。

天つひめ戀しおもひの煙とてたつやはかなき大空の雲

●詞林采葉抄第五富士山ノ條

古老傳曰。此山麓乘馬里。有老翁愛鷹。樞者飼犬。後作箕爲業。竹節間得少女。容貌端嚴光明照耀。爰桓武

天皇御宇延曆之比。諸國下宣旨被撰美女。坂上田邑麻呂爲東國勅使。富山裾宿老翁宅。終夜不絕火光。問子細。是養女光明也云。田邑麻呂即上洛奏事之由。於是少女登般若山入巖峯。帝幸老翁宅。翁奏由緒。帝悲泣。脫帝玉冠留此處。登頂上臨金峯。少女出向。微笑曰。願帝留此。帝即入峯。玉冠成石在于今。彼翁者愛鷹明神也。姬者飼犬明神也云々。

●三國傳記卷十二富士山事

和ニ云ク、駿河國富士山者、月氏震旦日域ノ間、無雙ノ名山也。源出ニ阿字大空、示ニ三觀一心旨。峯冥圓頓實相、顯ニ三密同體理。八葉白蓮靈嶽、五智金剛正體也。所以者何、人王第六ノ帝、孝安天皇ノ御時、富士郡ニ作レ竹翁ト云者アリ。竹林ニ鶯栖ヲ造リ、卵子産ミ生立ケル中ニ、倩盼タル美質、窈窕タル淑姿、誠ニ嚴敷姫御前アリ。自ラ稱ニ赫屋姫。則チ奏聞ヲ經ニ、帝王迎テ后トス。然ニ七年ヲ過テ、后皇帝ニ向テ曰玉ヒケルハ、妾ハ上界ノ天女也。前世ノ依レ有ニ宿緣、君皇ト契ヲ結ベリト云ヘ共、緣已ニ盡ヌ。今ハ御暇ヲ可レ賜。復來事モ片戀ノ、堅クハ歎キ玉マジ。是ヲ像見トシ玉ヘトテ、御鏡ヲ殘シ置レテ、身ニハ思ノ天津空、雲路ヲ分テゾ入玉フ。御門ハ其ヨリ獨居ノ病メ鵲、夜半ニ驚人鳴ク狂鷄ノ、三更ニ唱レ曉聲制ル音ナラヌモ嬾クテ、何マデ草ノ何マデゾ、壁ニ背ケル燈ヲ、消ヌ命ノ打シホレ、干隙モ無キ御涙、袖ノ溼ノツナギ舟、遣方モナキ戀心、御像見ヲソヘ玉ヘ共、ウキ面影ノ眞澄鏡、セン方無ク思食シ、何シテ天ニ昇ント思ヒ、富士ヲ尋ネ、此峯ニ到リ給ヒタレドモ、戀敷人モ中空ノ、盡ヌ歎ノ彌増テ、怨ヌ千種ノ思草、葉末ノ露ノ命モ、已ニ消ントシ給ヒケリ。責テ念ヒノ天ノ原、ソナタト計リソリサケテ、身ヲシル雨ハシグル

レ共、御胸ノ炎形見ノ鏡ニ燼付テ、俄ニ天ニ沸上ル、其時又此山一由旬高クナレリ。御胸ノ八分ノ肉段聚テ、八葉白蓮ノ太山王ト顯レタリ。眞言金剛ノ峯巒岑トシテ、阿字索光ノ雪麗切タリ。是則チ示ニ衆生心中六大像一也。是ヲ爲ニ即身成佛證理一也。所謂阿字トハ、一切ノ眞言ノ心也。復レ動レバ是眞言也。所謂一切眞言ハ阿字門也。王復無尋ナレバ是阿字也。毘盧舍那、唯以ニ此一字爲ニ眞言。即是自性清淨心王、四數曼荼尊心也云々。

大和國箸墓本緣語 第卅四

今昔□天皇ト申ケル帝一人ノ娘御ケリ形チ有様端正也ケレ。天皇后悲ビ傳キ給フ事无限シ此ノ娘未ダ娶給フ事モ无キ間ニ誰トモ不知ヌ人ノ極ク氣高キ娘ノ御許ニ忍テ來テ云ク我レ君ト夫妻ト成ト。思フト娘ノ宣ハク我レ未ダ男ニ觸這フ事无シ何カ輒ク君ノ言バニ隨ハム亦父母ニ此ノ由チ不レ申シテ不レ可有ズト男ノ云ク譬ヒ父母知給ヘリ惡キ事不有ジト如レ此ク夜々來テ語フト云ヘド近付ク事无シ而ル間娘天皇ニ申シ給フ然々有ル人ナム夜々來テ如レ此ク申スト天皇ノ宣ハク其レハ人ニハ非ジ神ノ來宣フ事ナ、然ル程ニ娘遂ニ近付キ給ヒニ其ノ後ハ互ニ相思テ過給ケル誰人トモ不知ネバ女男ニ申シ給フ様我レ君ヲ誰トモ不知ネバ極テ不審シ何クヨ御ソ。我レチ實ニ思ヒ給ハハ隱シ无ク誰人ト宣ヘ亦御ム。所チモ知セ給ヘト男ノ云ク我レハ此ノ近キ邊ニ侍ル也我ガ體見ムト思サバ明日其ノ持給ヘル櫛ノ箱ノ中ニ有ル油壺ノ中ヲ見給ヘ然テ其レヲ見給モ恐テ怖ル、心无クテ御セ若シ愕給ハハ我ガ爲ニ極テ難レ堪ムト女更ニ不愕ジト宣テ明バ。男返リ給ヌ其ノ後女櫛ノ箱開テ油壺ノ中ヲ見給フニ壺ノ内ニ動ク者アリ何ノ動クソ

思テ持上テ見給ヘバ極テ小キ蛇蟠テ有リ油壺ノ内ニ有ラム蛇ノ程ヲ思ヒ可レ遣シ女此レヲ見給フマニ然コソ不レ愕ジト契
 シカ大キニ愕テ音ヲ擧テ奔テ逃去ヌ其ノ宵男來レリ例ニ非ズ氣色糸惡クテ女ニ近付ク事无シ女怪シト思テ寄給ニヘル男
 ドモ宣ハク然許申シ事ヲ不ニ用給ニズシ愕給フ事極テ情无キ事也然レバ我レ今ハ參リ不レ來テ極ク半无氣ナル氣色ニテ
 返リ給フヲ女然許ノ事ニ依テ不來ト有コソ口惜ケレ引カヘ給フ時ニ女ノ前ニ箸ヲ搥立テ女即チ死給タレ 天后歎キ
 給フト云ヘド更ニ甲斐无クテ止リニケケ然テ其ノ墓ヲ大和國ノ城下ノ郡シキノシモニシテ箸ノ墓トテ于レ今有ル其レ也トナ 語リ傳
 ルトヤ

○日本書紀卷五崇神紀

十年秋九月丙戌朔壬子云々。天皇姑倭迹々日百襲姫。聰明睿智。能識未然云々。是後。倭迹々姫命爲大物
 主神之妻。然其神常晝不見。而夜來矣。倭迹々姫命語夫曰。君常晝不見者。分明不得視其尊顏。願暫留之。
 明且仰欲觀美麗之威儀。大神對曰。言理灼然。吾明且入汝櫛笥而居。願無驚吾形。爰倭迹々姫命。心裏密
 異之。待明以見櫛笥。遂有美麗小蛇。其長大如衣紐。則驚之叫啼。時大神有耻。忽化人形謂其妻曰。汝不忍
 令羞吾。吾還令羞汝。仍踐大虛登于御諸山。爰倭迹々姫命。仰見悔之急居。則箸撞陰而薨。乃葬於大市。故
 時人號其墓謂箸墓也。是墓者。日也人作夜也神作。故運大坂山石而造。則自山至于墓。人民相踵。以手遞傳
 而運焉。時人歌之曰。飲朋佐介珥。菟藝廼煩例屢。伊辭務邏鳩。多誤辭珥固佐屢。固辭介氏務介茂。

●俊賴無名抄卷上

ひかし大和のくにに、をとこ女あひすみて、年ごろになりてけれど、ひるとままりて、たがひに見ること

のなかりければ、女うらみて、年比のなかなれど、いまだ其かたちをみることをしとらみければ、男、
 うらむるところ、實にことわりなり。たゞしわがかたちを見ては、さだめておぢおそれんか、いかにと云
 ひければ、このなからひの年をかぞふれば、いくそばくぞ。たとひ其かたちみにくしといふとも、ねがは
 くはたゞ見え給へといへば、しかなり。さらば我そのみくしげのなかにをらむ。ひとりひらき見たまへ
 といひてかへりぬ。いつしかあけて見れば、ちひさきくちなは、わだかまりてのきぬ。其夜また來たり
 て、われをみておどろきおもへり。まことにことわりなり。われもまたきたらん事、はぢなきにあらざと
 いひちぎりて、なく／＼わかれざりぬ。女うとましながら、こひしからんことをなげきおもひて、をの
 まきあつめたるをばへそといへり。此へそをはりにつけて、かりぎぬのしりにさしつ。夜あけぬれば、そ
 のををしるべにて、たづねゆきて見れば、三輪の明神の御ほくらの中にいれり。そのをのこりの三輪
 けのこりたりければ、三輪の山とは云ふなり。

元明天皇陵點定惠和尚語 第卅五

今昔元明天皇ノ失給ケル時陵取ガ爲ニ大織冠ノ御一男定惠和尚ト申ケル人ヲ差シテ大和國ヘ遣シケレバ吉野
 ノ郡藏橋山ノ峯多武峯ノ岸重ガレ後ニ峯有リ前ヘニ七ノ谷向テ有リ定惠和尚此レヲ見給テ哀レ微妙ベキ止事无キ
 地カナ但シ天皇ノ御墓所ニテ左右ハ下レリ□ノ人不レ有ジ前々モ狹キニ依テ不レ取ザリ也トテ不レ取ザリ然テ其ノ麓
 ニ戌亥ノ方ニ廣キ所有リ其レヲ取ツ輕寺ノ南也此レ元明天皇ノ檜前ノ陵也石ノ鬼形共ヲ廻□池邊陵ノ墓様ニ立テ

微妙ク造レル石ナド外ニハ勝リタ然テ峯ニハ大織冠淡海公モ御墓ヲシ也其ノ御骨ヲ春飾テ時リケ然レバ馬牛ニ不踏セテ廻リハ漚ナ遠クシ敢テ人ニ寄セズ其レニ大織冠淡海公ノ御流レ國ノ一ノ大臣トシ于レ今榮ニ給フ而ルニ天皇ノ御中ト不ニ吉ラニ事出來テハ其ノ大織冠ノ御墓必ズ鳴リ響ク也然レバ此レヲ不レ怪ズト云フ事无シ多武峯ト云フ所此レ也トナ語リ傳ヘタトヤ

○續日本紀卷八

養老五年冬十月丁亥。太上天皇(元明)召入右大臣從二位長屋王。參議從三位藤原朝臣房前。詔曰。朕聞萬物之生靡不有死。此則天地之理。奚可哀悲。厚葬破業。重服傷生。朕甚不取焉。朕崩之後。宜於大和國添上郡藏寶山サヤコヲシ雍良岑造竈火葬莫改他處。謚號稱其國其郡朝廷馭宇天皇流傳後世云々。庚寅又詔曰。喪事所須一事以上。准依前勅勿致闕失。其輜車靈車駕之具。不得刻鏤金玉繪飾丹青。素薄是用卑謙是順。仍丘體無鑿就山作竈。艾棘開場即爲喪處。又其地者。皆殖常葉之樹。卽立刻字之碑。己卯。崩于平城宮中安殿。時春秋六十一。庚辰。從二位長屋王。從三位藤原朝臣武智麻呂等。行御裝束事。從三位大伴宿禰旅人。供營陵事。乙酉。太上天皇葬於大和國添上郡椎山陵。不用喪儀。由遺詔也。

●多武峯緣起(抄錄)

定慧和尚者。中臣連一男。實天萬豐日天皇(孝德)皇子也。大化元年乙誕生。請沙門慧隱爲出家師。齊明天皇被修仁王會之日。賜和尚號。父中臣連潛告云。和州談峯勝絕之地也。東伊勢高山。天照大神防護和國。西金剛山。法喜菩薩說法利生。南金峯山。大權薩埵待慈尊出世。北大神山。如來垂跡拔濟黎民。中談峯神仙靈

崛。豈異五臺。點墓所於此地。子孫昇大位。和尚聞斯言。爲拜五臺。天智六年丁卯入唐。

定慧和尚。在唐時夢云。吾身忽居談峯。父大臣告言。吾今上天。汝此地建寺塔修淨業。吾降神當嶺。擁護後葉流布釋教。

定慧和尚。爲起塔婆先公墳墓之上。攀登清涼山。移取寶池院十三重塔。以靈木一株或云栗木云々爲其材木。

定慧和尚。調儲十三重塔材木瓦等欲歸朝處。依乘船狹。一重之具留棄渡海。

定慧和尚歸朝。謁弟右大臣不比等。問言。大織冠聖靈御墓所何地哉。答。攝津國島下郡阿威山也。和尚言。平生有約契。卽具大織冠御約言并在唐間夢狀。大臣聞之信伏。稽首涕泣不已。

和尚引率廿五人。參阿威山墓所。掘取遺骸手自懸頸。卽落淚言。吾是天萬豐日天皇太子。宿世契爲陶家子。役人荷土。共攀登談峯。

和尚攀躋談峯。奉瘞御骨其上起塔。歎言。材瓦不備所願何遂。漸及十二重歎息無措。夜半雷電霹靂。大雨大風。忽然天晴。明朝見之。材瓦積重形色無異。知飛來也。和尚感然伏地。見聞奇異。

大織冠聖靈。降神當嶺以來。氏長者并一門重臣。若本所怪所。當有凶事之時。陵山鳴動異光顯現。或時其光遠至三笠山。或時彼山同發光云々。

●元亨釋書卷九感進篇

釋定慧。大織冠之長子也。初孝德帝有妃。孕已六月。大織冠寵遇厚。賜妃爲夫人。約曰。所生兒若男爲卿子。女爲朕子。旣而生慧。故名以鎌子之子。投沙門慧隱出家。白雉四年。隨遣唐使浮海。乃到長安城。高宗永徽

四年也。師慧日寺神泰。習學殆十歲。調露元年。伴百濟使而至。白鳳七年九月也。慧在唐。大織冠已薨。慧問弟承相不比等曰。先墳何處。對曰。攝州阿威山。慧曰。先公昔潛詣曰。和州談岑今曰多武峯。靈勝之區。不下大唐五臺。我若墓彼子孫益昌。我在臺山也。夢我身居談岑。先公告曰。吾已生天。汝於此地。營寺塔修佛乘。吾亦降此擁護後昆。時己巳歲十月十六夜二更也。丞相聞已涕泣曰。先君之薨。實某年月日也。師夢不徒也。慧與徒屬上阿威山。取遺骸改葬談岑。就上構十三層塔。其材慧在唐時。皆悉辨備。及歸載材於船。舶窄餘一層。其塔模清涼山寶池院塔也。既而營建只十二層。慧怨一層之留唐而造式不全。一夕奔雷飛電。風雨震山。黎明天晴。遺餘塔材宛然飛來。又無贏缺。僕射州民莫不感嘆。僕射又刻文殊師利像安塔中。慧和銅七年化。

近江鯉與鰐戰語 第卅六

今昔近江ノ國志賀ノ郡古市ノ郷ノ東南ニ心見ノ瀬有リ郷ノ南ノ邊ニ勢多河有リ其ノ河ノ瀬也其ノ瀬ニ大海ノ鰐上テ江ノ鯉ト戰ケリ而ル間鰐戰負バズ返リ下テ山背ノ國ニ石ト成テ居ヌ鯉ハ戰ヒ勝スレ江ニ返リ上テ竹生島ヲ繞キテ居ヌ此ノ故ニ心見ノ瀬ト云フ也ケリ彼ノ鰐ノ石ト成ト云フハ今山城ノ國ニ郡ノニ有ル此レ也彼ノ鯉ハ于今竹生島ヲ繞テ有トゾ語リ傳ヘタ心見ノ瀬ト云ハ勢多河ノノ瀬也トナ語リ傳ヘタトヤ

◎伊呂波字類抄卷二諸社部

竹生島在近江國云々。爰海龍感來。廻島七匝。蟠繞鎮島。首尾相咋。每其一匝一神顯生。住於八方。今之大神及七所神子是也。又此島有大鯨。長千丈也。纏島數廻。首尾相咋。又有一蛇。長數丈也。從宇治川登。到居

此島上云々。

近江國栗太郡大柞語 第卅七

今昔近江ノ國栗太ノ郡ニ大柞ハハソノ樹生タリ其ノ圍五百尋也然レバ其ノ木ノ高サ枝ヲ差タル程ヲ思ヒ可レ遣シ其ノ影朝ニハ丹波ノ國ニ差シ夕ニハ伊勢ノ國ニ差ス霹靂スル時ニモ不レ動ズ大風吹ク時ニモ不レ搖ズ而ル間其ノ國ノ志賀栗太甲賀三郡ノ百姓此ノ木ノ蔭ニ覆レテ日不レ當ザル故ニ田畠ヲ作得ル事无シ此レニ依テ其ノ郡々ノ百姓等天皇ニ此ノ由ヲ奏ス天皇即チ掃守ノ宿禰□□等ヲ遣テ百姓ノ申スニ隨テ此ノ樹ヲ伐リ倒ケリ然レバ其ノ樹伐リ倒シテ後百姓田畠ヲ作ルニ豐饒ナル事ヲ得ケリ彼ノ奏ルシタ百姓ノ子孫于今其ノ郡々ニ有リ昔ハ此ル大柞キナ木ナム有ケル此レ希有ノ事也トナ語リ傳ヘタトヤ

○古風土記逸文考證卷七

筑後國風土記云。三毛郡云々。昔者棟木ヒトツクノキ一株。生於郡家南。其高九百七十丈。朝日之影。蔽肥前國藤津郡多良之峯。暮日之影。蔽肥後國山鹿郡荒爪之山云々。因曰御木國。後人訛曰三毛。今以爲郡名釋日本紀卷十。九百七十丈は木の長なり。凡そ今の二十八町ばかりにもやあたるべし。かゝる大木、古は諸國にありしとみゆ。古事記仁德に、此之御世。兎寸河之西。有一高樹。其樹之影。當旦日者。逮淡道島。當夕日者。越高安山。故切是樹以作船。其捷行之船也。時號其船。謂枯野云々。また播磨風土記に、明石驛家駒手御井者。難波高津宮天皇之御世。楠生於井口。朝日蔭淡路島。夕日蔭大和島根。仍伐其楠造舟。其迅如飛。

大柞ノ上目
次及丹本等
伐字アリ

目次近江國
鯉與大海鰐
戰語ニ作ル

繞キハ繞リ
ノ誤カ

楸去越七浪。仍號速鳥云々。また肥前風土記に、佐嘉郡。昔者樟樹一株生於此村。幹枝秀高莖繁茂。朝日之影。蔽杵島郡蒲川山。暮日之影。蔽養父郡草横山也。日本武尊巡幸之時。御覽樟茂榮曰。此國可謂榮國。因曰榮郡。後改號佐嘉郡云々。また今昔物語に云々(本文ヲ引ケリ)と見え、佐々木家記に、天文辛丑六月二日、今日武佐より言上、地の三四尺或一丈下に、木葉枝の朽たるを掘出す。希有の事なりとて、數箇所掘返し見るに皆同じ。其物を獻ぜり。黒く朽たる木の葉の塊りたるなり。屋形カマ義賢佐々木希代の事なりとて、國の舊き日記を見給ふに、其記に云く、景行天皇六十年十月。帝甚有惱事。依之諸天祈病惱。終无其驗。是一覺云有占者。命彼。一覺曰。當國東有大木。此木甚帝有敵。早此木被退治者。帝病惱令平治云々。依之此木伐。每夜伐所木如本成。終无盡。然而彼覺召而問。所伐木屑。每日燒之果盡云。我者彼木敵對葛。數年爭威久。其志帝差向云。即時如搔消失。彼如言行。燒木屑及毎日。終七十餘日彼木倒。此木枝葉九里四方盛。木太數百丈。依之帝病惱平治。即彼木有郡號栗本郡。栗木實不實云々。など見えたるにて、上代には大木の、こゝかしこにありし事知るべし。

◎法苑珠林卷二十八神異篇雜異部

孫綽子曰。海人與山客。辯其方物。海人曰。衡海有魚。額若華山之頂。一吸萬頃之波。山客曰。鄧林有木。圍三萬尋。直上千里。旁蔭數國。有人曰。東極有大人。斬木爲策。短不可杖。鈎魚爲鮮。不足充脯。

◎三國傳記卷三江州栗太郡事

和ニ云ク、近江國栗太郡ト申スハ、栗ノ木一本ノ下ナリケリ。枝葉繁榮シテ、梢天ニ覆ヘリ。秋風西ヨリ吹ク時ハ、伊勢國マデ菓落ツ。七栗ト云所ハ其故也。又此木ノ隱、遙ニ若狹國ニ移ル間、田畠作毛ノ不熟ニ因テ、彼ノ國ノ訴誣有テ、此樹ヲ切ル。此木ハ天竺栴檀ノ種ヨリ生ジタル故ニ、西木ト書リ。銚鉄ヲ持シテ彼ノ木ヲ截レドモ、切口夜ハ愈合ケリ。然間、自國他國ノ輩奇異ノ思ヲ成テ、柚人ヲ集メ、毎日ニ是ヲ切レドモ、連夜元ノ樹ト成ル。其故ハ、此栗ノ木ハ樹木ノ中ノ王タルニ依テ、諸草木夜々訪ヒ來テ、櫛ヲ取テ合セ付ケケル故ナリ。秋來レバ一葉落テ、春至テ百花開ク。ナドカハ心ノナカルベキ。爰ニ一草、蔓ト云物訪ヒ來ル由ヲ云ケレバ、草木ノ數ドモ、思ハヌ物ノ推參スル事、奇怪トテ追返シケリ。仍テ此蔓腹ヲ立テ、同ジ國土ニ栖ミナガラ、侮ラレケルコソ口惜ケレト嘆リ。人々ノ夢ニ示シケルハ、此大木ヲ切頭シ給フベキナラバ、櫛火ニタキ給ヘ。不然バ、千草萬木夜々切目ヲ合テ差ス故ニ、此木顛倒スル事アルマジト語ル。諸人相談話シテ教ノ如クスルニ、無レ程此木倒レニケリ。其梢湖水ノ汀ニ到ル、今ノ木濱ト云所也。アナドル蔓ニ倒レスルトハ、此謂ナルベシ。

附

錄

本文補遺	一
攷證補遺	四
難訓字解	七
索引	八

本文補遺

異本今昔物語(抄)

卷第二

波羅奈國大臣願子語 第(廿五)

今昔天竺ノ波羅奈國ニ一人ノ大臣有リ家大ニ富テ財寶豊カ也而ニ此ノ人子有ル事无シ此ニ依テ晝夜朝暮ニ子无キ事ヲ歎キ悲ムト云ヘド子ヲ儲ル事无シ其ノ國ニ一ノ社有リ摩尼拔陀天ト云フ國ノ内ノ人舉リ詣テ心ニ願フ事ヲ祈リ申ス社也大臣子无キ事ヲ思ヒ惱ヒテ其ノ社ニ詣テ白テ言サク我レ子有ル事无シ願クハ天我ガ願ヲ滿給ヘ若シ子ヲ給ハラ金銀等ノ寶ヲ以テ天ノ宮ヲ莊嚴シ又香キ香藥等ヲ以テ御身ニ可レ塗シ又子ヲ不レ給ズバ此ノ社ヲ壞テテ廟ノ内ニ投入ムト誠ノ心ヲ致シテ禮拜シテ申ス其ノ時ニ天神聞驚テ此ノ人ノ爲ニ子ヲ求ム此ノ大臣ハ極テ止事無人ノ家无レ限富メリ其ノ家ニ子ト成テ可レ生キ人ヲ求ム更ニ難ニ求得レシ求メ煩ヒテ毗沙門天ノ御許ニ詣テ此ノ由ヲ申ス毗沙門天ノ宣ハク我レ更ニ力不レ堪□大臣ノ子ト可レ成人求得難シ然レバ帝釋宮ニ可レ申キ事也トテ忽チ忉利天ニ登テ毗沙門帝釋ニ申給ハク閻浮提ノ波羅奈國ニ一人ノ大臣有リ子无キニ依テ子ヲ願ガ爲ニ摩尼拔陀天ニ祈ル天神子ヲ給ニ不能テズシ毗沙門天ノ所ニ來テ申ス天王又求メ得ル事不能シテ帝釋ニ申也帝釋此ノ申ス所ノ事ヲ次第ニ具ニ聞給キ既ニ五衰現ハレ死ナム爲ル天人ヲ見給テ召テ宣フ様汝デ既ニ命終トス彼ノ大臣ノ子ト成テ願ヲ滿トヨ天人

答テ云ク彼ノ大臣ハ富无レ並キ人也彼ノ家ニ生ナバ樂ニ耽テ道心失ナム帝釋ノ宣ハク彼ノ家ニ生レタリ我レ助ケテ道心ヲ不レ失セジ天人帝釋ノ強テ勸メ給フニ依テ大臣ノ家ニ生ズ大臣形佛ノ如ナル男子ヲ儲テ喜コト无限シ名ヲバ
 〔ト名タリ父母手ニ捧テ養ヒ傳ク間漸ク勢長シヌ道心殊ニ深クシテ〕父母ニ申サク我ニ出家ヲ免シ給ヘ此レ本ノ深キ心也ト父母此ノ事ヲ聞テ答テ云ク我レ又子无シ汝チ只一人也家ヲ繼ガ爲ニ出レ可レ免ズト爰ニ
 〔彌ヨ道心深クシテ思ヘク我レ早ク死テ道心ノ家ニ生テ本意ノ如ク佛ノ道ニ入ラム不レ如ジ此ノ身ヲ捨テ、早ク死ナムニ思ヒ得テ密ニ親ノ家ヲ出テ山ニ入テ遙ニ高キ巖ノ上ニ登テ身ヲ投ルニ底ニ落タリ云モ〕身ニ疵无クシ痛キ所无シ又大ナル河ノ邊ニ行テ深キ淵ノ底ニ落入ヌ然レド死ヌル事无シ又毒ヲ取テ食ニ毒氣ニ身ヲ不レ犯ズ如レ此ク様々ニ死ナム爲ルニ身破ル事无シ然レバ思ヘク我レ公ノ物ヲ盜取ラム然ラバ事顯ハレ煞サレナ思テ阿闍世王ノ諸ノ采女ヲ引將テ蘭池ノ邊ニ行テ遊戯スル所ニ行テ
 〔密ニ蘭ノ内ニ入テ此ノ采女ノ脱ギ散シ置タル嚴レル衣ヲ懷キ取テ出ル時ニ守護ノ人此ヲ見テ〕
 ナ捕ヘテ王ノ前ニ將行テ此ノ由ヲ申ス王大ニ忿テ弓ヲ取テ自ラ
 〔ヲ射ル其ノ箭〕ノ身ニ不當ズシ更ニ返テ王ノ方ニ向テ落ツ如レ此ク三度射ルニ毎度ニ箭王ノ方ニ向テ落ツ其ノ時ニ王恐怖テ弓箭ヲ捨テ、
 〔ニ問テ云ク汝ハ此レ天龍カ鬼神カト〕ノ云ク我レ天龍ニ非ズ鬼神ニ非ズ波羅奈國ノ輔相ノ大臣ノ子也出家ノ志有ニ依テ父母ニ出家ヲ乞ニ敢テ免ヌ事无シ然レバ思ヘク速ニ死テ道心ノ家ニ生レテ本意ヲ遂ムニ不レ如ジト思テ如ハ巖ニ登テ身ヲ投ゲ深キ河ニ沈ミ次ニハ毒ヲ吞ニ不レ死ズ今ハ思ヘク王法ヲ犯サバ速ニ煞サレナ思テ取レル所ノ衣也。陳ブ王此ノ事ヲ聞テ悲ビノ心深ク速ニ出家ヲ免ヌ仍テ王又佛ノ御許ニ將詣テ具ニ此ノ由ヲ申ス佛
 〔出家メ給テ〕勤行レ阿羅漢ト成ヌ阿闍世王佛ニ白テ言サク
 〔何ナル福ヲ殖テ巖ニ身ヲ投ゲ水ニ沈ミ毒ヲ食ヒ箭ヲ放ツニ皆身不レ被

レ破ズ又世尊ニ參遇テ速ク徳ヲ得ト佛王ニ告テ宣ハク汝チ善ク聞ケ乃往過去ノ无量劫ノ中ニ一ノ國有リキ波羅奈國ト云キ其ノ國ニ王有キ名ヲバ法摩達ト云キ其ノ王諸ノ官人ヲ引將テ林中ニ行テ遊戯シキ諸ノ采女共有テ妓樂歌詠シキ歌詠セシ中ニ一人ノ高キ音有テ此レニ交フ王此ノ音ヲ聞テ大ニ忿テ此ノ人ヲ令レ捕テ使テ遣テ此ヲ令レ煞ムト其ノ時ニ一人ノ大臣有リ今外ヨリ來テ此ノ人ノ被レ捕テ見テ云ク此レ何ニ依テゾ諸ノ人其ノ故ヲ答フ大臣聞畢テ王ニ申テ申サク此ノ人ノ罪犯不レ重ズ然レバ其ノ命ヲ亡ボシ給フ事无ト爰ニ王此ノ人ヲ免シテ命ヲ亡ボス事ヲ止ツ既ニ大臣ノ爲ニ死テ遁ル、事ヲ得ツ此レニ依テ其ノ後大臣ニ仕ヘテ數ノ年月ヲ經ヌ其ノ人自ラ思ハク我レ善ク欲ノ心深クレ采女ノ音ニ高キ音ヲ加タリ既ニ
 〔ノ爲ニ害セラレヌ欲ノ爲也此ノ由ヲ大臣ニ申テ出家セム〕乞フ大臣答テ云ク我レ汝ニ不レ違ジ速ニ本意ノ如ク出家シテ佛道ニ入テ法ヲ學ビヨ若シ返リ來ラバ我ヲ見ヨト即チ此ノ人山ニ入テ專ニ妙理ヲ思テ正法ヲ修習シテ辟支佛ト成城ニ返リ來テ大臣ニ見ユ大臣又見畢テ大ニ歡喜シテ供養ス此ノ辟支佛虛空ニ昇テ十八變ヲ現ズ大臣此ヲ見テ誓願シテ云ク我ガ恩ニ依ルガ故ニ命ヲ免ル事ヲ得ツ我レ生々世々ニ福德長命殊勝テ世々ニ廣ク衆生ヲ度セム事佛ノ如クナラ誓ヒキ彼ノ時ノ大臣一人ノ命ヲ助ケテ遁ル、事ヲ令レ得タル今ノ
 〔此レ也此ノ因縁ニ依テ生ル、所ニハ中天ニ不當ズ法ヲ學ビテ速ク道ヲ得ル也ト説キ給フ也ナム〕語リ傳ルトヤ

前生持不煞生或人生二國王語 第(廿六)

今昔天竺ニ國王有リ子有ル事无レ然レバ佛神ニ祈請シテ子ヲ儲ケム事ヲ願フ程ニ后懷妊シヌ月滿テ子ヲ生ゼリ端嚴美麗ナル男子也國王喜ブ事无限シテ傳キ養フ程ニ國王ノ御行有リ后皇子モ皆相具セリ大ナル河ヲ渡ル間此ノ生

タル皇子ヲ取リハヅシテ此ノ河ニ落シ入ッ國王ヨリ始テ騒ギ求ト云モヘド底キモ不レ知ズ深キ河ナレ求メ出キ様モ无レ國王哭キ悲ムト云モ甲斐无クテ都ニ返リヌ惣テ思ヒ止ム時モ无ク戀ヒ悲ビ歎ク事无レ並シサテ此ノ皇子ハ落入リケ即チ大ナル魚吞リテケマ、魚深キ河ノ底ヨリ下ニ遣ニ走リ下リヌサテ隣國ノ境ノ内ニ入ヌ其ノ國ノ人漁捕スル所ニ行キ會テ捕レヌ大ナル魚捕得ト喜テ即チ俎ニ魚ヲ置テ作ラヌ先ヅ腹ヲ割ニ腹ノ中ニ音有テ云ク此ノ腹ノ中ニ我レ有リ刀深ク入レテ不レ可割ズ心知ラヒ可割シト魚作ル者此ノ音ヲ聞テ驚キ怪テ傍ノ人々ニ此ノ事ヲ告テ心シラ剝ギ開テ押レ開キテ見レバ端王美麗ナル男子丸ビ出タリ見ル者奇異ノ思ヲ成スト云モヘド端止ナル依テ乍レ喜ラ懷キ上ゲテ湯ヲ沐テ見ルニ只人ト不見エズ其ノ邑ノ者有限リ來リ集テ見騒グ事无限シ而ル間ダ其ノ國ノ王此ノ事ヲ傳ヘ聞テ兒ヲ召シテ見ルニ端嚴美麗無比ナシ國王自ラ思ハク我レ子无クシ位ヲ可レ繼キ様无シ然レバ佛神ニ祈請シテ子ヲ儲ケム事ヲ願ルニ今我が國ニ内ニカ、ル者出來レリ定メテ知ヌ此レ我が位ヲ繼ガ爲ニ佛神ノ給タル者也況ヤ者ノ體ヲ見ルニ更ニ只者ニ非ズト喜テ忽ニ御子ノ宮ニ立テ傳ク事无レ並シサテ彼ノ子ヲ流シテ國ノ王此ノ事ヲ自然ニ傳ヘ聞テ思ハク其レハ定メテ我が子ヲム河ニ落テ入マニ魚ノ吞ラケ也ト思テ其ノ王ノ許ニ此ノ由ヲ云テ乞ニ遣ル今ノ王答テ云ク此レ天道ノ給ヘル子也更ニ不レ可遣ズト如此ク云ツ、互ニ諍フ程ニ隣國ニ止事无キ大王在マヌ二ノ國共ニ此ノ大王ニ隨ヘリ此ニ依テ二國ノ王共ニ其ノ大王ニ訴ヘテ彼ノ御定メニ可レ依シト云フ大王定メテ云ク二ノ國ノ王ノ各訴フル所皆理也然レバ一人ノ王可レ得シト難レ定シ只二ノ國ノ境ニ一ノ城ヲ造テ其ノ城ニ此ノ御子ヲ居ヘテ二人ノ王各國ノ太子トシ皆祖ニテ養ヒ傳クベ二人ノ國王此ノ事ヲ聞テ共ニ可レ然ト喜テ定マニ共ニ我が國ノ太子トシ各傳キ護ケリ後ニ二ノ國ニノ王ニ即チ二國ヲ領知リ佛ケ此ノ事ヲ見給テ説テ宣ハク此ノ人前ノ世ニ人ト生レテ有シ時キ五戒ヲ

持タム思ヒキ然而五戒ヲ不レ持ズシ只不煞生ノ一戒ヲ持ル依テ今中天ニ不レ値ズシ命ヲ持ツ事ヲ得テ遂ニ二ノ國ノ王ト成テ二ノ父ノ財寶ヲ傳ル也ト何況ヤ五戒ヲ持タム人ノ福德无レ限シト説ケルト語リ傳ヘタトヤ

天竺神爲鳩留長者降甘露語 第(廿七)

今昔天竺ニ一人ノ長者有リ鳩留ト云フ五百人ノ商人ヲ引キ具シテ商ノ爲ニ遠キ國ニ行ク間途中ニシ糧盡テ皆疲レ臥ヌ長者思ヒ煩ヒテ見廻スニ遙ニ人ノ栖カ離タル所也山邊ニ盛ナル林有リ若シ人郷カト思ヒテ近ク寄テ見レバ人郷ハ非テ神ノ社也寄テ社ヲ見レバ神在マヌ長者神ニ申テ云ク我レ五百人ノ人ヲ引具シテ遠キ道ヲ行ク間糧盡テ既ニ餓死トス神慈悲ヲ以テ我レヲ助ケ給ヘ其ノ時ニ神手ヲ指シ延ベテ指ノ崎ヨリ甘露ヲ降ス長者其ノ甘露ヲ受テ服ニ忽ニ餓ヘノ苦ビ皆止テ樂シキ心ニ成ヌ其ノ時ニ長者又神ニ申サク我レ甘露ヲ服シテ餓ノ心皆止ニタ然レド其ノ具シタ五百人ノ商人同ジク餓臥シテ皆死トス彼等ガ苦ビヲ助ケ給ヘト神又五百人ノ商人等ヲ召テ手ヨリ甘露ヲ令レ降テ各皆服セシ給フ商人等甘露ヲ服シテ皆餓ノ心止テ本ノ如ク力付テ同心ニ神ニ白テ言サク神何ナル果報在マシ手ヨリ甘露ヲ令レ降メ給フ神答テ宣ハク我レ昔迦葉佛ノ世ニ人ト生レテ鏡ヲ磨テ世ヲ過ス人ト有リキ而ニ乞食ノ沙門道ニ遇テ何カ富メル家ト問ヒシ我レ手ヲ以テ富人ノ家ヲ彼ノ富メル家ト指テ差テ教キ其ノ果報ニ依テ今手ヨリ甘露ヲ降ヌ報ヲ得タル也ト鳩留此ノ事ヲ聞畢テ歡喜シテ家ニ返ヌ其ノ後千人ノ僧ヲ請ジテ供養シケ此レ佛在世ノ時ノ事也佛如レ此クナ説給ケルト語リ傳ヘタトヤ

流離王煞釋種語 第(廿八)

今昔天竺ノ迦毗羅衛國ハ佛ノ生レ給ヘル國也佛ノ御類皆ナ其ノ國ニ有リ此ヲバ釋種ト名ケテ其ノ國ニ人ニ勝レテ家高キ人ト爲ル此レ也物テ五天竺ノ中ニハ迦毗羅國ノ釋種ヲ以テ止事无キ人トス其ノ中ニ釋摩男ト云フ人有リ國ノ長者トシ智惠明了ナル事无限シ然レバ此ノ人ヲ以テ國ノ師トシ諸ノ人物ヲ習フ其ノ時ニ舍衛國ノ波斯匿王數ノ后有リト云モト云ヘド迦毗羅衛國ノ釋種ヲ以テ后ト爲ムト思テ迦毗羅衛國ノ王ノ許ニ使ヲ遣テ云ク此ノ國ニ數ノ后有リト云モト皆下劣ノ輩也釋種一人ヲ給テ后ト爲ムト迦毗羅衛國ノ王此ノ事ヲ聞テ諸ノ大臣及ビ賢キ人ヲ集メテ議シテ云ク舍衛國ノ波斯匿王迦毗羅國ノ釋種ヲ得テ后ト爲ムト申タリ彼ノ國ハ此ノ國ヨリ下劣ノ國也譬レ后ニ爲ムト云モト何カ其ノ國ヘ遣ラム然レド不レ遣ズバ彼國威勢有ル所ナレ來テ責ムニ更ニ可レ堪キニ非ズト議シ定メ煩フ程ニ一人ノ賢キ大臣ノ云ク釋摩男ノ家ノ奴婢某丸ガ娘形貌端正也其ヲ釋種ト名付ケテ遣サム何ゾト大王ヨリ始メ諸ノ大臣此レ吉キ事也ト定シ仍テ彼ノ奴婢ノ娘ヲ立テ、此レ釋種ト云テ遣シッ舍衛國ノ波斯匿王此ヲ受ケ取テ見ルニ端正美麗ナル事无限シ其ノ國ノ數ノ后ヲ校スル此ハ可レ當キニ非ズ然レバ王此ヲ傳ク事无限シ名ヲバ末利夫人ト云フカ、ル程ニ二人ノ子ヲ生ズ其ノ子八歳ニ成ルニ心聰敏ナレ迦毗羅衛國ハ母后ノ本ノ國バ陸ジ又智惠モ他國ニ勝レタ其ノ中ニ釋摩男ト云フ者有ナリ智惠明了ニシ福德殊勝也聞ケバ瓦石モ彼レガ手ニ入レバ金錢ト成リ然レバ國王ノ大長者ト成シ又國ノ師トシ諸ノ釋種此レニ隨テ物ヲ習フ國ニハ此レ彼レト等シキ者无シ又汝モ同ジ釋種バ行テ彼レニ可レ習キ也ト云テ出シ立テ遣ル大臣ノ子ノ同程ナル副ヘテ遣ス彼ノ國ニ行キ至テ見バ城ノ中ニ一新ク大ナル堂有リ其ノ内ニ

釋摩男ガ座横ニ高ク立タリ其ノ向ニ諸ノ釋種ノ物習フ座ヲ立タリ其ヨリ去テ釋種ニ非ヌ諸ノ人ノ物習フ座ヲ立並ベタ其ノ時ニ波斯匿王ノ子名ヲバ流離太子ト云ク釋種座ニ我レモ釋種也ト思テ登ヌ諸ノ人此ヲ見テ云ク彼ノ座ハ諸ノ釋種ノ大師釋摩男ニ向テ物習ヒ給フ座也君ハ波斯匿王ノ太子也ト云ヘド此ノ國ノ奴婢ノ娘ノ子也何デカ忝ク此ノ座ヲ穢ギト云テ追下シッ流離太子此レ極タル恥也ト思ヒ歎ク此ノ具シタ大臣ノ子ニ語テ云ク此ノ座ヨリ追ヒ下サル事本ノ國ニ更ニ不可レ令聞ズ我レ若シ本國ノ王ト成ム時此ノ諸ノ釋種ヲ可レ罰也其ノ前ニ此ノ事口ノ外ニ不可レ出ズト契リ固メテ本國ニ返ヌ其ノ後波斯匿王死ヌ流離太子國ノ王ト即ヌ此ノ具シタ大臣ノ子大臣ニ成ヌ名ヲバ好苦ト云フ流離王好苦ニ相語テ云ク昔シ迦毗羅衛國ニ語ヒシ所ノ事今ニ不□□今釋種ヲ罰チニ彼ノ國ニ可ニ行向ニキ也ト云テ國ノ兵數不レ知ズ發シテ迦毗羅衛國ニ行向フ其ノ時ニ目連此ノ事ヲ聞テ佛ノ御許ニ念ギ參テ言サク舍衛國ノ流離王釋種ヲ煞ガ爲ニ數不レ知ヌ兵ヲ具シテ此ノ國ニ超ヘ來ル多ノ釋種ハ皆被レ煞ナムト佛ノ宣ハク可レ被レ煞キ果報ヲバ何ガ爲ム我レ力不レ及ズト佛流離王ノ來ト爲ル跡邊ニ行向ヒ給テ枯タル樹ノ下ニ坐給ヘリ流離王軍ヲ引將テ迦毗羅城ニ入ラム爲ルニ遙ニ佛ノ獨リ坐給ヘル見奉リテ車ヨリ念ギ下テ禮シテ佛ニ白テ言サク佛何ノ故ニ枯タル樹ノ下ニ坐給ゾト佛ノ宣ハク釋種ノ可レ亡ケル其レニ依テカ、ル枯タル樹ノ下ニ坐スル也ト流離王佛ノ如レ此ク宣フニ憚テ軍ヲ引テ本國ニ返ヌ佛モ靈鷲山ニ返リ給ヌ其ノ後程ヲ經テ□苦梵流離王ニ申サク尙此ノ釋種ヲ可レ被レ罰也ト王此ノ事ヲ聞テ更ニ兵ヲ集メテ本ノ如ク迦毗羅城ニ趣ク其ノ時ニ目連佛ノ御許ニ詣テ言サク流離王ノ軍又可レ來シ我レ今流離及ビ四種ノ兵ヲ他方世界ニ擲グ着ムト佛ノ宣ハク汝チ釋種ノ宿世ノ報ヲバ豈ニ他方世界ニ擲グ着ムヤ目連ノ云ク實ニ宿世ノ報ヲバ他方世界ニ擲グ不堪ズト目連又佛ニ白テ言サク我レ今此迦毗羅城ヲ移シテ虛空ノ中ニ

着ムト佛ノ宣ハク釋種ノ宿世ノ報チバ虚空ノ中ニ着ムヤ目連ノ云ク宿世ノ報チバ虚空ニ着ムニ不堪ズト又言サク我
 レ鐵ノ籠ヲ以テ迦毗羅ノ上ニ覆トハム佛ノ宣ハク[]ノ報豈ニ鐵ノ籠ニ被レ覆ヤ目連ノ申サク宿世ノ報チバ[]不
 レ堪ズ又申サク我レ釋種ヲ取テ鉢ニ乗セテ虚空ニ隱ニ何ゾト佛ノ宣ハク宿世ノ報チバ虚空ニ隱ニ難レ遁トテ御頭
 ナ痛ムテ臥給ヘリ流離王及ビ四種ノ兵迦毗羅城ニ入ル時ニ諸ノ釋種城ヲ固メテ弓箭ヲ以テ流離王ノ軍ヲ射 流離
 王ノ軍釋種ノ箭ニ不當ズト云フ事無し皆倒レ臥シヌ然レド死ヌル事ハ无レ此ニ依テ流離王ノ軍憚ヲ成シテ責メ寄ル
 事无レ時ニ好苦梵志流離王ニ申サク釋種ハ皆兵ノ道ニ極タリ云ヘド戒ヲ持タル者ナレ虫ヲソ不レ害ズ況ヤ人ヲ煞ス事
 ナヤ然レバ實ニハ不レ射ザル也仍テ不レ憚ズ可レ責シト軍此ノ語ヲ聞テ不レ憚ズ責メ寄ル時ニ釋種防グ事无クシ皆引テ
 城ノ内ニ入ル其ノ時ニ流離王城ノ外ニ在テ云ク汝等速ニ城ノ門ヲ開ケ若不レ聞ズ數[]盡シテ可レ煞シト時ニ迦毗羅
 城ノ中ニ一人ノ釋種ノ童子有リ年十五也名ヲ奢摩ト云フ流離王ノ城ノ外ニ在テ聞テ鎧ヲ着弓箭ヲ以テ城ノ上ニ
 至テ獨リ流離王ト戰フ童子多ノ人ヲ煞シテ皆馳散ジテ逃ヌ王恐ル、事无レ限シ諸ノ釋種ハ此ヲ聞テ奢摩ヲ呼テ云ク
 汝チ年少シ何ノ故ニ我等ガ門徒ニ背ゾ不レ知ズヤ釋種ハ善法ヲ修行シテ一ノ虫ニ不レ煞ズ何況ヤ人ナヤ此故ニ汝チ
 速ニ出去ネト此ニ依テ奢摩即チ城ヲ出テ去ヌ流離王ハ尚門ノ中ニ在テ速ニ可レ開シト云フ其ノ時ニ一ノ魔有テ釋種ノ
 形ト成テ云ク汝等[]速ニ城門ヲ開ケ戰[]无カレ然レバ釋種城門[]ノ時ニ流離王云ク此ノ釋種極
 テ多シ刀劍ヲ[]害セム不レ能ズ馬ヲ以テ可レ踏煞シト群臣ニ仰セテ踏煞サセ 王又群臣ニ云ク面貌端正ナラ 釋種
 ノ女五百人ヲ撰テ可レ將來ニシト群臣王ノ仰ニ依テ端正ノ五百ノ女人ヲ王ノ所ニ將詣タリ王釋女ニ云ク汝等恐レ歎
 ク事无カレ我レハ此レ汝等ガ夫也汝等ハ此レ我が妻也ト云テ一人ノ端正ノ釋女ニ向テ持ル時ニ女ノ云ク大王此レ何

事ニ依テ王ノ云ク汝ト通ゼム欲ソト女ノ云ク我レ今何ノ故ニカ釋種トシ奴婢ノ生ゼル王ト通ゼム時ニ王大ニ瞋恚ヲ
 發シテ群臣ニ仰セサ此ノ女ノ手足ヲ切テ深キ坑ノ中ニ着ツ又五百ノ釋女皆王ヲ罵テ云ク誰カ奴婢ノ生ゼル王ト交通
 セム王彌ヨ瞋テ悉ク五百ノ釋女ノ手足ヲ切テ深キ坑ノ中ニ着ツ其ノ時ニ摩訶男王ニ向テ云ク我が願ニ隨ヒ給ヘト王ノ
 云ク何事ヲ思フゾ摩訶男ノ云ク我レ火ノ底ニ沒マム我が遲疾ニ隨テ諸ノ釋種ヲ放テ逃シ給ヘト王ノ云ク願ヒニ可レ隨
 シト釋摩男水ノ底ニ入テ頭ノ髮ヲ樹ノ根ニ繫テ死ヌ其ノ時ニ城ノ中ノ諸ノ釋種或ハ東門ヨリ出テ南門ヨリ入ル或ハ南
 門ヨリ出テ北門ヨリ入ル時ニ王群臣ニ云ク何ノ故ニ摩訶男水ノ中ニ有テ不レ出ゾト群臣ノ云ク摩訶男ハ水ノ中ニ死
 タリ王摩訶男ノ死タル見テ悔ル心有テ云ク我が祖父既ニ死タリ皆親族ヲ愛スル故也ト流離王ノ爲ニ被レ煞ル、釋種
 九千九百九十九人也或ハ土ノ中ニ埋ミ或ハ馬ノ爲ニ踏ミ煞ス其ノ血流レテ池ト成レリ城ノ宮殿チバ皆悉ク燒失シツ
 其ノ後流離王軍ヲ引テ本國ニ返ヌ目連ノ鉢ニ乗セテ虚空ニ隱シ釋種ヲ取下シテ見レバ鉢ノ内ニ皆死テ一人生タル者
 无シ佛ノ果報也可レ免キ事ニ非ズト宣シ遠フ事无シ佛ノ宣ハク流離王及ビ兵衆今七日有テ皆死ヌト王此ノ事ヲ聞テ
 恐怖テ兵衆ニ告グ好苦梵志王ニ申サク大王恐レ給フ事无カレ外境ニ忽ニ難无シ又災不レ發ズト王此ノ事ヲ聞テ爲
 ニ阿脂羅河ノ側ニ行テ群臣姪女ヲ引具シテ娛樂遊戯スル間俄ニ大ニ雷震暴風疾雨出來テ王ヨリ始テ若干ノ人皆水
 ニ湮テ死ヌ悉ク阿鼻地獄ニ入ヌ又天ヨリ火出來テ城内ノ宮殿皆燒ヌ被レ煞ル釋種ハ皆天ニ生レヌ戒ヲ持テ依テ
 也其ノ時ニ諸ノ佛弟子ノ比丘佛ニ白テ言サク此ノ諸ノ釋種何ナル業有テ流離王ノ爲ニ被レ煞ル佛ノ宣ハク昔羅閱
 城ノ中ニ魚ヲ捕ル村有キ世飢渴セリ彼ノ村ノ中ニ大ナル池有リ城ノ人民池ノ中ニ至テ魚ヲ捕テ食ヌ水ノ中ニ二ノ魚
 有リ一ヲ拘瓊ト云フ二ヲバ多舌ト云フ二ノ魚相語テ云ク我等此ノ人民ノ爲ニ前世ニ各无シト云ヘド忽ニ此ノ人民

ノ爲ニ被^レ食^トス我等前世ニ少ノ福有^ラズ必ズ此ノ怨ヲ報^シトベ其ノ時ニ村ノ中ニ一ノ小兒有^リ年八歳也其ノ魚ヲ不^レ捕^ズ魚岸ノ上ニ有^ルヲ見^テ興^ジ當^ニ可^レ知^シ其ノ時ノ羅閱城ノ人民ハ今ノ釋種此^レ也其ノ時ノ拘瓊魚ハ今ノ流離王此^レ也多舌魚ハ好苦梵志此^レ也小兒ノ魚ヲ見^テ啖^シハ今我ガ身此^レ也魚ノ頭ヲ打^タレ依^テ今我^レ此ノ時ニ頭ヲ痛^シ釋種魚ヲ捕^シ罪ニ依^テ無數劫ノ中ニ地獄ニ墮^テ苦ヲ受^ク適^ニ人ト生^レテ我^レニ值^フト云^ヘド其ノ報^テ感^ズル事如^レ此シ流離王及^ビ好苦兵衆若干ノ釋種ヲ^セル依^テ阿鼻地獄ニ墮^マト説^給ケリト語^リ傳^ヘトヤ

舍衛國群賊煞迦留陀夷語 第(廿九)

今昔天竺ノ舍衛國ニ一人ノ婆羅門有^リ殊ニ道心有^テ常ニ迦留陀夷羅漢ヲ供養ス婆羅門ニ一人ノ子有^リ父ノ婆羅門死^ヌル時ニ臨^テ子ノ婆羅門ニ語^テ云^フ汝^レ我^レニ孝養ノ志有^ラバ我ガ死^ナム後ニ我ガ如^クニ此ノ大羅漢ヲ供養シ奉^テ努^ムヲ思^フニ[□]无^カレ其ノ詞不^レ終^ルニ即^チ死^ニヌ其後子ノ婆羅門深^ク父ノ遺言ヲ信^ジテ寧^ニ此羅漢ヲ供養シ奉^テ夜ニ歸^依スル事无^限シ而^ル程ニ婆羅門要事有^テ遠^ク行^ト爲^ルニ妻ニ語^テ云^ク我ガ外ニ有^ラム間此ノ大羅漢心ニ入^レテ供養シ可^レ奉^シ努^々乏^キ事令^レ无^ト云^フ置^テ遙^ニ遠^キ所^ヘ趣^ヌ其間此ノ婆羅門ノ妻形貌端正^ニ无^レ限^キ姪女ニテ有^レバ國ノ五百ノ群賊ノ中ニ一人有^テ此ノ婆羅門ノ妻ノ美麗ナル見^テ愛^染ノ心ヲ發^シテ密ニ招^取テ終^ニ其ノ本意ヲ遂^ツ其ノ事^ヲ此ノ大羅漢自然^ニ見^ツ妻有^テ此ノ事ヲ羅漢夫ニ語^ラム事ヲ恐^レテ賊人ヲ教^ヘテ此ノ羅漢ヲ煞^シツ波斯匿王此事ヲ聞^テ云^ク我ガ國ノ内ニ彼貴^ク止事无^カリ證果ノ聖人ノ大羅漢婆羅門ノ妻ノ爲^ニ被^レ煞^レ歎^キ悲^ム大ニ瞋^テ五百ノ群賊ヲ捕^テ手足ヲ切^リ頸ヲ切^テ皆煞^シ弃^ツ婆羅門ノ妻ヲモ煞^シツ家ノ近邊八千餘家ヲ悉^ク亡^シ

失^ツ其ノ時ニ佛ノ御弟子諸ノ比丘此^レヲ見^テ佛ニ白^シテ言^サク迦留陀夷前世ニ何ナル惡^キ作^テ婆羅門ノ妻ノ爲^ニ被^レ殺^レテ如^レ此ノ大事ヲ曳^出シ佛諸比丘ニ告^テ宣^{ハク}迦留陀夷乃往過去无量劫ニ大白在天ヲ祀^ル主ト有^リキ五百ノ眷屬ト共ニ一ノ羊ヲ捕^テ四足ヲ切^テ天ニ祀^リキ其ノ罪ニ依^テ地獄ニ墮^テ无^レ際^ク苦ヲ受^ク其ノ時ニ煞^レシ羊ハ今ノ婆羅門ノ妻此也天ヲ祀^リシ人ハ今ノ迦留陀夷此^レ也昔ノ五百ノ眷屬ハ今ノ五百ノ群賊此^レ也煞^シ生^ノ罪世々ニ不^レ朽^ズ互ニ煞^シ其ノ報^テ感^ズル事如^レ此^シ適^ニ人ト生^レテ今羅漢果ヲ得^{タリ}云^ヘド子^レ今猶惡業ノ殘^レル所ノ罪ヲ感^ゼル也ト説^キ給^トナム語^リ傳^ヘトヤ

波斯匿王煞毗舍離卅二子語 第(三十)

今昔天竺ノ舍衛國ニ一人長者有^リ名^ヲ梨耆彌ト云^フ七人ノ子有^リ皆勢長シテ各夫妻ヲ相具^セリ其ノ第七ノ女子ヲ毗舍離ト云^フ其ノ人心賢^ク智^リ有^リ其ノ故^ヲ聞^テ其ノ國ノ波斯匿王后ト爲^ムト思^テ此ノ人ヲ迎^ヘテ后トシ其ノ後懷^任シヌ月滿^テ卅二ノ卵ヲ生^ゼリ其一ノ卵ノ中ヨリ一ノ男子出^{タリ}各形貌端正^ニ勇健ナル事无^レ限^シ此人一人テ千人ノ力ヲ具^セリ此ノ卅二人各勢長シテ皆國ノ中ノ家ニ高^ク賢^キ人ノ娘ニ娶^テ妻トセカ、ル程ニ毗舍離佛及^ビ比丘ヲ請^ジテ我ガ家ニシ^テ供養シ奉^レリ佛爲^ニ法ヲ説^給フ家ノ人皆法ヲ聞^テ須陀洹果ヲ得^{タリ}此ノ卅二子モ皆果ヲ得^ルガ中ニ最小ノ兒一人未^ダ果ヲ不^レ得^ズ其ノ小兒遊戯^セム爲^ニ馬ニ乘^テ出^ル間國ノ輔相ノ大臣ノ子車ニ乘^テ橋ノ上ニテ此ノ人ニ會^ヌ小兒此ノ人ヲ取^テ橋下ノ漚^中ニ投入^ツ然^レバ車破^レテ大臣ノ子身損^ジ父ノ許^ニ行^テ此ノ由^ヲ語^ル父ノ云^ク彼ノ人ハ力強^ク心武^キ人也汝^レ不^レ可^レ合^ズ但其事ヲ報^ゼム思^ハ密ニ七寶ヲ以^テ馬ノ鞭卅二ヲ作^テ各其ノ

中ニ釵ヲ籠テ怨ノ心ヲ不見セズ彼ノ卅二人ニ與ヘヨ子父ノ教ニ依テ忽ニ此レヲ作テ卅二人ニ與ヘッ卅二人此ノ鞭ヲ得テ大ニ喜テ翫フカクテ此ノ國ノ習テシ王ノ御前ニ人釵ヲ不レ帶セズ其ノ時ニ輔相ノ大臣大王ニ申サク毗舍離ノ子卅二人年壯ニシ力強キ事一人トシ千人ニ當ル心ノ武キ事无限レ此ニ依テ今謀反ヲ發シテ利刀ヲ作テ馬ノ鞭ノ中ニ籠テ王ヲ害シ奉ト構フト讒シケケ王聞給テ此レ實也ト信ジテ此ノ卅二人ヲ計テ皆煞シツサテ卅二人ノ頭ヲ一篋ニ入レテ善ク封ジテ母ノ毗舍離ノ許ヘ送レリ其ノ至テ見テ此レ王ノ許ヨリ供具ヲ訪ヘル也ト思テ忽ニ開カム爲ルヲ佛制シテ開カシ給ハズ飯食既ニ果テ佛爲ニ无常ノ法ヲ説給フ毗舍離此ヲ聞テ阿那含果ヲ得佛返リ給テ後此ノ篋ヲ開テ見ルニ我ガ子卅二人ガ頸ヲ入タリ然リト云ヘド毗舍離果ヲ證セル依テ愛欲ノ心ヲ斷チ此ヲ見テ歎キ悲ム事无シ但云ク人生レテ必ズ死スル事也永ク相副フ事ヲ不レ得ズトカクテ此ノ卅二人ノ妻□親族此ノ事ヲ歎キ悲テ云ク大王故无ク善人共ヲ煞セリ我等必ズ行テ其ノ事ヲ報ゼム云テ衆多ノ兵ヲ集メテ王ヲ討テ王此ヲ聞テ恐テ佛ノ御許ヘ詣テ兵衆其ノ由ヲ開テ引テ祇園精舍ヲ圍ミ遮テ王ヲ伺フ程ニ阿難此ノ兵衆ヲ見テ掌ヲ合セテ問奉テ云ク毗舍利ノ卅二人ノ子前世ニ何ナル果報有テ今王ノ爲ニ煞ゾト佛阿難ニ告テ宣ハク乃往過去ニ此ノ卅二人他人ノ牛一頭ヲ盜テ共ニ牽テ一ノ老女ノ家ニ至ツテ煞トス老女煞具ヲ與ヘテ煞ルニ既ニ刀ヲ下ス時ニ牛跪テ命ヲ乞フト云モ煞ト思フ心盛ニシ不レ許ズシ煞シツ牛死ヌル時誓テ云ク汝等今我ヲ煞セリ我レ來世ニ必ズ此レヲ報ゼム云テ死ヌ卅二人共ニ此ヲ食ヌ老女又食ニ飽テ喜テ云ク今日此ノ客人來レル我レ喜フ所也ト云フ其ノ時ノ牛ハ今ノ波斯匿王此レ也牛ヲ煞シ卅二人ハ今ノ毗舍離ガ子卅二人此レ也其ノ時ノ老女ハ今ノ毗舍離此レ也牛ヲ煞セル依テ五百世ノ中ニ常ニ煞サル也老女歡喜故ニ五百世ノ間常ニ母ト成テ子ノ煞ナル見テ悲ビテ懷ケル也今我レニ會ヘル故ニ阿那含果ヲ得タル也卅二人ノ家ノ

親族佛ノ如レ此キ説給フヲ聞テ皆怨ノ心止テ各云ク一ノ牛ヲ煞シテ其ノ報ヲ受ケム佛如此レ何況ヤ大王過无クシ善人共ヲ煞セリ豈ニ恨ニ非ザヤ然ト云ヘド我等佛ノ説給フヲ聞テ怨ノ心止ヌ又大王ハ此レ我等ガ國ノ主也然レバ煞害ノ心ヲ止ツト王又其ノ罪ヲ悔テ答ル事无シ阿難重テ佛ニ白テ言ク毗舍離前世ニ何ナル福ヲ殖テ佛ニ遇奉テ道ヲ得ゾ佛ノ宣ク昔迦葉佛ノ時ニ一ノ老女有キ諸ノ香ヲ以テ油ニ和シテ行テ塔ニ塗キ又路ノ中ニ卅二人有キ此ヲ勸メテ共ニ行テ塔ニ塗キ塗果ヲ願ヲ發シテ云ク生レム所ニハ豪貴ノ人ト生レテ常ニ母子ト成テ佛ニ遇奉テ道ヲ得ムト其ノ後五百世ノ中ニ豪貴ノ人ト生レテ常ニ母子ト成レル也佛ニ遇奉ルニ依テ道ヲ得ル事如此ナム語リ傳ヘタトヤ

微妙比丘尼語 第(卅一)

今昔天竺ニ一人ノ羅漢ノ比丘有リ名ヲ微妙ト云フ諸ノ尼衆ニ向テ我が前世ニ造ル所ノ善惡ノ業ヲ語テ云乃往過去ニ一人ノ長者有リキ家大ニ富テ財寶豐也但子无シ後ニ小婦ニ娶テ夫甚ダ愛念スル間ニ一人ノ男子ヲ生ゼリ夫妻共ニ小兒ヲ愛シテ厭フ心无シ而間本ノ妻心ノ内ニ妬テ思ハク若シ此ノ子勢長セバ家業ヲ可レ構シ我レハ空ク止ムト我レ寧ニ家業ヲ營テ何ノ□カ有ラム只不レ如ジ此ノ兒ヲ煞ト思テ密ニ鐵ノ針ヲ取テ陳テ量テ兒ノ頭ノ上ヲ刺ツレ兒死ヌ其ノ母歎キ悲ムテ思ハク此レ本ノ妻ノ妬ノ故ニ煞セル也ト思テ本ノ妻ニ向テ云ク汝ガ子ヲ煞セリ本ノ妻ノ云ク我レ更ニ汝ガ子ヲ不レ煞ズ咒誓□罪ノ有無ハ見ナム若シ汝ガ子ヲ煞バ我レ世々ニ夫有ラバ蛇ノ爲ニ螫シ煞サレ子有ラバ水ニ漂ヒ狼ニ噉レム誓ヲ成シテ後其ノ繼母死シヌ兒煞セル依テ地獄ニ墮テ苦ヲ受ル事无量也地獄ノ罪畢テ今人ト生レテ梵志ノ娘トシ年漸ク長大ニシ夫ニ娶テ一ノ子ヲ産セリ其ノ後又懷任ヌ月滿テ産ノ期ニ至ル程ニ夫ヲ具

シテ父母ノ家ヘ行ク夫貧クシテ從者無し途中ニシテ腹痛ムデ産セリ夜ル樹ノ下ニ宿ヌ夫別ニ臥ル忽ニ其ノ所ニ毒蛇來
 リテ其ノ夫ヲ螫シ煞シツ妻夫ノ死ヌル見テ悶絶シテ死入ヌ暫許有テ甦リ夜曙バ妻一ハカクテ可有キ事ニ非ネバ大
 ナル兒ヲバ肩ニ懸テ今生ゼル兒ヲバ抱テ獨リ哭キ悲ム事无限シ猶祖ノ家ヘ行ムト□路ニ進ミ出タル一ノ河有リ深レテ
 廣シ其ノ河ヲ渡テ行ムト爲ルニ大ナル兒ヲバ此方ノ岸ニ暫ク置テ小ヲ抱テ渡テ彼方ノ岸ニ置テ即チ返渡テ大ナル兒ヲ
 迎ヘム爲ルニ兒母ノ渡テ來ルヲ見テ水ニ赴キ入ル母此レヲ見テ迷テ捕ヘム爲ルニ水ニ流レテ行クヲ母子ヲ助ケム爲ル
 力不レ及テ須臾程ニ兒没シテ死ヌ母哭々還渡テ小兒ヲ見ルニ血流レテ小兒不見ズ只狼地ニ有リ狼ノ爲ニ噉セラ
 ケ母此レヲ見テ絶入ヌ良久ク有テ甦テ獨リ路ニ進ミ出タル一人ノ梵志ニ遇ヌ此レ父ノ親キ友也女梵志ニ向テ具ニ夫子
 共ノ死タル事ヲ語ル梵志此レヲ聞テ哀レム歎キ女父母ノ家平安也ヤ否ヤト問ニ梵志ノ云ク昨日汝ガ父母ノ家ニ失火
 出來テ父母眷屬ノ大小一時ニ燒死キト女此レヲ聞テ彌ヨ歎キ悲ムデ死入テ又甦テ梵志此レヲ哀ムデ家ニ將行テ養ツ其
 ノ後又他ノ男ニ娶テ懷任シヌ月滿テ産ノ期ニ成ル時ニ夫外ニ行テ酒ヲ吞テ醉テ日暮方ニ家ニ返ル妻聞キ程ニテ門ヲ閉
 ナル夫門ノ外ニ立テ門ヲ叩ニ妻其ノ時ニ内ニ獨リ在テ産セム産未ダ不生ル程ニ人无クシテ門ヲ不開ザル程ニ終ニ産ツ
 夫門ヲ破テ入テ妻ヲ打ツ妻産ノ事ヲ陳ブ夫暈テ其ノ生メル子ヲ取テ煞シテ蘇ヲ以テ養テ逼テ妻ニ令レ食ム妻心ノ内ニ
 思ハク我レ福薄キガ故ニカ、ル夫ニ遇ヘリ只逃去ナム思テ棄テ走リ逃ヌ波羅奈國ノ内ニ至テ一ノ樹ノ下ニ居テ息ム間
 ニ其ノ國ニ長者子有リ其ノ妻新ク死テ夫日來家ニ有テ戀悲ム程ニ此ノ女ノ樹ノ下ニ獨リ居タル見テ問フニ有様ヲ答
 フ其人此ノ女ヲ娶テ妻ツ數日ヲ經ルニ其ノ夫忽ニ死ヌ其ノ國ノ習テ生タル時夫妻愛念セル者夫死ヌレ其ノ妻ヲ生
 ラガ埋ム事定レル例也然レバ群賊妻ヲ埋ガム爲ニ其ノ家ニ來ヌ賊ノ主妻ノ形貌端正ナル見テ計テ娶テ妻リセ數日ヲ經

テ夫他ノ家ニ行テ家ヲ破ル程ニ其ノ家ノ主賊主ヲ煞シツ然レバ賊ノ伴屍ヲ持來テ妻ニ付ツ國ノ習ナレ其ノ妻ヲ生ラ
 共ニ埋ツ三日ヲ經テ狐狼其ノ家ヲ齧テ自然ニ出事ヲ得タリ女ノ思ハク我レ何ナル罪ヲ作テ日來ノ間重キ禍厄ニ遭
 死テ甦ラム今又何ナル所ヘ行ムト思フニ餘命有ラバ釋迦佛祇蘭精舍ニ在ト聞テ詣テ出家ヲ求ム過去ニ辟支佛ニ食
 ナ施シテ願ヲ發シ故ニ今佛ニ值奉ル事ヲ得テ出家シテ道ヲ修シテ羅漢ト成ヌ前世ノ煞生ノ罪ニ依テ地獄ニ墮ヌ現在ニ
 咒誓ノ過ニ依テ惡報ヲ受ク微妙自ラ昔ノ本ノ妻ヘ今我が身此レ也羅漢果ヲ得ト云ヘド常ニ熱鐵ノ針頂ノ上ヨリ
 入テ足ノ下ニ出ヌ晝夜ニ此ノ苦患難堪シト語リケ然レバ罪福ノ果報如此シ終ニ朽ル事無ナム語リ傳ヘトヤ

舍衛國大臣師質語 第(卅一)

今昔舍利弗尊者常ニ智慧ノ眼ヲ以テ衆生ノ中ニ得度スベ者ヲ見テ輒ク得度メシ給フ其ノ時ニ舍衛國ニ波斯匿王ノ
 一人ノ大臣有リ名ヲバ師質ト云フ家大ニ富テ財寶无量也此人得度シト見テ舍利弗彼ノ家ニ行テ乞食シ給フ大臣此
 レヲ見テ禮拜恭敬シテ請ジ入レテ食ヲ儲テ供養ス尊者供養ヲ受畢テ大臣ノ爲ニ法ヲ説テ云ク富貴榮祿ハ衆苦ノ本也
 家ニ居テ妻子ヲ愛スル事ハ牢獄ノ如シ一切ノ有ニル所ハ皆悉ク无常也ト大臣此ヲ聞テ心ニ歡喜シテ即チ道心ヲ發ツ
 家業及ビ妻子眷屬ヲ弟ニ付囑シテ出家シテ山ニ入ヌ其ノ後其ノ妻大臣ヲ戀悲ムテ弟ノ語ニ不樂ズ其ノ心ヲ見テ弟
 ノ云ク汝チ今ハ我レト夫妻トシ他ノ心无カルベ思フニ何ノ故ニ常ニ愁タル氣色有ト妻ノ云ク我レ前ノ夫大臣ヲ戀ルニ
 依テ歎キ愁ヘル也ト其ノ時ニ弟賊人ヲ語ヒ雇ヒテ兄ヲ煞ガ爲ニ山ヘ遣ル賊人其ノ語ヲ得テ山ニ行テ沙門ニ遇テ云ク
 我レ汝ノ弟ノ雇ヘル依テ汝ヲ煞ガ爲ニ爰ニ來ト沙門此ノ事ヲ聞テ恐レ怖テ云ク我レ新ニ道ニ入レリ云ヘド未ダ佛ヲ

見奉ラズ法ヲ不悟ズ暫ク我ヲ煞ス事无カレ我レ佛ヲ見奉リ法ヲ聞テ後我レヲ可レ煞シ其ノ事不レ遠ジト賊人ノ云ク我レ汝ヲ不レ可レ免ズト其ノ時ニ沙門臂ヲ擧テ賊人ニ與ヘテ云ク我ガ一ノ臂ヲ斫テ命ヲ暫ク留メヨ猶佛ヲ見奉ラム賊人然レバ命ヲ不レ煞ズシ臂ヲ斫テ持去ヌ沙門即チ佛ノ御許ニ詣テ佛ヲ禮拜シ奉ルニ佛爲ニ法ヲ説給フ沙門法ヲ聞テ羅漢ト成テ即チ涅槃ニ入ヌ賊人ハ臂ヲ持行テ弟ニ與フ弟兄ノ臂ヲ得テ妻ノ前ニ持行テ云ク汝ガ戀悲メル前ノ夫ノ臂此レ也ト妻此レヲ見テ哽テ云フ事无ク歎キ悲ム事无限シ妻波斯匿王ノ宮ニ詣テ此事ヲ申ス王具ニ聞テ瞋テ成シテ其ノ弟ヲ捕ヘテ煞シツ其ノ時ニ比丘佛ニ白シテ申サク今此ノ沙門前世ニ何ナル惡業ヲ造テ今臂ヲ斫テ又佛ニ值奉テ道ヲ得ゾト佛比丘ニ告テ宣ク乃往過去ニ波羅奈國ノ達王猶ノ遊ニ出シ時ニ山ニ入テ道ヲ失ナヒ行方ヲ不レ知ズシ草木ノ本ニ住シテ道ヲ求ムル間ニ山ノ中ニ一人ノ辟支佛有リ王辟支佛ニ道ヲ教ヘ云フニ辟支佛臂ニ惡キ病ヒ有テ手ヲ擧ルニ不レ能ズシ臂ヲ以テ道ヲ教フ王此ヲ瞋テ成シテ刀ヲ拔テ辟支佛ヲ斬ル辟支佛ノ云ク王若シ此ノ罪ヲ懺悔セズ重罪ヲ受ベシ云テ王ノ前ニ飛テ虚空ニ昇テ神變ヲ現ズ王此ヲ見テ我レ證果ノ人ヲ斬レリ思テ地ニ倒レ音ヲ擧テ叫テ悔ヒ悲ムテ云ク願ハ辟支佛返リ下リ給テ我ガ懺悔ヲ受給ヘト辟支佛即チ返リ下テ王ノ懺悔ヲ受テ王頭面ヲ以テ辟支佛ヲ禮拜シテ白シテ言サク唯シ願ハ哀憐ヲ垂レテ我ガ懺悔ヲ受給テ受苦ノ報ヲ除キ給ヘト辟支佛聞畢テ即チ涅槃ニ入ヌ王其ノ所ニ塔ヲ起テ供養シツ其ノ後常ニ其ノ塔ニシ此ノ罪ヲ懺悔シテ終ニ度脫ヲ得タリ今此ノ沙門ハ昔ノ達王此レ也前世ニ辟支佛ノ臂ヲ斬ルニ依テ今臂ヲ斫ル、也懺悔ヲ致セル依テ地獄ニ不レ墮シテ今道ヲ得タル也ト説給ケリト語リ傳ヘタトヤ

天竺女子不傳父財寶國語 第卅三

今昔天然ニ一ノ國有リ其國ノ習テシ人ニ女子有レド父ガ財寶ヲ不傳ズ男子定リテ傳フ若シ男子无キ財寶ヲバ其人死バ皆公ケ納メ取ラル此レ定レル國ノ例也其ノ國ニ一人ノ人有リ家大ニ富テ財寶ハ多カリ但女子五人有テ男子无シ死ナバ皆公ケ財ニ成トス而ニ此ノ人妻懷任セリ家ノ人皆男子ニテ生シト思フ程ニ其ノ父俄ニ死ヌ然レバ公ノ使來テ財寶納メ置タル庫倉ニ悉ク封テ付ツ其時ニ第一ノ女子有テ王ニ令申ル様此ノ懷任セル子若シ男子ニテ生ゼラ父ガ財寶ヲ可レ傳也而ルニ公物ニ成リ畢ナム後ハ譬ヒ男子也ト云ヘド返シ給フベ非ズ然レバ此ノ子ノ生レム程カク封ヲ付置カレ子生レテ後ニ女子ナラ公物ト成リ男子ナラ父ガ財寶ヲ可レ傳也ト王ノ云ク申ス所尤モ可レ然シ子ノ生ゼム程ヲ暫ク可レ待シト然ル程ニ子生レヌ其ノ子男子ニテ有リ五人ノ女子ヨリ始メ家ノ人皆喜テ成シテ兒ノ顔ヲ見レバ二ノ目无シ二ノ耳无シ口ノ内ニ舌无シ此ヲ見テ奇異ノ思成ヌ男子ニテ生ゼル喜ビ思フ程ニカ、ル片輪者ナレ何ガ可レ爲キト歎給フニ第一ノ女子ノ云ク先ツ此ノ由ヲ王ニ申シテ仰セニ可レ隨シト今四人ノ女子モ皆同心ニ可レ然シト云ヒ定メテ王ニ此ノ兒ノ有様ヲ申サヌ王此ノ由ヲ聞仰セ下サル様其ノ生ゼル子片輪者ニハ有リト云ヘド既ニ男子ニハ有レバ父ガ財寶ヲ可レ傳也ト然レバ公ケ使來リテ付シ封ヲ開テ生ル男子父ガ財寶ヲ可レ傳シト仰セ係ケテ去ヌ五人ノ女子共ハ此ヲ聞テ喜ビ思フ事无限シカクテ其ノ財寶ヲ五人ノ女子共ニ心ニ任セテ取用ヌ男子ハカ、ル片輪者ナレ此ノ兒ノ財也ト家ノ内ノ人モ世ノ人モ國ノ内舉テ讚メ合ヘル事无限シ其時ニ第一ノ女子ノ夫ノ云ク今ハ此ノ家ニ留メテ思ノ如ク也此レ偏ニ此ノ片輪兒ノ德也但シ此ノ兒ノカ、ル片輪者ノ身ニテ財ノ主ト成ル身ノ宿業ヲ知ラム思テ佛ノ

御許ニ詣テ佛ニ白テ言サク此ノ兒男子ニテ生セレバ父ガ財ヲ得タリ云ヘド二目无ク二ノ耳无ク口ノ内ニ舌无シ前世ニ何ナル報有テゾ佛告テ宣ハク汝チ善ク聽ケ過去ノ无量劫ニ國有キ其國ニ兄弟二人ノ人有キ兄ハ國ノ賢シキ人トシ公ヨリ始テ下ノ人ニ至マデ此ノ人ノ云フ事チバ正直ノ事チニシテ虚言セズ者也ト世學テ信ジキ弟ハ財寶チ多ク持テ世ノ人ニ此チ借シテ數チ増シテ返シ得レバ彌ヨ家大ニ富テ有リ又一人ノ人有リ常ニ海ニ浮テ財チ求メ財多カル國ニ行テ財チ買テ返來ル事チ業トス其ノ人例ノ如ク財チ求ガム爲ニ海ニ入ラム爲ル程ニ其ノ直物ノ乏少ナレ此ノ弟ノ富人ノ許ニ行テ錢チ借ル弟ノ云ク錢ハ要ニ隨テ可借シ但シ汝チ未ダ返來ム問ニ我レ若シ死ナバ我ガ子ニ數ニ依テ可返也ト云テ兄ノ賢人ノ虚言セズ世ニ重キ者ニ思エタ其ノ前ニテ借ムト云テ我ガ子及ビ借人トヲ具シテ兄ノ許ニ行テ錢チ借スト弟ノ云ク此人ノ海ニ入ガ爲ニ錢チ借ル只借ト云ヘド人ノ心難レ知シ我レ死ナバ其ノ物ハ我ガ子ニ可返也我ガ子幼稚ナレ賣ムト云フト難レ返シ然レバ兄ノ御前ニテ借ス也若シ然ノ如ク事有ラバ理ノ如ク裁リ給ヘ世ノ人ソラ汝チコト如此ノ正直ナル證人ニハ用キレ況ヤ兄弟ノ間也必ズ理ニ任セテ裁リ給ヘト云テ此ノ商人ニ多ノ錢チ借シテ去ヌ其ノ後弟幾ノ程チ不レ經ズ死ヌ此ノ商人七年ヲ經テ多ノ財チ買取テ返來ヌ此ノ弟ノ子今ヤ返ヌト待ニ无レ音也弟ノ子市ニ出テ物チ買ニ此ノ商人ニ遇ヌ弟ノ子ノ云ク海ヨリ返來テ久ク成ヌト聞ドモ无レ音何ニ故父ノ借シラレ所ノ錢ノ代チバ何ゾ今ニ返トソ商人ノ内ニ思フ様須ク員ニ依可返也而ニ可返キ程チ思ニ極テ其ノ員多シ大海ニ入テ財チ求ル事ハ艱事ニ非ズ財チ貪ボル心深クシ命チ弃テ海ノ中ニ浮テ尋ネ求ル事也辛クシ買ヒ持來タル財チ返サム事ノ員多カレ甚ダ難ク思エテ答テ云ク未ダ其物ノ員儘ニ不レ思エズ今尋テ可申ト云ヘバ弟ノ子ノ云ク甚ダ希有ナル事云フ人カナ只二人向テ借シ申ル事ニモ非ズ我ガ伯父ノ國ノ賢人ノ前ニテ儘ナル事チ様々ニ我ガ父モ契リ汝モ約セシ事チバ我レハ何ニモ不

レ可申ズ彼ノ伯父ノ御許ニ相共ニ行テ問ヒ申シテ彼ノ人ノ御定メニ依レシ云ヘバ商人尤可然シ今三四日有テ可レ行ト云テ其ノ日ト契テ去ヌ商人家ニ返テ夜光ル玉ノ目出ダク明ク照スヲ持テ彼ノ賢シ人ノ妻ノ許ニ行テ妻ニ遇云ク一トセ財チ求ガム爲メニ大海ニ入リシ其ノ直ノ足カバ賢シ人ノ御弟ノ錢チ多ク借取テ賢シ人トシ其ノ御前ニテ借テ罷去ニキ其後海ヨリ返タル彼ノ御弟ノ子ノ其ノ錢ノ代チ返セト責ルハ理ドモ可返キ物ノ員ノ極テ多カレ惜シク思ヒテ難レ返キ也然レバ不レ知ヤ不レ思ズト答侍ツル然レバ其ノ子ノ申ス様カク云フ極テ狼藉也我ガ父ハ若シ如此ノ詞モソ出來トテ兄ノ賢シ人ノ御前ニテ其ノ證人トシ借シ事ナレ彼ノ人ノ許ニ共ニ行テ其ノ定メニ依ゾ申シツ日チ定メテ可レ行キ由チ契テ去ヌ然レバ此ノ玉夜照ス事无レ並シ此ヲ納レテ此ノ事各申サム時ニ返ジキ様ニ裁シメ給ベキ也ト云テ玉チ押シ預ケテ去ヌ賢シ人出テ公事共定メ申シテ日暮方ニ家來タリ妻此玉チ取出テ見セテ密ニ彼ガ云シ事共チ語ル賢シ人大ニ瞋テ云ク汝チ年來我レニ相副テ我ガ心チバ知ヌラ何デ不レ知ヌ人ノ様ニカ、ル事チバ云ベキ速ニ其玉返シ遣レト云ヘバ妻商人チ喚テ玉チ袖移ニ返シ渡シツ商人家ニ返テ又夜光ル本ノ玉ニハ勝チタル二具シテ又家ニ行ヌ陳チ計テ密ニ此ノ二ノ玉チ妻ノ袖ニ入テ去ヌ賢シ人又家ニ返來ニ妻密ニ夫ニ此ノ二ノ玉チ見セテ云ク此ノ度ノ玉チコ難レ返ケレ汝チ猶返セト云ハハ我レ只一人持タル男子チ抱ガテ淵ニ落入ト云テ哭ケバ賢シ人賢コキ心ノ内ニモ弱リチイデ不レ知然レバ只汝ガ心ト云テ立去ヌ妻喜テ商人ノ許ニ密ニ云ヒ遣バ商人構ヘ得タリ思テ彼ノ契リシ日弟ノ子ト共ニ行合ヌ弟ノ子ハ父ノ錢借シ日契シ事共ニ云フ商人ハ惣テ此レ无キ事也ト口清ク諍フ其ノ時ニ賢シ人ノ云ク二人ノ云フ事皆聞ツ我レ有リシマ可レ云レト云ヘド此ノ事更ニ不レ思エヌ事共也ト云ヘバ弟ノ子甚ダ奇特也ト思テ心ノ内ニ瞋恚チ發ト云ヘド哭々ク云ク君ハ世ニ賢シク實語チ立テ裁リ給フ身ナレ我ガ父モ御前ニテ證人トシ互ニ契

リ申シ事ヲカク新タニ舌ヲ返シ給フ云ヘバ伯父ノ賢シ人云フ事无クシ立テ去ヌ商人喜ビ思テ去ヌ弟ノ子ハ悲ノ心ヲ發シテ去ヌ其ノ後賢シ人幾ノ程ヲ不レ經シテ重病ヲ受テ死ヌ此ノ罪ニ依テ地獄ニ墮テ多ノ苦ヲ受ク適ニ人ト生ハレテ舌ヲ返セル罪ニ依テ舌无クシ二ノ目二ノ耳无キ身ト生タリ又財ノ主ト成ル事ハ國ノ賢シキ人トシ國王ヨリ始メテ國ノ人重カバシ德豐ナル身ニテ人ニ物ヲ施シニ依テ財ヲ傳ヘ得タル也ト佛ノ説給テ聞テ第一ノ女ノ夫貴シト思テ禮拜ヲ成シテ去ニケリ語リ傳ヘタトヤ

畜生具百頭魚語 第(卅四)

今昔天竺ニ佛諸ノ比丘ト共ニ梨越河ノ側ヲ行キ給フ其ノ河ニ人集テ魚ヲ捕ル納ニ一魚ヲ得タリ其ノ魚驢驢牛馬猪羊犬等ノ百畜生ノ頭ヲ具セリ五百人シテ引クニ其ノ魚水ヲ不レ出ズ其ノ時ニ河邊ニ五百人有テ牛ヲ飼フ各牛ヲ放テ寄テ此ヲ引ク然レバ千人力ヲ合セテ引クニ魚水ヲ出ル事ヲ得タリ諸ノ人此ノ事ヲ怪ムテ競ムテ見ル佛比丘ト共ニ魚ノ所ニ行キ給テ魚ニ問テ宜ハク汝ハ教ヘシ母ハ何ナル所ニカ有ルト魚ノ云ク无間地獄ニ墮セリ阿難此ヲ見テ其ノ因縁ヲ佛ニ問奉ル佛阿難ニ告テ宜ハク昔迦葉佛ノ時ニ婆羅門有リキ一ノ男ヲ生ゼリ名ヲバ迦毗利ト云キ其ノ兒智惠明了ニ聰明第一也其ノ父死テ後母兒ニ問テ云ク汝ヲ智惠朗カ也世間ニ汝ニ勝タル者有ヤ否ヤト兒答テ云ク沙門ハ我ニ勝タリ我レ疑フ事有ラバ行テ沙門ニ問ムニ我ガ爲ニ悦テ令レ悟テム沙門若シ我レニ問フ事有ラバ我レハ答フル事不レ能ジト母ノ云汝テ何ゾ其法ヲ不レ習ゾト兒ノ云ク我レ其ノ法ヲ習ハバ沙門ト可レ成シ我レハ此レ白衣也白衣ニハ不レ教ザル也ト母ノ云ク汝テ僞ヲ沙門ト成テ其ノ法ヲ習ヒ得テ後ニ家ニ可レ返シト兒母ノ教ヘニ隨テ比丘ト成テ沙門ノ許

ニ行テ法ヲ問ヒ習テ悟リ得テ家ニ返ヌ母兒ニ云ク汝テ法ヲ習ヒ得タリ否ヤ兒ノ云ク未ダ習ヒ不レ畢ラズ母ノ云ク汝テ今ヨリ後習ヒ不レ得バ師ヲ罵辱シメ勝ル、事ヲ得テム兒母ノ教ニ隨テ師ノ許ニ行テ罵リ辱メテ云ク汝テハ沙門愚ニテ識リ无シ頭ハ獸ノ如シト云テ去ニキ其ノ罪ニ依テ母ハ无間地獄ニ墮テ苦ヲ受ル事无量シ子ハ今魚ノ身ヲ受テ百ノ畜生ノ頭ヲ具セリ阿難重テ佛ニ言サク此ノ魚ノ身ヲ脱ルベシ佛ノ宣ハク此ノ賢劫ノ千佛ノ世ニ猶此ノ魚ノ身ヲ不レ脱レヌ此ノ故ニ人身口意ヲ可レ慎シ若シ人惡口ヲ以テ罵辱セバ語ニ隨テ其ノ報ヲ可レ受シト説給ケリト語リ傳ヘタトヤ

天竺異形天人降語 第(卅五)

今昔天竺ニ天ヨリ一人ノ天人降タリ其ノ身金色也但シ頭ハ猪ノ頭也諸ノ不淨所生ノ類ヲ求メ食ス諸ノ人此ノ天人ヲ見テ奇異ノ思ヲ成シテ佛ニ白テ言サク此ノ天人前世ニ何ナル業有テカ身ノ金色也ト云モヘト頭ハ猪ノ頭也諸ノ不淨所生ノ類ヲ求メ食ス佛説テ宣ハク此ノ天人ハ過去ノ九十一劫ノ時毗婆尸佛ト申佛世ニ出給ヘリ其ノ時ニ此ノ天人女人ト生レテ人ノ妻ト有リキ其ノ家ニ沙門來テ乞食シキ夫金ヲ施セム云ニ妻慳貪ナル故ニ心ヲ誤マリ面ヲ赤テ臆患ヲ發シテ夫ノ乞食ニ金施スル事ヲ止テキ其ノ罪ニ依テ其ノ妻九十一劫ノ間此ノ果報ヲ得タル也又身ノ金色ナル事ハ其ノ沙門ニ値テ一度腰ヲ曲テ禮拜シキ其ノ功德ニ依テ金色ノ身ヲ得テ光ヲ放ツ也然レバ天ニ生ト云モ惡業ノ殘レル所如レ此也ト説給ケリト語リ傳ヘタトヤ

天竺遮羅長者子閻婆羅語 第(卅六)

今昔天竺ノ毗舍離城ニ一人ノ長者有リ名チバ遮羅ト云フ其ノ妻懷任シテ後身臭ク穢レテ惣テ人不ニ近付ズ十月ニ滿テ男子ヲ生ゼリ其ノ兒瘠セ悴ヘテ骨體連レリ又多ノ糞尿兒ノ身ニ塗テ生ゼリ然レバ父母更ニ此レヲ不見ズ兒漸ク勢長スル程ニ家ニ在テ父母ニ隨ハム事ヲ不レ欲ズ只糞穢ヲ嗜フ父母及ビ諸ノ親族此ヲ惡テ見ムト不レ欲遠ク遣テ不ニ近付ズ外ニ在テモ常ニ糞穢ヲ食ス世ノ人此ヲ見テ慍ミ厭フ事无限シ其ノ名チ閻婆羅ト云フ其ノ時ニ外道有リ道ヲ行ニ此ノ閻婆羅ニ遇ヌ我が門徒ニ入レト勸メテ苦行ヲ教ヘテ修ム閻婆羅外道ノ苦行ヲ修スト云ヘド猶糞穢ヲ食ス外道此ヲ見テ罵リ打テ追ヒ出シツ閻婆羅逃テ河ノ岸海ノ中ニ至リ住シテ苦惱シ愁歎ス其ノ時ニ佛此ヲ見給テ其ノ所ニ行テ此ヲ度シ給フ閻婆羅佛ヲ見奉テ歡喜シテ五體ヲ地ニ投テ出家ヲ求ム佛ノ宣ハク汝ガ善ク來ト閻婆羅此ヲ聞クニ頭ノ髮自ラ落テ身ニ法服ヲ着セリ既ニ沙門ト成レリ佛爲ニ法ヲ説給フニ身ノ臭穢ヲ除テ阿羅漢ト成ヌ比丘此ヲ見テ佛ニ白テ言サク閻婆羅前世ニ何ナル業ヲ造テ此ノ罪報ヲ受ケ又何ナル緣ヲ以テ佛ニ值奉テ道ヲ得ト佛比丘告テ宣ハク乃往過去ノ此ノ賢劫ノ中ノ物留彌佛ト申ス佛世ニ出給ヘリ其ノ時ニ國王有リ佛及ビ諸ノ比丘寶殿ニ積テ寺ヲ造テ一ノ比丘ヲ以テ寺ノ主トセ諸ノ檀越有テ衆僧ニ沐浴ヲサセ衆僧浴畢テ香油ヲ身ニ塗ル其ノ中ニ一人ノ阿羅漢ノ比丘有リ寺主此ヲ見テ喚テ罵テ云ク汝ガ出家ノ人香油ヲ身ニ塗ル糞ヲ塗ニ似ト羅漢寺主チ惡テ爲ニ神通ヲ現ズ虚空ニ昇テ十八變ヲ成ス寺主見已テ懺悔シテ此ノ罪ヲ除カム事ヲ願ヒキ云ヘド終ニ此ノ罪ニ依テ五百世ノ中ニ常ニ身臭穢シテ人不ニ近付ズ又昔シ出家シテ彼ノ羅漢ニ向テ懺悔ニ依テ今我レニ值テ出家シテ道ヲ得ル也説給ケリト語リ傳ヘダトヤ

滿足尊者至餓鬼界語 第(卅七)

今昔佛ノ御弟子滿足尊者神通ヲ以テ餓鬼界ニ行テ一ノ餓鬼ヲ見ル其ノ形極テ恐怖シク毛豎チ心迷ヒ身ヨリ火ヲ出シテ大ナル事數十丈或ハ眼鼻身體支節ヨリ焰ヲ放ツ長ヤ數十丈又唇口垂レテ野猪ノ如シ身體ノ縱廣一由旬也手ヲ以テ自ラ手ヲ斷テ音ヲ擧テ叫ヒ叫テ東西馳走ス尊者此ヲ見テ餓鬼ニ問テ云ク汝ガ前世ニ何ナル罪ヲ造テ今此ノ苦ヲ受ゾト餓鬼答テ云ク我レ昔シ人ト生レテ沙門ト成レリ云ヘド房舎ヲ執着シテ慳貪ヲ不レ捨リキ豪族ヲ恃ムテ惡言ノ事ヲ出シ若ハ持戒スル精進ノ比丘ヲ見テハ輒ク罵リ耻シメ服ヲ廢キ其ノ罪ノ故ニ此ノ苦ヲ受ク然レバ利刀ヲ以テ自ラ其ノ舌ヲ割ト思フ一日モ精進持戒ノ比丘ヲ罵リ謗ル事无カレ若シ尊者閻浮ニ返リ給ハム時キ我が形ヲ以テ諸ノ比丘ニ告テ善ク口ノ過ヲ助ケテ妄語ヲ出ス事无カレ持戒ノ人ヲ見テハ其ノ德ヲ敬ヒ思フベ我レ此ノ餓鬼ノ形ニ生テ以來タ數千萬歲此ノ苦ヲ受ク又此ノ命盡テバ地獄ニ墮ト云畢テ後囉ヘ叫ムテ身ヲ地ニ投テ其ノ音大山ノ崩ル、如トシ天振ヒ地動ク此レ口ノ過ニ依テ受ル所ノ惡業也尊者閻浮ニ返テ語リ傳ヘ給フ也ケリト語リ傳ヘダトヤ

天竺祖子二人長者慳貪語 第(卅八)

今昔天竺ニ二人長者有リ祖子也父モ子モ共ニ家大ニ富テ財寶豐也但シ慳貪深ク敢テ施ノ心ナシ自然ラ乞匄家ニ來レバ門ノ内ニ不レ入テ人ヲ以テ追ヒ掃ハス而ル間父ノ長者身ニ病ヲ受テ幾ノ程ヲ不レ經テ死ヌ其ノ國ノ内ニ目盲タル乞匄ノ女有リ此ノ長者其ノ乞匄ノ腹ニ宿ヌ月滿既ニ産セリ其子又目盲タリ年月ヲ經テ七歲ニ成ヌ母子モ

共ニ乞匄^テ命^ヲ養^フ子^ノ乞匄^シ行^ク程^ニ自然^ラ彼^ノ長者^ノ家^ニ至^リ其^ノ家^ノ守門^ノ者^{白地^ニ行タル間ニ}追^フム
 无^クテ此^ノ乞匄^{家ノ内ニ}入^テ南面^ニ立^テリ長者^{此ヲ}見^テ嘆^息ヲ發^シテ追^ヒ拂^ハス其^ノ時^ニ守門^ノ者^{返來^テ此ノ}乞匄^ヲ
 ナ見^テ一^ノ手^ヲ牽^テ遠^ク投^ゲ遣^ル時^ニ地^ニ倒^レテ一^ノ手^折レ頭^破レヌ音^ヲ擧^テ叫^ブ時^ニ母^ノ乞匄^{子ノ}叫^ブ音^ヲ聞^テ迷^ヒ
 來^テ子^ヲ抱^テ哭^キ悲^シ事^无限^シ其^ノ時^ニ佛^{此ヲ}哀^テ其^ノ所^ニ來^リ給^テ乞匄^ニ告^テ宣^{ハク}汝^チ善^ク聽^ケ汝^ハ此^レ此^ノ
 長者^ノ父^也前^生ニ慳^貪深^ク人^ニ物^ヲ施^{スル}心^无ク乞匄^ヲ強^ニ追^シ今^{此ノ}報^ヲ得^{タル}也此^ノ苦^ハ甚^ダ輕^シ
 此^ノ後^{地獄}ニ墮^テ无量^劫ノ間^苦ヲ受^{ベシ}哀^カナト宣^テ立^寄テ頭^ヲ撫^給フ乞匄^ニ目^開佛^ノ說^キ知^シメ給^フヲ聞^テ
 我^レハ此^ノ長者^ノ父^ニテ有^シ時^慳貪^深ク施^ノ心^无ク乞匄^ヲ追^シ罪^ニ依^テ今^{子ノ}家^ニ來^テ此^ノ苦^ニ遇^{ヘル}也^トケリ知^ル
 然^レバ此^ノ事^ヲ悔^ヒ悲^ム佛^ニ向^テ奉^テ禮^拜恭^敬シテ懺^悔セシ罪^ヲ報^ル果^報ヲ得^{タリ}語^リ傳^ルトヤ

天竺利群史比丘語 第(卅九)

今昔天竺ニ利群史ト云フ比丘有^リ此^ノ人^在家^{ナリ}時^モ衣食^ニ乏^ク難^レ得^{カリ}比丘^ト成^{レリ}云^{ヘド}猶^衣食^難レ得^レ
 一^ノ塔^ニ籠^テ宿^シ僅^ニ食^ヲ得^{タリ}云^ドモ食^{スル}不^レ能^ズ然^バ七^日不^レ食^ズシ既^ニ餓^死ナム事^不久^ズ此^ヲ哀^テ佛^ノ御^弟
 弟^子須^菩提^目連^阿難^等每^日ニ來^テ食^ヲ與^{ヘム}□^{レド}相^ヒ違^ヒツ更^ニ不^レ得^既ニ十^日ヲ經^テ未^ダ不^レ食^ズ其^ノ時^ニ目^連
 連^食ヲ入^レ持^來タル俄^ニ塔^ノ戶^固ク閉^テ不^レ開^目目^連神通^ノ力^ヲ以^テ鉢^ヲ抱^キ穴^{ヨリ}入^テ飯^ヲ比丘^ニ與^フ比丘喜^喜
 鉢^ヲ取^ルニ鉢^手ヨリ落^テ地^ノ下^{五百}由^旬ニ入^リ目^連神通^ノ力^ヲ以^テ臂^ヲ伸^テ鉢^ヲ取^出テ此^レヲ與^フ比丘此^ヲ取^テ
 食^{セム}爲^ル比丘^ノ口^俄ニ閉^テ開^ク事^ヲ不^レ得^ズ然^レバ終^ニ食^{スル}事^无シ其^ノ時^ニ目^連利群史比丘^ト共^ニ佛^ノ御許^ニ

ニ詣^テテ白^シテ言^{サク}利群史^何バ^{ナレ}如^レ此^ク食^ヲ不^レ得^ゾ佛^告テ宣^{ハク}汝^チ當^ニ知^{ベシ}此^ノ比丘^{前世}ニ母^有テ沙門^ニ
 物^ヲ施^{スル}見^テ子^強ニ財^ヲ惜^ム故^ニ母^ヲ土^ノ倉^ニ籠^テ食^ヲ不^レ與^{ザリ}母^飢テ死^ニキ其^ノ子^ハ今^ノ利群史^也此^ノ故^ニ
 食^ヲ難^レ得^キ也但^シ父^母ノ功^德ヲ修^ガシ故^ニ今^我ガ所^ニ來^テ我^ガ弟子^ト成^テ果^ヲ證^{セル}也^ト說^給ケリト語^リ傳^ルトヤ

曇摩美長者奴富那奇語 第(四十)

今昔天竺ニ放鉢國ト云フ國有^リ其^ノ國^ニ一^ノ長者有^リ名^ヲ曇摩美ト云フ家^大ニ富^テ國^ノ中^ノ第一^ノ人^也二人^ノ
 子有^リ兄^ヲ名^ヲ美那ト云フ弟^ヲ名^ヲ勝軍ト云フ又^其ノ家^ニ一^ノ婢^有リ長者^ヲ養^ヒ家^業ヲ助^{クル}者^也其^ノ婢^一ノ男子有^リ
 名^ヲバ富那奇ト云フ而^ル間^{長者}死^ヌ其^ノ後^{此ノ}富那奇^二子^ノ中^ニ兄^ノ美那^ニ屬^{セリ}其^ノ人^又家^大キ富^テ父^ノ長^者
 者^ニ勝^レタ而^ル富那奇^{出家}ヲ求^ル心^有テ美那^ニ此^ノ事^ヲ請^フ美那^此ヲ聞^テ出家^ヲ許^シ富那奇^既ニ出家^シテ道^ヲ
 ヲ修^シテ終^ニ羅漢^果ヲ得^{タリ}其^ノ後^{美那}ノ家^ニ來^リ勸^メテ云^ク佛^ノ御爲^ニ堂^ヲ造^ト美那^勸メニ隨^テ梅檀^ヲ以^テ堂^ヲ造^リ
 リ富那奇^又勸^メテ云^ク佛^ケ及^ビ比丘^僧ヲ請^ジテ供^養シ奉^レト美那^問テ云^ク佛^及比丘^僧ヲ請^ゼ何^レノ時^ゾ程^遙
 テ^ニ輒^ク來^リ給^{ハム}不^レ能^ジト其^ノ時^ニ富那奇^{美那}ト共^ニ高樓^ニ昇^テ香^ヲ燒^テ遙^ニ佛^ノ御方^ニ向^テ佛^ヲ請^ジ奉^ル佛空^ニ
 ニ其^ノ心^ヲ知^リ給^テ諸^ノ御弟子^等ヲ引^具シテ神通^ニ乘^ジテ來^給テ金^ノ床^ニ坐^シ給^{ヘリ}然^レバ美那^種々^ノ飲食^ヲ以^テ
 佛^及比丘^僧ヲ供^養シ奉^ル食^畢テ後^佛爲^ニ法^ヲ說^給フ國^ノ人^民舉^リ來^テ家^ノ上^下ノ男女^皆法^ヲ聞^テ道^ヲ得^ツ其^ノ
 時^ニ阿難^此ヲ見^テ佛^ニ白^シテ言^{サク}此^ノ富那奇^昔シ何^{ナル}罪^ヲ造^テ今^人ニ隨^テ奴^ト成^リ又^何ナル福^ヲ殖^テ佛^ニ值^奉テ
 道^ヲ得^ル佛^{阿難}ニ告^テ宣^{ハク}乃^往過^去ノ迦葉^佛ノ時^ニ一^ノ長者有^リキ比丘^僧ノ爲^ニ寺^ヲ造^テ飲食^{衣服}臥具^{醫藥}

ノ四事ヲ以供養シテ貧キ事无カラシ而ニ長者死シテ後其ノ寺破レ荒レテ人不レ住ズ衆僧皆散々ニ去ヌ長者ノ子有リ出家シテ道ヲ學ビキ名ヲ自在ト云フ如レ此ク寺ノ破レ荒レテ見テ諸ノ人ヲ勸メテ寺ヲ修治シキ其ノ時ニ僧返リ住レテ本ノ如ク也キ其ノ住スル僧ノ中ニ羅漢ノ比丘有テ寺ノ庭ノ塵ヲ拂清ムル間長者ノ子ノ比丘有テ此ノ羅漢ノ比丘ヲ故无クシ罵詈シキ昔ノ長者ノ子ノ比丘ト云ハ今ノ富那奇此レ也羅漢ノ比丘ヲ罵詈セシ依テ五百世ノ中常ニ人ニ隨テ奴ト成レル也又昔シ諸ノ人ヲ勸メテ寺ヲ修治ガ故ニ前ノ罪ヲ償ヒ畢テ後我レニ値テ道ヲ得ル也今又此ノ座ニ有テ道ヲ得タル國ノ人民家ノ上下ノ人ハ皆此レ昔シ勸メテ寺ヲ修治セシ人也ト説給ケリト語リ傳ルヘトヤ

舍衛城婆提長者語 第卅一

今昔天竺ノ舍衛城ノ中ニ一人ノ長者有ケリ名ヲ婆提ト云フ家大ニ富テ財寶无量也飲食衣服金銀等ノ珍寶倉ニ積ミ滿タル事不可ニ構計一ズ但シ家富メリ云ヘド長者慳貪ノ心深シテ我が爲ニモ飲食衣服ヲ不レ好ズ極テ異様也亦妻子眷屬兄弟親族ニ一塵ノ物モ不レ與ズ何況ヤ沙門婆羅門等施スル事有ヤ而ル間長者命終シヌ其ノ時ニ家ノ内ノ財寶ヲ皆公物ニ被レ召レヌ其ノ國ノ波斯匿王自ラ行テ皆取リ納メ給畢ヌ王佛ノ御許ニ詣テ白シテ言サク婆提長者今日命終シヌ生タル間慳貪邪見深カリ者也命終ノ後何ナル所ニ生レタリ可レ知キト佛王ニ告テ宣ハク婆提長者本ノ福業ハ既ニ盡テ新キ福業ヲ未ダ不レ造ズ亦心ニ邪見ノミ有テ善根ヲ斷キ一命終シテ叫喚地獄ニ墮タリ王佛ノ説給フナ聞テ涙ヲ流シテ泣ク事无限シ王重テ佛ニ白シテ言サク婆提長者昔シ何ナル業ヲ造テ福貴ノ家ニ生レテ財寶无量也亦何ナル惡ヲ造テ慳貪邪見ニシ地獄ニ墮ルゾ佛王ニ告テ宣ハク昔シ迦葉佛涅槃ニ入給テ後此ノ長者舍衛國

ニ生レテ田家ノ子ト有リキ其ノ前一ノ辟支佛至テ食ヲ乞ヒキ此長者食ヲ辟支佛ニ施シテ願ヲ發シテ云ク我レ此ノ善根ヲ以テ世々ニ三塗ニ不レ墮ズ常ニ財寶ニ富テ布施ヲ行ゼム誓キ其ノ後亦此レヲ悔ル心出來テ思ハク我レ今ハ奴婢ニ食ヲ與ヘテ此ノ頭禿ナラ沙門ニハ不レ可レ施ズト思ヒキ婆提長者前世ニ辟支佛ニ食ヲ施シテ願ヲ發シ、功德ニ依テ生ル、所ニハ常ニ財多クシ、乏キ事无シ亦施シテ後悔ル事有ニ依テ財多ト云ヘド衣食ヲ不レ好ズシ常ニ異様也亦妻子眷屬兄弟親族ニ物ヲ不レ與ズ慳貪邪見ニシ遂ニ地獄ニ墮ル也ト説給ケリ此ヲ以テ可レ知シ若シ比丘ニ布施ヲ行ゼム露許モ惜ム心可レ无シ歡喜シテ可レ施キ也トナ語リ傳ルヘトヤ

卷第十七

籠鞍馬寺遁羅刹難僧語 第卅三

今昔鞍馬寺ニ一人ノ修行ノ僧隨テ行ヒケ夜ル薪ヲ拾テ火ヲ打チ木ヲ燒ク間夜深更テ羅刹鬼女ノ形ト成テ僧ノ所ニ來テ木ヲ燒テ火ニ向テ居リ僧此レ只ノ女ニ非ジ鬼也ト疑テ金杖ノ尻ヲ燒テ鬼ノ胸ニ突立テ僧ハ逃ゲ去テ堂ノ西ナル朽木ノ下ニ竊ニ隱レテ曲マリ居タリ其ノ時ニ鬼胸ニ燒タル金杖ヲ被ニ突立一テ大キニ忿ヲ成シテ僧ノ逃去タル跡ヲ尋テ走リ來テ僧ヲ見付テ大口ヲ開テ僧ヲ噉ムト爲ルニ僧大キニ恐怖レテ心ヲ至シテ毗沙門天ヲ念ジ奉テ我ヲ助ケ給ヘト申ス其ノ時ニ其ノ朽木俄ニ倒レテ鬼ヲ打壓テ殺シツ然レバ僧命ヲ存スル事ヲ得テ彌ヨ毗沙門天ヲ念ジ奉ル事无限シ夜曙テ後見ルニ現ニ朽木倒レテ鬼ヲ打壓テ死タリ僧此レヲ見テ泣クク毗沙門天ヲ禮拜シ奉テ其ノ寺ヲ出テ他所ニ行リニケ亦此レヲ見聞ク人毗沙門天ノ靈驗ノ新ナ事ヲ彌ヨ信ジテ悲ビ貴ビケリ語リ傳ルヘトヤ

僧依毗沙門助令産金得便語 第卅四

今昔比叡ノ山ノ□ニ僧有ケリ止事无キ學生ニテ有ケレ身貧キ事无限シ墓々シキ檀越モ不持ザリケ山ニハ否无ク
 後ニハ京ニ下テ雲林院ト云フ所ニ住ケル父母ナド无カリケ物云懸ル人ナド无クテ便ヨリ无カリケル其ノ事祈リ申テ
 鞍馬ニソ年来仕リケ而ル間九月ノ中ノ十日ノ程ニ鞍馬ニ參リ返ケル出雲路ノ邊ニテ日暮ニケ幽ナル小法師一人ナ
 ム具ケル月糸明バケレ僧足早ニ急テ返リケ一條ノ北ナル小路ニ懸ル程ニ年十六七歳許有ル童ノ形チ美麗ガ月々シ
 氣ガル白キ衣チ四度解无氣ニ中結タル行キ具シタ僧道行ク童ニコ有ラメ共ニ法師ドモ不具セネ怪シト思フ程ニ童近
 ク歩ヒ寄テ僧ニ云ク御房ハ何コヘ御スゾ僧雲林院ト申ス所ヘ罷ル也ト云ヘバ童我チ具テ御セト云ヘバ童誰トモ知リ不
 レ奉テ上ノ空ニハ何カニ和君ハ亦何ニ御マス師ノ許ヘ御マス又母ノ許ヘ御マス具シテ行ケト有ルハ喜シキ事ニハ侍レド後
 ノ聞エナ惡ク侍リナト云ヘバ童然思サム理ドモ年来知テ侍ツル僧ト申テ違テ此ノ十日許浮レ行キ侍ルチ祖ニテ有シ人ニモ
 幼クテ送レシ糸惜ク爲ル人有ラバ具シ奉テ何チ也トモ思フ也ト云ヘバ僧喜シキ事ニコ侍ナレ後ノ聞エ侍リト法師ガ
 答ニハ不有マジカ然レド法師ガ候フ房ニハ賤シキ小法師一人ヨリ外ニ人モ不候ズ糸徒然ニテ侘シクコ思サム云ヒテ
 語ヒ行ク童ノ極テ嚴カリケ僧心チ移テ然ハレ只將行ナム思テ具シテ雲林院ノ房ニ行ヌ火ド燃シテ見レバ此ノ童色
 白ク顔福ニテ愛敬付キ氣高カキ事无限シ僧此レ見ルニ極ク喜シク思テ定テ此レ下薦ノ子ナドニ不有ジト見ユレ僧
 童ニ然テモ父ハ誰トカ聞エシ問ドモ何カニ不云ズ寢所ナド常ヨリ取テ臥セツ僧ハ傍ニ臥シテ物語シテ寢タル程
 ニ夜モ明バ隣ノ房ノ僧共此ノ童ヲ見テ□テ讚メ合タリ僧ハ童ヲ入ニモ不見セズ思テ延ニダ不レ出サズ糸珍ラシ

心ノ暇モ无ク思フ程ニ亦ノ日暮バレ僧近付テ今ハ馴々シキ様ニ翔ケル僧怪シキ事□思ケム僧童ニ云ケル様己ハ此
 ノ世ニ生レテ後母ガ懷ヨリ外ニ女ノ秦觸ル事无バ委クハ不レ知ネ怪ク例ノ兒共ノ邊ニ寄ニル不似ズ何ニゾ心解ク
 様ニ思エ給フゾ若シ女ニテ御カ然ラバ有マニ宣ヘ今ハ此ク見始メ奉テ後ハ片時離レ可奉クモ不レ思エヌ尙怪シク不
 心得ズ思ユル事ノ侍ツル也ト云ヘバ童打咲テ女ニテ侍ラバ得意ニモ不□云ヘバ僧父ニテ御セム具シ奉テ有ラム人
 モ何ニカ申スラ思テ慎マシク亦三寶ノ思食サム所モ怖シクコ云ヘバ童三寶ハ其ニ心チ發シテ犯シ給フ事ナラバ有ラム亦
 人ノ見ム所ハ童ヲ具シ給ヘルト知ラメ若シ女ニ侍リト童語ヒ給ム様ニ翔テ御カシ云テ糸可咲氣ニ思タリ僧此レヲ聞
 テ女也ケリ思フニ怖シク悔シキ事无限シ然レド此ガ身ニ染テ思ハシ勞タケ出シ遣ル事ナバ不レ爲デ此ク聞テ後ハ僧外
 々□テ衣□隔テ、寢ドモ僧凡夫也バケレ遂ニ打解テ馴レ陸タル有様ニ成リケ其ノ後ハ僧極キ童ト云モ此ク思ハシ勞タ
 モ无シ此レハ可然キ事ナメ思テ過ケル程ニ隣ノ房ノ僧共ハハ微妙キ若君チ然許貧シキ程ニ何ニシ儲タル有ラム云ケル
 而ル程ニ此ノ童ハ心地不例ズ成テ物ナム不食ズ僧怪シク思フ程ニ童ノ云ク我レハ懷任ケリ然□リ給ヒタ僧此ヲ聞テ
 疎キ顔シテ人ニハ童ト云テソ月來□有ツル極メテ侘シキ事カナ然テ子産ム時ハ何ガセ爲ルト云ヘバ童只御セヨモ其
 ニ知セ不奉ラジ然ラム時ニハ只音不爲セテ御セト云ヘバ僧心苦ク糸惜ク思ヒ乍ラ過ル程ニ既ニ月滿バ童心細氣ニ
 思テ哀レナ事共チ云テ泣ク事无限シ僧モ哀レニ悲シク思フ程ニ童腹痛ク成タリ子産ベキ心地スト云ヘバ僧侘テ騒ケル
 童此ナ騒ギ不レ給ソ只可然キ壺屋ニ疊テ敷テ給ヘト云ヘバ僧童ノ云マニ壺屋ニ疊テ敷バ童其レニ居テ暫計有ルニ
 既ニ子チ産ツルナ衣チ脱着テ子チ含ミ臥様ニシ母ハ何チ行トモ不見エ一デ失ニケ僧糸怪ク思テ寄テ和ラ衣チ搔
 去テ見レバ子ハ无クテ大キナ枕許ナル石有リ僧怖シク氣疎ク思ドモ明リニ成シテ見レバ其ノ石ニ黄ナル光有リ吉々ク見

レバ金也ケリ童ハ失レバ其ノ後僧面影ニ立テ有ツル有様戀シク悲シク思エケレ 偏ニ鞍馬ノ毗沙門ノ我レヲ助ケム謀リ
給タル也ト 思テ其ノ後其金ヲ破ツ、賣テ仕ケル實ニ万ツ豊ニ成リ然レバ本ハ黃金ト云ニ 其ヨリ後金子トハ云ニヤ
有ラム此ノ事ハ弟子ノ法師ノ語り傳ル也ケリ毗沙門天ノ靈驗揭焉ナル事此ナム有ケルト 語り傳ルトヤ

吉祥天女攝像奉犯人語 第卅五

今昔聖武天皇ノ御代ニ和泉ノ國和泉ノ郡ノ血滄上山寺ニ吉祥天女ノ攝像在マヌ其ノ時ニ信濃ノ國ヨリ事ノ縁有テ
其ノ國ニ來レル一人ノ俗有ケリ其ノ山寺ニ行テ此ノ吉祥天女ノ攝像ヲ見テ忽ニ愛欲ノ心ヲ發シテ彼ノ像ニ心ヲ懸ケ
奉テ明ケ暮レ此レヲ戀ヒ悲テ常ニ願テ云ク此ノ天女ノ如クニ形チ美麗ナラ 女ヲ我レニ令レ得メ給レト其ノ後此ノ俗夢ニ
彼ノ山寺ニ行テ其ノ天女ノ攝像ヲ婚奉ルト見テ夢覺メ奇異也ト思テ明日彼ノ寺ニ行テ天女ノ像ヲ見奉レバ天女ノ
像ノ裳ノ腰ニ不淨ノ姪付ヲ染タリ俗此レヲ見テ過チ悔ヒ泣キ悲ムデ申サク我レ天女ノ像ヲ見奉ルニ愛欲ノ心ヲ發ニ依
テ天女ニ似ム 女ヲ令レ得給ヘト願ニ 忝ナク 身ヲ自ラニ交ヘ奉ル事ヲ恐レ歎クト然レバ此レヲ耻テ此ノ事
ヲ努々他人ニ不レ語ズ而ルニ親キ弟子自然ヲ竊ニ此ノ事ヲ聞ケリ其ノ後其ノ弟子師ノ爲メニ無禮ヲ成ス故ニ弟子追
ヒ被レ去テ其ノ里ヲ出ヌ他ノ里ニ至テ師ノ事ヲ謗テ此ノ事ヲ語ル其ノ里ノ人此ノ事ヲ聞テ師ノ許ニ行テ其ノ虛實ヲ問
ヒ并ニ彼ノ天女ノ像ニ姪穢ノ付ケル事ヲ尋ヌル 師隱シ得ル事不能 具ニ陳ブ人皆此ノ事ヲ聞テ希有也ト思ヒ誠
ニ懃ニ心ヲ至ニ 依テ天女ノ權ニ示シ給ケル此レ奇異ノ事也此ヲ思フニ譬ヒ多姪ナル人有テ好キ女ヲ見テ愛欲ノ心ヲ
發ト云トモ強ニ念ヲ繫ル事ヲ可レ止シ此レ極テ无益ノ事也トナ 語り傳ルトヤ

王衆女仕吉祥天得富貴語 第卅六

今昔聖武天皇ノ御代ニ王衆廿三人有テ心ヲ同クシ契ヲ結テ次第ニ食ヲ儲テ宴ヲ成ス事有ケリ而ルニ一人ノ女王有
ケリ此ノ中ニ交ルト云ドモ身貧クシ 食ヲ儲ルニ力无シ然レバ廿二人ノ王衆ハ次第ニ食ヲ儲テ宴ヲ樂テ成ス事既ニ畢
而ルニ此ノ女王獨リ未ダ此ノ備ヲ遂テ 女王大キニ貧報ヲ耻テ悲テ奈良ノ左京服部ノ堂ニ詣テ吉祥天女ノ像ニ向
テ泣々ク申シテ云ク我レニ前世ノ貧窮ノ種ヲ殖テ今生ニ貧キ報ヲ得タリ而ルニ我等契ヲ結テ廿三人互ニ各食ヲ儲テ
次第宴ヲ成ス我レ其ノ中ニ入レリ云モ 食ヲ儲ルニ便无クシ 徒ニ人ノ物ヲ食テ我レ其ノ饌ヲ不レ遂ズ願クハ我レヲ哀ミ
而ルニ其ノ女王ニ一人ノ兒有リ急ニ走リ來テ 古京ヨリ大キニ食ヲ儲テ持來レリ 女王此レヲ
聞 女王ヲ養ヒシ乳母ノ來レル也ケリ乳母女王ニ語テ云 自然 客人ヲ得給ヘリ然レバ其ノ故
ニ我レ饌ヲ具シテ來レリ女王此レヲ聞テ喜ブ事无限シ飲食ノ味ヒ殊ニ美ナル事無比シ亦飲食トシ 不レ具物
器ハ皆鏡也使卅八人ニ荷ヒ令レ持タリ女王此レヲ見テ喜テ王衆ヲ呼ブ即チ皆來レリ此ノ饗ヲ食フニ前々ノ饌ニ増レリ
王衆等皆喜テ此レヲ讚メテ富王ト云テ吉ク食フニ皆飽キ滿ヌ然レバ舞ヒ歌ヒ遊ビ戲レテ或ハ衣ヲ脱テ女王ニ與ヘ或ハ
裳ヲ脱テ與ヘ或ハ錢絹布綿等ヲ與フル 女王皆喜テ受ケツ此レ偏ニ乳母ノ德也ト思テ得タル所ノ衣裳ヲ捧テ乳母ニ令
レ着ム乳母此レヲ着テ即チ返ヌ其ノ後女王彼ノ服部ノ堂ニ詣テ吉祥天女ヲ禮ミ奉ラム 思テ詣テ見ルニ彼ノ乳母ニ
令レ着ツル衣裳天女ノ像ニ令レ着奉タリ此レヲ疑ヒ怪ムデ返テ乳母ノ許ニ人ヲ遣テ此ノ事ヲ尋ネ聞クニ乳母更ニ
飲食ヲ不レ送ザル由ヲ答フ其ノ時ニ女王涙ヲ流シテ泣々ク思ハク此ノ事定メテ知ヌ天女ノ我レヲ助ケ給テ授ケ給也ト

思テ彌ヨ心ヲ至シテ天女ニ仕ケリ其ノ後女王大キニ富テ財多クシ更ニ貧窮ノ愁无カリ此レ奇異ノ事也ト見聞ク人皆讚メ貴トナム語リ傳ヘタトヤ

生江世經仕吉祥天女得富貴語 第卅七

今昔越前ノ國ニ生江ノ世經ト云フ者有ケリ加賀ノ掾ニテ有ケル初ハ家貧テ食物食フ事極テ難カリケ殊ニ吉祥天女ニ勤ニ仕ケル間ニ後ニハ富人ト成テ財ニ飽キ滿テ有ケル初貧カリ時

念ジ 告テ云ク門ニ極テ端正ナル女人ノ家主ニ物 經誰ニカ有ラム 思テ見レバ實ニ美麗ナル女

飯一盛ヲ持テ餓タリ云ツル 此ヲ食ヘト 令レ得バ世經喜テ此レヲ 持入テ先ヅ少シ食ニ飽キ

滿タル心地ニテ二三日ヲ經ト云モ 餓ノ心更ニ无シ然レバ此レヲ置テ少シツ食テ有ケル間ニ日來ヲ經テ此ノ飯既ニ失

レバ亦何ガ爲ムト思テ亦前々如ク吉祥天女ヲ念ジ奉ケレ 亦人有テ告テ云ク前ノ如ク家主ニ物宣ハム有ル女人門ニ在

マス 告ケレ 世經前ニ習テ喜テ迷ヒ出テ見レバ前ノ女人在マシ 世經ニ告テ宣ハク汝ヲ糸惜シト思フト云モ 何ガハ可レ爲

キ然レバ今度ハ下文ヲ與フト宣テ文ヲ給ヒタ 世經披テ見レバ米三斗ト云フ下文也此レヲ給リテ世經申テ云ク此レハ何

コニ行テ可レ請ト 女人ノ宣ハク此ヨリ北ニ峯ヲ超テ行カム 中ニ高キ峯有リ其ノ峯ノ上ニ登テ修陀々々ト呼バ答テ出

來ル者有ラム 其レニ值テ可レ請シト世經此レヲ聞テ教ヘノ如ク行テ見レバ實ニ高キ峯有リ其ノ峯ノ上ニ登リ立テ女人

ノ宣ヒシ如ク修陀々々ト呼バ高ク怖シ氣ナル音ヲ以テ答ヘテ出來ル者有リ見レバ額ニ角一ツ生テ目一ツ有ル者ノ赤キ

俗衣ヲシ鬼也出來テ世經前ニ跪テ居タリ見ニ極メテ怖キ事无限シ然レド 念ジテ云ク此ノ御下文有リ此ノ米ヲ可

令レ得シト鬼ノ云ク然ル事侍ラム 下文ヲ取テ打見テ下文ニハ三斗侍レド 一斗ヲ奉レト侍リシ米一斗ヲ袋ニ入テ令

レ得バ 其ヲ請取テ世經家ニ返ヌ其ノ後此ノ米ヲ取テ仕フニ亦袋ニ米ノ自然ヲ滿テ取レド 取レド 更ニ不盡ケリ千

萬石 一斗ノ米ハ不レ失リケレバ世經程无ク 滿ヌ而ル間其ノ國ノ守

ト云ケル人此 云ク汝ガ許ニ然ル袋有ナリ其レ速ニ我レニ可賣 内ニ有

ル者バ守ノ仰セテ難辭クシ 袋ヲ守ニ與テケレ 守袋ヲ得テ喜テ其ノ直ニト米百石ヲソ 世經ニ與タリ 守ノ許ニシ同ジ様ニ

一 取リ仕ツレ 亦同ジ様ニ出來テ不盡ケリケ守極タル財儲ツト思テ持リケ 程ニ百石取リ畢バ 一斗ノ米盡テ亦不

出來ケリ然レバ守本意ニ違テ口惜ク思ヒケレ 力不レ及テ 世經ニ返シ與ヘテ世經此レヲ得テ家ニ置タル 其ノ所ニシ亦

前ノ如ク取リ仕フニ隨テ不盡ズ米出來ケレ 世經无限キ富人ト成テ諸ノ財ニ飽キ滿テ有ケル守ノ心極テ愚也世經

ハ吉祥天女ニ仕ヘテ給タル物ヲ故无クシ 押取ニハ當持ナ誠ノ心ヲ至シテ佛天ニモ仕ル人ハ此クソ有ナム 語リ傳ヘ

依妙見菩薩助得被盜絹語 第卅八

今昔紀伊ノ國ノ安誦ノ郡ニ私部寺ト云フ寺有リ其ノ寺ノ前ニ一ノ富ル家有ケリ其ノ家ニ盜人入テ絹ヲ十四疋盜ミ取

ツ此レ誰人ノ盜ト云フ事ヲ不知ズ而ルニ其ノ家ノ主本ヨリ妙見菩薩ヲ深ク懇テ年來有ニ 此ノ絹被レ盜タル事ヲ

心ヲ至シテ 妙見ニ祈リ申シ請ケル 其ノ盜人此ノ盜タル絹ヲ持テ其ノ北ニ邊ニ有ル市ニ持テ行テ賣ルニ人有テ此

レヲ買フ間被レ盜テ後未ダ七日ニ不滿 彼ノ市ノ庭ニ忽ニ猛キ風出來テ其ノ絹ヲ空ニ卷キ上テ遙ニ南ヲ指テ吹持

行ク彼ノ絹ノ主ノ家ノ庭ニ吹キ落シツ絹ノ主此レヲ見テ喜テ取テ思ハク此レ他ニ非ズ妙見菩薩ノ助ケニ依テ

彌ヨ信ヲ發シテ仕ケリ彼ノ市ニシ買ハム爲
聞テ此レ盜メル絹也ト云

止ニケ此レ奇異ノ事也心ヲ至シテ佛天ニモ仕レバ
也トナ語リ傳ヘタトヤ

金就優婆塞修行執金剛神語 第卅九

今昔聖武天皇ノ御代ニ奈良ノ京ノ東ノ山ニ一ノ山寺有リ其ノ山寺ニ一人ノ優婆塞有リ名ヲベ金就ト云フ此ノ優婆塞ノ此ノ山寺ヲバ造ニ依テ此ノ山寺ニ住セル也而ル間未ダ東大寺ヲ不造ザル時ニ金就行者其ノ寺ニ住シテ佛ノ道ヲ行フニ其ノ山寺ニ一ノ執金剛神ノ攝像在マヌ金就行者其ノ執金剛神ノ躡ニ繩ヲ付テ此レヲ引テ晝夜ニ息ム事无ク修行ス其ノ時ニ執金剛神ノ躡ヨリ光リヲ放ツ其ノ光リ即チ天皇ノ宮ニ至ル天皇此ノ光ヲ見給テ此レ何レノ所ヨリ來ル光ト云フ事ヲ知リ不給テ驚キ怪ビ給テ使ヲ遣テ尋ネ給フニ使勅ヲ奉テ光ニ付テ彼ノ山寺ニ行テ見レバ一人ノ優婆塞有テ執金剛神ノ躡ニ繩ヲ懸テ禮拜シテ佛道ヲ修行ス使此レヲ見テ返リ參テ此ノ由ヲ奏ス天皇此レヲ聞キ給テ忽ニ彼ノ金就行者ヲ召スニ即チ參レリ天皇行者ニ宜ハク汝デ何事ヲ求メ願フニ依テ如レ此ク修行ソト金就行者答テ云ク我レ願フ出家シテ佛道ヲ修行ト思フ故也ト天皇此ヲ聞キ給テ讚メテ出家ヲ許シテ令レ度給フ其ノ時ニ行者本意ノ如ク出家シテ比丘ト成
時ノ人皆此レヲ見聞テ行者ヲ
其ノ金就菩薩ヲ天皇
事ヲ仰セ合セ給リ其ノ光リヲ放チ給ヘル執金剛神攝
東大寺ノ羅索堂ノ北ノ戸ニ于テ今立給ヘリ專ニ人詣テ禮ミ可奉キ像也其ノ羅索堂ハ彼ノ金就行者ノ住ケル昔ノ山寺此レ也亦古

ハ出家ヲモ天皇ノ許サレ无クテ輒ク爲ル事无カリケ然モ勲ニ祈リ請ケル也ケリト語リ傳ヘタトヤ

元興寺中門夜叉施靈驗語 第五十

今昔元興寺ノ中門ニ二天在マス其ノ使者トシ夜叉有リ其ノ夜叉靈驗ヲ施ス事无限シ然レバ其ノ寺ノ僧ヨリ始テ里ノ男女此ノ夜叉ノ許ニ詣テテ或ハ法施ヲ奉リ或ハ供具ヲ備テ心ニ願フ事ヲ祈リ請フニ一トシ不叶ズト云フ事无シ此ニ
人皆(下文闕)

今昔物語集卷第二十別本(抄)

淨藏親生事

昔善宰相ト云人有ケリ其子法師有名ナバ淨藏トナ云ケル修行ニ出テ久ク親ノ許ニ不來ケリ爰カシ所々行ジテ十年許有テ親ノ許ノ不審レバ返來ル家ノ門ノ前ニイミジウ人哭騒グ怪シウ思内ニ入ル今火燈ノド爲程ニコサテモ見苦ケレ日暮レテ入ツル家ノ内ニ人哭キ胸ツツ急ギ入テ人ニ問ヘバ此四五日病給テ此晝失セ給レバ其事ニ依リ人ハカク哭キ嗚ル也ト云ヘバ乍驚走入テ衰チモ脱ギ不レ敢寄ッ見バ露濕ナル所モ无ウヒエ畢テスクミテ伏タリ悲キ事無レ限思ヒノドメテ頭ヨリ黒煙ヲ立テ加持ス二時許加持ドモナニシニカハ驗シ有ム責テ聲ヲ限夜一夜ヲ哭々加持スル夜曙ル程ニ露許喉本温ナルカ力ヲ致シテ加持爲リ日出程ニ實ニ生返リ目ヲ見開テ淨藏ガ顔ニ見合セテ哭ク事イミジヤヲ手ヲ捧ゲテ手ヲ摺テ禮テ云我子ニハ有ラテ佛ノ御コソ有ケレナドテ行ヒアルクヲ制止ケムイミジキ事ノ有ツル我死テ焰魔王宮ニ被レ弱テ罪ヲ被レ定テ地獄ヘ遣ト爲程ニ紺青ノ色ル者我ヲ奪ヒニ奪ツ焰魔王宮ノ人モ爭テカ是ハ罪定マリ者ナ何者ノカクハ奪ソト惜ミ嗚ルサレドモエ惜ミ畢ジト云テ當ノ物ヲ杖ヲ持テ打掃ウサレドモ人多ウ立固テ嗚ル間焰魔王宮ノ檐ニ燭ヲ出來テ付ヌ只モエニモユ焰魔王宮其時ニ驚テ此被レ弱ル宰相ニ喜清行速ニ免セ子ナル僧ノ加持スレ不動尊ノ奪ニ御シテ王宮モ燒キカクシ給フ无益キ事也早々免ヨト有レ

バ免サレ思ツル程ニ爰ニ返テ目ヲ見開タル此大徳枕上ニ居テ加持スル目ヲ見合セタレガ爲ニコ思ニ悦ウ貴悲キ事也此大徳カウ行シカバ今度ハ生キエザラマシカ、ルイミジウ悦ビ思ユ從レ今リ彌ヨ行ヒ不レ懈怠ニカクテ行程飽ス尊ノ驗ヲナシツ、キケル煩フ人ノ許ニモヨバレテ行キテ必ズ其ノ驗シ有ケリカウミ行ク間ニ何ナル先ノ契有ケル者ニカ有ケム不意ナル女落ヌ忍レド人漸知ヌ世間ニ心ウカリケル事无限シ形モ吉ク愛敬有バレ萬人遊敵ニシケルカクスル間ニ此女ニ子生セツ彌何トモ今ハ驗者ニモ不レ仕成ニダ思エモ下ニ具シタ者今ハ不レ隱成ヌレ彌何トモ思ハズ成リ子ノ童ハ五ツ六ツ許ニ成程ニイミジウ悲レバ片時身ヲ不離三月許ニ東山金打ニ八坂ノ寺ニ行テ見バ其寺五重ノ塔有見バ東七八尺許傾キ見ニイト悲シツクロハズバ今一度風吹ベ願サレ此塔イミジウ久ウ成ル塔ナリ佛法ノ從ニ最初ニ有塔也イカデ是ヲ願サセ見ムト爲ル我子ヲ儲妻ヲ具シテ有トモ年來ノ行ヒ佛ヨモ捨給ハジ試ニ加持シテ直サム思テ寺ノ別當ノ許ニ寄テ此御寺ノ塔ハユガミタルメルハ今暫シツクロハズバ願ヌベカ何カガ給ハム爲ルト云別當ノ答ル様此寺ニハ露物モ無シナ持テカ修理モシテラム本目知識曳造タル寺バハカナキ修理モ只知識持テ年來送ルニ時世末ニ成テ人ノ心道心モ无ク成レバ知識モ曳トモ露物加ル人モ侍ラジサレバ只見テ嘆クヨ外ノ事不レ侍ズ淨藏ガ云イト悲キ事也佛法ノ從レ始リ願ハレ給フル堂ナレイカデカ造バ見給ハム明日淨藏ガ思様知給タル様ニ今ハカ云甲斐无キ身ニ罷成レバ今ハ人ニ侍ラネ早ク仕リ置タル佛モ忘レ給ハジ申ナドカ直ル様モ侍ラザラ申バ別當ジウ貴キ事バ是加持シ直シ給ヘト云ケレ淨藏ガ云ク如此ノ事ハ人多ク心モ彌ヨ發テ佛モ被レ念レ給バ明後日許詣テ持セム京中ノ人ニ淨藏ナムカ、ル物ニ狂事ナムト云ト告廻リ給ヘト云テ淨藏ハ歸ヌ別當京ニ出テ人々ニ告ケレ聞次ツ、上達部殿上人君達京中ノ上下馬車集マラ所无クツド事无限シ已時許ニ子ノ

童チ人ニダカセテ八坂ニ致ヌ塔本ニ立テ貴聲捧テ陀羅尼ヲ讀ツ、加持ス一時許加持爲レド露直ル事無ケレ見人共
 サハ猶□何態爲ソト云テサマノニワラフ物共モ有ハラホケナキ態爲ル法師カナワラヒテ返ル者共モ有ケリ
 申時打下ル程ニ俄ニクラガリヌ神打鳴シテ如レ例ク思ヒテ有ルニ空ヨリ黒キ雲細ク下テ塔ノ上ニ懸ル程ニ塔モ不見
 ズ黒キ雲塔ノ周ニ涌キ廻事イミジ一切カバメキテ上ニ雲登リヌ本ノ様ニ空晴ヌ其時ニ塔ヲ見レバ露ユガミタル
 事无萬ノ人其時ニ哭々淨藏ヲ禮ム其後ヨリ淨藏□様々貴ケル其子ノ童ハ今マデ内藏助ニテ有ツ

金峰山金給事

昔修行者ノ金峰山ニ參リテ冬ハ下山ニ下リ夏ハ上候ヒテ年來行フ有ケリ貧シキ事无限シ只詣ル人ノ時々訪ナ便スト
 蓮花會ノ頭爲ル人ノ俄ニ闕レバ亦可爲人無テ此貧キ法師ヲ差リテ一人ガ前ニ可爲思ニザリ只藏王ノ御前ニ
 居テ哭ク外ノ事无御山ニ候ハム心更ニ深シカ、ル大事ヲ闕ツル者ナラ片時可候不有ズ而バ此御山ニ候ハム事
 只今明日許也ト云テ涙ナ如レ雨ク流シテ哭ク事无限シ戸ノ方ヨリ長キ法師ノ髮一寸許生タル輕ラカシ立ガ銀前ニ
 差シテ表頸ニ懸テ形チ恐ナル□不見ズ二問許テ前ニハダカリ立テ云コト□タリ木□カタヒノ身ニ花頭ニ差宛
 ラレニ可爲様□無テ哭嘆キ候ナリ答此修行者ノ云様ゲニ□法師ハト前ニ盛立ヤム此我取ラム物ヲ取テシ立ヨト云
 テフトコロヨリ裏タル物ヲ取出シテ投テ去ヌ怪シウ思テ披テ見レバ金十兩アリ驚キワレ□テ此悦ビ云ムガ料□追着
 ナ御堂ヲ出テ見廻スニ惣人一人モ不見藏王哀ビ給リトケ思テ悲シウ思ル事ト无限シ金ヲバフトコロニ差入テ是
 持テ何ニ爲ムト思程ニ詣集タル人モアマタツドヒ居ヌ有ハ行ジ經テ讀念珠ヲシ禮拜ナ□レル其中ニ禮拜ナシ止

各語ヌル人モ有傍角ニ寄居テ聞バ法師二三人許物語ヲナリテ語様近來藥師寺ノ布施一講八角ノ堂ヲ造其内ニ佛
 師ノ法橋ヲ語ヒテ大安寺ノ釋迦佛ヲ移シ奉タリ其ニ可押金東西求ラル行往還人モ金ヲ持リ尋ラル事有早イミジ
 キ富人ト思ツレ金ハ固物ナリケ語イミジウ成テ聞マ、立走テ足ノ成ム様モ不レ知御山下リテ藥師寺ヘ行ヌ別當ノ
 房ノ前チ行キ行ム法師出來テ云ク何ゾノ持經者ゾト問バ忍テ御房ニ可申事有ル也ト答フ僧走返テ御房ニカウ
 ト申御房人モ無所ニ呼入テ相給ヘリ此法師申テ云年來金峰山□テ行ハ不頼不幸ニ更ニ訪テ不レ得其ニ俄ニ花
 ノ頭ニ差宛ラレ可爲様モ无テ候シニ俄法師ノ詣來テ金ム投取ラセ罷リニサテ播消様ニ失カバ藏王ノ給タル思候也
 ト云テ金ヲ取出セリ別當悦テ取テ云ク金万兩ナニカ我ガ願ノ叶ヌルナ云テ哭事无限シ暫許有テ涙ナノゴヒテ云ク
 金无トモ此事ヲ請引カデ可有ニ非ズ而テ丈六ノ佛ヲ奉テ造テ今金十兩不レ足ズ而テ已ニ十兩ヲ得タリ靈山ノ尺迦金
 峰山ノ藏王ノ恩ヲ貴給ハル是ヲ持テ知ヌ我身ノ深キ重罪忽ニ消ニ失テ後世ノ憑尤深シ亦ハ蓮花會ノ事ニ致テハ他不
 レ知偏ニ可ニアツカウト云ケレ此貧シ法師手摺テ悦テ金峰山ニ返詣ヌ會日漸近ウ成レド此僧アツカウ事モ无クテ
 居レバ山ノ僧ノ云便有僧共ダニ奉ニ用事云ヒ相セテコソアツカヘ□院ノトモカクモ云テ指仰テ居ハル何ナル事ソ
 日ハイト近ウ成ニル何ガシ侍ラム藏王御坐セバセサセ給ナム居バ僧共ハ内々ニイミジキ態カナ從レ昔未ダ闕ヌ事
 ナ无レ由キ法師ニ云テ可關リトテ嘆ク其日ニ成テ多ノ人手毎ニ物ヲ捧テ登ル怪シビ問バ藥師寺ノ別當ノ蓮花ノ頭
 □ト云ケレカ、ル人語ニシエテ日來ハトモカクモアツカハデ有ケリト云ヒ騒グサテ僧供山ノ所无ク居ヘ
 嗚ル前々カクマウケシタル事無ツ今ソイカメシウシタル是ム云ル藏王ノ訪セ給ハム將ニ愚ヤハ世ノ末
 ニ成リタリ御驗カニ貴キ事无限也

伯爵津輕家所藏卷子本

卷第十九 顯基中納言出家受學眞言語 第十六

中納言顯基事

中納言顯基ハ大納言俊賢卿ノ子息也西宮ノ右大臣高明卿ニハ孫也後一條ノ御門ニ仕テ時ノ寵臣カバシ折ニ隨テ
 榮花^ニホコリケリサレドモ夢ノ世ニ心ヲ不^レ留シテ只今度何^ニモ往生^テ遂ム事ヲ願フ明暮レハ生死ノ無常ヲ觀ジ
 此身ノ無^レ墓^キ事ヲ悲^ミケテ常ニハ樂天ノ詩ヲ詠ケル古墓何ノ世ノ人ゾ不^レ知姓與^レ名化シテ作^テテ路ノ傍ノ土ニト年
 年春ノ草生^{タリ}口ヲズサミテ心ヲスマシテイミジキ肅人^ニテ夜^ル晝^ル琵琶^ヲ引^キツ罪無シテ配所ノ月ヲ見^ト申
 サレ人ナリカ、ルホドニ後一條院長元九年ノ春ノ末花ノ御姿タ風ニ痛ミ卯月中旬ノ第九ニ綠ノ御形ヲ正ニ隱レ御
 シキ寶算ハ廿九歳十善ノ玉體モ殿ク萬乘ノ尊儀モ鮮ナリ未^ニ三十^ニニ^ニ滿^タセ給^ハヨホドナレバ百年ノ御往末^ヘモ遙
 ナル様ニコ候シニ簪色變^リ露^ヲ御體忽^ニ消^ヘ御^スベシ思^ハザリ今明カ、ル事可有^テ顯基卿^ハ理^{ハリ}過^テ御別^テ奉
 レ悲^シ禁中^ノ有^様ナド無^レ程^ク昔^ニ引^替タル氣色餘^ニ悲^ク覺候^バレセキアヘ又涙^ダ袂^ノ上^ニ可^レ乾^モ候^ハザリ三台
 九棘^ノ烈^ク袖^ヲ不^レ臨^マ七弁八省^ノ並^ニシモ冠^ヲ不^レ見^ヘ雲客^ノ月卿^ノ群^ニ參^シテ殿上^ニ如^ク競^シモ塵^ヲ空^ク積^リ地
 下ノ北面ノ預^ニ參^シテ門前^ニ成^レ市^シモ草屢繁^シ朝廷^ヲバ風拂^ドモ朝^ギヨメスル人モ無^ク夕殿^ニ螢^ハ飛^ドモ暮^ノ

燈^ヲモ不^レ挑^ゲ事ノ外ナル儀式心愛^ク覺^ケル間殿上燈^ナ備^ウル程ノ事^モ無^シテ何^シカカハリモテ行間^コハ何ナル
 有^様ト^ヤ被^レ尋^ケレ御簾ノ中ヨリ女房ノ聲ヲ以^テ忍^マアサマニテ泣^々申^ケル彼ノ御弟後朱雀院御位ヲ繼^ギ御^セバ諸
 司百官皆行去^テ新帝ノ御事ヲ沙汰之間御跡ノ沙汰スル人獨^モ無^シト答^ヘケ加^様ノ事ヲ見聞^テハヨソノ人目ヲモ不^レ
 レ憚^涕泣^レ候^テ彌々昔^ノ名殘^ノミ忍^バシ悲^ク候^バレ中陰^五旬^ノ程^ハ内裏^ニ祇候^シテサマ^ノ追^善ヲ營^ム晝^ニ終^ヒ
 日^ニ先帝ノ御事ヲ申^シ出^テ人シレズ袂^ヲシボル夜^ハ終^ニ念^佛シテ登^リ給^シ霞^ト聖靈^成等^正覺^ト唱^テ只^一佛^淨
 土^ノ值^遇ヲ祈^リ夜^ト共^ニ泣^キ明^シテ露^モマドロマズ明暮^候ケリ人々^ハ皆當^今ヘ參^リケレ其^レ忠^臣ハ二君^ニ不^レ仕^ズ
 ト申^テ終^ニ不^レ被^レ參^セズヤガテ喪服^ノ色^ヲ不^レ改^メズ墨染^ノ袖^ニ引^替マサレドモ花^ヤカナリシ榮花^ノ形^ヲ無^レ程^ク
 苔^ノ衣^ニヤツシ、姿^タ哀^シナリ事^ニテ候家^ニ一人^ノ妻家^ハ室^ヲアリ袖^ヲヒカヘテ名殘^リヲ惜^ミ跡^ニ數輩^ノ子息^有リ
 袂^ニスガリテ別^チシタウサレドモ更^ニタメラウ心無^ク横川^ノ嶺^ニ登^テ思^入テ動^ケレ觀^念ノ窓^ニ月清^クシ戀^ニ白
 毫^ノ粧^ニテ經行^ノ床霧^ヲ晴^レテ願^フ紫雲^ノ迎^テ上東門院^モ雲深^キスマヒ心苦^シクナ常^ニハトヒ御^シケ後^ニハ大
 原^ノ奥^ニ栖^テ貳^心無^ク佛道^ヲ行^ズサテ二條關^白此^由ヲ殊^ニ貴^ク聞^食テ彼^ノ家^ヘ尋^行給^ヘリ此^ハ神無^月上^旬也^中旬^ノ
 傍^注ノホドナレバ青嵐^梢ヲ拂^ヒ黃葉^道ヲ失^フ如^レ此^心スゴキ道^ヲワケテ尋^入リ給^ウニ遙^ノ西^ノ山^ノ籠^ニ幽^ニスゴ
 キ菴^有リ庭^ニハ薄^{カル}カヤ不^レ殖^ルニ滋^シ垣^ニハツタシノブ不^レ染^シテ悉^ク色^リツケ燒^香ノ煙^リホソク匂^ヒ念^佛
 音^ハホノカニヲトツル山路^ニ日暮^ヲ入^アヒノ鐘^物サビシク洞^戸ニ嵐^シ咽^アイザヨヒノ月^ノ光^リホノカニ物
 ニ哀^ニ有^レ情^ケサマ也禪^門ハ麻^ノ袂^ニヤツレハテ、昔^ノ姿^トモ不^レ見^ズ關^白殿^ヲ奉^レ見^テ夢^ト覺^候ヘコ^ハ何^シ
 テ入^御候^屋覽^ト一^タビ恐^レ一^ビハ悅^コビ被^レ思^ケリ夜^モスガラ後^生井^ノ事^ヲ御^物語^有リ今^生ノ事^ヲ懸^觸一言^モ

申出サレザリ而テ餘ニ貴ク思食テ後生ヲ導キ給ヘト被レ仰テ夜モ既ニ明レバ御歸有ニル庭上マデ奉レ送テ如此入御殊ニ畏リ存候俊實ハ極タル不覺ノ者ニテ候ト許リ被レ申ケリ俊實トハ我御子ノ事也關白殿其時ハ何トモ思ヒトガメテ歸ラレ閑ニ此事ヲ案ジ給ニサセル次モ無キニ我子息ノ事ヲ云出タル見ハナタズ方人ト被レ思タルニ世ヲ背ト云ドモ當ニ恩愛ノ餘執ハ難レ去キ物ナレ思餘ル事ニコ哀ニ思食テ其後事ニ觸レ折ニ隨テ引立テ、扶持シ給ケレミニナシ子ニテ御坐ケレ早ク大納言ノ位マデ至リ給ケル美野大納言ト申ハ、此人ノ事ニテ候也一筋ニ此世ノ事ヲ思ヒ捨テ給テ深山ニ隱居シ給モ、尙子ヲ思道ニハ迷ソコ候メレ親子恩愛ノ習ハ實ニ哀ナル次第ニ候カ、ル親ノ慈悲ヲモ不願昔ノ情ヲモ不レ知ニ親ノ地獄ニ墮テヲメキ叫ヲモ不レ悲餓鬼城ニ候テ飢渴ノ苦ニ悲ヲモ不レ助ケ只我身一リノ世ヲ遂リ求テ今日ハ親ノ月忌トモ不レ知母ノ忌日トモ思ワケズシテ徒ニ送ニ日月ニ哉

攷證補遺

卷第一 波斯匿王娘善光女語 第(廿四)

●雜談集卷五天運之事

在世ニ、波斯匿王ノ女善光ト云ケル、人ニ愛セラレ、富徳ムマレカ、レリ。王ノ云ク、我が女タル故ニ、人愛敬スル也。コレヲ聞テ、我が果報也、王ノ恩ニアラズト云ケリ。王聞テイカリテ、追出シテ、流浪スル非人ニトラセテケリ。善光コレヲ恨ミ憂ヘズシテ、相伴ヒ遊行シケリ。長者ノ子ナリケルガ、親ノ跡ヲ尋テミルニ、地ノ下ニ伏藏アリケリ。ホリイダシテ家ツクリナドシテ、富貴ニナリテ王ニモマサレリ。佛其故ヲ説給ケルハ、昔夫婦ナリシガ、初ハ二人トモニ慳貪ニシテ、三寶ヲ供養セズ。後ニ心ヲ同シテ佛僧ヲ供養シキ。コノ故ニ、初ハマヅシク後ニサカヘタリ。

卷第三 佛頭陀給鸚鵡家行給語 第(二十)

●寶物集卷六頭陀師臨終ノ念ヲ佛ニ問事

波羅奈國ニ鸚鵡頭陀師ト云人、佛ニ申テ言ク、如何ナレバ百年功德ヲ作ル人地獄ニ落テ、百年罪ヲ作ル

人淨土ニ往生スル。佛頭陀師ニ告テ宣ク、百年功德ヲ作ル者ノ地獄ニ落ルハ、命終ノ時ニ臨テ、今生ニ執ヲトムル妄念ニ依ル故也。百年罪ヲ作ル者ノ淨土ニ往生スルハ、臨終ニ彌陀ヲ念ズル故也トコソ宣ヒケレ。此理ヲバシラデ、夢ノ内ノ世ニ着テ成シ、幻ノ間ノ此身ニ執ヲトムル人多クゾ侍ル云々。

卷第三 目連尊者弟語 第(廿四)

●寶物集卷六目連尊者弟ノ事

目連尊者ノ弟アリキ。福貴ニシテ寶ニ乏シカラズ。三千ノ庫倉ヲ成テ寶ヲ滿ルニ處ナシ。雖レ然一紙半錢ノ施ナクシテ、彌寶ヲ尋求ム。目連此事ヲ哀ミ悲テ、弟ヲ教ヘコシラヘテ云ク、汝檀施ヲ行ズベシ。弟ノ長者答テ云ク、檀施ヲ行ジ侍ラバ何トカアランズル。寶又出來ナンヤト云ケレバ、目連思サク、現世ニハ寶出來ベカラズ、後世ノ資糧ニコソナランズレト云バ、檀施ヲ行ズマジカリケレバ、今生ニモ財寶出來ベシト答ヘ給ヒケレバ、長者大ニ喜テ、先ヅ庫倉ヲ作テ檀施ヲ行ズルニ、全ク寶入替ラザリケレバ、長者大ニ怒テ目連ヲ恨ケレバ、目連神通ヲ以テ長者ヲ具シテ、六欲天ニ上リテ見スルニ、七寶ノ宮殿ニ玉ノ床ヲハラヒテ、天女人ヲ待ツ氣色也。長者、如何ナル人ヲ待チ給フゾト問ニ、天女微妙ノ聲ヲ出シテ、南閻浮提ニ目連尊者ノ弟檀施ヲ行ズルユヘニ、來世ニ此所ニ生テ、我等ト樂ムベキ事ヲ兼テ顯ス也ト云ケレバ、長者隨喜ノ泪ヲ流シテ、其後ハ寶ヲ惜ム事ナク、檀施ヲ行フトコソ申テ侍メレ。

卷第四 優婆曇多會波斯匿王妹語 第七

●雜談集卷九佛法盛衰事

付法藏ノ師優婆曇多ハ、佛滅後百年後出世シテ、在世ノ事ヲ戀テ、聞タク思ハレケルマ、ニ、波斯匿王ノ母ノ比丘尼ノ百廿歳ニナリケル、ワカクシテ佛ノ在世ニアヒタテマツレル人ナルマ、ニ、相見シテ在世ノ物語承リタキヨシ聞ヘケレバ、ヲハシマセト返事アリケリ。曇多ノ入給ベキ戸ノ脇ニ、大ナル器物ニ油ヲ入テヲキタルヲ不知シテ、ケコボサレケル。サテマヅ在世ノ僧ノ威儀云何ト問ハレタリケルニ、在世ノ六群ガ數、我房へ來シ、一滴ノ油ヲコボサズ。君ハ無相好佛トイヘルト。スデニ多ノ油ヲコボシ給フ。コレヲモテオボシメシヤレト答ケレバ、サシモノ聖者恥入テミエ給ケルヲミテ、尼ノ云ク、佛中夜ニ御入滅有シカバ、後夜ヨリ僧ノ威儀アラクナレリ。スデニ百歳ニヲヨベリ。時ノ運ナルベシト云ケル。佛ノ光明ノ赫奕タリシ事ヲカタリケルハ、我兒ノ王宮へ御影向有シガ、還御ノ時ヲガミタテマツリシニ、我金ノ釵ヲヲトシタリシガ、佛ノ光明ニ曜テ、世界皆金色ナル故ニ、地ニヲチタルスベテミヘズシテ、佛ハルカニ去ラセ給テ、光明カスカナリシ時、ミツケタリシト語リケル。佛在世ノ威儀如レ此。邊地末代事不足言也。

同 羅漢比丘教國王太子死語 第十二

○大唐西域記卷十二

達摩悉鐵帝國在兩山間。觀貨邏國故地也云々。昏馱多城國之都也。中有伽藍。此國先王所建立。疏崖奠谷。式建堂宇。此國之先未被佛教。但事邪神。數百年前肇弘法化。初此國王愛子嬰疾。徒究醫術有加無瘳。王乃躬往天祠。禮請求救。時彼祠主爲神下語。必當痊復良無他慮。王聞喜慰回駕而歸。路逢沙門容止可觀。駭問其形服。問所從至。此沙門者已證聖果。欲弘佛法故此儀形。而報王曰。我如來弟子。所謂苾芻也。王既憂心。卽先問曰。我子嬰疾生死未分。沙門曰。王先靈可起。愛子難濟。王曰。天神謂其不死。沙門言其當終。詭俗之人言何可信。遲至宮中愛子已死。匿不發喪更問神主。猶曰不死。疹疾當瘳。王便發怒。縛神主而數曰。汝曹群居。長惡妄行威福。我子已死尙云當瘳。此而謬惑孰不可忍。宜戮神主殄滅靈廟。於是殺神主除神像。投縛芻河回駕而還。又遇沙門見而敬悅。稽首謝曰。曩無明導佇足邪途。澆弊雖久沿革在茲。願能垂顧降臨居室。沙門受請隨至中宮。葬子旣已謂沙門曰。人世糾紛生死流轉。我子嬰疾問其去留。神而妄言當必痊差。先承指告果無虛說。斯則其法可奉。惟垂哀愍導此迷徒。遂請沙門揆度伽藍。依其規矩而便建立。自爾之後佛法方隆。故伽藍中精舍。爲羅漢建也。伽藍大精舍中有石佛像。像上懸金銅圓蓋。衆寶莊嚴。人有旋繞蓋亦隨轉。人止蓋止莫測靈鑒。聞諸耆舊曰。或云聖人願力所持。或謂機關祕術所致。觀其堂宇石壁堅峻。考厥衆議莫知實錄。

卷第四 天竺人於海中值惡龍人依比丘教免害語 第十三

○衆經撰雜譬喻經卷下

昔有屠兒。欲供養道人。以其惡者故而無往者。後見一新學沙門威儀詳序。請歸飯食種々備儲。食訖還請此道人。願終身在我家食。道人卽便受之。玩習既久。切見在其前殺生。不敢呵之積有年歲。後屠兒父死作河中鬼。以刀割身卽復還復。道人渡河。鬼捉船曰。沒此道人著河中。乃可得去。船人怖曰。鬼言。吾家昔日供養此道人。積年不呵我殺生。今受此殃。恚故欲殺耳。船人曰。殺生尙受此殃。況乎道人。鬼曰。我知爾恚故耳。若能爲我布施作福。呼名咒願。我便相放。船人盡許爲作福。鬼卽放之。道人卽爲鬼作會。呼名咒願。餘人亦復爲作會。詣河中呼鬼曰。卿得福未。鬼曰卽得。無復苦痛。船人曰。明日當爲卿作福。得自來不。鬼曰得耳。鬼且化作婆羅門像來。手自供養自受咒願。上座爲說經。鬼卽得須陀洹道。歡喜而去。是以主客之宜。理有諫正。雖墮惡道故有善緣。可謂善知識者是大因緣也。

昔有賈客入海採寶。逢大龍神舉船欲翻。諸人恐怖。龍曰。汝等頗遊行彼國不。報言。曾行過之。龍與一大卵如五升瓶。汝持此卵。埋彼國中。大樹下。若不爾者後當殺汝。其人許之。後過彼國。埋卵著市中。大樹下。從是以後。國多災疾疫氣。國王召道術占之。云有鱗卵在國中。故令有災疫。輒推掘燒之。病悉除愈。賈客人後入海。故見龍神重問事狀。賈人曰。昔如神教埋卵市中。國中多有疾疫。王召梵志占之。推得焚燒病者悉除。神曰。恨不殺奴輩。船人問神。何故乃爾也。神曰。卿曾聞某國有健兒某甲不。曰聞之。已終亡矣。神曰我是也。我不存時。喜陵轢國中人民。初無教呵我者但獎我。使我墮鱗蛇中。悉欲盡殺之耳。是以人當相諫從善相順。莫自恃勢力陵轢於人。坐招其患三惡道苦。但可聞聲不可形處。

●難談集卷一同法苛責事

又一向不_レ教訓_一事、其咎可有_レ之。律ノ中ニ、昔師養_ニ弟子_一而不_レ教訓、弟子放逸ニシテ成_ニ大毒蛇_一。我毒蛇トナル事、師ノ教訓闕タル故ト思テ、恨ノ心深ク、師ヲ吞ミケリト云ヘリ。進退實ニ難シ。若シ棄テテ不_レ訓、爲_ニ弟子_一可_レ被_レ侵。住_ニ惡念_一教訓セバ、可_レ成_ニ怨敵_一。只住_ニ慈悲_一之方便、自可_レ免_ニ此難_一者歟。悲智具足ノ菩薩ノ通行也。凡夫ノ師弟、誠ニ難_レ免_ニ此事_一。雖_レ然隨分ニ存_ニ此道理_一、漸々可_レ習_ニ大行_一、不_レ可_レ頓_レ達_一者歟。

卷第四 天竺佛爲盜人但被取眉間玉語 第十七

●難談集卷七願行事

天竺ニ靈像御坐ケル、頂ニ無價ノ寶珠ヲ納メタリケリ。賊人コレヲ取ラントスルニ、像ノ身次第ニ高ク成リ給フ。梯ヲ立テテ取ラントスレバ、彌_レ高ク成リ給ケリ。コ、ニ賊ノ云ク、佛昔菩薩ノ行ヲ行ジ給シ時ニ、國財妻子頭目髑髏、來求ノ者ニヲシミ給事ナカリキ。我貧クシテ、珠ヲ求ルニ惜ミ給フハ、本願ヲ妄リ給ヘルカ。遺像生身、カハリ給ベカラズト申ケル時、クママリテ玉ヲトラレ給ケリ。國王聞シ召タイマシメケルニ、ヌスメル事ナシ、佛ノタビタル也ト、事ノ子細申ケル。御使アリテ像ヲミルニ、イヘルガ如ククママリ給ケリ。仍テ玉ヲ買テ佛ニ納メ、賊ヲユルサレケル。

同 天竺大天語 第廿三

●寶物集卷七舍衛梵士母ヲ犯ス事

舍衛國ニ一人ノ梵士アリ。容好カラン妻ヲ儲ケンガ爲ニ、國中ヲ尋_ニ見巡_一ルニ、我母許ノ美人ナシ。是故ニ母ヲ人ハナレタル處ヘスカシヤリテ、是ヲ犯サントスルニ、母憂事ト思テ_ス捍_トスレドモ、女ハ甲斐ナキ者ニテ、終ニ隨ヒニケリ。可_レ叶事ナラネバ、志深クテ過ス程ニ、女ノ心憂キ習_ハ、逢初テ後ハ度々値ニケリ。其後ハ人目ヲモ憚ラズ、心ニ任テ值ンガ爲ニ、父ヲ殺テケリ。父ナク成テ後ハ、心ノマ、ニ住渡ル程ニ、見聞ク人禁忌ガリ惡ミケレバ、母此事ヲ恥テ、隣國ニ夫ヲ儲テ住ントテ遊ントシケルヲ聞ツケテ、昔コソ母ニテ有シカ。今ハ我妻也。何ゾ他人ノ膚觸ントスルハ安カラズトテ、嘔_リ腹立テ打ケル程ニ、母ヲモ打殺テケリ。梵士祇園精舍ヲ通リケルニ參リタリケレバ、五百ノ羅漢佛弟子等、禁忌シキ罪人也トテ、逃隱テ逢ザリケレバ、又嘔_リヲ成シ腹立テ、僧坊ニ火ヲ放テ燒ツ。多クノ聖教皆燒失ヌ。五逆罪ノ中ニ四逆ヲ既ニ犯シツ。去ドモ佛ハ此重罪ヲ哀ミ悲テ、善知識ト成テ救ヒ給ヒタル事アリ。如此惡人スラ善知識ノ力ニ助カル。況ヤ是程ノ重罪ナカラン人ハ、善知識ニ逢テ往生極樂ヲ願テ、努々疑ヒ有ベカラザル也。此梵士ト云ハ大天ガ事歟。或經ニハ、死_シ後葬ルニ、重罪ニ依テ燒ケズ。故ニ犬ノ糞ヲカケテ燒クナド申タメリ。又祇園精舍ノ僧坊ヲ燒ク度ニ、多クノ佛弟子ヲ殺スト申シタメル。聖教ノ_{タガヒ}異能々定説ヲ尋ヌベキ也。

卷第五 般沙羅王五百卵初知父母語 第六

◎曾我物語卷六ふん女が事

そも／＼ふん女と申す由來を委しく尋ぬるに、昔大國流砂の水上に、ふん女といへる女あり。天下に聞ゆる長者なり。金銀珠玉のみならず、七珍萬寶四方の藏にあまりけり。然れども、如何なる罪の報にや、一人の子なし。悲みて祈れどもかなはず。ある時思はざるに懷妊す。悦の思をなすに、苦めることいふばかりなし。されども子の出來ぬべきことの悦しさに、物の數とも思はざりけり。日數積るほどに、産の紐を解く。見れば人にはあらで、卵を五百生みたり。これは如何に、一つなりとも不思議なるぞかし。五百まで生ること唯事にあらず。縁なき子を強ひて祈るによつて、天の憎を蒙ると覺えたり。解りなば、如何なるものにて親を損じ、人を害すべきやらん。その上胎卵濕化のうち、卵生罪深しと説かれたり。置くべからずとて、箱に入れて、うらさの浪に流し捨てけり。不思議なる例なり。遙の川の末にれうかんといふ所に、きよはくといふひんだう無縁の老人あり。旦暮この河の魚族を漁り、身命を助かりけるが、折節釣する所へこの箱流れ寄りたり。取上げ開き見れば卵なり。何者の子やらんと思ひ、家に取りて歸り、妻にかくと語る。女これを見て、恐ろしや、如何なるものにか解りなん。主も様ありてこそ捨てつらん。急ぎ元の川に入れよといふ。男の曰く、唯置き候へ。斯様なるものには不思議もこそあれ。たとひ僻事ありとも、吾等は齡幾程もあるべきならねば、彼が様を見よとて、物に包み、暖にしておきたりければ、程も

なく美しき男子に解りぬ。吾古より子のなき事を歎きに思ふに、然るべき瑞相、天の憐みにやと悦びて、また見れば、解り／＼て五百人にぞ解り揃ひける。一つを捨てて一つを養はん事、うらめしく黙止しがたくて、取集め養ひけるに、一つも恙なく成長しけるぞ不思議なる。實に夫婦二人の時だにも、渡世かなひ難く乏しかりけり。況してこの者どもを育てける程に、朝夕の生路に侘びければ、此處や彼處に徘徊し、命を助からんとする程に、心ならず猛惡になり、思はずも忿心に住す。瞋恚を旨として驕慢にあまりければ、外道にも近づきけり。或時彼等いひけるは、吾等一人ならず饑餓に及べり。さればとて徒に身を捨つべきにあらず。この川上にふん女とて長者あり。財寶藏におき餘る。いざや行きてうち破り、寶を取りぬべしといひければ、一人は進み出でいふやう、さる事なれども、それいみじき果報者を、我等卑しき貧力にて、寶を奪はんこと思ひも寄らず、却つて身の仇となりぬべし。案じ給へといふ。今一人進みていふやう、さらば外道どもを語らひ、彼等が神通の力を借りて破つて見ん。然るべしとて、飛天外道といふ者の許へいひ遣りたりければ、素より鬪争修羅を好むものなれば、同類を催し打立ちける。裝束には流轉生死の鎧直垂に、惡業煩惱の籠手をさし、貪慾の脇立に、因果撥無の脛當に、愚癡暗蔽のつならぬさき、極大邪見の膝甲に、誹謗三寶の裙金物をぞ打つたりける。三界無安の白星の兜に、六趣輪廻の頬當、瞋恚憤怒の刀をさし、放逸無慚の太刀を佩き、殺生偷盜の大弓に、破戒無明の弦をかけ、苦患極重の箠には、諸法愛著の矢數をさし、四天王の馬の太く逞しきに、四苦八苦の鞍置きてぞ乗つたりける。異類異形の下外道ども、思ひ／＼の裝束に、色々の旗さし、數を知らずぞ集りける。城中には靜まりかへりて音

もせず。されども用心嚴しくして、容易く入るべきやうはなし。時を移してゆらへたり。かのふん女と申すは、同じく福者といひながら、三寶を崇め仁義を亂さぬ賢人なり。如何でか諸天も捨て給ふべきならねば、ふん女を渴仰し給ひけり。かくては如何あるべきとて、死生を知らざる外道ども、喚き叫んで亂れ入る。その時惡魔を降伏の四天十二天影向なりて、四角四方を守り給ふ。四天はもとより甲冑をよろひ、弓箭を離さぬ勇士なれば、面もふらず障へ給ふ。火天猛火を放し、風天風を吹かせ、各城を守り給ふ。中にも水天は弓矢を守らんと誓ひ給ふなれば、數の眷族を引連れ、妙觀察智の旗さへせ、殊に進みて見え給ふ。その日の御装束には、九品正覺の直垂に、相好莊嚴の籠手をさし、上求菩提の小具足に、下化衆生の脛當、しくりやうくわんの釘靴はき、大悲大衆の頬當し、無趣方便の赤糸のけをひかせ、紫磨黄金の裾金物をこそ打つたりけれ。萬徳圓滿の月眞甲にうち、畢竟空、四空の四方白の兜を猪首に着、五劫思惟の嚴物造の太刀を佩き、首楞嚴定の刀をさし、火舎三昧の月弓、實相般若の弦をかけ、智徳無量の矢數をさし、隨類化現を羽に交へ、管高に負ひなし給ふ。元より手馴れし大蛇後より匍ひかゝり、左右の肩に手を置き、兜の上に頭をもたせ、兩眼の光明にして、時々電四方に散り、紫の下の色鮮にして、折々火焰を吹出す勢天に餘る。今の世に兜の龍頭をうつこと、この時よりも始りけり。各床几に腰をかけ宣ひけるは、大修羅王が戰の強きも佛力にはかなはず。ましてやいはん、彼等が勇、ものの數にて數ならず、蟻の塔とも覺えたり。城中靜まれとぞ下知し給ふ。こゝに城の中より武者一人進み出で申しけるは、唯今寄來る兵は、何處の國の如何なる者ぞ。また如何なる宿意あるぞ。委しく名のれといひければ、五百餘人の

兵聞きて、彼等には親もなし、系圖もなし。生るゝ所を知らざれば、何條誰と名のるべし。朝夕思ふ事とは、寶の欲しさばかりなり。急ぎ藏を開き、財寶を興へ給へ。吾等思ふ程取りて歸らんとといふ。心得ぬ言葉かな。人により分に隨ひ、氏も名字もあるものを。猛惡の身不思議なり、委しく申せといひければ、問うては何にし給ふべき。さりながら、この川上より流れ來たる五百人の卵の流人なり。謂なければ人知らず。急ぎ寶を施して歸すべしとぞ申しける。流れ來たる兵といふを、ふん女つくんと聞きて怪しく思ひ、槽の下に歩み出でて、五百人の殿ばら近く寄り給へ。尋ねべき事ありといひければ、一人堀の際に寄りたり。そもく流れ來たると仰せられつる言葉について申すぞとよ。姿は何にて流れけるぞ。寶をば出ださでむづかしとは言ひながら、吾等が昔は如何なるものか生みたりけん、五百の卵にて水上より流れけるを取上げて育てけるが、かくなりぬといふ。さればこそと思ひ、その卵は何に入れけるぞ。玉の手箱に入れ、上には銘を書きしなり。銘をば何と書きたるぞ。はうしやうろの箱と書けり。さては疑ふ所なし。是はそなたのししやうなり。こなたの證據には、若しこの卵、恙なく成長あらば訪ね來よ。ふん女と書きて判を捺し、箱の底に入れたりしが、刹那も肌を離さじと、頸に懸け持ちたりとて、懷よりも取出す。さては疑ふ所なし。汝等は自らが子どもなりとて、門戸を開きて出でければ、尾花の如く支へたる、鉞劍をも捨てにけり。母も子どもの懷しさに、劍の刃も忘れつゝ、彼等が中へ走り入りて見廻せば、兵も兜を脱ぎ、弓矢を横へ、各大地に跪く。何時しか母は懷しく、思ひの涙に袖しぼる。並居たる兵も、同じ心になりけり。彼もこれも、そかといふ情の袖も香しく、憐み憐む装は、見るに涙も進みけり。實に

や恩愛の中ほど悲しき事あらじ。誠や夜叉羅刹を従へて、猛く勇める武士も、母一人の言葉に、皆靡くぞ哀なる。かくて城中に誘ひ入れ、親子の陸懇なり云々。かのふん女と申しし人、後には大辨財天と現れ給ふとかや。五百人の人々は五百童子となり、その一はいんやく預り給ふ神と現れ、はうしやうらうの箱をも、その中に持たせ給ふ。一切衆生の願を悉く汲みて、安樂世界に迎へんと誓ひ給ふ。かやうに猛き弓取も、母には従ふ習ぞかし。

卷第五 天竺王宮燒不歎比丘語 第十五

○宗鏡錄卷六十四

故知諸苦所因。貪欲爲本。若貪心暫起。爲五欲之火焚燒。覺意纒生。被三界之輪繫縛。如帝釋與修羅戰勝造得勝堂。七寶樓觀莊嚴奇特。梁柱楹櫺皆容一綫。不相著而能相持。天福之妙力能如此。目連飛行。帝釋將目連看堂。諸天女皆羞目連。悉隱逃不出。目連念。帝釋著樂不修道本。卽變化火燒得勝堂。燼然崩壞。仍爲帝釋廣說無常。帝釋歡喜。後堂儼然無灰煙色。釋曰。以帝釋恃其天福執着有爲故。目連垂方便門示無常境。問。天堂燼然崩壞。云何儼然無灰煙之色。答。此火非是目連神通之火。卽是帝釋心中火。故法華經云。貪著所愛則爲所燒。既以貪著之心。遂見宮殿焚蕪。及悟無常之事。則貪欲之火潛消。所以卽見堂殿宛然無有灰煙之色云々。

同 天竺牧牛人入穴不出成石語 第卅一

○大慈恩寺三藏法師傳

瞻波國南界數十由旬。有大山林云々。人無敢行。相傳云。先佛未出之時。有一牧牛人。牧數百頭牛。驅至林中。有一牛離群獨去。常失不知所在。至暮欲歸還到群內。而光色殊悅嗚吼異常。諸牛成畏。無敢處其前者。如是多日。牧牛人怪其所以。私候目之。須臾還去。遂逐觀之。見牛入一石孔。人亦隨入。可行四五里。豁然大明。林野光華多異花果。爛然溢目。蓋非俗內所有。見牛於一處食草。草色香潤。亦人間所無。其人見諸果樹。黃赤如金香而且大。乃摘取一顆。心雖貪愛。仍懼不敢食。少時牛出人亦隨歸。至石孔未出之間。有一惡鬼奪其果留。牧牛人以此問一大醫。并說果狀。醫言不可卽食。宜方便持一出來。後日復隨牛入。還摘一顆懷欲將歸。鬼復遮奪。其人以果內於口中。鬼復撮其喉。人卽咽之。果既入腹身遂洪大。頭雖得出身猶在孔。竟不得歸。後家人尋訪。見其形變無不驚懼。然尙能語說其所由。家人歸還。多命手力欲共出之。竟無移動。國王聞之。自觀慮爲後患。遣人掘挽亦不能動。年月既久漸變爲石。猶有人狀。後更有王。知其爲仙果所變。謂侍臣曰。彼旣因藥身變。卽身是藥。觀是石。其體終是神靈。宜遣人將鎚鑽斷取少許將來。臣奉王命與工匠往。盡力鑄鑿。凡經一旬不得一片。今猶現在。

○酉陽雜俎卷十八木篇

瞻波國有人。收羊千百餘頭。有一羊離群。忽失所在。至暮方歸。形色嗚吼異常。群羊異(一本)之。明日遂獨

行。主因隨之入一穴。行五六里。豁然明朗。花木皆非人間所有。羊於一處食草。草不可識。有果作黃金色。牧羊人切一將還。爲鬼所奪。又一日復往取此果。至穴鬼復欲奪。其人急吞之。身遂暴長。頭纒出身塞於穴。數日化爲石也。

卷第七 震旦李思一依涅槃經力活語 第卅二

○法苑珠林卷九十一破齋篇感應緣

唐隴西李思一。今居相州之滏陽縣。貞觀二十年正月已死。經日而蘇。語在冥報記。至永徽三年五月又死。經一宿而蘇。說云。以年命未盡。蒙王放歸於王前。見相州滏陽縣法觀寺僧辯珪。又見會福寺僧弘亮及慧寶三人。並在王前。辯答見冥官云。慧寶死時未至。宜修功德。辯珪弘亮今歲必死。辯珪等是年果相繼卒。後寺僧令一巫者就弘亮等舊房。召二僧問之。辯珪曰。我爲破齋今受大苦。兼語諸弟子等曰。爲我作齋救拔苦難。弟子輩卽爲營齋。巫者又云。辯珪已得免罪。弘亮云。我爲破齋。兼妄持人長短。今被拔舌痛苦。不能多言。相州智力寺僧慧永等說之。出冥報拾遺

卷第九 會稽州曹娥戀父入江死自亦身投江語 第七

○源平盛衰記卷十九曹公尋父骸事

昔太國ニ曹公ト云シ者ノ父、秦泉河ト云フ川ヲ渡リケルニ、流レ烈シク波高フシテ、舟覆リ水ニ溺レテ

失セニケリ。曹公歎キ悲ミテ、彼ノ秦泉河ノ底ニ入リテ、父ガ骸ヲ尋ネケルニ、水神之ヲ憐ミ、曹公ヲ相具シテ、其骸ノ流レ寄タル所ニ行キ、十五里ヲ下ツテ、柳原ノ下ニ推上グラレタリケルヲ與ヘタリケレバ、曹公泣々父ノ骸ヲ懷イテ、臥シテカクゾ云ケル。

昔惜身命爲報高恩 今雙遺骨爲休戀慕

トテ亡父ノ骸ヲ懷キ、臥シナガラ曹公七日ニ死ニケリ。オチコト遠近人モ是ヲ見テ、皆涙ヲゾ流シケル。

同 歐尙戀父死墓造菴居住語 第八

○淵鑑類函卷四百二十九虎部

王孚安成記曰。都區寶居父喪。里人格虎。虎匿其廬。寶以蓑衣覆藏之。虎以故得免。時負野獸以報。寶由是知名。

晉郭文嘗有虎。忽張口向文。文視其口有橫骨。乃手以探去之。虎至明日。乃獻一鹿于堂前。

同 震旦禽堅自夷域迎父孝養語 第九

○私聚百因緣集卷二戀子事

南天竺西城國ニ戀子ト云フ兵モノアリ。一天ノ内ニ無ニ並レ勢者、四海ノ間ニ振ニ武名。彼國ノ帝ハ此ヲ天下ノ寶ト、難レ有ニ國內ニ御守ト思シ食ス。朝恩餘身、榮超ニ將々タリ。其時南海國ト西城國ノ境ニ有テ事、

理ヲ兩州ニ難_レ付シテ、遂ニ成_ニ合戰。國互ニ廻計、兵各馳セ集ル。西城國ノ帝催_ニ四城戎_一シテ、向_ニ南海國境_一タマフ。戀子其中ニ大將ナリ。懷_ニ宣旨_一テ馳_ニ向敵陳_一。戀子有_ニ歎事_一。家ニ有_ニ借老友_一、跡ニ留_ニ妻夫殘_一。思_ニ捨妻子恩愛悲_一、敵陳失_ニ命事_一、兵ノ定レル習ヒナリ。戎常ノ振舞也。若シ不破_ニ南海國陳_一、人ヲバ不知、於_ニ我身_一ハ生_ニ命テ不_レ可_レ歸。然_ニ我_レ年來無_レ子事ヲ歎キ思シニ、至_ニ時緣_一テ、友不_レ只經_ニ六箇月_一タリ。成_ニ身々_一ラン事在_ニ近_一。其終ヲ不_レ見シテ、受_レ箭當_レ銚_テ命ヲ滅サン事、殊ニ罪深ク思_ルナリトテ、破_レ陳順_レ敵_ヘル道ノ武キ聞_ヘ、響_ニ南天竺_一男ナレドモ悲_ニ胎内子別_一ニテ、鎧ノ袖ニ雨_レ涙_{ケル}。爾レバ親子ノ別レハ勝_ニ萬悲_一タリ。心武キ人モ無_ニ別道_一耶。況ンヤ女ノ思ヒ、爾コソ悲シカリケメ。于_レ時戀子解_レ髻_テ、無量壽佛ノ聖容三寸ノ金像ヲ取出シ奉_テ、妻ニ云フ様、此金像ハ戀子ガ代々相傳ノ重寶也。汝ト夫妻ダニモ、年來ニナレドモ、裏_ニ髻中_一テ未ダ知ラセズ。胎内ノ子女ハ難_レ知。我_レ今度ノ軍ニ死センハ決定ナリ。設ヒ男子ナリトモ女子ナリトモ、父ノ形見ニ此金像ヲ見セテ、懸_レ頸助_ニ我阿修羅城苦患_一ヨト、勲ニ契リテ去リヌ。爾ル程ニ南海國ノ軍武クシテ、千敵大婆羅門ヲ前トシテ、責_ニ入西城國_一ニ、塞ギ戰フトイヘ共、軍始マリテ云_ニ三箇年_一ニ、南海國ニ被_レ破_テ、彼ノ境モ付_ニ敵國_一ケテ、千敵大婆羅門一_レ心ニシテ、戀子ヲ卷籠_テ、不_レ有_レ間_{シテ}生取リ、奉_ニ南海國帝_一。人ハ千敵也。我ハ只一騎也。戀子武シト云ヘドモ、被_ニ生取_一テ、遺恨ノ思ヒ滿_レ胸_{テリ}。敵王令_ニ問_一戀子_一テ言ハク、汝ハ西城國第一ノ者ナリ。數ノ軍兵大將軍、陳ヲ被_レ破_ハ常ノ事也。何ゾ乍_レ存_レ被_レ取_ニ敵陳_一ト。戀子申ケルハ、大將軍ノ靜ナル事ハ、陳ノ不_レ傾間也。大陳已ニ傾ケバ、軍徒氣色騷_ヒ、國力弱ク成テ、官兵捉_テ輕ンズル程ニ成シカバ、敵ニクンデ死

ストモ、國ニ歸テ不_レ生。軍被_レ破_ニ他國_一テ、生テ歸_ニ古郷_一ン事、生涯ノ遺恨也。同ク死ナン命ハ敵中ニゾト思テ、招_レ箭_レ呢_レ銚_テ、千度百度クミシカドモ、命ト云フ物ハ有限事ニヤ、人ヲバ滅シ、カドモ不_レ蒙_レ疵シテ、遂ニ爲_ニ千敵_一ニ卷籠_{ラレテ}、自害ノ不_レ求_レ間_{被_ニ存_一テ、蒙_ニ不覺恥_一コト。聞_レ之雲客月卿ヲ始トシテ、至_ニ四海戎_一マデ、眞_ニ嚴カリケル_一武者哉ト讚ケル。許_ニ死罪_一シテ人ニ預ケラル。爾ル程ニ戀子ガ妻、月滿テ男子ヲ平産ス。貌形勝_レ人タリ。如何計リ父ニ見_ニ恚思_一ヒツラン。不_レ及_レ力母一人シテ養ヒ長ケル。其名ヲバ云_ニ戀父_一。母思ケルニ、戀父ガ父ノ云置シ事アリ。僧房ニ近付テ、父ノ後生菩提ヲ助クル心セヨト云テ、遂ニ成_ニ法師_一ンズレバ、出家セヨトゾ朝夕云ケル。漸ク成長シテ、戀父十四歳ノ時、是ヲ遣_ニ僧坊_一ントテ出立セケル。或人見_ニ戀父_一テ申ケルハ、糸惜ノ兒ノ形、哀_レ父ニ奉_レ見_レバヤ、何ニ喜給ント云フ。聞_レ之テ後、戀父殊ニ歎キタル色アリ。母奇_ニミテ問_レ故。皆人ハ父母並ベテ在リ。我_レ未ダ父ト云フ人體ヲ見ズ。年來此事無_ニ覺塚_一侍リツレドモ、少カリツル程ハ何ト無テ過ヌ。今ハ是_レ程ニ成ツテ、可_レ遣_ニ僧邊_一ト、云ヒモ得ズシテ泣ニケル。母申サレシハ、汝ガ父ヲバ戀子ト云キ。勝_レ人タル武者ニテ、帝モ嚴者ト被_ニ思食_一タルナリ。敵國ト有_レ軍シニ大將軍ヲ給キ。汝胎内ニ有ツテ未_レ生、行向ヒテ此國ノ軍被_レ破シ時、三箇年ノ戰ニ存_ニ殘_一レル者皆歸リケルガ、汝ガ父ハ敵中ニ打入リテ被_ニ存_一取_テ、南海國ノ帝ノ御前ニ詣_レケルトハ聞シカドモ、何_レ成_レケン後ニハ不_レ知。是_レレコソハ父ノ平生ノ時ノ形見トテ、髻ノ中ヨリ解キ出シテ留置キタマフトテ、金像ノ無量壽佛三寸ノ聖容ヲ取出シ奉ル。戀父得_レ之テ捧_ニ月上_一テ悲シム。只母モ子モ泣ヨリ外ノ事ハ無リケリ。戀父母ニ申ケルハ、我ニ賜_レ暇_レタマヘ。行_ニ南海國_一テ、尋_ニ}

父行末ニテ還ラント云フ。母ノ云ク、汝ガ父ニ別レテ、汝一人ヲ養ヒ育テ、戀子ノ形見トモ、現世後世ノ財トモ、汝一人計ヲコソ憑シク悦シク思フニ、十四歳マデ養立タル母ヲバ振捨テ、自ニ胎内ニ別レテ、未ダ見ザル尋ニ父跡ニト云フコソ口惜ケレ。抑、亦尋行タリトモ、今生テ會ン事モ難シ。渡ニ敵手ニ者ノ命ノ存タル事ハ稀也。設ヒ又存命スルトモ、何ナル戎ノ手ニカ渡リ、何成ル方ニ趣キケン。此ヨリ南海國ノ城マデハ、行ク道ニ三箇年程也。一日モ不レ休往キ返ルトモ有ニ六箇年。互ニ命無定、不ニ往付ニシテ死センコト決定ナリ。可ニ思留ニトゾ云ケル。戀父云ク、眞ニ世間ノ不定ハ爾ル事有ベシ。但シ何事ノ罪ノ酬ヒカ、父ニハ胎内ニシテ別レタリ。母ニハ不レ返跡ニ可レ奉レ後。傳聞ク、親ノ孝養ヲバ佛天ノ哀ミ給フ事ナリト。何ハ天衆地類可レ不ニ瞻哀給。我が父實ニ死シテ御坐サバ、取ニ其骸ニテ可レ歸。若シ自ラ生キテ御坐サバ、爲レ親爲レ子ル呢ビナレバ、我が不レ奉レ見トモ戀シク思ヒ奉ガ如ク、父我ヲバ爾コソ思ハセ給ラン。其ヲ不レ奉レ尋シテ止ナバ、經ニ無量ニトモ何カハ可レ奉レ會。在處ハ皆昔ノ敵ナレバ、誰カ可有ニ奉レ仕人ニヤ。父ニコソ不レ奉レ副トモ、母ニハ有ニ下人、里人ノ情モ、住馴テ御坐マス處ナレバ深カル可シ。家ナンドモ、加様ニ居在バ憑シキ方モ有リ。況ンヤ母成ニ十四歳ニ迄、夜晝不レ奉レ離。父ハ未ダ一度モ見奉ラズ。比レ之スルニ父ノ思ヒコソ悲ケレ。若シ又佛天ノ助ニテ、父ヲ我が國へ具足シ返ル事有ラバ、父ト母ト二人並ベ奉テ、一度ニ奉レ拜ン喜バシサハ、生々世々ノ中ニモ難レ有事ゾ侍ラメ。何カニ留メ給フトモ不レ留レ。南海國へ可レ往也トゾ細々ト云ケル。母折レ理テ不レ及レ力許シケリ。戀父三寸ノ金像ヲ懸レ頸、喜テ拜ニ禮母ニシテ出ニケリ。理リヲバ互ニ乍レ云、親子ノ別レハ何ハ悲カリケン。毎レ日ニ折レ花ヲ奉ニ金像、十方ノ三寶ニ

手向ケテ、南無四十八願無量壽佛、十方三寶天衆地類、我が父ト云人ニ今生ニテ合セ給へ。亦我が母歸リ付ンマデ平カニシテ、父母並ベテ見奉ル事ヲ令レ得タマヘト、毎ニ歩足ニ祈念シテ行ケル。サスガニ十四歳ナンドヨリ行ケバ、思フ程ニモ不レ進マシ。兩州ノ境中惡キ事ニテ、兎角障ケル程ニ、四年半ニシテ南海國ノ城へ行キ付タリケリ。爾ル程ニ戀子ハ、初メツ方ハ堅ク瞻リケレドモ、過ニ十四年ケレバ、禁ムコトハ無リケリ。只人ニ預ケル許ニテ、羈居タリケル。無隱事ニテ在ケレバ、未ダ存ヘテ在ゾト聞テケリ。何許カ喜バシカリケン。其門ト其家ト細カニ人ニ被レ教、其門ニイ伺フ程ニ、有ル夕暮ニ、鬢白キ翁ノ事ノ外ニ疲テ、成ニ七十有餘ニラント見ルガ、心細グニ詠メ出テ、我が立タルヲ見テ、何ト思フラン、心ノ底ハ不知、漸ク歩ミ出ケリ。戀父ガ母ノ謂ヒケルハ、我が父ハ六十餘ノ人ニコソ御坐ナルニ、無間物ヲ思フニハ、事ノ外人ノ年ヨルナル事ナレバ、此人若シヤ我が父ニテ御坐ナラント思フ。戀子ハ亦親子ノ呢ビ、世々生々ノ事ナレバ、只人ヲ見ルニ同カラシヤ。戀父問テ云ク、此ニ西城國ヨリ、兩州ノ軍ノ時被レ取テ在マシケル、戀子ト云フ人ガ御坐マスカト問フ。翁云ク、其レハ何ヨリ尋ネタマフゾト云フ。戀父云ク、西城國ヨリ來レル其人ノ子ニテ侍ル也ト云フ。サル事モ有ント思ヒケレドモ、靜ニ騒心ニテ、我コソ戀子ト云フ者ナレ。去事不レ覺ト云ヒケレバ、戀父打泣キ申ケルハ、若シ父ニテ御坐サバ覺給ラン。我レ未ダ胎内ニ在ケル時、軍ニ出デ給フトテ、鬢ノ中ヨリ解テ留メ給ヒケル御形見ヲ奉レ持テ參レリトテ、三寸ノ金像ヲ取出ス。爰ニ戀父戀子、手ト手ヲ取合セテ、未ダ見ザル取ニ父手ニ取ニ子手ニテ、合レ音テ泣叫ブ。其國ノ帝、夢ニ得ニ天告ニタマフ、西城國ノ戀父父ヲ哭シ來ル。古郷ニ留レ母、悲シム念ヒ深シ。是レ則チ南

浮第一ノ善人、孝養無雙ノ者也。佛天並ビ隨喜シ、帝同ク可レ哀ト。天王此事ヲ仰ニ臣下ニ如レ上。王臣貴ビ哀デ許ニ戀子。即チ天地ノ感ナリ。在レ勅ヲ相ニ加御使ニタマフ。境マデ送ラル。聞レ之者見ル者、孝養ノ嚴事ヲ思ヒ知リ、親子契ノ哀ニ深事。而シテ八箇年ト云フニ、具足シテ歸ニ付古郷ニ戀父其時二十一歳。爾テモ我が母ノ死シテヤ在ル、亦生テヤ在スラン。是ノミ歎キ來ツテ見レバ、庭ノ蓬モ荒野トナリ、家ハ破レ崩レ、棟廊不ニ見分。深キ葎ニ立チ、向レ内ヲ呼ビケルハ、戀父是ニ來レリ。母在サバ、父ノ戀子來リ給ヘリ。早ク出見タマヘ。母内ヨリ答フ、我レ于レ今生タリ。汝ヲ戀フル悲ミ、以レ之爲レ命ト。父ハ後ロニ老トシテ、懸ニ鶴杖ニ立タマフ。母ハ内ヨリ衰々テ、頂ニ鶴髮ニテ出タマフ。父母二人ヲ並ベ奉リ、大地ニ倒レ臥テ呼リ禮シテ申ケル、南無四十八願無量壽如來、十方三寶天衆地類、我レ八箇年ノ間、寤テモ寐テモ祈リ悲シム事ハ、今既ニ満足シヌ。佛天願クハニ親ヲ心安ク、孝ニ羽含ニ奉ル程ノ授ニ果報ニタマヘト、七タビ禮ニ金像ニス。放ニ光明ニテ天ニ聳ニ紫雲、大地將レ動。彼國ノ習、孝養ノ人ヲ爲ニ上々人。是ヲ以テ彼國ノ大王聞食シ哀ミテ、位ヲ讓ニ戀子ニ爲レ帝。堯王ノ天子如レ授ニ虞舜。國榮ヘ人貴ク、造ニ興大王御願大伽藍ニ親子三人往ニ生極樂。當レ知現當兩福、不レ如ニ歸佛孝順ニ云々。

卷第九 河南人婦依姑令食蚯蚓羹得現報語 第卅二

○晋書列傳第五十八

盛彥字翁子。廣陵人也。少有異才。年八歲。詣吳太尉戴昌。昌贈詩以觀之。彥於坐答之。辭甚慷慨。母王氏因

疾失明。彥每言及。未嘗不流涕。於是不應辟召。躬自侍養。母食必自哺之。母既疾久。至于婢使數見捶撻。婢忿恨。伺彥暫行。取蟬蟻炙飴之。母食以爲美。然疑是異物。密藏以示彥。彥見之抱母慟哭。絕而復蘇。母目豁然即開。從此遂愈。彥仕吳至中書侍郎。

卷第十 漢武帝以張騫令見天河水上語 第四

●詞林采葉抄第六七夕姫ノ條

七夕の五百機立て織る布の秋さり衣たれかとりみん

七夕つめは七夕姫を云。證明白也。寧彥星機ハカらるべけん哉。牽牛織女の女神男神の事、古き物語にありといへども、作者未レ勘之、故不レ載之焉。金谷園記曰。漢武帝張騫使。令極銀河源。騫到牽牛國孟津。時織女河邊洗身。問曰。何故至此乎。騫曰。依漢帝勅。欲令極銀河源。織女云不可極。速歸觀漢帝。與一様一怪石。騫還下界獻帝。東方朔云。此是織女支機石也矣。經三年歸云々。漢帝妃宮。以此支機石始錦織。已上注。

(和歌童蒙抄第一天部參閱)

同 漢元帝后王照君行胡國語 第五

○後漢書卷八十九南匈奴列傳

初元帝時。以良家子選入掖庭。時呼韓邪來朝。帝敕以宮女五人賜之。昭君入宮數歲。不得見御積悲怨。乃請

掖庭令求行呼韓邪。臨辭大會。帝召五女以示之。昭君豐容靚飾光明漢宮。顧景裴回竦動左右。帝見大驚意欲留之。而難於失信。遂與匈奴。

●和歌童蒙抄第六資用部

見るからにかゝみのかげのつらきかなかゝらざりせばかゝらましやは

後拾遺十七に有。王照君を懷國法師がよめるなり。昔漢王三千人の妃あり。胡のまびす奏して云く、妃一人給はらむ。若したまはらずば、國の爲にあしく、給はりたらば、國のかためとならむと申す。王これを聞て、見めぐらむに數多ければ、畫工を召て、三千人のかたちをかきうつさせて、中にもみにくからむを給はむとす。仍て畫工に、われもくんと黄金のまひなひを送る。王照君鏡をみるに、かたち世にすぐれたるを、みづからたのみて、まひなひをせず。此故にふでを偽りて、王照君をみにくくかけり。仍てまびすにたぶ時、帝みたまふに、かたちたぐひなければ、まびすみつればとどめがたし。つひにゐてさる。頃は八月ばかり、月あかかりけり。照君ふるさとをかへりみつゝ、なげけどかひなし。漢書にみえたり。

卷第十 莊子見畜類所行走逃語 第十三

◎十訓抄中卷可存忠信廉直旨事

楚の襄王、晉の國をうたんとす。孫叔敖これを諫めていはく、園の楡ユの上に蟬露を飲まんとす。後に螳螂の犯さんとするをしらず。螳螂又蟬をのみ守りて、後に黄雀の犯さんとするをしらず。黄雀又螳螂をの

み守りて、楡の下に弓を引いて、童子の犯さんとするを知らず。童子又黄雀をのみ守りて、前に深き谷、後に掘り株のある事をしらずして、身をあやまてり。これ皆前に利をのみ思ひて、後の害を顧みざる故なりと申せり。王此の時さとりを開きて、晉をせむといふ事を止まり給ひぬ。

(劉向說苑正諫篇。韓詩外傳卷十等參閱)

同 伯驛人隨遺言金副死人置得德語 第廿二

○後漢書列傳第七十一

王恂字少林。廣漢新都人也。恂嘗詣京師。於空舍中見一書生疾困。感而視之。書生謂恂曰。我當到洛陽而被病。命在須臾。腰下有金十斤。願以相贈。死後乞藏骸骨。未及問姓名而絕。恂即鬻金一斤。營其殯葬。餘金悉置棺下。人無知者。後歸數年。縣署恂大度亭長。初到之日。有馬馳入亭中而止。其日大風。飄一繡被復墮恂前。即言之於縣。縣以歸恂。恂後乘馬到雒縣。馬遂奔走。牽恂入它舍。主人見之喜曰。今禽盜矣。問恂所由得馬。恂具說其狀并及繡被。主人悵然良久。乃曰。被隨旋風與馬俱亡。卿何陰德而致此二物。恂自念有葬書生事。因說之。并道書生形貌及埋金處。主人大驚號曰。是我子也。姓名名彥。前往京師不知所住。何意卿乃葬之。大恩久不報。天以此章卿德耳。恂悉以被馬還之。彥父不取。又厚遺恂。恂辭讓而去。時彥父爲州從事。因告新都令假恂休。自與俱迎彥喪。餘金具存。恂由是顯名。仕郡爲功曹。

卷第十 震旦盜人入國王倉盜財煞父語 第卅二

◎源平盛衰記卷二十楚劾荆保事

又荆保ト云フ者アリキ。家貧ウシテ父ヲ養ケルガ、飢饉ノ歲ニアヒテ、父ガ命ヲ助ケ難カリケレバ、父ト共ニ隣國ニ行テ、他ノ財ヲ劫シテ盜ミ歸リケルヲ、家ノ主人ヲ集メテ是ヲ追フ。父子二人逃走ルコト、鼠ノ猫ニ合フガ如シ。子ハ盛ニシテ先立テ逃ル。父ハ衰テ走ルコト遅シ。父垣ノ中ヲクワリ逃ルニ、首ヲバ出シテ足ヲバ捕ラレタリ。荆保立チカヘリテ、父ガ恥ミン事ヲ悲ミテ、劔ヲ拔テ其頸ヲ切ツテ、持チテ家ニ歸リタリケルヲバ、時ノ人稱シテ、孝養ノ子ト云ケルナリ。

同 國王造百丈石卒堵婆擬煞工語 第卅五

○大莊嚴經論卷十五

我昔曾聞。有一國中施設石柱。極為高大。除去梯階樵樵繩索。置彼工匠在於柱頭。何以故。彼若存治。或更餘處造立石柱。使勝於此。時彼石匠親族宗眷。於其夜中集衆柱邊。而語之言。汝今云何可得下耶。爾時石匠多諸方便。即摘衣縷垂二縷綫。至於柱下。其諸宗眷。尋以縷綫繫彼衣縷。匠即挽取既至於上。手捉縷綫語諸親族。汝等今者。更可繫著小蠶繩索。彼諸親族即隨其語。如是展轉。最後得繫蠶大繩索。爾時石匠尋繩來下云々。

同 利德明德興酒常行會語 第四十

◎淵鑑類函卷二百五十二交友部

崔豹古今注。鄭弘行宦京洛。未至夜宿一壩。逢舊友四人。四顧荒郊。沾酒無處。情抱不申。乃各以錢投水中。依水共飲。盡夕酣暢。皆得大醉。因名沈醉川。

卷第十一 行基菩薩學佛法導人語 第二

◎袖中抄第六せりつみしむかしの人ノ條

或人のかたりしは、昔大和國に猛者ありけり。家には山をつき、池をほりて、いみじきことどもを盡せりけり。門もりの姫の子なりけるわらはは、まふくだまろといひてありけり。池のほとりにいたりて、芹をつみけるあひだ、猛者のいつきひめぎみいでて遊びけるをみてより、此童おほけなき心つきて、病になりて、其事となくふせりければ、母あやしみて、ゆへをあながちにとひければ、童此よしを語に、すべてあるべきことならねば、我子のしなむことをなげくほどに、母も又病にふしぬ。其ときに彼家の女房、この女のやどりにたぢられるに、二人のもののやみふせるをみて、あやしみてとふに、おうなのいはく、させる病にてあらず、しかくこのことはべるを思ひなげくによりて、おやしなむとするなりといふ。女房わらひて、此よしを姫君にかたるに、姫君あはれがちて、安き事なり。はや病をやめよといひけれ

ば、わらはもおももかしこまりよろこびて、おきて物くひなどして、例のごとくになりぬ。姫君のいふやう、しのびてふみなどかよはさんに、手かゝざらんくちをし。手ならふべし。童よろこびて、一二日にならひつ。又いはく、我父母しなむこと近し。其後は何ごとも沙汰せさすべきに、文字しらざらんわろし。學問すべし。童又學問して、物みあかす程になりぬ。又云く、しのびてかよはんに、童はみぐるし。法師に成るべし。則なりぬ。又云く、そのことなき法師のちかづかんあやし。心經大般若などよじべし。いのりせさするやうにも、もちなさんといふに隨てよみつ。又いはく、なほいさゝか修行せよ。護身などするやうにて、ちかづくべしといへば、修行に出たつ。姫君あはれみて、藤のはかまを調してとらす。片袴をばみづからぬひつ。これをきて修行しありく程に、ひめ君かくれにければ、そのよしをきいて道心を發し、ひとへに極樂をねがひて、たうときひじりにてうせぬ。弟子ども後事に、行基菩薩を導師に請じたるに、禮盤にのぼりていはく、まふくだ丸がふぢばかま、われぞぬひしかたばかまといひて、かねうちて事もいはでありぬ。弟子あやしみて問ければ、猛者智光は必往生すべき縁ありし物の、はからざるに世間に貪着して、惡道にゆかむとせしかば、我方便にてかくはこしらへいたるなりとなむ有ける。姫君は行基菩薩の化身、行基は文殊なり。まふくだ丸は智光也。智光頼光とて、往生したる物は是也。是はうきたる事にもあらず、人の文殊供養しける導師にて、仁海僧正の給ける也云々。

卷第十二 横川源信僧都語 第卅二

●私聚百因縁集卷八惠心事

抑、大和國葛木下郡有説云吉野郡ニ、年來栖ミ渡ル人アリキ、夫ハ占部氏、妻女ハ即チ清原氏。有ニ五人子、一男四女ナリ。其中ニ四人ハ皆求道修行。此義先立テ得ニ天告ニ母ノ夢ニ天人來テ、五人ノ内恭ニ敬四子一三女俱是應ニ聖人ニ云々。凡ソ父ハ指シテ雖ニ非道心者、性甚ダ質直ナリ。母ハ是レ眞ノ善人也。若シ修ニ西方菩提ニスルニ、其第一女ハ臨終正念シテ命終ス。其時異香滿ニ室。第三女者大乘極善ノ人也。手ヅカラ書ニ寫法華、恭敬頂戴ス。後ノ時ニ河内國ニ有ニ一人尼、相ニ傳彼經、往年時々ニ拜見ス。有ル時彼ノ菴燒亡ス。資具悉ク成ニ灰燼、唯奉殘ニ此御經一部灰中ニ彌、知ニ本願禪尼之信心甚深。其一男トハ、即チ惠心僧都源信ナリ。今云フ處楞嚴ノ先德是也。慈母清原氏、年來意ニ念願スラク、我得ニ一人男子、爲ニ後生方人。而シテ郡内ノ靈驗ノ伽藍ニ、高尾寺ノ觀音ニ祈請シテ生ム處也。種々ノ靈夢、母子供ニ感ズ。珠玉明鏡等ナリ。悉クハ保胤記レ之、更ニ檢ヘヨ。抑、此僧都ハ御廟ノ大師ノ御弟子。幼カリシ時ヨリ登ニ叡山、修學ノ名聞ニ天下、秀逸ノ譽振ニ山門。仍テ登ニ僧位ニ爲ニ權少僧都、若シテ三條ノ妃宮ノ御八講ニ被レ召。辯說磨ニ玉決擇評ニ燒曲、稱美感歎驚ニ雲上下。御講畢テ後、面々ニ預ニ奉物。其中ニ殊ニ有ニ朝召ニ趣ニ公請、所レ預ノ奉物ノ中、選レ珍送ニ母所。母ノ尼泣々報ジテ云ク、送り遣ル處ノ珍色、雖レ非ニ喜奉ニ返、此事更ニ奉レ成ニ法師ニ非ニ本意。眞ノ孝養ノ志深クバ、亦得ニ聖教之旨、在ニ當武峯ニ聖ノ御房ノ様ニ、捨ニ離名利ニシテ求道玉ヘ。夫ゾ善知識ノ望ム處也云々。仍テ隨ニ悲母命、永絶ニ萬縁、楞嚴ノ洞ニ始ニ山籠、深ク修ニ淨土菩提。抑、集メ選バル、處ノ法門數十部數十卷、具ニハ如ニ別錄。件ノ法門本朝ニ盛ニ用レ之。亦自ニ大宋ニ宋土亦

受之。寂照上人從宋送書云ク、往生要集持用シテ有國請寺、弘之珍之有所云。彼作四十餘間大回廊。僧徒多談要集。先置集高窓。南無大日本國源信如西朝弘法前代ニ未聞。誠ニ是レ傳燈ノ師、如來ノ使ナリ。尤モ可レ歸ニ足レリ。亦往年ニ人間テ云ク、仁者ノ知行世ニ無ニ等倫、修スル處以何爲ニ詮要。答テ云ク、出離淨業偏ニ是レ念佛ナリ。亦問フ、諸行ノ中ニ多ク讚理タリ。念佛トハ修理觀乎否。答フ、唯唱佛號。往生ノ業ニハ念佛ヲ爲先ト。導和尚ノ云ク、大聖悲憐シテ、直ニ勸專勝ニ名字等云々。三昧發得ノ人、師豈可レ誤乎。是ヲ以テ不レ修理觀、我レ亦理觀ハ非爲難ト云々。往生要集勸ムル處檢之セヨ云々。凡ソ自行勸他併ラ稱名ナリ。夫レ悟佛道之奥旨、從レ得聖教之大綱以來、深ク憑他力、偏ニ修易行、相續念佛ス。設ヒ雜時ナレドモ、一食三度ハ願ニ往生心。設ヒ疎ナル日ナレドモ、一日三時ニ泣西方。摠ジテ行住語默、悉ク稱名懸舌端、日夜旦暮併ラ本願ヲ置胸内。剩ヘ移都卒谷上ニ立花臺院、安丈六來迎之聖容、解脫戒心ノ境娑婆ノ辻ニ、結行者草菴ニ結構迎講。如此シテ常ニ最後正念ニシテ、臨終ニハ見佛來迎ノ儀式ヲ思ヒ知ル。摠ジテ云自行ニ云勸他ニ云行業、古今未曾有ノ先德ナリ。往生勸發ノ舟師ナリ。抑御年六十七、長和二年正月一日、所著ノ自書願文ニ云ク、生前所修ノ行法今略シテ錄之。稱名念佛廿俱呢返、奉讀大乘經五萬五千五百餘部。予始メ厭穢土流轉、願淨土往生。日ヨリ、粗註其數處如此。其外日夜ノ行住、併ラ不捨稱誦コト、舉テ不可計。此レ併ラ臨終正念往生極樂行也云々。其後御存命、長和ノ末ノ年ヨリ、時ノ受惱小病無苦ニシテ、漸ク驚此界因緣盡之旨。亦ノ年寬仁元年巳ニ至ル迄久シク手馴レタリ。右脇ニ臥テ更ニ不レ得餘臥。五月ノ中ヨリ、一色ニ臨終ノ營、掃除住處、洗淨身衣、觸事似有用心、只

如待貴客。同ジキ六月九日ニ、集隣房院中門徒門弟、心靜ニ物語シテ云ク、生者必滅ノ旨口ニハ云ヘドモ、心底ニハ不染。會者定離ノ理ハ人ニ勸ムレドモ、身ノ上ニハ思ハヌ世ノ常ノ習ヒ也。人間ノ八苦取々ナリト云ドモ、悲ヲ極ムルハ無過ニ死苦。和詞シテ契ニ千年シ友モ、同志シテ憑萬春メシ人モ、跡枕ニ竝ビ居テ涙ヲ流シ悲シム輩、左右ニ連キ有テ舉音ヲ呼ハル類ヒ、取手取テ泣ク族、押額押胸テ惜ミツル者ノ、閉目ヌレバ早ク送塚邊、息留マレバ急ギ抛野邊。賢モ愚ナルモ如此、然然ルニ可レ厭此身。豈愛著浮生一旦依身、不レ求常住不退法式乎。亦今此娑婆世界ハ、是レ惡業所感衆苦ノ本源也。生老病死輪轉ノ三界ノ獄縛ハ、無ニ一可樂。若シ於此時不レ厭離之、當於何生離輪廻乎。然ルニ西方極樂ハ、是レ大乘善根ノ界ナリ。無苦惱ノ處、一切ノ快樂無ニ具足。往生禮讚ニ云ク、今信知彌陀本弘誓願スレバ、及ビ稱名號スルコト下至十聲、一聲等ク定メテ得往生。乃至一念モ無有疑心ト。哀ミ貴ク誦シテ眼蓋ヲ開ヒテ、一座二三返計見渡シテ、源信ハ明日必ズ當臨終レリ。今生ノ對面今明計也。各遠ク淨土ノ蓮臺ニコソ奉會ラメ云々。一座聞之、袖ヲシボラザルハ無一人。次ノ朝タ十日、問衆僧テ云ク、今日ハ正シク臨終ノ日ナリ。我ニ若シ有十五種惡死相乎。衆僧答テ云ク、更ニ惡死ノ相不在、容顏如常。若シ今日臨終シ給ヘバ、十五ノ善生ノ相也。依手經意也而シテ後拔鼻毛、洗身口、著淨衣、向佛像、其後以人令誦觀無量壽經、真身觀并ニ九品ヲ二返令誦之。其後以縷著彌陀佛手、自ヲ執其糸末、法門ノ中ヨリ取七言十二句偈、自誦教人令誦。又彌光明名見佛四句清淨慈門刹塵數四句面善圓淨如滿月四句。而シテ後頭北面西ニシテ、右脇ニシテ臥ス。高聲ニ念佛數十返、念佛ノ音

空ニ澄ミ登テ、音樂ノ音西ニ幽ニ聞ヘ、微音ニ唱ヘ給テ、南無西方極樂微妙淨土大慈大悲阿彌陀佛觀音勢至諸菩薩清淨大海衆云々。容顏如咲シテ、只謂ニ休息ニテ、良久クシテ無レ音。尋テ見レバ即テ終リ給ヘリ。紫雲圍ニ楞嚴禪房、光明照ニ閑室西窓、妓樂歌詠ノ響細ニ漸ク去リ、紅雲ノ上ニ栴檀沈水ノ薰馴シク、遙ニ殘ニ沒後床。三塔九院如レ雲集リテ、念佛往生ノ教門ニ堅レ信、四明三千如レ星連ツテ、彌陀來迎ノ本願ニ係レ憑。一天悉ク致ニ極樂信仰、四海併ラ作ニ彌陀歸依。凡ソ此僧都ハ朱雀院ノ末丙村上ノ初丁ニ生レテ、一乘圓宗懸鏡ヲ聖道淨土ニ磨レ玉、邊國末代ノ燈トシテ、村上冷泉圓融花山一條過ニ六代、後一條ノ初寬仁元年六月十日、生年七十有二ニシテ往生スト云々委保胤並長明記處。如別傳檢之云々。

卷第十三 盜人誦法花四要品免難語 第卅八

◎法苑珠林卷二十七至誠篇感應緣

唐貞觀年中。有河東董雄。爲大理丞。少來信敬蔬食十年。至十四年中。爲坐李仙事。主上大怒。使侍御韋琮鞠問甚急。因禁數十人。大理丞李敬玄。司直王欣。同連此坐。雄與同屋囚鎖。專念普門品。日得三千遍。夜坐誦經。鎖忽自解落地。雄驚告欣玄。欣玄共視。鎖堅全在地。而鈎鎖相離數尺。即告守者。其夜監察御史張守一宿直。命史關鎖。以火燭之。見鎖不開而相離。甚怪又重鎖。紙封書上而去。雄如常誦經。五更中鎖又解落有聲。雄又告欣玄等。至明告敬玄視之。封題如故。而鎖自相離。敬玄素不信佛法。其妻讀經。常謂曰。何爲胡神所媚。而讀此書耶。及見雄此事。乃深悟不信之咎。方知佛爲大聖也。時欣亦誦八菩薩名。滿三萬遍畫鎖解

落。視之如雄不異其事。臺中內外具皆聞見。不久俱免田冥報拾遺

卷第十五 播磨國賀古驛教信往生語 第廿六

◎帝王編年記卷十四貞觀八年丙戌ノ條

同年。攝州勝尾寺勝如上人證道上人弟子年八十六。修不輕行。正得禮拜十六萬七千餘家。以此惠業廻向二親攝父津國那攝使左衛門府生時原佐通。母出羽國惣大判官代藤原榮家女。不輕之間。每臨門香氣自薰。見聞道俗皆以奇之。修念佛定五十餘年。味道忘疲。五日一飯。禁斷言語十二箇年。同行弟子相見尤希。于時八月十五日夜。空聞音樂奇思之間。戶外人陳云。我是居住播磨國賀古驛北邊沙彌教信。今往生極樂之時也。上人明年今月今夜。可得其迎。爲告此由故以來也。然間微光僅入菴。細樂漸去西矣。勝如驚怪。明且遣僧勝鑿。令尋彼處。稍見賀古驛北有小廬。當其廬上鴉鳥翔。漸近寄見群狗競食。倚大原上有新闢。容顏不損眼口似笑。香氣薰馥。又臨廬內。有一老嫗一童子。相共哀哭。問悲情。嫗曰。死人是我夫沙彌教信也。去十五夜既以死去。今成三日。一生之間稱阿彌陀號。晝夜不休以爲己業。童子卽子也。於是村里男女往還道俗。具問勝鑿之來由。星馳雲集廻被闢。歌唄讚嘆矣。勝鑿速還陳上件事。聖人聞此自謂。我年來無言。不如教信稱。恐利他行疎矣。以同廿一日故往詣聚落。自他念佛云々。

同九年丁亥八月十五日。勝如上人語弟子等。教信之告相當今夜。今生言談此度計也。抑淚入堂辨備香花。線付佛手念誦如例。然間。漢月影靜松風聲斜。漸運漏刻到夜半程。樂音聞異香且芬。聖人合音樂念佛。聞者

歡喜不少。光明忽照紫雲滿室。上人向西結印。端坐入滅。時年八十七。遺弟子等。悲喜交集流淚結緣。上下二百餘人。三七日夜。圍遶被屍不斷念佛。此間香氣猶以不絕。結願之後。將以火葬乎。即不燒在土灰中。忽起石塔安之既畢。今號逢石塔是也。

卷第十九 攝津守源滿仲出家語 第四

●帝王編年記卷十七

天祿元年庚午。源滿仲建立多田院。攝津國川邊郡中尊文六釋迦像。滿仲營作。文殊願主攝津守賴光。賴政行忠先祖也普賢願主大和守賴親。法華經太郎賴安先祖也四天願主河內守賴信。賴朝卿已來代將軍先祖也供養導師天台座主慈惠大僧正。

卷第二十一 吉志火磨撰慈母得現報語 第卅三

●寶物集卷五武藏國玉火丸ノ事

我朝武藏國ニ、玉ノ火丸ト云者アリ。聖武ノ御時也上京シテ、人ノ供ニ母ナド具シテ、鎮西へ下向シテ、太宰府ニ住ケル程ニ、主人上京シケル供ニ上ルベキニアリケルニ、思ハシキ妻ヲ設ケタリケルニ、離レジトテ障リヲ致シテ停ンガ爲ニ、母ヲ山へ具シテ行テ殺ントスル時、大地俄ニ割テ火丸落入ケルヲ、母悲テ鬢ヲ取テ引上ルニ、鬢ハ抜テ主ハ地下ニ落入ヌ。誠ニ我命ノ失ン事ヲバ恐レズシテ、敵トナル子ヲ引上シハ、無ニ和利ニコソ覺ユレ。

卷第卅一 右少弁師家朝臣值女死語 第七

●雜談集卷四戀故往生事法華往生事

中比、朝夕御門ニ仕フマツルヲノコアリケリ。有ル優ナル女ヲ語ヒテ、年來スミケル程ニ、心ウツル方ヤ有ケム、宮仕ニ事寄テ、カレハニナリユクヲ、心ノ外ノタヘマカナナムト思フホドニ、遂ニカヨハズナリニケレバ、女事ニフレッツ、心細ク思ヒ歎キ、年月ヲ送ル間ニ、此男コ便リ有リテ、女ノ家ノ前ヲスギケリ。ソコナル人見アヒテ、只今殿コソスギサセ給ヘ。サスガニサリシ所トハ思出ヅルナンメリ。物見ヨリ見入レ給ツルト語ル。女此ヲ聞テ、キクベキ事アリ、立入り給ヒナムト申セトイフ。スギ給ヒヌル物ヲヤハ、返リ入り給ハムズルト云ナガラ、ハシリツキテ此ノ由聞ユ。アヤシク何事ニヤト思ヒナガラ、此ヲサヘキ、スグベキナラネバ、返リ入ルニ、門ヨリ指入テ見レバ、庭ハ草フカク滋リテ、アリシニモアラズ、アレタル氣色ヲミルヨリ、ナニトナク哀レフカクナムアリケリ。我身ノ過思ヒシラレテ、イカニゾヤ、ソバロナルヤウニ覺ユルヲ、女ハ今更ニ心ヲキタル氣色モナシ。本ヨリカクテ居タリケル氣色ニテ、脇足ニヲシカ、リテ、法華經ヲ讀ミ奉ル。物思ヒケルモシルク、物ノ思ヒヨリ、ヤセタルアリサマ、イトキヨゲニ居タル形スガタ、カミノコボレカ、レルサマナド、本ト見シ人トモ不覺、タグヒナクミユレバ、ナニノ物ノ狂ハシニテ、此人ニ物思ハセツラムト、日來ノ心苦サヲ思フニモ、イトハアハレサアサカラズ、心ナラヌ事ノアリサマナムト、ネムゴロニ語フ。女房イハムト思フケシキナガラ、イラエモセネ

バ、經ヨミハテテト思フナンメリト、イブセク心モトナクマツ程ニ、於此命終、即往安樂世界、阿彌陀佛ト云所ヲ、クリ返シ再三ヨミテ、ヤガテネイルガ如クニテ、イナガライキタヘニケリ。此男ノ心イカナリケム。男ハナニガシノ弁トカキ、シカドモ、名ハワスレニケリ。人ヲコヒテハ、或ハ望夫石ト名ヲトメ、若ハツラサノアマリニ、惡靈トナルタメシモキコユ。何ニモツミフカキナラヒユテコソ侍ルニ、其レヲ往生ノ縁トシテ、思フサマニ終リニケム、イトメデタカリケル心ナリケリ。アハレコレヲタメシニ、コノ世ニ物思フ人ノ往生ヲ願フ事ニテ侍ラバ、イカニ心カシコカラムトナリ。サテ男ハ即チ我宿所ヘモカヘラデ、モトヒキリ、遂ニ佛道ヲ修行シテ、往生ヲ遂ニケリ。

難訓字解

●一畫

- 一ヒトリ
- 一兩ヒトリフタリ
- 一切アマネク
- 一族イチゾウ
- シカナヅ(奏)

●二畫

- 二三間フタママ
- トシム
- 七一ト七ノ銀 (不詳)

●三畫

- 上層ウハコシ
- 下オロス(切)
- 丸マロガス
- 凡人タマビト
- 乞丐(句)カタキ

口實クチズサビ
土クニ

大臣オトド(殿舎)

大疊オホテヅクリ

小サ、ヤカニ

小駕コアガリ

山ノ葉ヤマノハ(山端)

巾ノゴフ

イテタ、ズム

●四畫

- 不信ウケズ
- 不替カハサズ
- 不意ソモロニ
- 不審オボツカシ
- 不慮オモハザルニ
- 不憶オボエズ
- 云縁イヒシラフ

仍マサニ

今明ケフアス

今明日ケフアス

六借ムヅカシ

六借氣ムヅカシゲ

切シキリニ

切々ケレ、ニ

切々ケレ、ニ

勾引カドハカス

天井クミイレ

少チヒサシ 小ニ通ズ

少々オロシ

心疎コ、ロウシ

心馳ムナバシリ

手巾タヌグヒ

手扣テマサグリ

手抛テナゲ

手便テダヨリ

手迷テマドフ

支エダ

斗マス

无力チカラナ

无端アヂキナシ

无禮ムライ

日讀ヒヨミ(曆)

日ナタ誇ヒナタボコリ

月々シツキム、シ

月无氣ツキナゲ

木綿ユフ

比ククラブ

水旱ヒエカワク

水餓ウウ

片白カタシレタル

片岫山カタクキヤマ

片嗚カタユガム

片蹇カタナヘグ

●五畫

且カツ、

主アルジ(鑿)

仕卒ツカヒモノ

以成モテナス

以來コノカタ

出居イデキ

半无ハシタナシ

半者(物)ハシタモノ

占トウラナフ

去ノクサク イヌ

去年イニシトシ

去來イザ

只行ヒタユキ

只走ヒタハシリ

只吞ヒタノミ

只寄ヒタヨリ

只出立ヒタイデタチ

叫ヨブ ヨバフ

可咲ナカシ

囚メシウド
囚家ヒトヤ
四度解无シドケナシ
失アヤマチ
尻切シキレ
匪メグル
弘ヒロゴル
末ウレ
米ヒユ、カニ
汎々ヒロトト
生オフ、オホス、ナル
生ナマ、ナマメカシ
生侍ナマサブラヒ
生女房ナマニヨウバウ
生六位ナマロクキ
生名徳ナマミヤウトク
生土ウブスナ
生物ナリモノ
田蕩ダガヘス(耕)
白マウス
白地アカラサマ
白地目アカラメ

白帖(疊)シロテヅクリ
白事シレゴト
白者(物)シレモノ
白魚シミ
白團タマゴ
白墓无者シレハカナキ
目出メデタシ
目瞬メクハス
禾イネ
穴憎アナニク
立約タチモトホル
二マロブ
交マジル、マギル、マギ
交ラス、ハサム、アハヒ
ホド
交菓子マゼグワシ
仲ナカダチ
佞タルウツアス
低ニ同ジ
佞臥ヒレフス

●六 畫

仰張ノサバル
仰様ノケザマ
共トモ(伴)
次朝アクルアサ
印指オシデサス
添アブナシ
爰タヤスシ
吉ヨク(能)
吉ヨク(善、良)
坊シドカニ
地震ナキ
多アマダ
夷母チバ
安ヤスシ(易)
安ノ外アムノホカ(案外)
守マモル(目守)
扣マサダル
早ハヤス(難)
早朝ツトメテ
曲ユガム
カマム

曳ソビク
机ツク(突)
机エブリ
牟子ムレ
此コチ
此入コチイレ
此寄コチヨレ
此彼トカク
此モ彼モトモカクモ
此引彼引トヒキカクヒ
此向彼向トムキカクム
此許カバカリ
此様カヤウ
灯トモス、燈ニ同ジ
糸イト(最)
羽含ハダタム(養育)
老毫オイボレ
而シカモ、サルニ
而間シカルアヒダ
而程シカルホドニ
肉(宍)村シムラ

●七 畫

自然オノヅカラ
至イタス(致)
舌嘗シタナメヅリ
血肉(宍)チミドロ
行アルク
衣魚シミ
衣曝キサラギ
何イカニ、イクラ、イブチ
何イクツ、イブラ、イブコ
何様イカヤウ
佛サトル
伯父アチヂ、
低、佞チ見ヨ
冷スマシ、スマム
冷氣スママジク
判ワカツ
卵カヒコ
即、即チ見ヨ
吟ニヨブ

吮ノドブエ
吻サキラ
吹フキマロボス
含ク、ム
含ク、モル
含音クマモリゴエ
否イサ
坏ツキ
坑アナ
坐オハス、オハシマス
坐イマゾカリ
宍シ、肉ニ同ジ
宍村シムラ
巫カムナギ
臣、莊チ見ヨ
延エム(縁)
延有ハヒリ(這入)
弟子オトゴ
形貌ナリカタチ
把ニギル
抓ツカム
扶ク、ム
扶ク、ル
扶ク、リ
扶ク、リ

早カワク
杖木ツエ
杖杖マダブリツエ
杓形ヒサゴガタ
杜モリ
歩行カチ
汰ソロフ
没シヅム
沃ナガス
沃懸地イカケチ
狂タルフ、タル
利カシコシ
私語サ、ヤク
胸クハフ(衝)
見暉ミクルベカス
谷迫タニアロ
赤裸ハダカ
辛卷カラマク(絡卷)
迅ハヤシ
言マウス
マウス

●八 畫

働ニクシ
依怙タノミ
兒チゴ
其ソコ
其々ソコ
其達ソコ
具ヨロフ
制イマシム
制命イサメオホス
効マネ
取食トリバミ
取迦トリハズス
呵シカル
呻ニヨブ
咋ク、フ
咋、集チ咋フ(糝集)
咋合クヒアフ
味煎ミセム
咒イノル
命オホス

周アワツ
周章アワツ
垂ツカル
夜冷ヨサム
夜前ヨウベ
奇メダラシ
奇異アヤシ
奉マツルマホラス
妻夫メナト
尙ナホス(直)
居スウ
屈カムム
岨サカシ
岫タキ
岳サカ
帖テヅクリ
底井ソコヒ
彼カシコ
彼許カバカリ
往古イニシムカシ
怪アヤシ(神託)
アヤシ

怖オダ、オドス、チノ、ク
怖ウラメシブ
怖々オツ、
怖惶オチチノ、ク
怙ホク
怙ホク
忿イソガシ
忽諸ユルカセ
辰マガル
所爲シワザ
拈チサム、イマシム
拈グル、シム、ハルトル
拘カク、ル
拘トラフ
抛ナダグスツ
招チキ(籠)
承引ウケヒク
放ハダス、ハナス
放出ハナチイデ
放ツ風ハナツキ
明且アケノアサ
明朝アケノアサ

眠ネブタシ
眞顯アラハニ
破无ワリナシ
祖オヤ(親)
祖子オヤコ
祝ハフリ
祠ホクラ マツル
秦ハダ(膚)
窃窈タチヤカニ
筭タカムナ
納ナハ 一斗納
純モトホシ
索餅ムギナハ
毫ホク ホルク
砥ネブル
荒アバル
莖ミノ 蓑ニ同ジ
草薺クサノミ
荆イバラ ウバラ
記オボユ
託オボユ

財タカラ
送オクル(後)
迷マドフ
逃ニグ サル
除ヌグ
馬齒ウマゲハ

●十一畫

乾カダシ カタヤカニ
停トミコホリ
側ホトリ
假納ケチサメ
動スル トヨム トヨモ
動クハタラク フルマフ
動モ不爲シテ
匙カギ
婦ヨメ
婬ヨメ
婢ヤツコ
婚マク トツグ
婚タナゲ ツルブ

婚合マゲハヒ
娶クナグ トツグ
密キビシ ミソカニ
密夫(男) マナトコ
密事 ミソカゴト
密音 シノビネ
密氣 キビシゲ
宿直トノキ
宿直所トノキドコロ
宿直物トノキモノ
寂イト 最ニ同ジ
幅イハヤ
崎サキ(先)
彫ホル エル
御オハス オハシマス
御酒ミキ
御燈ミアカシ
御燈明ミアカシ
御髪ミグシ
御頭ミグシ
御寢オホトノゴモリ

御月物 ミツギモノ(貢物)
從トモ(從者)
徘徊 ヤスラフ タチモト
惜ウラヤム
探ツム
捻ネヅ
接イダク
捲ニギル
排クジル
接クジル
接スカス チコヅル
接コシラフ 凌ニ通ズ
接リヨウズ
挿入タエイル
挿ノブ
族ゾウ
曹ツカサ
朗アキラカニ
望ノゾク
桴バチ

梯カケハシ
椀アカシ
械アシカシ
梯シキミ
欲オボス オモフ
淨キヨマハル
深更フク
將キテ(次官)
將來キテキタル
將奉キテマツル
將詣キテマウツ
現ゲニ
率イザナフ
牽星ヒコボシ
牽牛子ケニゴシ
竈ホトギ
畢ハツ
疵アザ
疵咲アザワラフ
瘰癧ヒルム スクム
唾マナガブラ

毗ニラム
眼皮 マナコキ
眼見 マミ
移ワタリ(邊)
組入クミイレ(天井)
終日ヒネモス
終夜ヨモスガラ
終道ミチスガラ
細疊ホソテヅクリ
習ナラス(平)
陵シママル
苜コクハ
莊カザル
莊嚴カザル
祛タモト
祖カタヌグ
設モシ
許ガリ バカリ
貫ツラナル(連)
貫ツラヌキ(鞆)
販婦ヒサメ

貧窮氣マツシゲ
跌アナウラ
蹴躓ケツマツク
軟ヤハラカニ
速イソグ
速疾スミヤカニ
這礙ハビコル
野老トコロ
野猪クサキナギ
劔ツルギ 劔ニ同ジ
閉トブ 閉ニ同ジ
闕ツビ
陷クボミ
麻柱アナハヒ

●十二畫

傍痛カタハライダシ
勞イタハル
勞イタツク
勞ダシラウタシ
啼サケア
喘アヘグ
喘イキツク

嗶カマビスシ
嗶ユガム
喜ウレシ
喬 高チ見ヨ
圍メグル
媚ウレシ ウツクシ
嬖ヤハラカニ
富モウク
尊ミコト(御事)
屠サカツ
帽額モカウ
強コハラカニ
強顔ツレナシ
強々シ氣コハシゲ
愕オビユ オビヤカス
惶オツ オソル
惶々オツ
惶怖オチオソル
惶(空)
惶(遊)
揮ハラフ
揃ムシル

提ヒサゲ(器)
擲タバカル
掲焉ケチエン
散サト
敢アフ(蓋)
智サトリ
智惠験チエクラベ
最イト
最手ホテ
替カハス
期カギリ
朝アシタ
朝ツトメテ
朝應アサマツリゴト
椒ハシバミ
棲スミカ
棍 棍チ見ヨ
滋シゲル(紫)
温アツル
滯サケア
焔ホムラ
然サハサレバ
然サラナリ

然而サレドモ
焦コガル
爲者シワザ
猪アタ
獸イトフ 厭ニ同ジ
異アヤシ
疎ウレシ ウトシ ウトマシ
疎ツクロフ
痢ヒル
瘰癧チ見ヨ
短ヒクシ
短太ヒキプト
答タフ(報)
糞シトギ
統ナサム
結ユフ
絡カラグ マツフ
絡カラム
絡々クル
絡石ツタ
翔フルマフ
勝マタ 勝ニ同ジ

脾モ、
モ、
醉ニギハフ、ニギハシ
眠フクル
鼻クサシ
菓コノミ
菓子コノミ
菓蔵クダモノ
菸クサル、アザル
着ハク
虚ソラ
虚ハブレ
虚薰ソラダキ
裁コトワル
衆多アマタ
詠ウタフ
詠ナガム
詛トコフ
詛ノロフ
冒ノル
冒立ノリダテ
貴アテブ
貴アテヤカニ
趁ハシル
軒旬ノ、シル

進マキラス
透ツドフモコヨフ
鈎イコヤカニ
閑シツカニ
閑シツマル
開ツクハダカル
開マラ
階シナ(品)
黄昏タツガレ
黄斑牛アメマダラウシ
黒方クロバウ(薰物)

●十三畫

儻セグクマル
勢セイ
勢長シテ、身ノ勢高シ
咲ワラフ、笑ニ同ジ
嗚呼チコ
嗚呼人チコビト
嗚呼繪チコエ
塊ツチクレ
塗ヌラス(濡)
脛クロ

嫁マクヨバフ
嫌ニクム、ネタム、ソネム
嫉ネタガシ
嫉シナダル
微妙ミメウ、イミジ
慎ツ、マシ
慈アハレブ
意オモフ
感メツ
構カマフ
搏ニギル
搭トル
搥ツク
搥ツク
搥ツク
新サラニ
新發シムボチ
断カナヘ
暗ヤマクモル
暗ソラニ
暗々クラト
極イタシ、イミジ
極コウズ

碓道カケチ
碓道カケチ
禁イマシム
稔ニギハフ、シ
粹アツム
窟イハヤ
窟ウガツ
堅イヨダツ
筩ツ、
聖サカシ
裕タフサギ
裕衣タフサギ
裾アバク
詫ツク、託ニ同ジ
誑シヒテ
賄マヒナフ
賄マカナフ(饗)
買カフ
跨マダ
跡アト(後)
載惣ノセナガラ
過トガ
逼セム

●十四畫

遊ウカル
通カクル、ニダ
達イタル
達曉アケガタ
道祖神サヘノカミ
鉏スキ
鉏(タ(端))
隔子カウシ、隔子ニ同ジ
隙、隙チ見ヨ
飲ス、ル
飮アラ、カニ

寢寝イナノミ眠ル
寢引イビキ
寢延ネノビ
寝サシム
寝サカル
寝ネタム
傍アナツル、慢ニ同ジ
慚、慚チ見ヨ
摸サグル
摸ソ、ク
槁カツラ
槌ツク、槌ニ同ジ
築サク
築アガム
漉スフ
熄イル
熄燒イリヤク
熏フスフ
薰ハル
瘖ハル
暉クルベカス
福トム
窪クボミ

端(ヘリ)
端正タミシ
端殿タミシ
端麗タミシ
精シラゲ、ヨシ
緋アケ
緋イロドル
維スミ
綿々ナガ、ト
罰ウツ
署シルス
署預ヤマノイモ
署預ニ同ジ
署預粥イモガユ
緇ツリフネ
蓋キスガサ
葦クサノミ
蝟アブ、蛇ニ同ジ
蜿カキ、蠖ノ誤?
裳層モコシ
誘コシラフ

語カタラフ
誣シノガタリ
誣イツハル
貌カホ
疎疎チ見ヨ
疎チ見ヨ
踰、踰チ見ヨ
踰チ見ヨ
遙遠トホシ
銖火カ、リビ
聞キク(藥)
聞カク(香)
隲ヒスキ
隲チサム
髮ホノカニ
齊ホソ、臍ニ同ジ

●十五畫

價アキナヒ、アガフ
儀立ヨソホヒダツ
劇イタマシ
劇草カキツバタ
嗽クフ、クラフ
嗽ハム
喋付スヒツク

暫時トバカリ
數シバシバカリ
樂アソビ
標ス 巢ニ同ジ
樓棟ナリ
漿コムツ
澆アワツ
漢活ヒシメク
鬻斗ノス(仲)
鬻ツカム 鬻ニ同ジ
筮ミガク
瘡病ワラハヤミ
盤サ(更)
稽オコタリ
稷アハ 稷ニ同ジ
窮マツシ
幅ヒキメ
緩ニルブ 隅ルヤカニ
編アムクム オコタル
編ツクク
編入クミイレ(天井)
練鞋ネリムチ

罵ノル
罰 罰ヲ見ヨ
鬻ヨボロ
鬻本ヨボロ
膝マ突ヒザマツク(跪)
蔑アナイガシロニ アナツル
蝦カヘル
復 フクカニ フクヨカニ
復 フクラム
復 カタヌグ
請ウク
課オホス
誣イサカヒ
論戦イサカヒ
賤アヤシ
賈サガ サカシ
賈サカシラニ
賈タヌク
趣オモムカフ
陰アト
輒タヤスシ(容易)
鋤クハ
鋤ホコ

銚タサリ
銳トグ(磨)
銳杭トグキ
鬻トジキミ
震チノ、ク
養子トリコ
養蠶カヒコ
養富カヒマウク
駟ツカフ(仕)
駕カク
髮サブカミサブ(養殿)
髻ホノカニ
髻知ホノシル
鳩ワシ 鷺ニ同ジ
勢ムギノコ
十六畫
嗚ナグサム
嗚ヨバフ
喙イユ 癒ニ同ジ
鳴クチバシ 鶺ニ同ジ

器ウツボ(器量)
器量イカメシ
墳ツカ
嶮サカシ
憶オボユ
憑タノムシ
憩立イコハシタツ
戦ワナハ、夕
檢カムガフ 檢ニ同ジ
機ハタモノ
横ヨコサマニ
横ヒツ 櫃ニ同ジ
澳オキ
燈アカシ
燃タク トモス
燧ケブリ 煙ニ同ジ
燧コガル
燧イリモミ
燧イリヤキ
獨樂コマツブリ
癩セグクマル

磨登ミガク
築ツク(突)
篩フルフ(振)
膳ソナフ
膳夫カシハデ
膳所カシハドノ
蕩トラカス
衛カコム
親マノアタリ
親近チカヅク
謀ハカリゴツ タベカル
諫イサム(勇)
諧カナフ
録シルズ
錯アヤマリ
鉤カナマリ
鉤チノ
錠タガニ
霑ソボツ
霖雨ナガアメ
静ノドカニ

題フケル
題オモネル 幅ニ通ズ
頰咲ホ、エム
骸カバネ
骸ムグロ
鴉鳥フクrof

●十七畫

債アガフ
嘖ネズナキ
壓オス
壓オソフ
壘ホリ
嬪カ、ナフ
嫫ヤモメ 寡ニ同ジ
嬰ミドリゴ
懃ネムゴロニ
戴イタマキ(頂)
戲言タハコト
撥オフ
撥ヤラフ
擬ハカル
檢カムガフ
檜蓮條ヒアジロ
濕ヌル

濟スクフ(抄)
營イソグ
瞬メクハス
糙モム(揉)
縮ツママル
縷イトスヂ
駢キヌガサ
聳ソビク
臨ノゾク
縹ヒラタブネ
蕤ウバラ
蕤ヒエ 稗ニ同ジ
薄莪ス、キ
蠅カキ
塾コモル
蹉ヒザマツク
蹉ナヘグ
避サル
遮アワツ
駝ハヤシ
點サス

●十八畫

憤クチバシル
擲ナグ
擲ウツ
擲モム
斷々ズタク
燭アタ、カニ
禮チガム
穢キヤマフ
穢キタナム
繪カトリ
繚シラフ メグルワツラ
繚ワバラ イトヨル
繚氣ワツラハシゲ
播カケル
蕪イバラ
蕪ウバラ
蕪タキモノ フスフ
蠶ワガヌ
蠶ムツキ
轉ハギ
轉ウタ、ウダテシ
醫クスリ
醫師クスシ

●十九畫

將ヒシホ
鎚ツチ
鎚カキ
鎖 鎖チ見ヨ
雙ナラフ
雙エル
雞 鶏チ見ヨ
壞物コボチモノ
曝サラボフ
瀝キヨシ
燭モエクヒ
穩オイラカニ
鏃ヒル
鏃子カウシ
綯エガク
繫カク
羸ツカル
艶 艶チ見ヨ
艶オドロ

●二十畫

識サトル
證アカス
證サトル
證シコツ
贈チドル
蹴躐ケツマツク
辭スマフ
邊イナフ
邊ワタリ
鋏ナベ
鏢カギ ジヤウ
壺アフ
類ヒタヒ
類ニル
類ダグフ
顛ダフル
賊クサシ
斷ハジキ
嚴イツクシ ウツクシ
嚴キビシ カザル
嚴氣イツクシゲ
嚴重イカメシ
噫ウソブキ

龍 アテヤカニ ホコル
 鼓 フタル
 競 クラブ
 慕 ツクロフ
 繼 ツマク
 預 マユ 蘭ニ同ジ
 覺 サトリ
 觸 バフフレバフ(觸這)
 謔 オモシロシ
 擧 コシ
 錙 タツギ
 鏡 トダ(磨)
 聚 シグレ
 飄 タマヨフ
 黨 トモガラ
 馴 ナヤム
 器 サワガシ
 屬 ヤカラ ックモガラ アツ
 攝 チサム

●二十一畫

榻 ツカ 榻ノ訛?
 繩 カツク
 纏 頭カヅケモノ
 蓬 蔭 アジロ
 蠢 ウゴメク
 ムクメク
 蠢 付ムクツケシ
 護 タ、フ
 謹 セム
 雷 カマビスシ
 鐵 クロガネ
 錙 ナベ
 霹 ハタメク
 霹 霹 ハタ、ガミ
 颯 ツジカゼ 颯ニ同ジ
 舖 カヘル
 舖 ソナフ
 饌 ソナフ
 鬣 ミヅラ 鬣ニ同ジ
 鷄 冠木カヘデ

●二十二畫

儼 然 イツクシ
 攤 モム
 擺 コク
 疊 タハム
 テヅクリ
 竊 ミソカニ
 竊 事 ミソカゴト
 讀 オボユ
 讀 ホム
 讀 アガフ
 讀 ツグナフ
 躑 ツマツク
 躑 モム
 鐵 ナ見ヨ
 鐵 カナヘ
 鞋 ムチ
 襪 アルジ
 襪 應 モテナシ
 戀 ユカシ
 襦 ツカ
 欄 ナホシ(直衣)

●二十三畫

欄 姿 ナホシスガタ
 欄 裝 束 ナホシヤウソク
 裨 褌 チハヤ
 鞞 オビトリ
 顯 アラハニ
 驗 クラブ
 偶 體 ヒトガシラ
 鱗 イロクツ
 廳 マツリゴトドノ
 罐 ツルベ
 醜 エナラヌ
 讓 セム
 讒 シコツ
 讒 言 シコゴト
 鬢 ヒゲ
 鯨 ヲダカマル

●二十五畫

籬 シタミ
 樹 シハムラ
 葉 アマツラ
 綱 キラメク キラ、カニ
 綱 キラ、カニ
 綱 ヲキラ、カニ
 雙 ワク

●二十六畫

索引

アイ	阿育王 上、五二、五九、三六〇、三〇〇、 四九、中、三三	英多郡 中、五二	愛智郡 下、五三	倉嶋 上、二六	倉嶋摩羅 上、六〇、九三	鷄嶋 上、六六、三〇	鷄嶋寺 上、六四	明石 下、〇五、五九	明石郡 下、四九、八	明石ノ津 中、五九	赤キ特 中、三五	赤染 下、一八、五	赤染時望 下、八五	赤穂郡 中、五九、七九	赤山ノ神 中、三二	阿錫施藥 上、三五	阿伽 中、五七、五九	阿伽 中、〇八一	縣犬養爲政 下、四一	安藝國 中、七六、八三〇	秋河 中、三九七	
アカ	明石 下、〇五、五九	明石郡 下、四九、八	明石ノ津 中、五九	赤キ特 中、三五	赤染 下、一八、五	赤染時望 下、八五	赤穂郡 中、五九、七九	赤山ノ神 中、三二	阿錫施藥 上、三五	阿伽 中、五七、五九	阿伽 中、〇八一	縣犬養爲政 下、四一	安藝國 中、七六、八三〇	秋河 中、三九七								
アウ	倉嶋 上、二六	倉嶋摩羅 上、六〇、九三	鷄嶋 上、六六、三〇	鷄嶋寺 上、六四	明石 下、〇五、五九	明石郡 下、四九、八	明石ノ津 中、五九	赤キ特 中、三五	赤染 下、一八、五	赤染時望 下、八五	赤穂郡 中、五九、七九	赤山ノ神 中、三二	阿錫施藥 上、三五	阿伽 中、五七、五九	阿伽 中、〇八一	縣犬養爲政 下、四一	安藝國 中、七六、八三〇	秋河 中、三九七				
アキ	安藝國 中、七六、八三〇	秋河 中、三九七																				
ア	阿開梨 中、五九、七六、一〇一、 一〇九	阿私施 上、一〇〇	阿就頭女 上、四九	阿修羅女 下、六九	阿開佛 上、一三、四六	飛鳥郷 中、二六、八六	阿曾祇劫 下、四九	阿蘇ノ史 上、四九	阿蘇洛宮 下、四六	安曇郡 上、三三、四四	愛宕寺 中、三三、三七	愛宕ノ大門 下、八三、六〇	愛宕護山 中、七三	味木里 中、七三	餘 中、一〇八〇	類神 下、四三	類離那 上、三三	小豆 上、三六	敦實 上、三三	敦忠 上、三三	敦行 下、二五	中、九七
ア	熱田明神 中、二七、八	阿都ノ家 中、三	阿刀氏 中、六八、九〇、六三	阿那合果 上、三三、三九	阿那律 上、七五、六三、三三	阿難 上、四九、六六、六七、七九、 九一、一〇九、一四、二五、三三、 三六、三三、三三、二六、二九、 一四、一四、一五、一五、一六、 一六、一八、一八、二四、二七、 三三、三三、三三、三三、三三、 三三、三三、三三、三三、三三、 三三、三三、三三、三三、三三、	穴太郎眞人 中、一	阿耨達智池 中、五九〇	阿波國 中、九、五三、六三、下、 三七、六〇	阿般提國 上、一三	粟 上、一八〇、四三、中、四〇	粟田朝臣 中、七三	粟田口 下、三三	粟田道磨 中、六五	粟田山 下、六三、八七	粟津 中、三三、九七	粟津宮 中、三三	淡路國 中、三〇、下、四一	鮎 下、三三、六三			

アヒ	阿毗達磨	上、三〇七
アホ	安陪爲元	下、三五八
アハ	安陪貞任	下、二五〇
アサ	阿保親王	下、二四九
アタ	天ノ河原	中、二六二
アチ	天津守郷	中、一九六
アチ	天野宮	中、一〇二
アチ	尼天狗	中、三三三、三六三
アチ	海部郡	中、三九〇、〇五八
アチ	阿彌陀	中、三九〇、〇五八
アチ	阿彌陀經上	中、三九〇、〇五八
アチ	阿彌陀經下	中、三九〇、〇五八
アチ	阿彌陀像	上、三五五
アチ	阿彌陀ノ像	中、一九〇
アチ	阿彌陀ノ大咒	中、六七〇、六七八
アチ	阿彌陀堂	下、五〇〇
アチ	阿彌陀如來	中、二二一、六二五、六二六、六三〇、六三九
アチ	阿彌陀念佛	中、八〇一
アチ	阿彌陀ノ定印	中、六〇七
アチ	阿彌陀ノ和讃	中、六〇七
アチ	阿彌陀ノ聖	中、八〇二、下、四八六
アチ	阿彌陀佛	上、三六三、三五五、三五三、二九七、四四六、四六六、五九九、六三三、六二七、六九六、六七三、八五八、八六八、六二七、六九六、六七三、八五八、八六八
アチ	阿彌陀ノ繪像	中、二〇七
アチ	綾ノ氏	中、〇四四
アチ	綾ノ絹	中、七八九
アチ	綾小路	下、四八四
アチ	綾蘭笠	中、九三三、下、三三三、四六三、四九八
アチ	阿輪遮國	上、三四一
アチ	阿羅漢	上、四八八、六五五
アチ	阿羅漢果上	上、三三三、三三三
アチ	阿羅漢迦蘭	上、三三三
アチ	阿羅漢仙人	上、三三三
アチ	荒三位	下、四八五
アチ	荒田村	中、三三七
アチ	荒法師	中、一〇〇〇
アチ	荒卷	下、四七七
アチ	洗米	下、三三六
アチ	有明親王	中、一〇〇六
アチ	有仁	下、三三四
アチ	在厨業平	下、二四九、二四九、二四八
アチ	青經丸	下、三三四
アチ	安義橋	下、三三四
アチ	安西城	上、五〇四
アチ	安祥寺	中、四四五
アチ	安上門	上、六七八
アチ	安勝	中、四四三
アチ	安息國	上、三三三
アチ	安日寺	中、九七七
アチ	安法	中、六五五
アチ	安法君	下、一七八
アチ	安養淨土	中、六八四
アチ	安養ノ尼君	中、三三九
アチ	安樂	中、四九九
アチ	安樂寺	上、五五二、二〇〇
アチ	安樂世界	下、五八九
アチ	安祿山	上、七三〇
アチ	伊尹	上、六四六
アチ	幽州	上、五五二、二〇〇
アチ	遊女傀儡	中、九六三
アチ	伊賀國	中、三四八、三四三、下、四三三
アチ	伊賀留加	中、五
アチ	伊香郡	中、七四四
アチ	イカコノウミ	中、七四七

イセ	沃懸地	下、一八一
イセ	鷗寺	中、五
イセ	鷗宮	中、四、五
イセ	鷗村	中、七、九
イセ	生靈	下、三六七
イセ	生江世經	中、八七五
イセ	生贊	上、八五五、下、二四四、三九七
イセ	池上	中、六〇六、八一九
イセ	池上寛忠僧都	下、五九四
イセ	池ノ尾	下、四三〇
イセ	池邊直水田	中、一八九
イセ	池邊水田	中、一九〇
イセ	池邊宮	中、五七一
イセ	伊佐入道	下、四三三
イセ	伊佐平新發	下、四三三
イセ	石川郡	中、三〇九、一〇八〇
イセ	石川沙彌	中、一〇八〇
イセ	石坂	下、三三三
イセ	石率都婆	上、八三三、中、一〇〇六
イセ	石山	中、一五〇、四九六、六二〇
イセ	石山觀音	中、七四四、七〇〇
イセ	石山寺	中、六六一、七〇七
イセ	石山御堂	中、七〇〇
イセ	伊勢國	中、三五一、六六一、六六六、八六六
イツ	伊勢御息所	一〇八四、下、四〇〇、五九六、六五五
イツ	磯津	下、二四一、一〇
イツ	一乘持經者	下、三〇六
イツ	一乘	中、四七〇
イツ	一乘要決	中、八三三
イツ	一條	中、四三三、四四四、一〇三三、下、一〇八、四七〇
イツ	一條大路	下、四四五、五五五
イツ	一條攝政殿	中、六六八、下、二六六、四二〇
イツ	一條天皇	下、一三六
イツ	一條堀川	中、七六六
イツ	一條院	中、三五九、九三三、下、四一、四三三、一三三、一五五、一七〇、一六九、九三三
イツ	一條殿	下、一九一
イツ	一ノ供奉	中、一〇七五
イツ	一ノ宮	中、八三三
イツ	一ノ藤	下、四三八
イツ	市女笠	中、七五五、下、三三六、五三三
イツ	壺演	中、五七一
イツ	標(探?)	上、四三三
イツ	伊豆國	中、四九一、九一七、八二二、下、三三三、四四四
イツ	一角仙人	上、三九六
イヌ	一切經	上、五八四
イヌ	一宿聖人	中、四五六
イヌ	伊調島	中、八三〇
イヌ	和泉國	中、三三三、三三〇、六四四、七元、一〇六五、下、一八六
イヌ	和泉郡	中、一八九、七三九、一〇六五
イヌ	泉河	中、三三三
イヌ	泉川原	中、一〇八三
イヌ	泉大將	下、三三
イヌ	出雲國	中、四八八、下、一五九
イヌ	出居	下、三六五
イヌ	伊都郡	中、七九六、下、五〇三
イヌ	因幡國	中、八四〇
イヌ	因幡河	下、二七一
イヌ	因幡野	中、七五三、下、三八八
イヌ	印南郡	中、八三三
イヌ	印南郡	中、八三三
イヌ	稻荷ノ禰宜	中、五四〇、下、五五五
イヌ	稻荷	下、一八六
イヌ	大上	上、三三〇、四四六、五七三、六三九、六四九、中、五四六、六六六、一〇一〇、下、三三〇
イヌ	犬頭系	下、三〇九
イヌ	犬山	下、二八四
イヌ	狗	中、四三三、五三六、五四四、六四一、一〇〇一、下、三三八、四四七、四八五、五五五
イモ	飯室	中、三三三
イモ	飯室	中、一〇〇六
イモ	飯室	中、一〇〇七
イモ	飯室	中、一〇〇八
イモ	飯室	中、一〇〇九
イモ	飯室	中、一〇一〇
イモ	飯室	中、一〇一一
イモ	飯室	中、一〇一二
イモ	飯室	中、一〇一三
イモ	飯室	中、一〇一四
イモ	飯室	中、一〇一五
イモ	飯室	中、一〇一六
イモ	飯室	中、一〇一七
イモ	飯室	中、一〇一八
イモ	飯室	中、一〇一九
イモ	飯室	中、一〇二〇
イモ	飯室	中、一〇二一
イモ	飯室	中、一〇二二
イモ	飯室	中、一〇二三
イモ	飯室	中、一〇二四
イモ	飯室	中、一〇二五
イモ	飯室	中、一〇二六
イモ	飯室	中、一〇二七
イモ	飯室	中、一〇二八
イモ	飯室	中、一〇二九
イモ	飯室	中、一〇三〇
イモ	飯室	中、一〇三一
イモ	飯室	中、一〇三二
イモ	飯室	中、一〇三三
イモ	飯室	中、一〇三四
イモ	飯室	中、一〇三五
イモ	飯室	中、一〇三六
イモ	飯室	中、一〇三七
イモ	飯室	中、一〇三八
イモ	飯室	中、一〇三九
イモ	飯室	中、一〇四〇
イモ	飯室	中、一〇四一
イモ	飯室	中、一〇四二
イモ	飯室	中、一〇四三
イモ	飯室	中、一〇四四
イモ	飯室	中、一〇四五
イモ	飯室	中、一〇四六
イモ	飯室	中、一〇四七
イモ	飯室	中、一〇四八
イモ	飯室	中、一〇四九
イモ	飯室	中、一〇五〇
イモ	飯室	中、一〇五一
イモ	飯室	中、一〇五二
イモ	飯室	中、一〇五三
イモ	飯室	中、一〇五四
イモ	飯室	中、一〇五五
イモ	飯室	中、一〇五六
イモ	飯室	中、一〇五七
イモ	飯室	中、一〇五八
イモ	飯室	中、一〇五九
イモ	飯室	中、一〇六〇
イモ	飯室	中、一〇六一
イモ	飯室	中、一〇六二
イモ	飯室	中、一〇六三
イモ	飯室	中、一〇六四
イモ	飯室	中、一〇六五
イモ	飯室	中、一〇六六
イモ	飯室	中、一〇六七
イモ	飯室	中、一〇六八
イモ	飯室	中、一〇六九
イモ	飯室	中、一〇七〇
イモ	飯室	中、一〇七一
イモ	飯室	中、一〇七二
イモ	飯室	中、一〇七三
イモ	飯室	中、一〇七四
イモ	飯室	中、一〇七五
イモ	飯室	中、一〇七六
イモ	飯室	中、一〇七七
イモ	飯室	中、一〇七八
イモ	飯室	中、一〇七九
イモ	飯室	中、一〇八〇
イモ	飯室	中、一〇八一
イモ	飯室	中、一〇八二
イモ	飯室	中、一〇八三
イモ	飯室	中、一〇八四
イモ	飯室	中、一〇八五
イモ	飯室	中、一〇八六
イモ	飯室	中、一〇八七
イモ	飯室	中、一〇八八
イモ	飯室	中、一〇八九
イモ	飯室	中、一〇九〇
イモ	飯室	中、一〇九一
イモ	飯室	中、一〇九二
イモ	飯室	中、一〇九三
イモ	飯室	中、一〇九四
イモ	飯室	中、一〇九五
イモ	飯室	中、一〇九六
イモ	飯室	中、一〇九七
イモ	飯室	中、一〇九八
イモ	飯室	中、一〇九九
イモ	飯室	中、一〇一〇〇
イモ	飯室	中、一〇一〇一
イモ	飯室	中、一〇一〇二
イモ	飯室	中、一〇一〇三
イモ	飯室	中、一〇一〇四
イモ	飯室	中、一〇一〇五
イモ	飯室	中、一〇一〇六
イモ	飯室	中、一〇一〇七
イモ	飯室	中、一〇一〇八
イモ	飯室	中、一〇一〇九
イモ	飯室	中、一〇一〇〇
イモ	飯室	中、一〇一〇一
イモ	飯室	中、一〇一〇二
イモ	飯室	中、一〇一〇三
イモ	飯室	中、一〇一〇四
イモ	飯室	中、一〇一〇五
イモ	飯室	中、一〇一〇六
イモ	飯室	中、一〇一〇七
イモ	飯室	中、一〇一〇八
イモ	飯室	中、一〇一〇九
イモ	飯室	中、一〇一〇〇
イモ	飯室	中、一〇一〇一
イモ	飯室	中、一〇一〇二
イモ	飯室	中、一〇一〇三
イモ	飯室	中、一〇一〇四
イモ	飯室	中、一〇一〇五
イモ	飯室	中、一〇一〇六
イモ	飯室	中、一〇一〇七
イモ	飯室	中、一〇一〇八
イモ	飯室	中、一〇一〇九
イモ	飯室	中、一〇一〇〇
イモ	飯室	中、一〇一〇一
イモ	飯室	中、一〇一〇二
イモ	飯室	中、一〇一〇三
イモ	飯室	中、一〇一〇四
イモ	飯室	中、一〇一〇五
イモ	飯室	中、一〇一〇六
イモ	飯室	中、一〇一〇七
イモ	飯室	中、一〇一〇八
イモ	飯室	中、一〇一〇九
イモ	飯室	中、一〇一〇〇
イモ	飯室	中、一〇一〇一
イモ	飯室	中、一〇一〇二
イモ	飯室	中、一〇一〇三
イモ	飯室	中、一〇一〇四
イモ	飯室	中、一〇一〇五
イモ	飯室	中、一〇一〇六
イモ	飯室	中、一〇一〇七
イモ	飯室	中、一〇一〇八
イモ	飯室	中、一〇一〇九
イモ	飯室	中、一〇一〇〇
イモ	飯室	中、一〇一〇一
イモ	飯室	中、一〇一〇二
イモ	飯室	中、一〇一〇三
イモ	飯室	中、一〇一〇四
イモ	飯室	中、一〇一〇五
イモ	飯室	中、一〇一〇六
イモ	飯室	中、一〇一〇七
イモ	飯室	中、一〇一〇八
イモ	飯室	中、一〇一〇九
イモ	飯室	中、一〇一〇〇
イモ	飯室	中、一〇一〇一
イモ	飯室	中、一〇一〇二
イモ	飯室	中、一〇一〇三
イモ	飯室	中、一〇一〇四
イモ	飯室	中、一〇一〇五
イモ	飯室	中、一〇一〇六
イモ	飯室	中、一〇一〇七
イモ	飯室	中、一〇一〇八
イモ	飯室	中、一〇一〇九
イモ	飯室	中、一〇一〇〇
イモ	飯室	中、一〇一〇一
イモ	飯室	中、一〇一〇二
イモ	飯室	中、一〇一〇三
イモ	飯室	中、一〇一〇四
イモ	飯室	中、一〇一〇五
イモ	飯室	中、一〇一〇六
イモ	飯室	中、一〇一〇七
イモ	飯室	中、一〇一〇八
イモ	飯室	中、一〇一〇九
イモ	飯室	中、一〇一〇〇
イモ	飯室	中、一〇一〇一
イモ	飯室	中、一〇一〇二
イモ	飯室	中、一〇一〇三
イモ	飯室	中、一〇一〇四
イモ	飯室	中、一〇一〇五
イモ	飯室	中、一〇一〇六
イモ	飯室	中、一〇一〇七
イモ	飯室	中、一〇一〇八
イモ	飯室	中、一〇一〇九
イモ	飯室	中、一〇一〇〇
イモ	飯室	中、一〇一〇一
イモ	飯室	中、一〇一〇二
イモ	飯室	中、一〇一〇三
イモ	飯室	中、一〇一〇四
イモ	飯室	中、一〇一〇五
イモ	飯室	中、一〇一〇六
イモ	飯室	中、一〇一〇七
イモ	飯室	中、一〇一〇八
イモ	飯室	中、一〇

附録 索引

Index table with columns for kana characters (イラ, イル, イン, ウカ, ウキ, ウコ, ウサ, ウシ, ウタ) and corresponding entries with page numbers.

附録 索引

Index table with columns for kana characters (エウ, エキ, エチ, エノ, エヒ, エホ, エン) and corresponding entries with page numbers.

大神高市磨 中、〇八四
 大宅光任 下、三三三
 大衛左衛門尉 下、四三三
 大山 中、八八九
 大鷲峰 中、四四二
 大破子 下、二六、四二二
 大井川 中、二九八、下、四一、八九九
 大井ノ津 下、三〇六
 大井光遠 下、六六
 正親大夫 下、六三三
 狼 中、六六六、下、五三三
 表江里 中、八六一
 表衣 下、四〇〇
 恩眞 中、四〇七
 陰陽 中、一〇七七
 陰陽師 中、五七、五五、七四、九〇三、
 九六七、下、九三、九五、九八、一〇三、一〇五、
 三二、三四八、三五六、三七一、四八〇
 陰陽術 中、六九
 鴉 上、五五五
 可愛樂 上、三九
 開覺寺 上、五二六
 開眼供養 中、三六
 開元寺 中、一〇〇
 戒師 中、八三、九三

戒壇 中、八三、二四、八五〇
 戒壇和上 中、六〇六
 戒壇院 中、八三、二四一
 戒律 中、八、八三
 海賊 中、九五、下、一〇五、四三三
 海道 下、六九
 海蓮 中、五三四
 海會ノ聖衆 上、五一
 嘉運 上、六一
 上野國 下、三〇六、二四八、六〇一
 上野峯雄 下、一九
 衛山 中、四
 籬子 下、三六四
 柑子 上、四三三
 絳州 上、五、五八、四
 好延持經者 中、三九三
 好常 中、三三〇
 好尊聖人 中、四九
 香姓婆羅門 上、二六九
 香身佛 上、一五九
 香隆寺 中、四七七
 江都 上、五五、六七、六三四
 江南 上、六八八
 江陽縣 中、八一
 江陵 上、五九

康僧會三藏 上、四八七
 項羽 上、七六、七四
 項莊 上、七六
 項伯 上、七二五
 卓歸女 中、三九五
 高堅樹 上、四六
 高祖 上、七三、七四
 高宗 上、五三四、五四
 高鳳 上、七三
 高野 中、九六
 高野ノ神 下、二八四
 高野山 中、一九五、九〇
 高野大師 中、一九四、下、六三三
 高野明神 中、一六六
 高麗端ノ疊 下、三三
 高麗端 下、三五、六九
 行雨 上、七九
 行疫流行神 下、五三三
 緜繭城 中、二二七
 賀綠 下、二六
 加賀國 下、三〇、四九九、五三、六四九、
 六六七
 鏡 上、二五、中、四九
 鏡造 中、一〇七九
 鏡明神 中、六九

香水郡 中、一〇四四
 柿 上、四三、中、四六、五三三
 鯨(鯨?) 中、一〇四四
 買置 上、七九三
 餓鬼 上、五四、中、六七三、九〇五
 餓鬼道 上、三〇三
 劇草 下、一四六
 覺雲阿闍梨 中、九二一
 覺緣律師 中、九六五
 覺護 上、五〇五
 覺念 中、五三一
 覺超僧都 中、五四五
 學生 中、九、九五、一〇七五、一〇八三、
 一〇九二
 柯俱婆 上、三六
 神樂舍人 下、四〇一
 懸橋 下、四六三
 賀古驛 中、六四一
 賀古郡 中、五八、六三〇
 夏侯均 上、五三四
 笠 上、一六七
 笠置 中、八八四
 笠置ノ窟 中、八三三
 笠置寺 中、三八
 加佐郡 下、三六七

庄馬 下、四二五
 風祭 中、八九一
 汗衫 下、一三五
 膳部 下、三三三
 膳廣國 中、一〇四〇
 膳所 下、三九
 柏原天皇 下、三〇五、六七
 柏手氏 中、四
 香椎明神 中、七九
 鹿島 下、三四一
 牙舍利 上、二六七
 春日 下、三九九
 春日器 下、四三三
 春日野 中、三三三
 春日社 中、二二、〇八六
 主計頭 下、一〇二
 可咲 下、一三三
 迦葉 上、三、五〇、一〇八、二八、三三、
 三四、三三三、三三三、三三六
 迦葉尊者 上、一三三、三三三、四三八
 迦葉波如來 上、三三八
 迦葉佛 上、二四、一五六、一五九、中、
 三八
 迦葉菩薩 上、三三五
 迦旃延 上、一三四、三四五、中、六六

迦多演那比丘 上、八〇
 方縣郡 下、五、三六
 片輪郡 下、五三
 片岡山 中、五
 乞句 下、四三
 乞巧 下、五七
 乞食 中、一〇二
 加太乎加耶末 中、五
 加持 中、一〇二、一〇八一
 梶原寺 中、三〇
 桂河 中、八〇、一〇七、下、三九七、
 五九九
 桂谷ノ山寺 中、九二
 精尾 下、一五六
 勝尾寺 中、九六
 勝尾寺 中、四四二
 葛川 中、四〇四
 葛木下郡 中、三〇〇、三三三
 葛下郡 中、六三
 葛上郡 中、四九
 葛木ノ尼寺 中、八六三
 葛木峯 中、四三
 葛木山 中、四九、三九、一〇五
 上總國 中、二七、八五、下、三三、
 五二八

經頭 上、五五、六〇、六六、六四
 河東 下、四九五
 看ノ長 下、三三三
 梶取 上、五三、六五、六八
 河内 上、六六、六九
 河南 上、六六、六九
 金倉郡 中、七三三
 金尾丸 中、七三三
 鎧屋 下、三三三
 鏡 中、七三〇
 迦膩色迦王 上、一八七
 蟹滿多寺 中、七三三
 金ノ山崎 中、八四三
 金判官代 中、六九五
 鏡ノ御崎 中、九八〇
 川崎 下、二〇八
 川原院 中、八六四
 川山郷 中、六五、下、一七六、
 三四、三四
 河伯神 下、二六七
 河内國 中、三六、六〇、八九、三〇七、
 三〇九、四二、五三六、五五二、五五四、六四四、
 八六四、一〇五五、一〇六二、一〇八〇、下、八九、
 三四、三四八、三六、三七七

河内郡 中、六三四
 河内大臣 下、一三
 河ノ神 上、三六
 河邊法師 中、六九
 皮子 下、五九
 骨島 中、九八
 甲斐國 中、三、下、六九
 迦毗羅國 上、三
 迦毗羅城 上、九
 迦毗羅國 上、二二、一四九、
 二六九、中、六
 伽藍園 上、二八
 甲賀郡 中、八四、下、三六
 甲賀三郎 下、六五五
 燕 下、三七〇
 鳴箭 下、四八
 鷲冠木 下、四六、三六二
 顔方崎 中、七九五
 鎌 中、一〇二、下、五九
 釜 中、五九
 釜 中、五九
 蝦蟇 下、四三、四六
 蒲生郡 中、五七
 神 下、六〇
 紙障紙 下、四〇
 紙幡寺 中、七三六

五色ノ鬼神	中、三〇〇	五色ノ道祖神	中、二〇九	小松ノ楯	下、二四〇	金剛界ノ大曼陀羅	上、五三〇
悟眞寺	上、五三三	五條堀川	下、三六二	高麗	上、七六八、中、六九六、下、六三三	金剛界ノ曼荼羅	上、五三三、中、五九六
巨勢廣高	下、五三三	五徳ノ甲	上、七九六	高麗ノ樂	中、三二六	金剛合掌	中、五三六
越田ノ池	中、三三九	小舎人童	下、二四九	高麗寺	中、五五四	金剛薩埵	上、五〇三
五節所	下、四〇九	特牛	下、三三二	狛鶴	中、九三三	金剛山	中、二〇五
後世	中、二〇九	葉子	中、四六六、下、三三八	米	上、一三三、三三八、中、五九五、七二二	金剛醜女	上、三〇一
後世ノ苦	中、二〇五	木幡	下、三六四	春米寺	中、二〇〇	金剛女	上、三〇一
吳招李	上、七六六	鯉	上、五八八、中、二〇五、下、六五四	小屋寺	下、四九七	金剛手菩薩	上、三〇一
基勢	下、八三三	五筆和尙	中、九三	五欲	上、一三三、一四	金剛智三藏	上、五〇三
古曾部入道	下、七七八	五百ノ商人	上、四六三	御靈會	下、四一九	金剛般若	中、二六四、四八六、五〇〇、五七一
小鷹狩	下、五二二、五三九	五百ノ鼠	上、三三三	後冷泉院	下、三三三	金剛般若經	上、五〇四、五〇五、五〇六、五〇七
五臺山	上、五〇六、中、七六六、二二六、一四〇、四四一、四四二、八三三、八九三	五百ノ御弟子	上、一三七	惟明	下、四四四	金剛峯寺	中、一六六
五道	上、五三三	五百ノ皇子	上、二〇四	惟喬親王	下、二四九	金剛密迹	上、三三三
五道大臣	上、五三〇	五百ノ皇子	上、四三三	惟通	下、三三三	金剛夜叉	中、一〇二
御境所	下、四三三	五百ノ皇子	上、四三三	惟基	下、二四二	金剛力士	上、三六一
小中將ノ君	下、五九九	御佛名	下、四四四	衣河ノ關	下、三三三	金光明	上、一三六
五濁	上、二五九、中、八三三	護法	上、三三三、八八八、中、四八八、四九二、四九三、四九四、四九五、一〇〇三、下、三九三	五位侍	下、三三三	金光明經	上、五〇四
護持僧	中、五八四	護法ノ牛	中、四五一	衣河ノ關	下、三三三	金光明寂勝王經	上、五〇五
牛頭鬼	中、八七三	小松寺	中、三二八、一〇	小院	下、四三三	金鼓	下、四八六
牛頭樹檀	上、三三三	小松天皇	下、三三〇、六九九	金宮	中、二〇二	金財	上、一三三
五通ノ菩薩	上、五二五	小松僧都	下、三三〇、六九九	金剛	中、五三〇	金色	上、三〇七、一八〇
五條	下、九二八、三三三、五二五			金剛界	上、五三〇	金翅鳥	上、三〇七、一八〇
五條京極	中、七九九			金剛界ノ印契	中、六〇〇	金鸞	中、八七八

サイ

金勝寺	中、四八八、八七	金粟世界	上、五〇一、六〇一
金地國	上、一三九	金天	上、一三六
金毗羅	上、七六	根本中堂	中、一〇〇、四三三、四八二、四八三
權現	中、五〇〇、八三〇	權者	中、六二一、四三三、一〇六三
勤操僧正	中、九一	合照	上、五三九
西大寺	中、七七八	西塔ノ北谷	中、四六三
西塔ノ平南房	下、六二六	西塔ノ房	中、六四四
西塔ノ寶幢院	中、四二七	西明寺	上、五〇五、六六六、中、九二二、七〇
祭主	下、一九一	最勝	中、四三三
寂勝王經	中、二六二、三〇三、二七六、二八九、四八三	寂勝會	中、二七六、四六三、九九三
寂澄	中、三〇一	齊祇僧都	中、五三六

サウ

齋院	中、九三三	齋院ノ年預	下、三六四
濟源僧都	中、六〇七	崔浩	上、六六六
崔義真	上、五九九	崔彦武	上、五九六
賽論	下、三三〇	犀ノ角	中、一〇九四
財徳長者	上、二二六	相應和尙	中、六〇九
相應寺	中、五七一	相馬郡	下、三二六
莊子	上、七六八、七〇七、七二二	曹娥	上、六二五
象	上、二二四、三三〇、四四四、四四七、四六〇、四六九	象頭山	上、三
藏縁	中、八三〇	藏海	中、八三三
藏算	中、八八九	藏念	中、八二〇
藏満	中、八三三	藏明	中、〇九
坂上田村麻呂	中、二四二	坂上晴澄	下、三三

サキ

坂上逢高	下、三〇八	坂田郷	中、二〇四
坂田郡	中、八六六、六八	坂本	中、四九
酒泉郷	下、六〇八	逆頼ノ尻褌	下、四
嵯峨	中、一〇〇三	嵯峨寺	下、九五
嵯峨天皇	中、九三三、五八四、八三三、下、七七	嵯峨野	中、八六〇、九三三
相模國	下、四二二、五三三	相模郡	中、三三八、三六五、五四
左京	中、七七七、一〇六二	前ノ一條院	中、六五七
前ノ世ノ父母	中、一〇六五	鷺	上、七三三
櫻村	中、一〇五六	櫻井	中、四六一
酒	中、九六三	鮭	下、四三三
左近ノ馬場	下、四三三	大角豆	上、四三三
篠波山	中、三三三	指貫	下、三三三、三三三、三三三、四一〇、

サタ

幸島	下、三〇七	狭敷	下、五九四
座主	中、一〇〇七	佐太	下、一八八
佐大夫	下、五七七	定方	下、三三
貞重	下、三三	貞正	下、三三
貞盛	下、四一八、九八四	薩埵	上、二九
薩埵王子	上、四四七	薩摩氏長	中、八二七、六六
薩波悉達國	下、三三	佐波國	下、四二二、三九六、六二八
讚岐國	中、九二九、三九六、六二八、一〇三六、一〇三六、一〇三六、一〇三六	實方	中、九二九、下、一〇三三
實資	下、五三六	深勝四郎	下、三三
鱈	中、二八〇	雜色	中、四七九、下、八七二、五、三五二、三六三、四三六、四四五、四八五

サハ 雑色男 下、五二
佐伯氏 中、六〇、三六
佐伯公行 下、七〇七

サロ 道祖 中、四七〇、九三六
道祖神 中、四七〇、九三五
道祖ノ大路 下、八三三

サリ 佐保殿 下、一一
狭屋寺 中、七六六

サラ 沙羅雙樹 上、二六九、三四
沙羅林 中、三九、九三三
沙羅林ノ儀式 中、三二七

サル 讚良郡 中、一〇九、下、八八
又利國 上、一三三

サリ 猿 上、四三、四三六、四三三、四三五、中、
四三三、四三二、四三〇、七二二、下、二八四、
四三三

サワ 猿神 下、二二四
猿丸 下、二九二

サン 藏王菩薩 中、四五一、五七七
三惡道 上、三三八、三三三、四〇三、四〇四、
四〇五、五〇〇、中、四六九、四九五、五八三、
五九〇

六七四 三衣 中、四二四、四三六
三衣宮 中、一〇〇七、一〇二二

三階ノ佛法 上、三九一
三階ノ法門 上、二四三

三歸ノ法文 上、三三四
三行ノ文 中、五三三

三遊罪 上、三三〇
三結 中、九三、一九五、四五一、九八五

三業 中、五四〇、五四七、八七二、八三三
三藏 中、六〇、一四一

三時殿 上、七五
三修禪師 中、一〇三〇

三乘 上、三六九
三身 上、三〇五、中、七〇

三世 上、三六六、六三二
三世ノ一切經 上、五五五

三世十方ノ佛 中、九一
三世ノ諸佛 上、四〇〇、中、四六六、
八三三、九〇四

三世ノ佛 中、八五三
三千大千世界 上、九一六、三二八、
三六九

三善谷 上、六六八
三途 上、三三三、中、五二八、五三三、
五三六、七〇六、七三三、八三三、八四六

三條 下、三三三、四八五
三條右大臣 下、三三、四三七

三條大后 中、六三二
三條京極 下、三三五

三條關白 中、五五六
三條大臣 下、二四二

三條天皇 中、九五六
三條太皇太后宮 中、九五六

三部ノ伎樂 中、二七七
三寶 上、二五三、三三七、四八八、五五〇、
五五九、五六六、六六六、中、一六六、二二六、
三〇三、三三八、四四三、四六六、四七七、五三三、
五三三、五六六、五九七、六六六、七七一、七九四、
七九六、八〇四、八三三、八三三、八三三、八三三、
八三三、九〇四、九〇四、九〇四、一〇六、一〇三三、
一〇三三、一〇三三、一〇六、一〇六、一〇七、
一〇八、一〇七、一〇三、下、三三九、四三九、

三昧定 上、一三三
三摩耶外道 上、五〇、五五六

三滿 下、九三
三密ノ法 中、一四〇

三明六通 上、一六四、四〇四

一〇四 三論 中、一六四
三會 上、五八八

卅講 中、八五九、下、六三三
卅座ノ講 中、六二九

山神 上、四三三
竺州 上、七九三

四阿含 上、五三八
四惡趣 上、五三三

志字會利 中、二五三
修正 下、四六一

修圓僧都 中、五八三
修覺 中、六八〇

紫雲寺 上、四六六
周 上、六四六、七九九、七六八

周善通 上、六六五
終 上、四三〇

子 上、七〇六
四恩法界 中、六七

司稼寺 上、六七三
鹿 上、三五五、三五五、四六六、六七七、七五七、
中、四〇四、九二二、九三三、九四〇、一〇三三、
下、六八六、八四三、八七〇、五二二、五二二

飭磨郡 中、五八八
志賀 中、二六三、三二下、六五
志賀郡 中、二二一、二〇〇、八六九、下、
一〇五

六五四 志賀寺 中、三三二
兒干 下、五〇八

志覺大師 中、二五二、四三二、二二一、
二二二、二六六、八八三、下、五九〇

式部卿宮 下、三六八
式部卿字合 中、六六

式家 下、二二
色紙形 下、三二一、三二二、三二五

廟鬼 上、五七九

城上郡 中、二〇五
城下郡 下、五四四、六〇〇

敷下郡 中、三三二
敷上郡 中、三二二

信貴山 中、七二九
尻切 中、二五六

四巻經 中、一〇〇〇、下、八四
止觀 中、五七七

始皇 上、七〇三
重明親王 下、五五六

重成 下、三三一
重信 下、三五四

繁茂 下、三二九
慈岳川人 下、九二

滋定 下、三三三
四國邊地 下、六〇

自在天王 上、二九
四悉檀 上、三三三

四十九所ノ寺 中、七〇
四十九日ノ佛事 上、九三

四生 上、三六六
四色ノ羅漢 中、七二七

師子 上、三三七、三五五、四六六、四四四
穴ノ背山 中、四三七

梓州 上、五三四
梓州 上、五四九

資聖寺 上、六六六
資聖寺 上、五五三、五五六

仁壽殿 上、五九六、四〇四、中、五七一、
下、三三二

慈氏 中、五四四
慈氏菩薩 上、四六六、四九五、五八八

思禪法師 中、四
四大 上、三

四大天王 中、二七六、四八八、九三五
四諦ノ法 上、八八

四道四果 上、四〇四
中、二八〇

七條 中、八四四、一〇三三、下、五五五
七條大宮 下、三六四

七佛 上、五三九
七佛ノ像 上、五三三

七寶 中、三二六
七寶ノ地 上、二二六、一九五、三三〇、
三三六、三五〇、三六一、三六六、七二一、九二一、
五四六、中、七三三

七美郡 上、一〇、二三三
七美郡 上、一〇、二三三

悉曇 上、一〇、二三三
悉曇太子 上、二一八、二四四、四二一、
一九九、四七五

十戒 中、九九九
十齋日 中、九九九

十種ノ吉祥 上、一八〇
十地經 上、三三三、三七九

十方淨土 上、二二五
十方世界 上、二二五

十方諸佛 上、二二〇
十方ノ佛 上、二二〇

實四 下、五九、五九三
實供奉 中、八二五

實惠僧都 中、一九六
四條 下、三四、三七七

シデノ山 下、五七九
四天王 上、九七七、三二、二九六、
二二六、二六六、中、一〇〇八

四天王寺 中、三
四天王ノ像 中、一八四

司徒 上、六六六
慈徳寺 下、三三五

支那國 上、四四五
信濃(乃)國 中、三三四、四四八、
五〇〇、四三三、四四六、三三三、一〇三三、
下、五〇〇、四六三、七五五

篠村 中、七〇一
自然太子 上、五七九

篠原 下、四七一
柴船 中、四七一

四部ノ衆 上、三三三
濫河郡 下、三三三

十一面觀音 中、二二〇、二二四、二七四、
七九九、七九六、七九七

十善 上、二二七
十禪師 中、五八三、六〇九

十重禁戒 中、六七七
十二因縁 上、三三三、三三三、三三八

十八變 上、三三三、三三三、三三八
十禪師 中、六二四